福岡市埋蔵文化財調査報告書第 1070 集

入　部　XIII

－東入部遺跡群第２次調査報告（４）－

２０１０

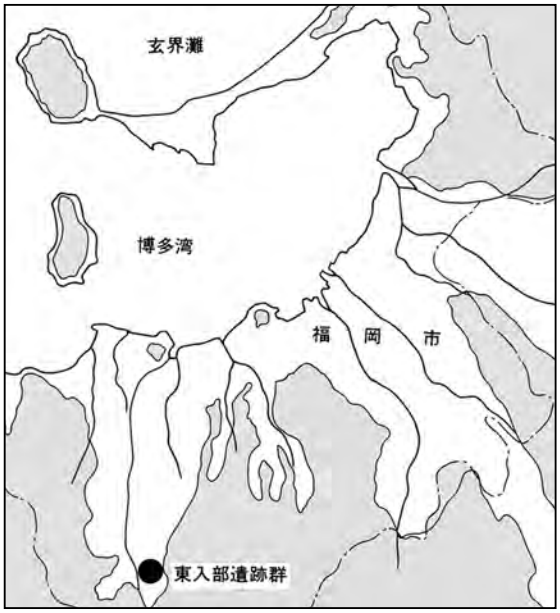
福 岡 市 教 育 委 員 会

福岡市埋蔵文化財調査報告書第 1070 集

IRU　　BE

入　部　XIII

－東入部遺跡群第 2 次調査報告（4）－



9168 HGI-2

２０１０

福岡市教育委員会

(1) 11-1.3 区全景（南東から）

(2) 11-2 区全景（東から）

序

福岡市には豊かな自然と先人によって育まれた歴史が残されています。これらを活用するとともに、保護し未来に伝えていくことは、現在に生きる我々の重要な努めです。しかし、近年の著しい都市化により、その一部が失われつつあることもまた事実です。

福岡市教育委員会では、開発に伴いやむを得ず失われていく埋蔵文化財について、事前に発掘調査を実施し、記録保存に努めています。

本書は、平成 62 年度から平成 7 年度にかけて実施された早良区入部地区の県営圃場整備に伴う発掘調査のうち、平成 3 年度の東入部遺跡第２次調査の成果を報告するものです。

本書が文化財保護への理解と認識を深める一助となり、また研究資料として利用頂ければ幸いです。

最後に、発掘調査から本書の刊行まで、地元改良区をはじめとする多くの方々のご理解とご協力を賜りました事に対しまして、心からの謝意を表します。

平成 22 年 3 月 23 日

福 岡 市 教 育 委 員 会
教育長 山　田　裕　嗣

例言

1．本書は、福岡市教育委員会が福岡市早良区東入部地内で県営圃場整備に伴い実施した発掘調査のうち、第２次踏査（1991 年度）の 4 回目の報告である。今年度は 11 区の調査のうち、弥生時代以降についての報告を行い、縄文時代については次年度以降の報告を予定している。

2．本書に用いた遺構実測図は榎本義嗣、黒田和生、英豪之、辻節子、山田やす子が作成した。現場での写真は池田、榎本が撮影した。

3．出土遺物の実測図は、池田、大庭友子が行った。写真撮影は池田が行った。
　本書に関わる製図は、濱石正子、池田が行った。

4．本書に使用した方位は磁北で、座標北から 6°21′ 西偏する。

5．土器の図でアミかけ部分は赤色顔料が施されていることを示す。

6．本書の作成にあたり窪田慧　党早苗、前田みゆき、安永令子、荒田文江、篠原恵子の協力を得た。

7．本書に係わる図面、写真、遺物はすべて福岡市埋蔵文化財センターに収蔵保管される予定である。

8．調査区番号は圃場整備事業に関わる発掘調査区の通し番号である。

9．遺構番号は東入部遺跡第２次調査全体での 4 桁の通し番号で、11 区では 5001 ～ 5284、6801 ～ 6728 が相当する。（欠番あり）
遺構の種類に応じて遺構番号の頭に記号を付した。
　ＳＢ（掘立柱建物）、ＳＣ（竪穴住居）、ＳＤ（溝）、ＳＫ（土抗）、ＳＰ（ピット）

10. 遺物番号はすべて通し番号とし、登録番号の下１～４桁と一致する。また、実測図の縮尺は土器 (1/3)、甕棺 (1/8)、土製品 (1/2)、石器 (3/4、１/2、1/4) がある。
土器実測図では、おおむね 1/4 弱以上のものについて反転復元を行った。それ以下の破片から復元したものについては、原則的に破片の残存割合を記した。

11. 遺物の分類、編年については下記の文献を用いた。
久住猛雄 1999「北部九州における庄内式併行期の古式土師器」『庄内式土器研究』19
太宰府市教育委員会 2000『大宰府条坊跡ＸＶ－陶磁器分類編－』

12. 本書の作成作業は国庫補助を受けて行った。

13. 本書の執筆、編集は池田が行った。

遺跡調査番号	9168	遺跡略号	HGI-2	分布地図番号	入部 (85)
所在地	福岡市早良区東入部 1409-1 他			事前審査番号	－
開発面積	21.7ha	調査面積	2242.5 ㎡		
調査期間	911001 ～ 920305				

本文目次

Ⅰ　はじめに　1
Ⅱ　東入部遺跡第２次調査　3
Ⅲ　11 区の調査　5
　１．調査の概要　5
　２．層序と遺構面　6
　３．弥生時代の遺構と遺物　8
　　(1) 竪穴住居　8
　　(2) 土抗　10
　　(3) 甕棺墓　12
　　(4) 土抗墓　14
　　(5) その他の遺物　15
　４．古墳時代の遺構と遺物　20
　　(1) 竪穴住居　20
　　(2) 土抗　68
　　(3) ピット　69
　　(4) その他の遺物　69
　５．中世以降の遺構と遺物　72
　　(1) 掘立柱建物　72
　　(2) 溝　74
　　(3) 井戸　76
　　(4) 木棺墓･土抗墓　80
　　(5) 土抗　84
　　(6) くぼみ状土抗　90
　　(7) ピット　95
　　(8) その他の遺物　96
　６．おわりに　98

挿図目次

Fig.1　入部圃場整備事業地の位置と早良平野の遺跡 (1/50000)
Fig.2　東入部遺跡および第２次調査地点 (1/5000)…… 2
Fig.3　11 区調査区位置図 (1/1000)…… 3
Fig.4　11-1、11-3 区全体図 (1/200)…… 4
Fig.5　11-2 区全体図 (1/200)…… 5
Fig.6　11-1 区土層図 (1/60)…… 7
Fig.7　SC5018 実測図 (1/60)…… 8
Fig.8　SC5018 出土遺物実測図 (1/3､2､1)…… 9
Fig.9　SK5083 実測図 (1/40)…… 10
Fig.10 SK5083 出土遺物実測図 (1/3)…… 11
Fig.11 ST5041 実測図 (1/20)…… 12
Fig.12 ST5041 出土遺物実測図 (1/3､6)…… 13
Fig.13 SK5042 実測図 (1/20)…… 14
Fig.14 SK5042 出土遺物実測図 (1/3)…… 15
Fig.15 弥生土器実測図 (1/3)…… 16
Fig.16 弥生土器･土製品実測図 (1/3､2)…… 17
Fig.17 弥生時代石器遺物実測図 (1/2)…… 17
Fig.18 SC5001 実測図 (1/60)…… 20
Fig.19 SC5001 出土遺物実測図１ (1/3)…… 21
Fig.20 SC5001 出土遺物実測図２ (1/3)…… 22
Fig.21 SC5002 実測図 (1/60)…… 23

Fig.22 SC5002 出土遺物実測図 1 (1/3)…… 24
Fig.23 SC5003 実測図 (1/60)…… 25
Fig.24 SC5003 下層出土遺物実測図 1 (1/3)…… 26
Fig.25 SC5003 下層出土遺物実測図 2 (1/3)…… 27
Fig.26 SC5003 下層出土遺物実測図 3 (1/3)…… 28
Fig.27 SC5003 下層出土遺物実測図 4 (1/3)…… 30
Fig.28 SC5003 上層出土遺物実測図 1 (1/3)…… 31
Fig.29 SC5003 上層出土遺物実測図 2(1/3、1/2)…… 32
Fig.30 SC5004 実測図 (1/60)…… 33
Fig.31 SC5004 出土遺物実測図 1 (1/3)…… 34
Fig.32 SC5004 出土遺物実測図 2 (1/3)…… 35
Fig.33 SC5004 出土遺物実測図 3 (1/3)…… 37
Fig.34 SC5004 出土遺物実測図 4 (1/3)…… 38
Fig.35 SC5004 出土遺物実測図 5 (1/3)…… 39
Fig.36 SC5004 出土遺物実測図 6 (1/3、1/4)…… 40
Fig.37 SC5005 実測図 (1/60)…… 41
Fig.38 SC5005 出土遺物実測図 1 (1/3)…… 42
Fig.39 SC5005 出土遺物実測図 2 (1/3、1/2)…… 43
Fig.40 SC5006 実測図 (1/60)…… 44
Fig.41 SC5006 下層出土遺物実測図 1 (1/3)…… 45
Fig.42 SC5006 下層出土遺物実測図 2 (1/3)…… 46
Fig.43 SC5006 下層出土遺物実測図 3 (1/3)…… 48
Fig.44 SC5006 上層出土遺物実測図 1 (1/3)…… 49
Fig.45 SC5006 上層出土遺物実測図 2 (1/3)…… 50
Fig.46 SC5006 上層出土遺物実測図 3 (1/3)…… 51
Fig.47 SC5006 上層出土遺物実測図 4 (1/3)…… 52
Fig.48 SC5006 上層出土遺物実測図 5 (1/3)…… 53
Fig.49 SC5006 上層出土遺物実測図 6 (1/3)…… 55
Fig.50 SC5006 上層出土遺物実測図 7 (1/3)…… 56
Fig.51 SC5006 上層出土遺物実測図 8 (1/3)…… 57
Fig.52 SC5006 上層出土遺物実測図 9 (1/3)…… 58
Fig.53 SC5006 上層出土遺物実測図 10(1/3)…… 59
Fig.54 SC5006 上層出土遺物実測図 11(1/3)…… 60
Fig.55 SC5007 出土遺物実測図 (1/3)…… 60
Fig.56 SC5007、SC5008 実測図 (1/60)…… 61
Fig.57 SC5008 出土遺物実測図 1(1/3)…… 62
Fig.58 SC5008 出土遺物実測図 2(1/3)…… 63
Fig.59 SC5017 出土遺物実測図 (1/3)…… 63
Fig.60 SC5017、SC5019 実測図 (1/60)…… 64
Fig.61 SC5019 出土遺物実測図 (1/3)…… 64
Fig.62 SC5084 実測図 (1/60)…… 65
Fig.63 SC5084 出土遺物実測図 (1/3)…… 66
Fig.64 SC5085 実測図 (1/60)…… 66
Fig.65 SC5085 出土遺物実測図 (1/3)…… 65
Fig.66 SK5022、5034、5035、5036、SB5045 実測図 (1/40、60)…… 68

Fig. 67 SK5022、5035、5036 出土遺物実測図 (1/3)……70
Fig. 68 古墳時代遺物実測図 (1/3)……71
Fig. 69 SB5044、5086、5087 出土遺物実測図 (1/3)……72
Fig. 70 SB5044、5086、5087 実測図 (1/100)……73
Fig. 71 SD5010、5011、5076、5077、5082 出土遺物実測図 (1/3、2)……75
Fig. 72 SE5057、5059、 5066 実測図 (1/40)……77
Fig. 73 SE5057、5058 出土遺物実測図 (1/3、2)……78
Fig. 74 SE5066 出土遺物実測図 (1/3、2)……79
Fig. 75 SK5062、5063、5064、5073、5079 実測図 (1/40)……81
Fig. 76 SK5062、5063、5064 出土遺物実測図 (1/3)……82
Fig. 77 SK5073、5079 出土遺物実測図 (1/3)……83
Fig. 78 SK5012、5013、5014、5015、5016 実測図 (1/40)……84
Fig. 79 SK5014、5015、5016 出土遺物実測図 (1/3)……85
Fig. 80 SK5051、5052 出土遺物実測図 (1/3、2)……86
Fig. 81 SK5051、5052 実測図 (1/40)……87
Fig. 82 SK5053、5054、5055、5056、5060、5061、5072、5205 実測図 (1/40)……88
Fig. 83 SK5053、5054、5055、5056、5060、5061、5067、5068、5072、5074、 5205 出土遺物実測図 (1/3)……89
Fig. 84 SX5070 出土遺物実測図 (1/3)……91
Fig. 85 SX5078 出土遺物実測図 (1/3、2)……92
Fig. 86 SX5081、6805 出土遺物実測図 (1/3)……94
Fig. 87 ピット出土遺物実測図 (1/3、2)……95
Fig. 88 その他の遺物実測図 1(1/3)……96
Fig. 89 その他の遺物実測図 2(1/2)……97

巻頭図版

(1)11 － 1、3 区全景 (南東から)　　(2)11 － 2 区全景 (東から)

図版目次

Ph. 1 11 区全景（北から） Ph. 2 11 － 1、2 区全景（東から)……101
Ph. 3 SC5018（東から） Ph. 4 SK5083（西から） Ph. 5 ST5041、5042（東から)……102
Ph. 6 ST5041（南から） Ph. 7 ST5042（東から） Ph. 8 ST5042（南から)……103
Ph. 9 SC5001（北東から） Ph. 10 SC5002（東から） Ph. 11 SC5003（東から)……104
Ph. 12 SC5004（北から） Ph. 13 SC5005（南から） Ph. 14 SC5006（北から)……105
Ph. 15 SC5007（西から） Ph. 16 SC5008（南から） Ph. 17 SC5017（南から)……106
Ph. 18 SC5084（北東から） Ph. 19 SC5085（北から） Ph. 20 SK5022（南から)……107
Ph. 21 SK5015（西から） Ph. 22 SK5016（西から） Ph. 23 SE5057（東から)……108
Ph. 24 SE5066（南から） Ph. 25 SE5059（北西から） Ph. 26 SK5062（北から)……109
Ph. 27 SK5064（東から） Ph. 28 SK5051、5052（北西から） Ph. 29 SK5054（北東から)……110
Ph. 30 ～ Ph. 57 出土遺物 ……111 ～ 138

1	吉武遺跡群	6	四筒遺跡群	11	西新町遺跡
2	大田遺跡	7	拝塚古墳	12	五島山古墳
3	羽根戸遺跡	8	有田遺跡群	13	捨六町ツイジ遺跡
4	都地遺跡	9	原遺跡群	14	宮ノ前遺跡
5	田村遺跡群	10	藤崎遺跡群	15	野方中原遺跡

（○遺跡群
●遺跡
■古墳
アミ部が圃場整備事業地）

Fig1　入部圃場整備事業地の位置と早良平野の遺跡（1/50000）

Ⅰ　はじめに

１. 調査の経緯

1985（昭和 60）年、福岡市早良区大字重留および東入部一帯の県営圃場整備事業計画が、福岡県農林事務所などから福岡市教育委員会埋蔵文化財課に示された。計画は約 100ha の耕地を対象に、1987 年度から 8 ヶ年にわたって圃場整備を行うという大規模な計画であった。

事業計画地内には重留、四箇船石、四箇古川、四箇東、清末、岩本、安通、東入部の 8 遺跡と拝塚古墳が知られており、1986 年に行った試掘調査でも弥生時代と中世を主体とした遺構がほぼ事業地内全域に広がっていることが確認された。

課では埋蔵文化財の保存と事業の円滑化をめざして事業者と協議を持ち、当年度の対象地を詳細に試掘し、この結果に基づき一部設計変更をはかるなど、調査対象面積を最小にする方針をとった。発掘調査は 1987（昭和 62）年度から 1995（平成 7）年度まで 9 ヶ年にわたって実施した。

1991（平成 3）年度には、安通遺跡 1 次、清末遺跡 3 次、東入部遺跡 2 次調査（6 ～ 15 区）を実施した。本書は、東入部遺跡 2 次調査の本報告である。ただし整理の都合上、11 区の遺構・遺物の一部について報告する。

２. 調査組織

事業主体　福岡県農林事務所農地整備鉱害課、福岡市農林水産局農業振興部農業土木課、福岡市入部土地改良区

調査主体　福岡市教育委員会埋蔵文化財課

課長　折尾学

第 1 係長　飛高憲雄

庶務　　内野保基

調査担当　濱石哲也　長家伸　池田祐司（11 区担当）　榎本義嗣（11 区担当）

調査補助　英豪之　黒田和生

調査にあたっては県農林事務所、市農業土木課、入部土地改良区のご指導・協力を得た。

東入部 2 次調査区

区	調査対象面積	調査面積	主な内容	備考	報告
6	3344㎡	3027.28㎡	弥生早前期墓地、古墳		613集
7	243㎡	245.34㎡	同上		613集
8	6172㎡	7177.98㎡	弥生時代前中期集落・墓地、古墳、奈良・鎌倉時代集落	弥生時代墓地は埋め戻し保存	652、685集、未報告あり
9	491㎡	505.08㎡	中世集落		
10		1178.56㎡	古墳時代集落		613集
11	2410㎡	2242.5㎡	縄文後期集落、弥生前中期集落・墓地、古墳前期・鎌倉時代集落	11-3区は上面遺構のみ調査。下面は保存。	本報告
12	2268㎡	2334.12㎡	鎌倉時代集落　弥生時代集落	ピット多数。田面部分は保存。	未報告
13	432㎡	401.86㎡	弥生中期集落古墳前期集落、鎌倉時代集落		未報告
14	644㎡	460.3㎡	弥生中期集落古墳前期集落、鎌倉時代集落		未報告
15	270㎡	316.9㎡	弥生中期集落古墳前期集落、鎌倉時代集落		未報告
合計	16271㎡	18069.92㎡			

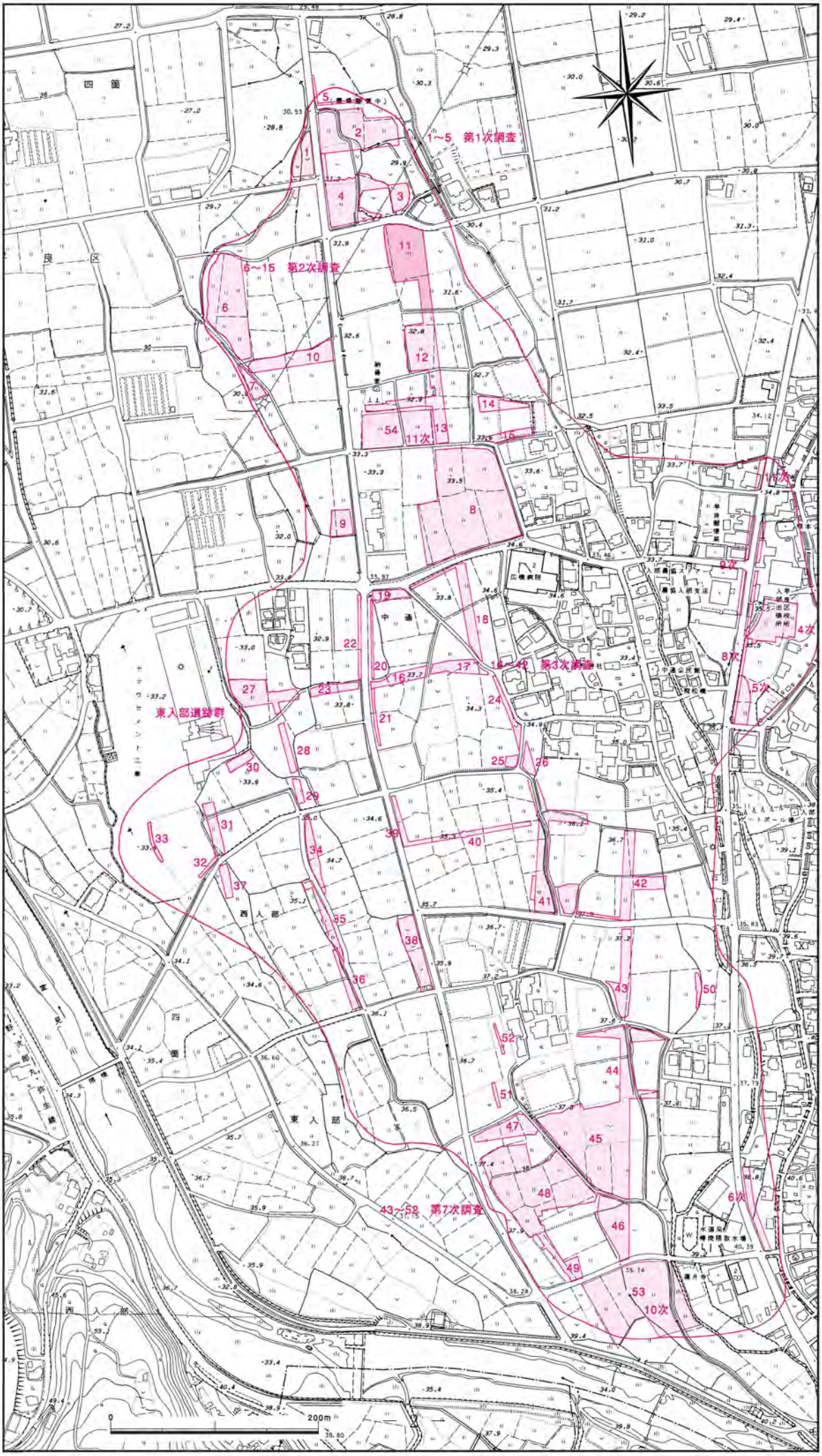


Fig. 2　東入部遺跡および第２次調査地点（1/5000）

Ⅱ　東入部遺跡第２次調査

１．東入部遺跡の位置

県営入部地区圃場整備事業は、福岡市の南西に広がる早良平野の南部、標高 592 mの油山西麓とその西を流れる室見川との間に広がる水田地帯で実施された。今回報告する東入部遺跡群は、事業地内の遺跡群の中では最も南の福岡市早良区大字東入部地内にあり、南北に延びる低位段丘とその周囲の沖積地を占める。東西約 700 m、南北 1200 mの広大な遺跡で、西は室見川、東側は小河川を越え荒平山の麓に達する。北側には安通、清末、四箇大町、四箇古川、四箇船石、岩本の各遺跡が、川や浅い谷を隔てて分布する。南は室見川が平野に流れ出る狭地となる。標高は遺跡の第１次調査北端で 29 m、第 3 次調査地点で 33 ～ 37 m、南端にあたる 10 次調査地点で 39 mである。

東入部遺跡では、これまで 12 次にわたる発掘調査が行われてきた。その内容は、縄文時代の集落と包含層、弥生時代・古墳時代の集落と墳墓、奈良・平安時代の集落と官衙的建物、鎌倉・室町時代の集落と墳墓および生産跡など、豊富で多岐にわたる。

２．東入部遺跡２次調査の概要

（１）調査範囲

1991 年度の事業地の総面積は 21.7ha におよぶ。1991 年 4 月 2 日から 5 月 10 日までの詳細分布調査の結果、発掘調査を要する面積は工事対象地の約 60%、102400 ㎡に達した。埋蔵文化財課では、事業者と調整会議を繰り返し、主に田面の盛土による設計変更を行うことで、調査対象面積を 34481 ㎡に

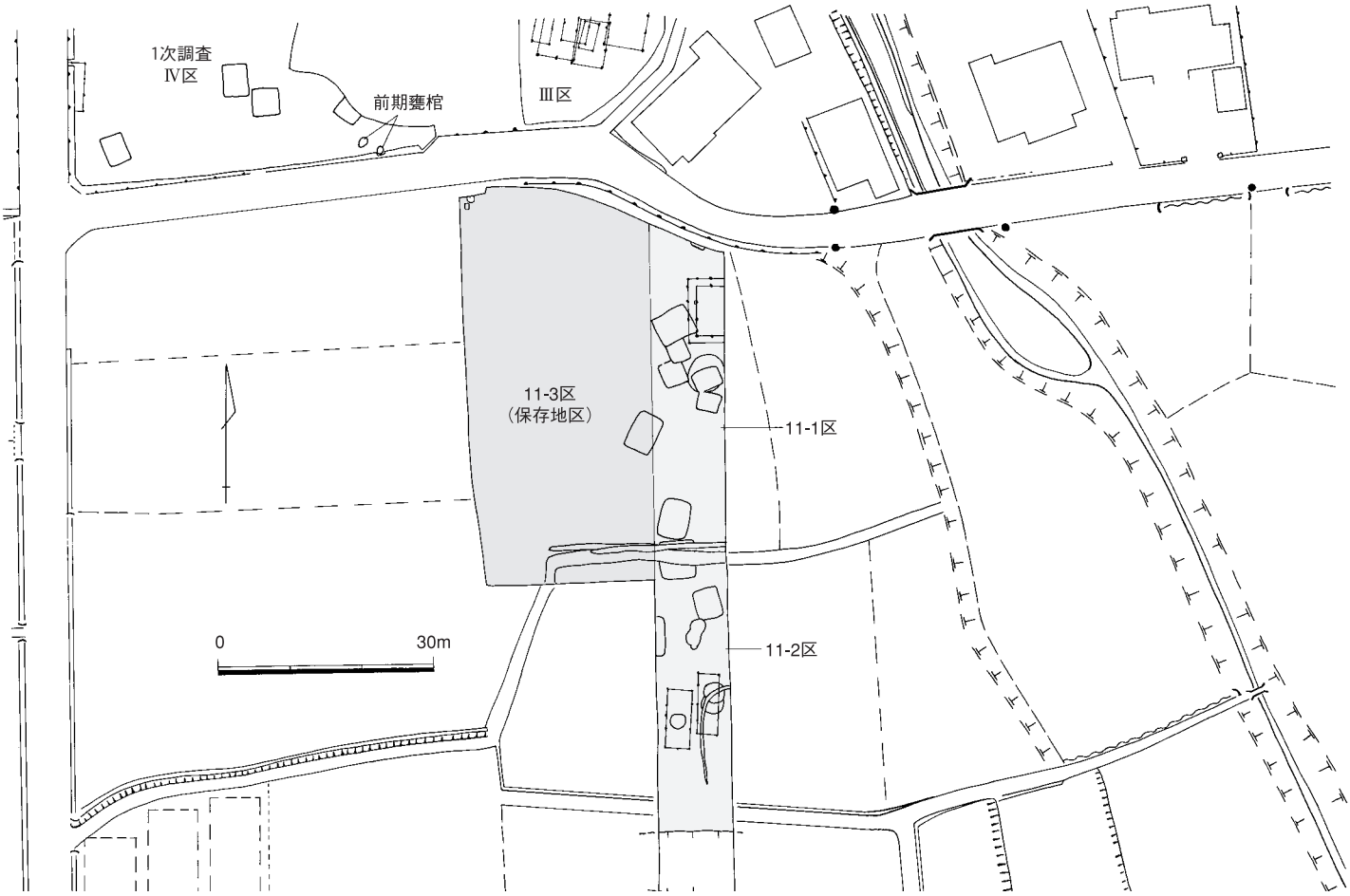


Fig.3　11 区調査区位置図 (1/1000)

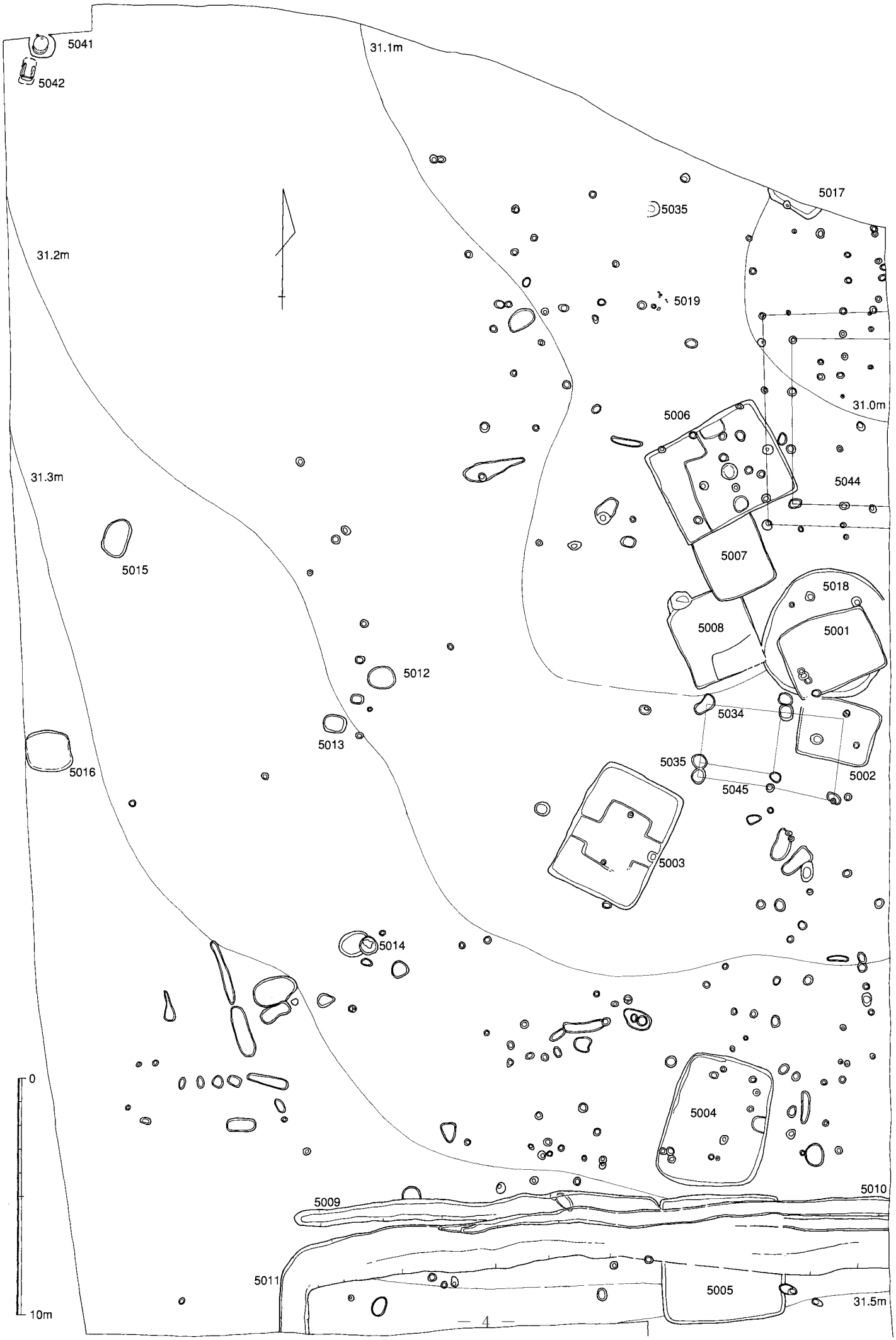


Fig. 4　11-1・11-3 区全体図（1/200）

まで縮小した。このうち東入部遺跡２次調査の調査面積は 16271 ㎡である。

調査対象地は、試掘により遺構、遺物が確認された箇所のうち、道路、用排水路等の構造物建設部分と、田面部分で削平を受ける部分である。また田面部分のうち、耕作土直下で遺構が検出された箇所については、盛り土部分であっても耕作土を掘削する場合は調査対象とした。計画高が現況と同じで、耕作土と扱わない箇所については、表土直下で遺構が確認された箇所でも調査を行っていない。

ただし、田面部分で削平が小さく、下層に工事の影響が及ばないと判断された場合、上面のみの調査を実施し、それ以下を保存した箇所がある。

（２）調査経過

調査対象地を６区から 15 区の調査区に分けた。区の番号は１次調査の続きである。

５月 13 日から６区の調査に着手し、その後７区、さらに８区へと進んだ。８区では甕棺墓、木棺墓から副葬品の出土が相次ぎ、11 月 16 日には現地説明会を実施した。８区の調査は２月まで継続した。一方、10 月からは９～ 15 区の調査に着手し、２月末に終了し、３月５日に 1991 年度の発掘調査をすべて終了した。

なお、同年度には安通遺跡、清末遺跡の調査も東入部遺跡の調査区に前後して調査を行っている。

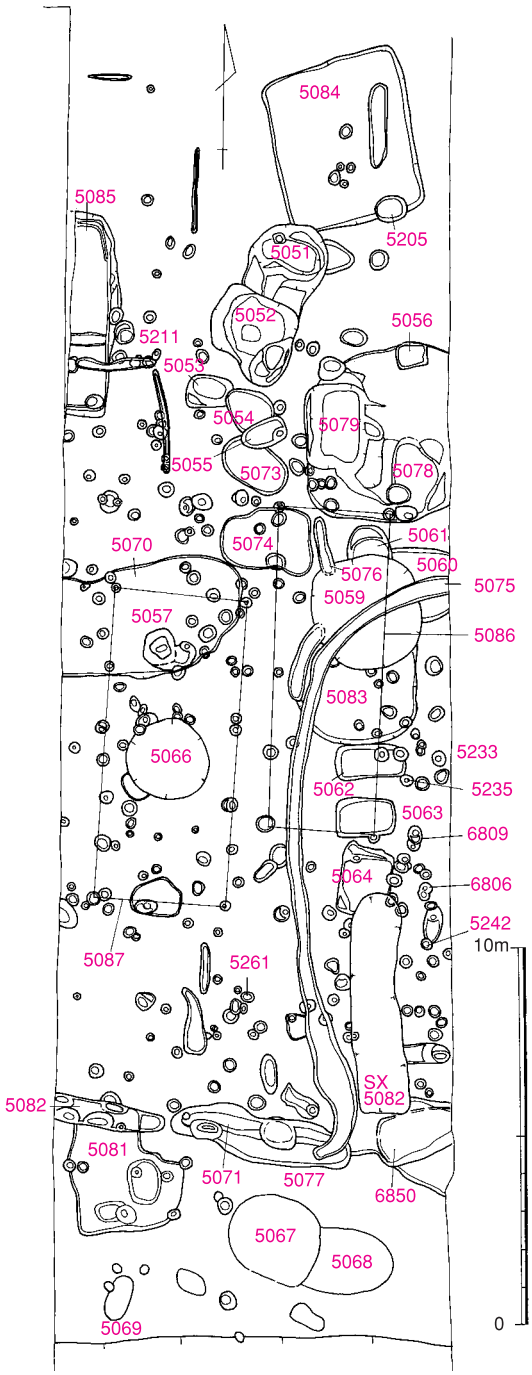


Fig.5　11-2 区全体図（1/200）

Ⅲ　11 区の調査

１．調査の概要

位置　11 区は東入部遺跡が立地する低丘陵の北端近く、丘陵のやや東よりに位置する。この部分は、丘陵の幅は約 250 ｍで、東側は貞島川により区切られる。現況は水田で標高 31.5ｍである。北側に接する道路は田面より 30 ㎝ほど下がり、丘陵を削る。さらに北には１次調地点が広がる。(Fig.2)

11 区は南側の８区に延びる道路建設箇所と、その西側の田面部分に設定した。道路部分では、北端から南に 80 ｍの位置で東西方向の大溝を検出し、これから南側を 12 区、北側を 11 区とした。11 区は道路建設部分を 11-1 区、11-2 区、田面部分を 11-3 区と便宜的に呼称する (Fig.3)。

調査は平成３(1991) 年 10 月に着手し、12 ～ 15 区と平行しながら平成４年３月５日に終了した。

検出遺構と遺物　縄文時代後期からおよそ 14 世紀までの遺構と遺物を検出した。縄文時代は、主に 11-1 区で鐘ヶ崎、北久根山式期を主とする遺物包含層と土抗を確認した。これについては次年度以降報告予定である。

弥生時代以降の遺構は縄文時代の包含層 4b および５層を地山として築かれる。弥生時代では前期の円形土抗１基、中期の円形竪穴住居１基、甕棺墓１基、土抗墓１基、を検出した。古墳時代は前期の竪穴住居 11 基、土抗を検出した。竪穴住居の覆土からは多くの古式土師器が出土した。古代は若干の遺物が出土したが、明確な遺構は確認できていない。中世では 12 世紀から 14 世紀までの遺構を 11-2 区を中心に検出した。これ以降は、近世から近代の溝を検出したのみで、この地が耕作地として使用されたものと考えられる。

ピット以外の遺構については 100 頁の表に一覧を示した。

保存　田面部分である 11-3 区は、後述する 3 層を除去した面で中世の遺構を確認した。その中には、集石や鉄滓を伴う土抗、ピットなどがある。また遺構掘削中に、弥生時代、古墳時代等の遺物がまとまって遺存する状況を確認し、下層に当該期の遺構が存在することが予想できた。北西部では、空隙が陥没することで甕棺墓を確認し、その部分についてのみ掘削取り上げを行った。

中世の遺構面は、南端部で 31.5m、北端で 31.1m であり、田面の計画高は 31.65m で、耕作土の厚さを考慮しても、すでに工事による掘削高より下がっている。以上の状況から、下層遺構に工事の影響はないと判断し、慎重な工事を求めた上で 11-3 区下層を現状保存とした。主に古墳時代までの遺構･遺物が広がると考えられる。

２．層序と遺構面

Fig.6 に 11-1 区の北壁および東壁の一部の土層図を示した。作図した時点ですでに現在の表土は除去されており、1 層の上に 15 ㎝ほどの耕作土がのる。

１層　灰色の粘質シルト質土層で、ほぼ水平堆積を保つ。近現代の耕作土と考えられる。１c、d 層は北端から 13 m付近で段を成し深くなった部分に堆積する。１a、b 層はこれらを覆って広がり、田面を広げた過程が確認できる。

２層　淡灰褐色の粘質土で、北端から 30 m付近まで広がる。この層もほぼ水平で、時期は不明だが耕作土と考えられる。

３層 黒色から暗褐色を呈す粘質土層で色調から目立つ。鉄分の筋が多く見られ、炭粒を多く含む。所々途切れながら 11 区全体に広がり、小片であるが遺物を含んでいる。

４層 灰褐色を呈すやや粘質の土層である。４a 層はやや粘質が強く東壁を通して見られる。４b 層は４a 層より色調が淡く黄色かかる。北端より 12 m付近まで広がり､主たる縄文時代の包含層である。弥生時代の遺構はこの層を掘り込んでいる。

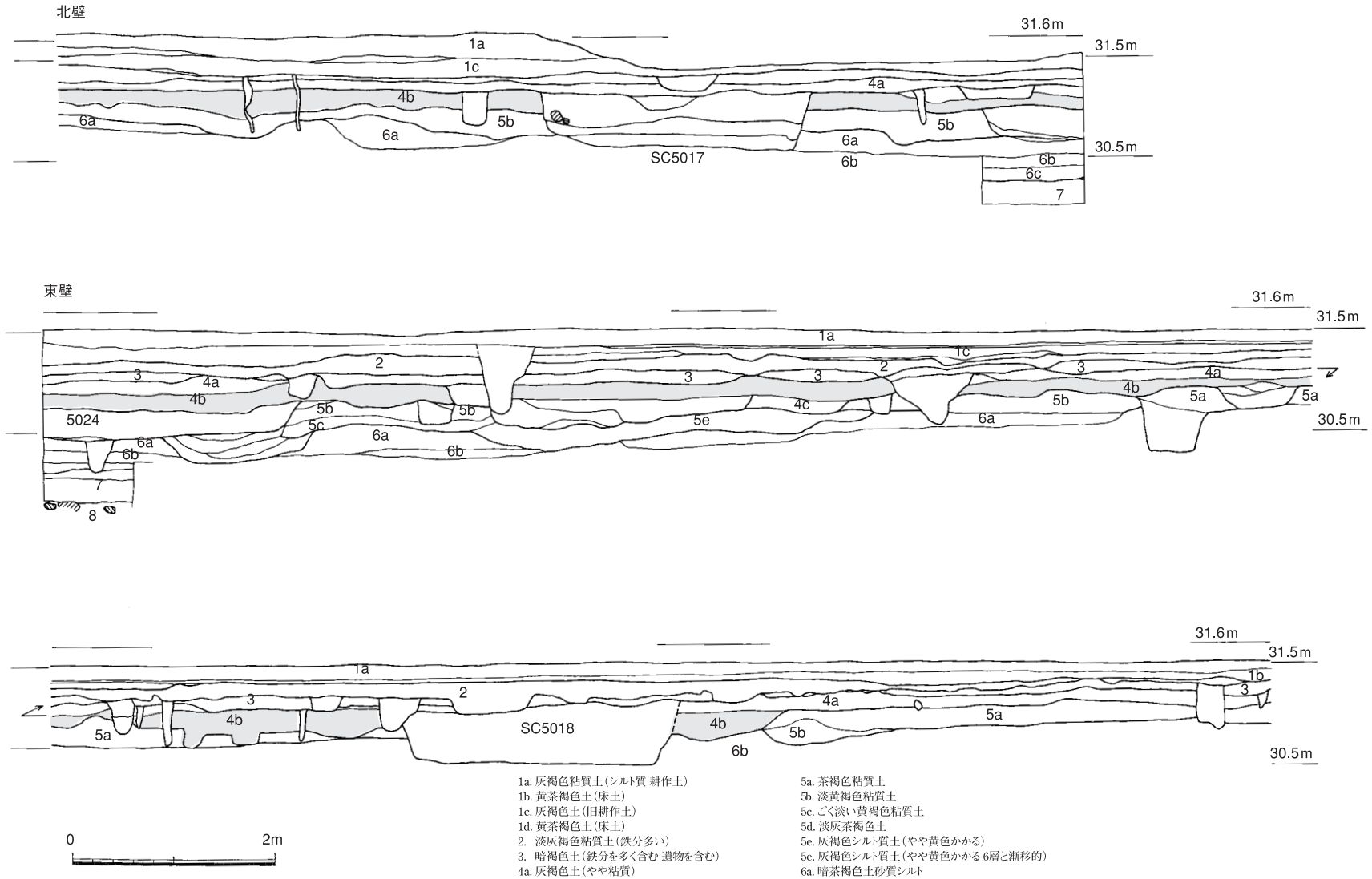
５層 淡黄褐色系のややシルト質の層で 11 区から 12 区に広がる。５a、b 層からは縄文土器が出土している。４、５層については、次年度以降の縄文時代の報告の際に若干細かく検討したい。

６層 黒褐色から暗茶褐色の砂質シルトで調査区全体に広がる。６層以下では遺物を確認していない。

７層 調査区北東隅のトレンチで確認した、明るい淡黄褐色のシルトでしまりがない。

９層 茶褐色の粗砂と 20 ㎝大までの礫層で厚さ 30 ㎝以上を確認した。

11-1 区の弥生時代以降の遺構は、４a 層より上層を除去した面で確認した。すなわち、11-1 区では４b 層または５層上面である。11-1 区では、４層が古墳時代、弥生時代の遺構覆土と色調が類似し、中世の遺構も検出が困難であった。遺構の切り込みは４a 層からの可能性がある。



1a. 灰褐色粘質土(シルト質 耕作土)
1b. 黄茶褐色土(床土)
1c. 灰褐色土(旧耕作土)
1d. 黄茶褐色土(床土)
2. 淡灰褐色粘質土(鉄分多い)
3. 暗褐色土(鉄分を多く含む 遺物を含む)
4a. 灰褐色土(やや粘質)
4b. 淡灰褐色粘質土(黄色かかる 縄文包含層)
4c. 灰褐色土(やや粘質)
5a. 茶褐色粘質土
5b. 淡黄褐色粘質土
5c. ごく淡い黄褐色粘質土
5d. 淡灰茶褐色土
5e. 灰褐色シルト質土(やや黄色かかる)
5e. 灰褐色シルト質土(やや黄色かかる 6層と漸移的)
6a. 暗茶褐色土砂質シルト
6b. 暗茶褐色土(6aより暗くやや砂質強い)
6c. 茶褐色土砂質土
7. 淡明黄褐色砂質シルト
8. 砂礫

Fig. 6　11-I 区土層図 (1/60)

11-2 区は灰褐色粘質土、黄褐色土の面で遺構を検出した。11-1 区土層との関係は記録をとっておらず不確実ではあるが、4a 層および 5 層と考えられる。11-2 区は SX5070 等のように浅いくぼみ状に遺物を含んだ土が広がる箇所が広がり、それらを掘削しながら遺構を検出した。また、中世の遺構の調査を終了した後に灰褐色粘質土を重機で除去し、黄褐色土上面で弥生時代の土抗 SK5083、古墳時代の住居 SC5084、SC5085 を検出した。

Fig.4 には遺構面の等高線を示した。11-1 区は北東に向かって落ちる緩やかな斜面で、東北端で 30.92m、南東端で 31.60 m と約 70 cmの高低差がある。調査区が丘陵の中央より西側であることもわかる。11-2 区では若干の高低はあるが、11.6m 前後とほぼ水平である。削平による平坦化も行われていると考えられる。

３. 弥生時代の遺構と遺物

弥生時代では、前期の土抗、中期の甕棺墓、土抗墓各 1 基、円形住居 1 基を検出した。遺物は古墳時代の住居等の遺構にも少量であるが出土している。11-3 区下層等、未調査の周辺に広がることが予想されるが、密度は高くない。１次調査では前期の甕棺墓 2 基が確認されている。

（１）竪穴住居

SC5018 (Fig.7・8)

11-1 区中央北よりに位置する円形住居跡である。一部調査区外に広がり、その土層を Fig.6 に見ることができる。直径 5.5m × 5.1m の規模で、深さ 50 cmを検出できた。古墳時代の住居跡 SC5001 に

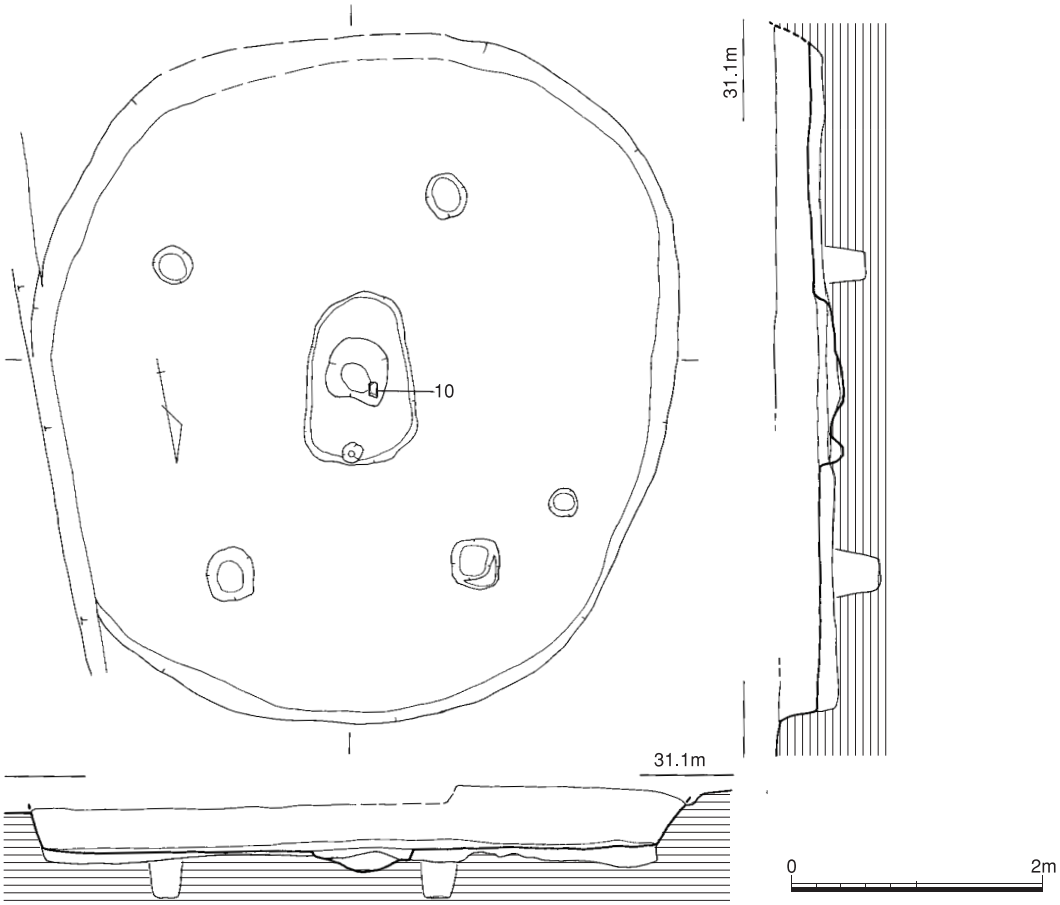


Fig.7　SC5018 実測図（1/60）

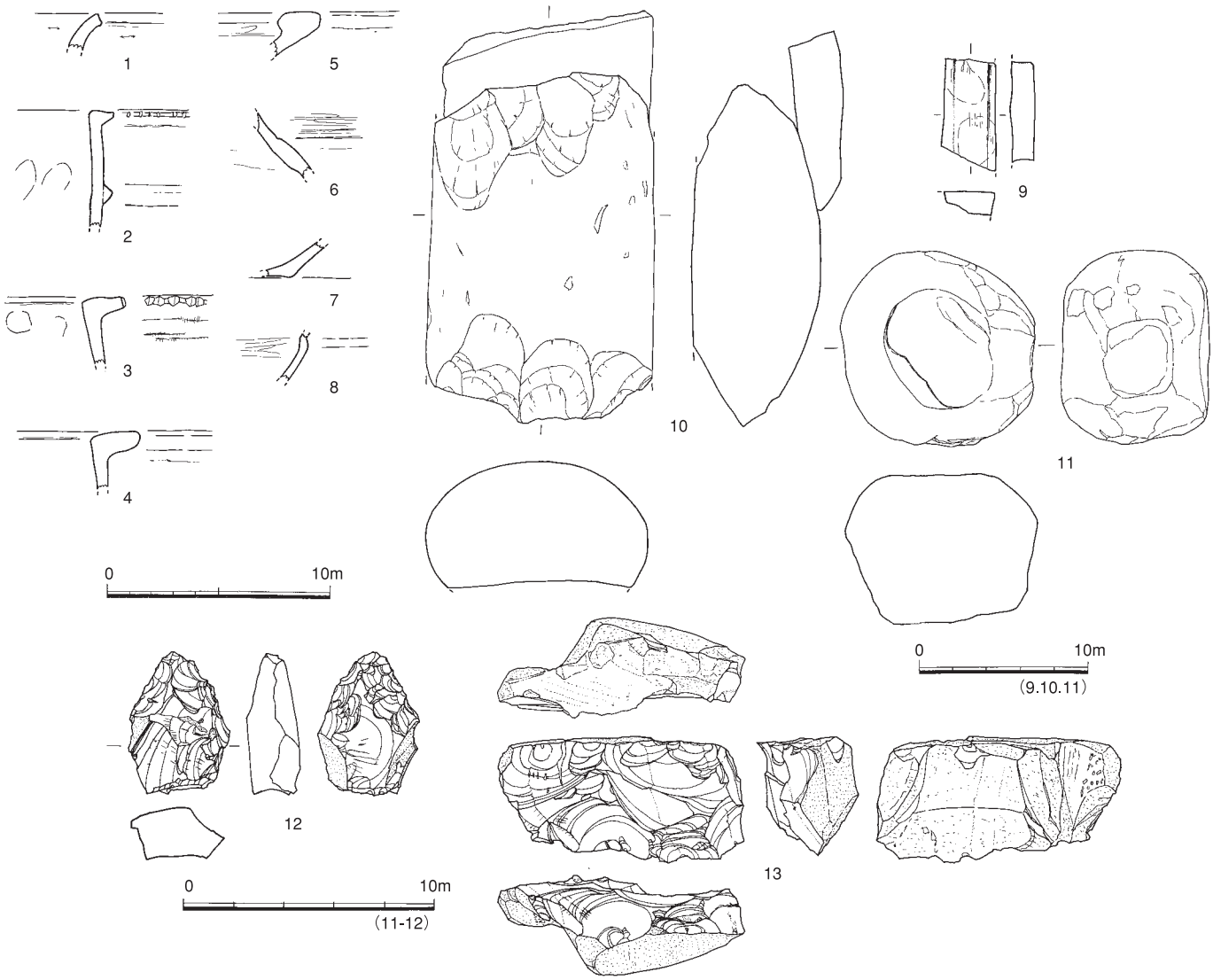


Fig.8　SC5018 出土遺物実測図（1/3、2、3/4）

切られる。覆土はやや淡く粘質の均一な茶褐色土で 4 層に近い。厚さ 10 ～ 15 cmほどの張床が見られた。4、5、6 層を掘り込み、張床下は淡黄褐色シルトの 7 層に達している。南側は一部掘りすぎている。張床上では中央土抗と 4 本の主柱穴を検出した。中央土抗は 136 × 84 cmほどの楕円形で中央がくぼみ深さ 23 cmほどである。蛤刃石斧 10 が出土した。主柱穴は径 30 cmから 40 cm、深さ 40 から 50 cmほどで、柱痕は確認できなかった。

遺物は少なく細かな時期は決めがたい。Fig.10-5、7、10 以外は上層出土で上層では古墳時代の遺物も混入している。下層出土の壷 5 から中期前半としておくが、柱数や中央土抗等の住居形態は前期の可能性もある。

出土遺物（Fig.8）　1 は外反口縁を横ナデ調整し、鉢または壷と考えられる。器面は橙茶色を呈す。2 は 2 条突帯の甕で口縁部に浅い刻み目を施す。胴部突帯の刻みの有無は器面荒れのため不明確。ナデ調整で黄白色を呈す。3、4 は逆 L 字口縁の甕である。3 の口縁端部には浅い刻み目を施し、口縁下には木口痕が残る。いずれも胎土に多くの砂粒を含む。5 は鋤先口縁の壷で覆土下層からの出土である。器面荒れのため調整は不明。灰褐色を呈す。6 は壷の肩部で、外面研磨、内面ナデ調整で淡橙色を呈し、胎土は細かく精良である。8 は内外面研磨調整で灰褐色を呈す。浅鉢と考えられる。7 は主柱穴覆土からの出土。丁寧なナデ調整を施す底部片で壷または鉢と考えられる。9 は泥質頁岩製の磨製石器である。残存する 2 面は若干のくぼみがあるものの平滑で、縦方向の擦痕が見られる。扁平片刃石斧等の破片と考えられる。10 は玄武岩製の蛤刃石斧で基部、刃部を欠く。器面は風化し、敲

打痕が浅くわずかに見られ、丁寧な研磨が伺われる。小片はSC5003出土の破片が接合した。長辺の破面は大きな一度の剥離であるが、両短辺は成形を施しているようでもある。磨石等に再利用した可能性もある。11は緑色の堆積岩製の叩き石で281gを量る。12は黒曜石製の石器で調整剥離により鏃状に先端部を作り出している。基部側は両端に自然面を残し、8.5mと厚い。石鏃未製品であろうか。長さ2.0cm、幅1.3cm、重さ5.94 gである。13は黒曜石の石核で背面は自然面を残す。上下面からの剥離を行い、打面は自然面である。剥離は大きなステップが見られる。長さ4.14cm、幅1.80cm、厚さ9.2cmである。剥片石器は、黒曜石の剥片・砕片が77点、石核14点、つまみ型石器2点、加工がみられるもの2点、安山岩製剥片2点である。黒曜石の剥片には刃器もしくは使用痕を持つもの15点を含む。つまみ型石器の存在から縄文後期のものを含むことは明らかである。剥片のうち、縦長を意識したもの等を除くと、弥生時代と考えられるものは約半数ほどである。また、石核は小型で、縄文時代の包含層と比べてその出土頻度が高く、これも弥生時代的な状況を示していると考えられる。

（２）土抗

SK5083（Fig.9）

11-2区中央で検出した。中世の井戸SK5059や溝SD5075に切られる。遺構面の灰褐色粘質土を除去した黄褐色土層上面で検出した。平面形は径360㎝ほどの略円形を呈し、深さ30㎝ほどである。壁の立ち上がりは明瞭で床面は平坦である。柱穴は検出できなかった。覆土は淡茶色の砂混じり粘質土である。

床面より10㎝ほど浮いた状況で前期の甕を中心とした遺物が出土した。遺構の時期を示すと考えられ、板付Ⅱｂ式と位置づけられよう。

出土遺物（Fig.10）16、17、20から22は外反口縁の口唇部に刻目を施す甕である。16、17は口縁下に刻目突帯を巡らし、器面調整がやや丁寧である。16は南東側に横たわった状態で出土し、中央の破片が接合する。西よりから出土した底部は、同一個体と考えられるが接点が小さく不確実である。外面胴部をヘラ状工具により上部を横方向に調整したのち下半部に縦方向の調整を施す。口縁部は横方向のナデ調整である。また、これらの調整以前の刷毛目が所々に見られる。内面は口縁部刷毛目で、胴部は斜め方向の刷毛目の後にナデている。外面灰茶色を呈し胎土に砂粒を多く含む。7割ほどが残存する。17は16の西隣出土で底部は伏せた状態であった。器面調整は外面は16と同様で、内面中位より上は横方向のヘラナデである。外面口縁部および底部は黄橙色、胴部は灰茶褐色を呈し、若干煤ける。内面は茶褐色で底部付近は暗褐色を呈す。胴部中位より上は一

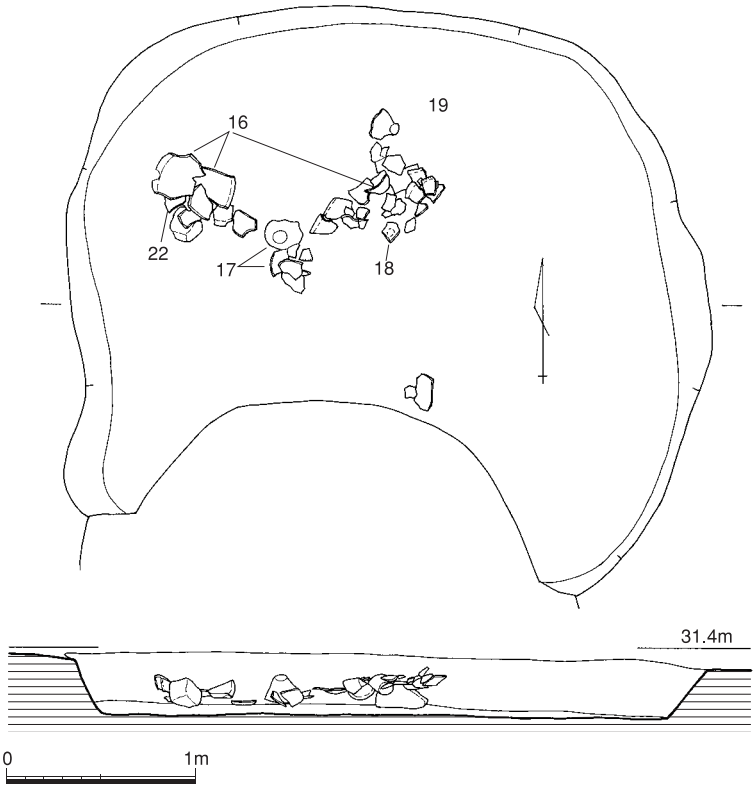


Fig.9　SK5083実測図（1/40）

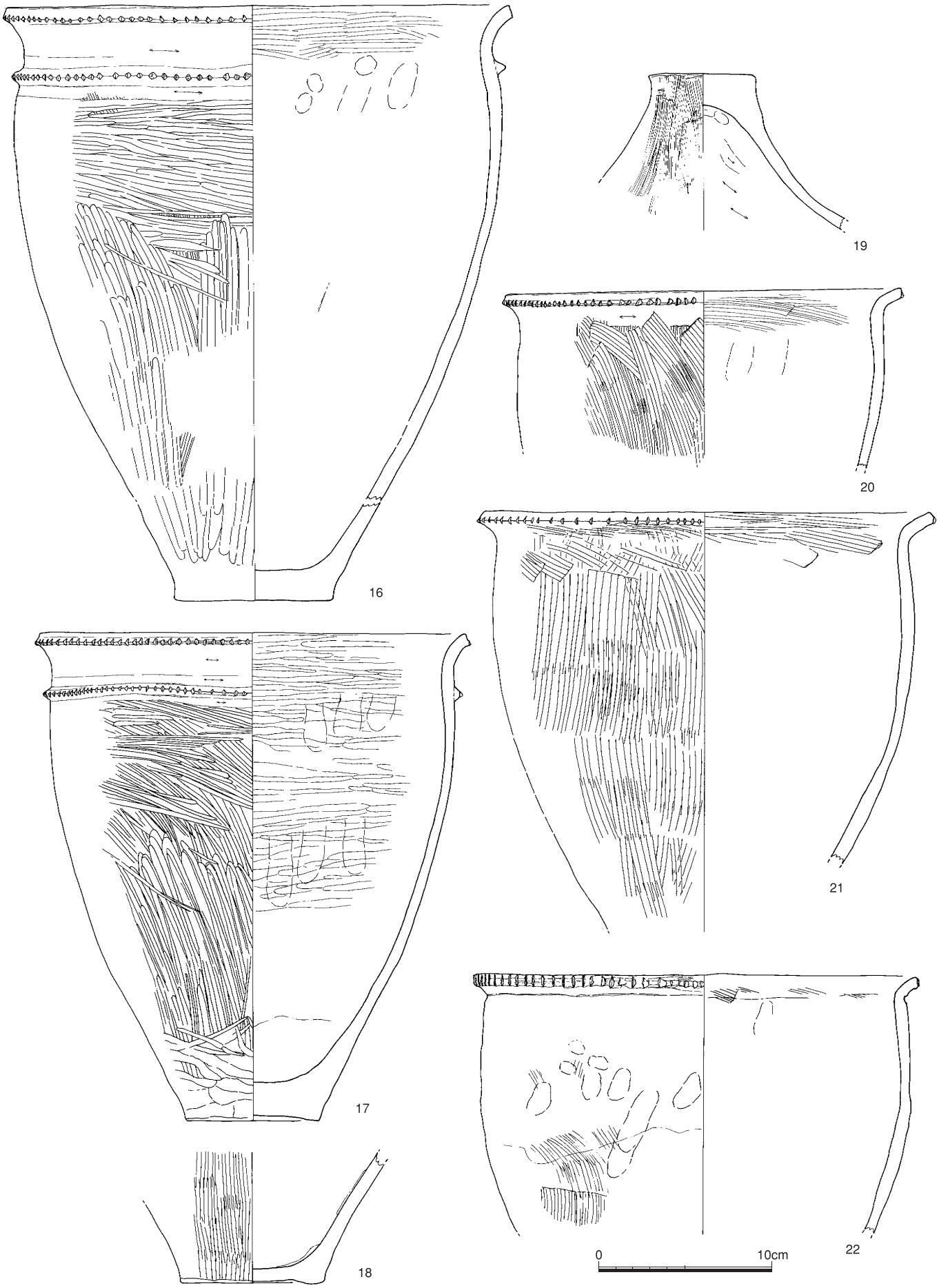


Fig. 10　SK5083 出土遺物実測図（1/3）

部が残るのみで、図は底部径からの復元である。18 は甕の底部で外面刷毛目、内面には炭化物が残る。19 は蓋で外面は細かな刷毛目、下部は一部横方向のヘラナデが見られ、若干煤ける。内面はナデである。20 は外面刷毛目で口縁部に縦方向に施した後に横ナデし、口縁下から胴部はその後に縦方向に施す。灰茶褐色を呈し、下部は荒れ気味で２次焼成によると考えられる。内面は口縁部を横方向の刷毛目、胴部をナデ仕上げで、淡灰褐色を呈す。2、3 ㎜大の砂粒を多く含む。1/2 強が残存する。21 は外面刷毛目で灰褐色を呈し、下部は 2 次調整で赤みがかり器面が荒れる。内面は口縁部を刷毛目、胴部にはナデを施す。淡灰褐色から灰褐色を呈し、下部は暗褐色を呈す。3、4 ㎜大までの砂粒を多く含み、器壁は厚い。下部は欠損部分が多いが上部は１周する。このほかに黒曜石の剥片 2 点が出土している。22 は口縁下に 1、2 ㎜ほどの段が見られる。横方向に断続的に施した調整の工具端部により削られたものと思われ、段の下には横ナデ状の浅い擦痕が残る。口縁部は外反成形した際に口唇部下に襞が生じている。また刻目は口唇部全体に及び浅い。外面上部はナデで、暗茶褐色を呈し煤け若干の炭化物が付着する。中位より下は刷毛目調整で赤みを帯びた淡灰褐色を呈し煤は及ばない。内面は口縁部に刷毛目が残る他はナデで、上部は灰茶色、下部は暗褐色を呈す。3 ㎜大までの砂粒を多く含み、内面下部は砂粒が抜けた小さなくぼみが多い。図は 1/4 からの反転復元である。

以上の遺物は出土状況から一括性が高いと考えられる。器種が甕に偏り、壷は破片も見られない。また、甕も主に外面の器面調整にヘラナデ、刷毛目、ナデの３種が見られた。刻目は、22 以外はヘラ状工具で横方向に浅く鋭く刻んでいる。

（３）甕棺墓

ST5041 (Fig.11)　調査区北西端で、表土剥ぎの段階で一部が露出し検出に至った。2 個の大型甕棺を組合わせた覆口式の甕棺墓である。甕棺の挿入角度は 54°と大きく、挿入方位はN 18°Eからである。棺外墓抗中位には、棺に接して小壷がほぼ正立した状態で出土した。甕棺は上甕の底部の一部を重機で欠いた以外は完存する。棺内は土が流入し、骨、副葬品は確認できなかった。小壷についても同様である。墓抗は平面形径 110 ㎝ほどの不整円形で、深さ 80 ㎝を確認した。壁面は挿入口方向である北側は斜めに立ち上がり調査区外に及ぶ。他は直立に近いが、南側はオーバーハングしていたものを掘りすぎた可能性がある。

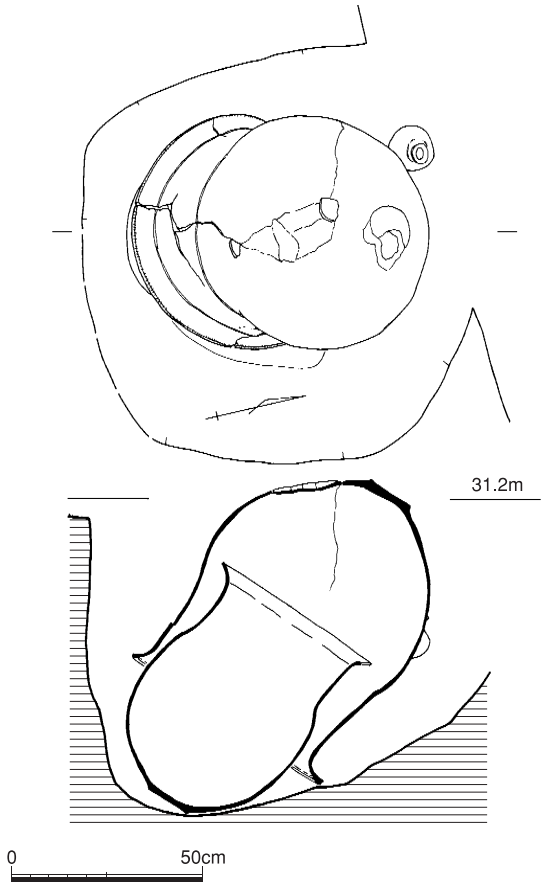


Fig.11　ST5041 実測図（1/20）

出土遺物（Fig.12）　23は甕棺の上甕で器高73㎝、胴部最大径 62.5 ㎝、口縁部径 60 ㎝の規模である。頸部の締まりが強く、壷の形態をよく残す。金海式甕棺でも古手と考えられる。口縁部には、内面を肥厚し、外面端部には上下端に刻目を施す。上端については刻みを施す部分と施さない部分が交互に見られる。(112 頁 23-2) 施す部分は幅 7 ㎝から 15 ㎝、施さない部分は 10 ㎝から 17 ㎝ほどである。口縁部下と頸部には 2 条の沈線を巡らす。器面調整は口縁部は内外面横ナデ。外面頸部は縦方向のナデ状の擦

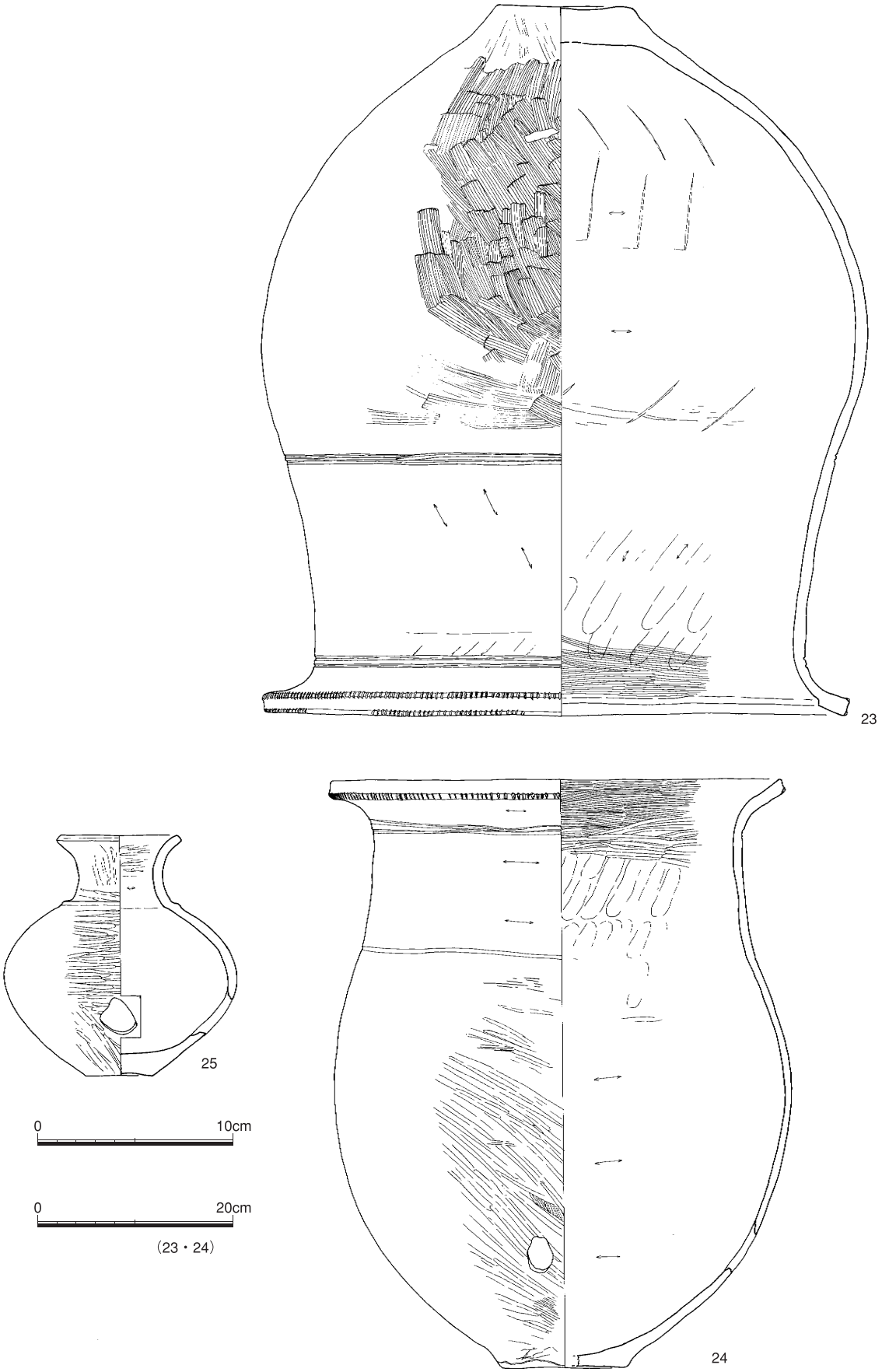


Fig. 12　ST5041 出土遺物実測図（1/3、6）

過痕が残る。胴部は刷毛目調整で、最上部の横方向の刷毛目は浅く、他の部分は幅広で縦方向で深い。底部付近は細かく浅い擦過状の刷毛目である。内面口縁部下は横方向の刷毛目、頸部は縦方向の幅広の指による指圧、ナデ痕跡が残る。胴部は上部に横方向の浅い削り状の擦痕と木口痕が見られ、その下はナデ調整で所々に木口痕がわずかに見られる。底部近くになると連続した長さ5から7㎝ほどの木口痕が残る。外面は淡茶褐色を呈し、最大径部には黒斑が1カ所見られる。内面は明るい茶褐色を呈す。胎土には2㎜大までの砂粒を多く含んでいる。

24は下甕で器高60.5㎝、胴部最大径47㎝、口縁部径47㎝ほどの大きさである。縦長の器形で伯玄社式に近い形態である。口唇部下端に施す刻目は浅く細いものと大きめの物があり不均一である。口縁下には浅く幅広の沈線2条、頸部下部には1条巡らす。胴部下部には焼成後の穿孔を施している。器面調整は外面口縁部から頸部は横ナデ、胴部は斜め方向のヘラナデ状の調整が不鮮明ながらみられる。またその前段階の横方向の刷毛目調整が所々に見られる。底部は削りを施す。内面は口縁部に横方向の刷毛目を施し、口縁部下には刷毛目の後に横方向のヘラナデもしくは研磨状の調整を施す。頸部には指押さえの痕跡が残り、胴部は横方向の擦過状の調整痕が見られる。外面は黄橙色を呈し反対側の位置2カ所に黒斑がある。内面は色を呈す。

25は棺外副葬の小壷で、器高12.2㎝、最大径11.8㎝ほどである。胴部下部に焼成後の穿孔がある。頸部と胴部間には低く不明瞭な突帯が巡る。器面調整は、頸部に縦方向の擦痕、頸部基部から胴中位までには横方向のヘラナデもしくは研磨を施す。胴部下部は斜めから縦方向の研磨である。全体に丁寧に平滑に仕上げる。内面は口縁部から頸部は研磨状の平滑な仕上がりだが、胴部以下は普通のなで調整である。灰茶褐色を呈し、胴部最大径部1カ所に黒斑が見られる。胎土は1㎜大までの砂粒を多く含む。頸部内面には、所々に赤色顔料と考えられる淡橙色部分があり、外面胴部上部にわずかではあるが同様の部分がある。彩文がなされていた可能性がある

（4）土抗墓

ST5042（Fig.13） 甕棺墓ST5041の南に隣接して確認した石組みをともなう遺構である。長さ50㎝、幅25㎝ほどの丸みをおびた礫をコの字状に配し、南側、東側の礫の背面には同一個体の壷の破片を貼り付けるように乗せている。石組みの内径は25㎝ほどで、内には骨、幅葬品等の出土はなく、石組みの形態と、甕棺墓に近接することから墓と考えた。墓杭は、灰茶褐色粘質土に同様の土で埋まっているため、検出が困難であった。覆土の色調から図に示したように掘削したが不確実である。写真(Ph.5)と他遺跡の事例から、さらに北側に長いプランで甕棺墓と切合い関係にあったのではないかと考えている。その際、石組み側が頭位と想定され、その方位はN -169°- Wである。

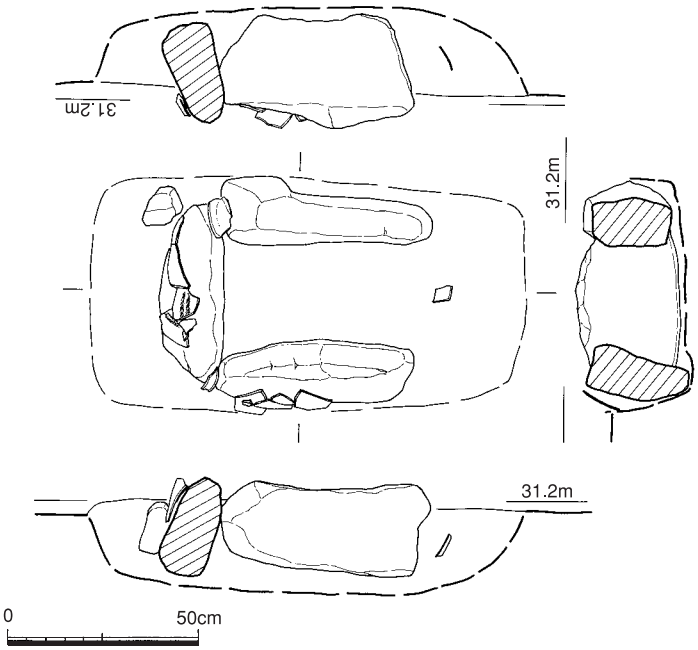


Fig.13 SK5042実測図（1/20）

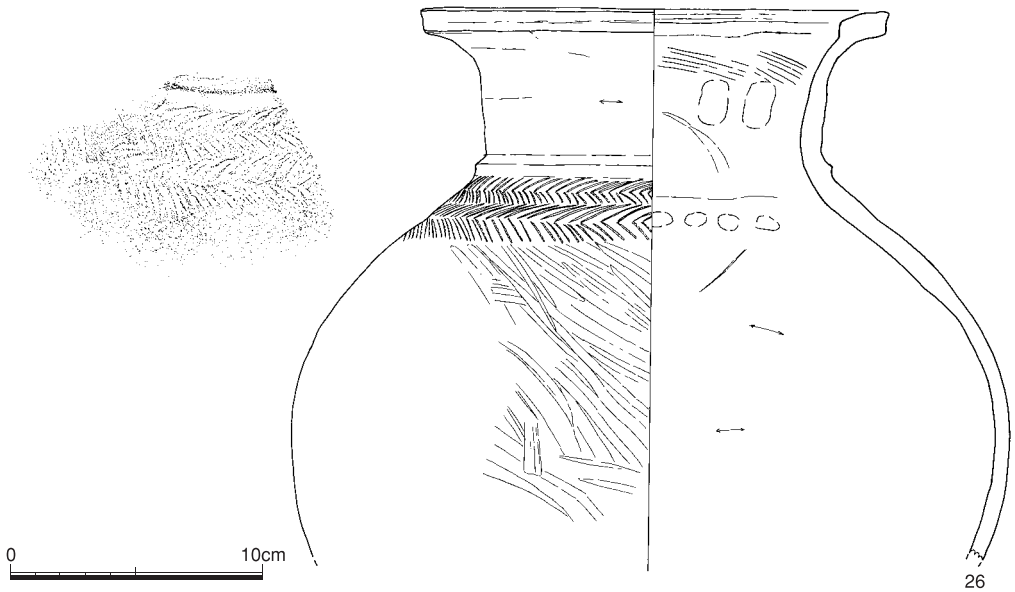


Fig.14　SK5042 出土遺物実測図（1/3）

出土遺物（Fig.14）　26 は石組みの礫に配されていた土器片である。すべて同一個体で大きな固まり二つとそのほかに接合した。二つの大きな破片で全周の 1/2 から 2/3 になる。図は口縁部から頸部の 1/4 ～ 1/6 からの反転復元で胴部はもう少し張る可能性がある。中期初頭の壷で口縁部を肥厚し、頸部に突帯を巡らす。胴上部には無軸羽状文を２条施す。羽状文は、上から順に施し、3 段目については左から右に施文している。また 1､3 段目は弱い弧状に沈線を描き､2､4 段目はやはり弱い弧状で、外側が鋸歯状を成す貝等の工具を刺突することで施文する。外面は頸部を横ナデ、胴部を横方向のヘラナデ調整で、内面は口縁部横ナデ、頸部は上部を刷毛目、下部をナデ調整である。胴部は主に横方向のナデ調整で木口痕状の痕跡が見られる。外面は灰褐色から黄褐色、内面は淡黄褐色を呈す。この他に弥生土器、縄文土器が数点出土している。

（５）その他の遺物（Fig.15 ～ 17）

ここでは古墳時代、中世の遺構等、弥生時代の遺構以外から出土した遺物を示す。器形が分かるもの、1/4 以上残存する底部等できるだけ図化に努めた。未図化の物を含めてコンテナケース１箱弱の量である。

27 から 32 は外反口縁に弱い横ナデ調整を施す甕である。27 は荒れ気味で、丸みのある口唇部下部に長く浅い刻みを施す。28 から 30 は口唇部を横ナデで面取りし、下端に小振りの刻目を施す。32 は口縁下にも刻目突帯を施す。外面は口縁部を横ナデ、胴部をヘラナデ調整し、内面にはヘラナデを施す。33 は小振りの逆Ｌ字口縁の口唇部に浅く丸い刻目を施し、口縁下突帯にも極小さな刻目を施す。外面突帯間には強い横ナデを施す。34 はＬ字部が厚い。35 から 37 は口縁部下の刻目突帯である。35 の外面は横方向のヘラナデ状、内面は縦方向の刷毛目調整である。37 は低くなだらかな突帯にやや大振りの刻目を施す古手の甕である。38 は壷または鉢の口縁部で強い横ナデを施す。器面は荒れるが、橙色のスリップをかけたような部分が残る。39、40 は壷の口縁部である。39 は外面に木口痕状の段が残る。灰褐色を呈す。40 は器面が荒れ、一部 38 と同様にくすんだ橙色部分が見られる。41 の器壁は橙色を呈し､2 本の平行沈線の上下に斜め方向の沈線文を施す。42 は沈線により 4 重の半円を描く。

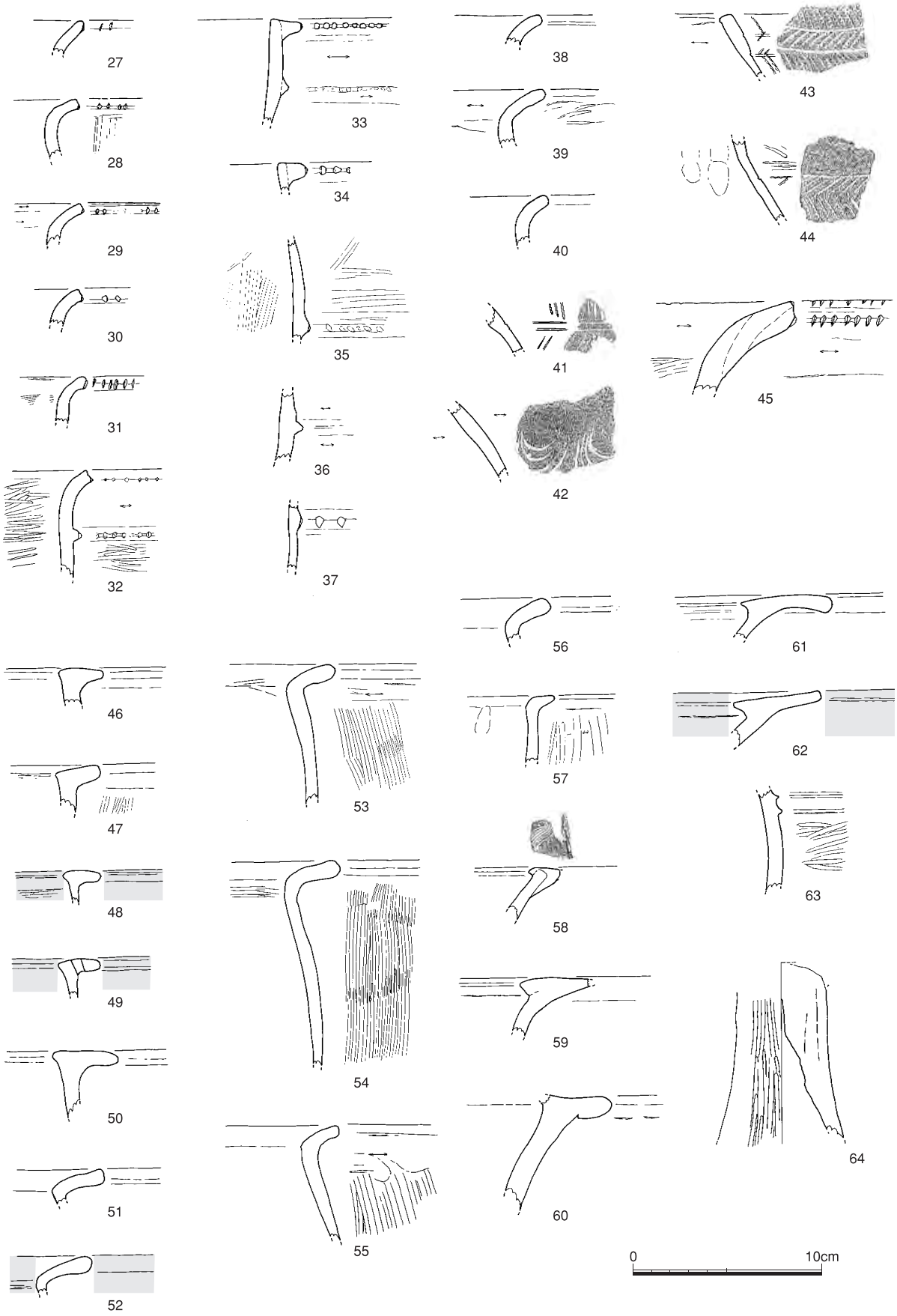


Fig. 15　弥生土器実測図（1/3）

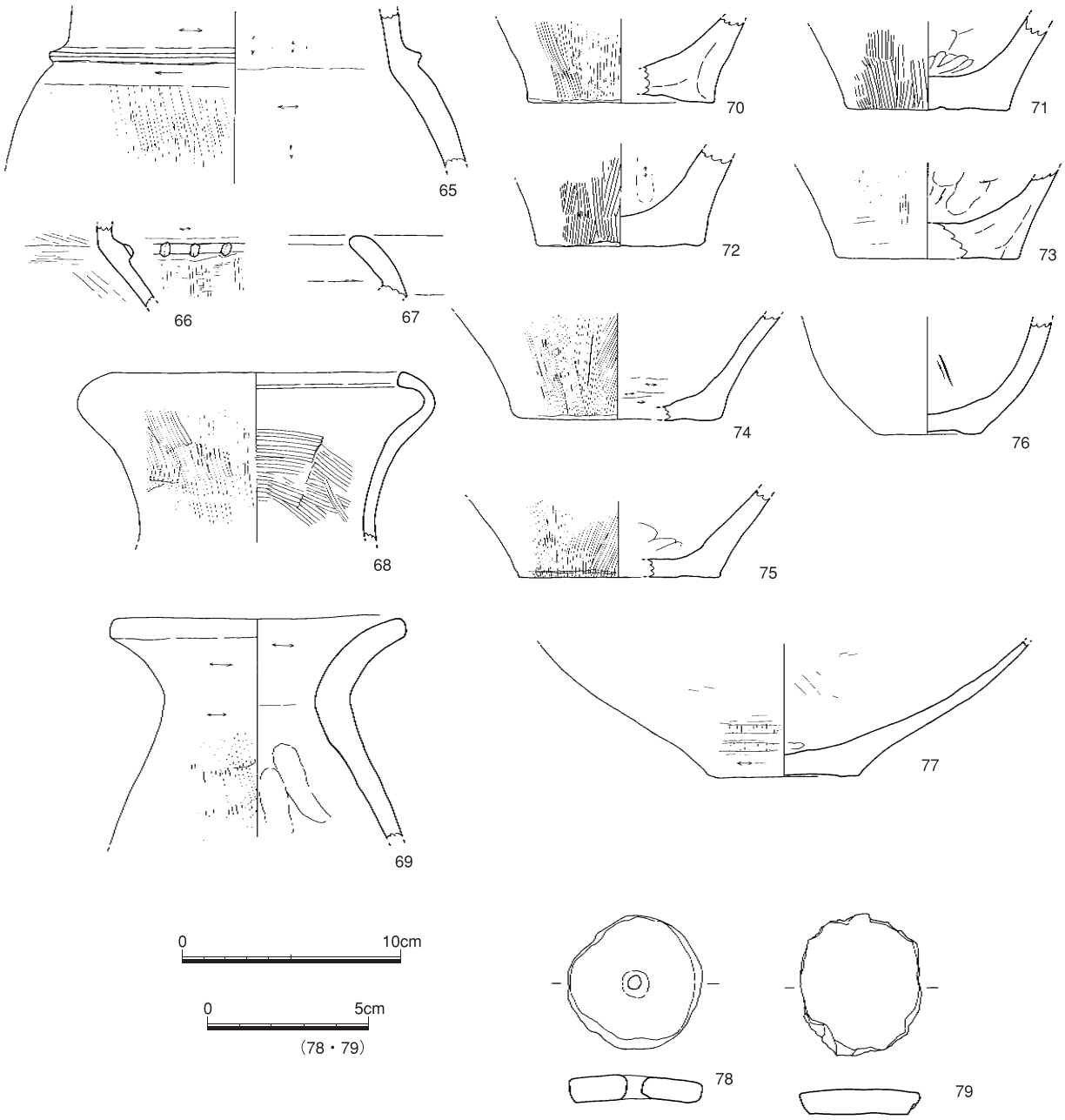


Fig.16　弥生土器・土製品実測図（1/3、2）

筆致に勢いがあり、文様として雑な感がある。外面には擦過、内面は横ナデ痕が残る。43 は無頸壷と言えそうな器形で、貝殻腹縁による施文の後に沈線を施し有軸羽状文を構成する。灰色を呈し、横方向の丁寧なナデ調整を施す。44 は無軸羽状文の上に横線を配す。いずれも二枚貝の腹縁により施文し、その順序は左下がりのものが最後である。外面は横方向の研磨、内面には指押さえがよく残る。45 は大型の壷で口唇部上下端部に刻目を施す。口縁部外面にはわずかに段が見られる。内外面とも横ナデで、内面頸部部分には横方向の擦痕が見られる。外面淡灰褐色、内面淡い橙色を呈す。

46 から 57 は逆Ｌ字状の口縁部の甕である。およそ口縁部は横ナデ、胴部外面には縦方向の刷毛目を施す。淡橙色系の色調で 48、49、52 には赤色顔料を施し、作りが丁寧で胎土も細かい。48 には焼

成前の穿孔が見られる。56 は灰白色を呈す。57 の縦方向の刷毛目は凹凸が明瞭で、平行沈線状に見える。58 から 61 は鋤先口縁の壷である。58 は口縁端部を欠き、外面は荒れ気味である。内面は口縁部横ナデ、頸部は丁寧なナデ調整で橙色を呈す。口縁部には浅い沈線または調整工具による平行波状文を施している。59 は内外面に赤色顔料を施す。60 は内面突出部を欠き、器面は荒れ気味である。器壁が厚い。外面口縁部下に木口の刺突痕であろうか幅２㎜ほどの線状のくぼみが見られる。61 は薄手でシャープな作りで胎土が細かい。淡橙色を呈す。62 は壷または高坏で内外面に赤色顔料を施す。器面は荒れる。63 は壷の胴部突帯部分で外面には横方向の研磨調整を施す。64 は高坏の脚部で 1/2 弱からの復元。外面は縦方向の研磨調整で赤色顔料を施す。内面は橙色を呈す。胎土が細かく砂粒をほとんど含まない。65 は 1/6 からの復元で短頸壷の肩部と考えられる。器壁が厚くにぶい橙色を呈す。外面に突帯を貼付し、その上下に強い横ナデを施す。胴部には幅広の刷毛目が残るが雑である。内面は頸部を縦方向の擦過、胴部は横方向のナデ調整が見られる。66 も肩部に突帯を施し、刻目を深く施す。胴部には平行叩きの後に縦方向の刷毛目を施す。67、68 は袋状口縁壷である。67 は袋部が大きく、桃色部分があり赤色顔料を施していた可能性があるが、器面荒れのためはっきりしない。68 は 1/6 からの復元である。口縁部は器面が荒れ、頸部は外面には縦方向、内面には横方向の刷毛目が明瞭に残る。黄灰白色を呈す。69 は器台で口縁部は 1/3 強残り、頸部は一周する。上部は内外面横ナデ、下部は外面縦方向の刷毛目、内面指押さえを施す。淡黄褐色を呈す。

70 から 73 は甕の底部である。72 は 3/4、74 は 1/3、他は 1/4 ほどからの復元である。いずれも外面は縦方向の刷毛目、内面はなで調整である。73 までは底径が小さく内面の平坦部が狭い。70 は内側を上げ底状に成形する。71、72 は削り状の調整を施し、73 は調整痕が見られない。74、75 は底が広めで底が薄い。76 は小さな底部で上げ底気味である。胴部は丸みを帯びて立ち上がる。胎土は細かく２、３㎜大の砂粒には赤色鉱物を含む。器面は橙色を呈す。77 は壷の底部で外面は刷毛目の後ナデ、内面は縦方向のヘラ状工具による擦痕を施す。胎土に 3 ㎜大までの砂粒を多く含み暗灰褐色を呈す。78 は土製紡錘車で土器片の再利用である。浅い研磨調整が残り、前期の壷と考えている。79 は土製円盤でやはり前期の壷の転用と考えられる。

81、82 は玄武岩製石斧の基部である。81 は丁寧な成形で端正な器形をなし、器面の研磨により敲打痕はわずかしか見られない。残長 9.7 ㎝、幅 6.1 ㎝、厚さ 4.3 ㎝ほどである。82 は成形時の剥離での形の歪みが残る。敲打の後の研磨も行っている。83 は円盤状の玄武岩の自然石の側片に若干の加工と思われる痕跡が見られる。錘にしては加工が小さく用途不明。84 は黒色の頁岩製の柱状抉入り石斧で刃部を欠く。片刃になると考えられる。側面には敲打痕状の痕施があるが風化による荒れも加わり器面は荒れる。現状で長さ 10.4 ㎝、幅 3.8 ㎝、厚さ 3.1 ㎝である。85 は灰白色に白色の筋が入る泥質頁岩製の石器で柱状片刃石斧と考えられる。成形痕は見られない。図の上面に浅いくぼみ状部分が２カ所ある。現状で長さ 7.7 ㎝、幅 2.1 ㎝、厚さ 1.2 ㎝である。86 は灰色の泥質砂岩製の片刃石斧である。現状で長さ 5.1 ㎝、幅 1.2 ㎝、厚さ 1.8 ㎝ほどである。87 から 90 は石包丁である。87、88 はきめの粗い頁岩製で両側面とも剥がれた面で天地不明である。穿孔部がわずかに見られる。89 は頁岩製で両刃が鋭利でかなり研ぎ減りしていると考えられる。図示した側面は磨きにより平滑で裏面は風化もあってそれほどではない。90 は立岩産とされる輝緑凝灰岩製の完形品である。刃部は右側半分を斜めに研ぐことで、表裏どちらの面を上に使用しても、右手で刃を鋭角に使用出来る。片刃的な刃部である。側面には横方向の擦痕が見られるが、両面とも左側には少なく滑らかである。使用により器面が磨かれたためか。また、石材元来の穴に刃部が達しており、このことからも研減りしていることが想定される。長さ 13.5 ㎝、幅 4.4 ㎝、厚さ 0.65 ㎝、穿孔間の距離は 2.9 ㎝である。

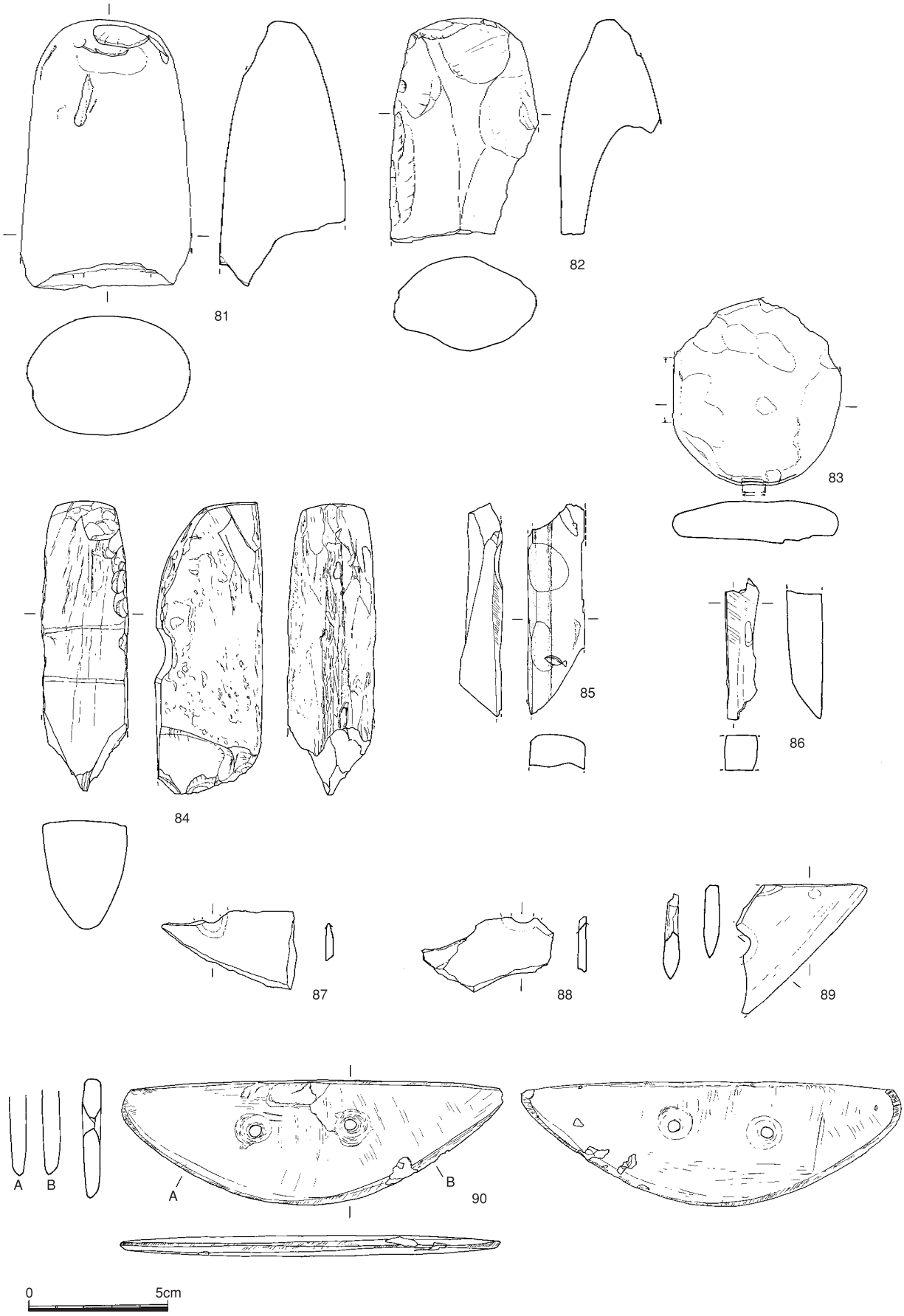


Fig. 17　弥生時代石器遺物実測図（1/2）

４．古墳時代の遺構と遺物

古墳時代前期の住居跡 11 棟、土抗、ピットを検出した。その分布は 11 区を中心とする。特に住居跡は、検出面である４ｂ層と覆土の色調が近く検出が困難であった。保存した 11-3 区には未検出の遺構が残っている。遺物で、特に記述していない場合は覆土中からの出土である。

（１）竪穴住居

SC5001(Fig. 18)

11-1 区中央部に位置する方形の竪穴で、平面 405 × 306 ㎝、深さ 20 ㎝を測る。覆土は茶褐色粘質土で平面プランの検出が困難であった。SC5002 と切り合いがあるが、前後関係を解決出来なかった。支柱穴となる明確なピットは確認出来ず、床面の硬化等も確認できなかった。遺物は床面および 10 ㎝ほど浮いた状況で出土した。遺物からⅡ A 期に位置づけられる。

出土遺物（Fig. 19 ～ 20）　101 から 104 は丸みをおびた胴部に短い頸部が立ち上がる壷形を呈す。101 は南東端でつぶれた状態で出土した。1/3 強からの復元である。外面は横方向の平行叩きの後に縦方向の刷毛目、内面は斜め方向の刷毛目調整を施す。102 は外面に荒い擦過もしくは削り状の調整が残り、内面は胴部を強く削る。灰褐色を呈す。103 は口縁部外面を横ナデ、内面は刷毛目調整である。胴部は外面を平行叩きの後に刷毛目を施し、内面は刷毛目である。赤みをおびた黄褐色を呈す。北東隅で出土し南東隅の破片が接合した。104 は最大径 45 ㎝とやや大型で器壁が厚い。頸部の断面台形の突帯は太く、斜格子状の刻みは深い。突帯貼付前に器面に刺突を施す。淡橙色を呈し外面に一部黒斑が見られる。南西側で出土した。頸部は一周し、胴部は反転復元である。105 から 107 は壷の口縁部で反転復元した。105 は口縁部と頸部下部は横ナデで、内面は横方向の刷毛目が残る。106 は口縁部外面へのナデにより緩やかな段を成す。外面は煤けて灰褐色を呈す。108、109 は張りが小さな胴部に口縁部が短く外反する甕である。108 は器壁が厚く、傾きは不確実。109 は口縁部の横ナデが強く、胎土は細かい。端正な作りで橙白色を呈す。110 は横ナデを施す。111 は椀形を呈し下部には擦痕が見られる。傾きは不確実。112 は小型品で外面は細かな研磨、内面はナデで木口痕が見られる。橙色を呈し胎土は細かい。口縁部は 1/3 が残存。113 は刷毛目の後ナデで仕上げ､淡灰茶色を呈す。1/5 からの復元である。114 から 119、121 は高坏である。114、115 は外面に刷毛目、擦痕が残り、内面は丁寧なナデで研磨状の暗文を施す。胎土は細かい。116 は器面が荒れる。117 は口縁部が鈍く屈

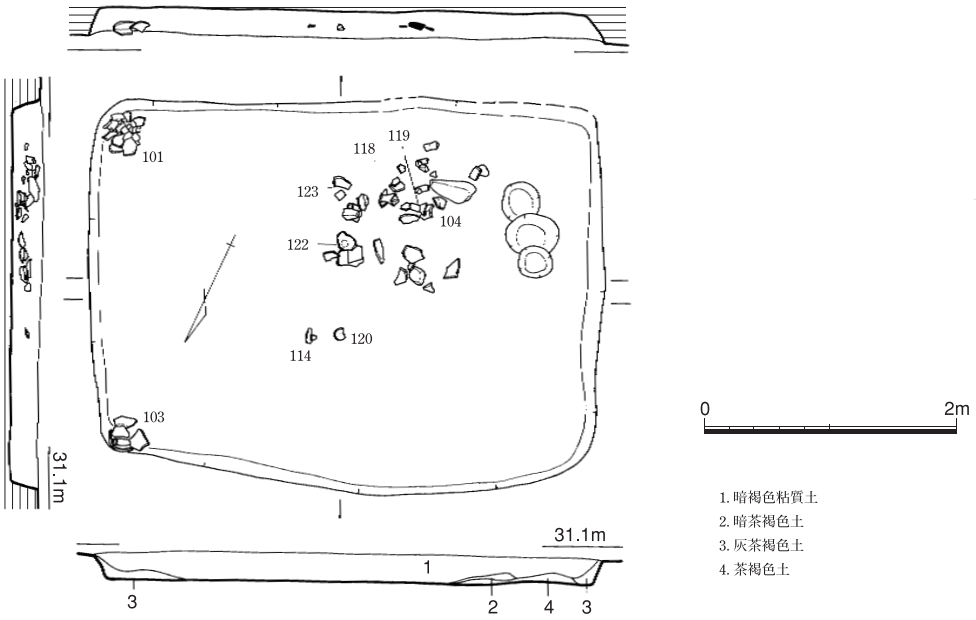


Fig. 18　SC5001 実測図（1/60）

Fig.19　SC5001 出土遺物実測図 1（1/3）

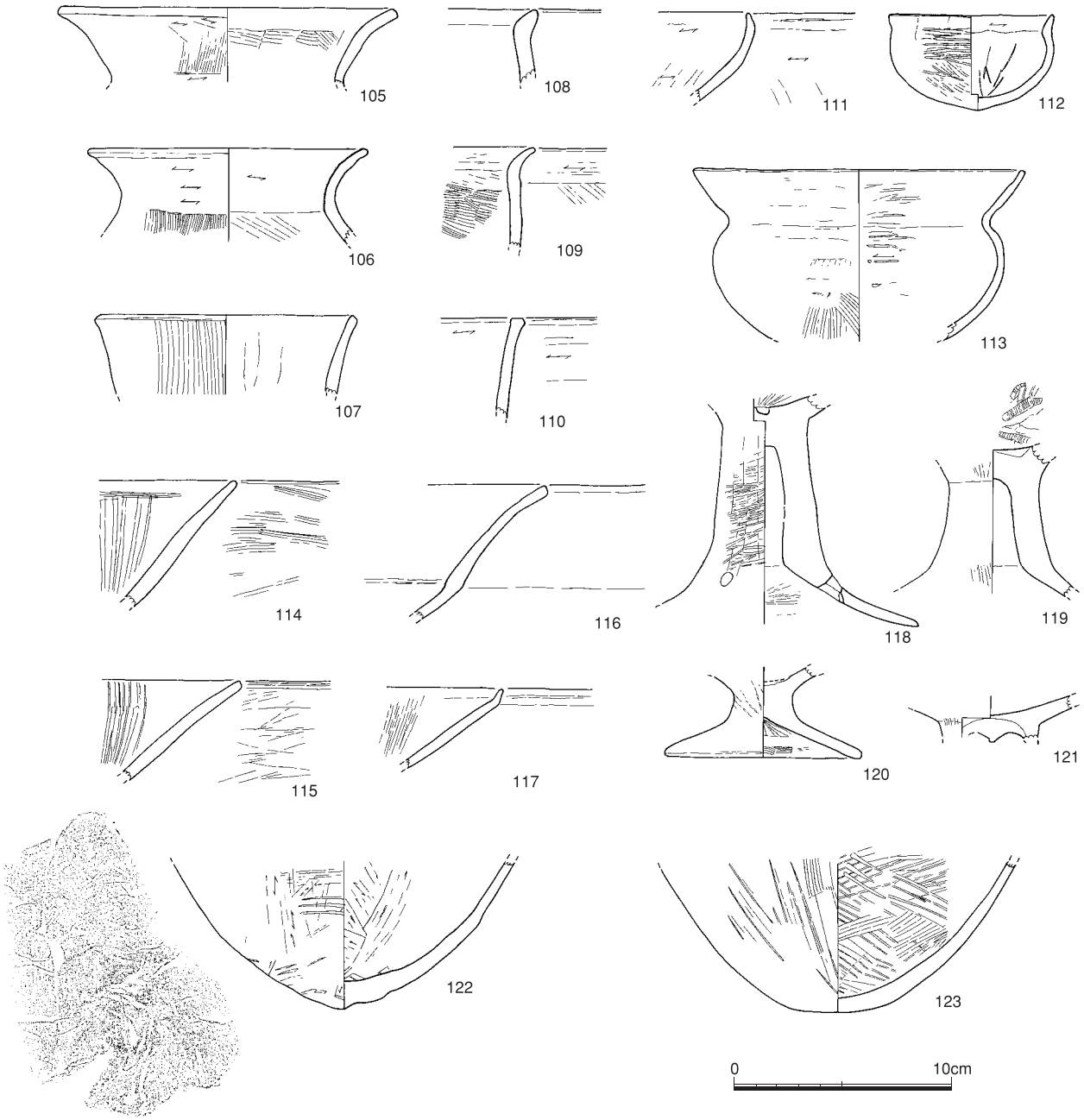


Fig.20　SC5001 出土遺物実測図 2（1/3）

曲する。外面は煤けたような暗茶褐色を呈す。内面には縦方向の刷毛目が残る。118 は脚部外面を縦方向の成形の後に細かな研磨を横に施す。3 方に焼成前の穿孔がある。橙色を呈し胎土は精良で、裾部は一部を欠く。119 は器面が荒れ刷毛目が見られる。坏部との接合面には刷毛目工具によると思われる刺突がある。120 は鉢等の脚部で遺構中央の出土。内外ナデで、内面に刷毛目が残る。橙白色を呈す。裾部 1/3 を欠く。121 は脚内面天井部に粘土を充填し指頭圧痕が残る。122 は底部先端が尖底状を呈す。外面に叩きの痕跡があり、削り状の擦過、ナデ仕上げである。内面は削りで、堅く淡橙色を呈す。123 の外面は細くシャープな刷毛目、内面は刷毛目を施す。橙色を呈し外面底付近に煤が付着する。

SC5002（Fig.21）

11-1 区中央、SC5001 の南に接し切り合い関係にある。検出時には前後関係を確認できなかった。

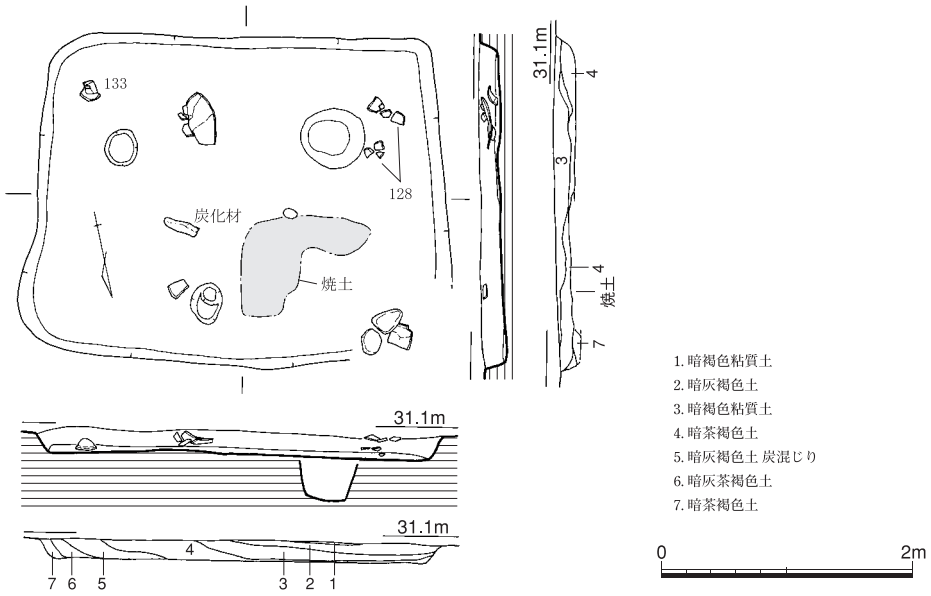


Fig.21　SC5002 実測図（1/60）

平面長方形で 280 × 258 ㎝、深さ 20 ㎝ほどを確認した。覆土は暗灰褐色から暗茶褐色の粘質土である。床面ではピットを 3 基を検出した。4 本柱であれば南側の 2 基が支柱穴になると考えられる。北西側には、床より 4 から 5 ㎝高いレベルに厚さ 1 ㎝ほどの焼土層を確認した。これが住居に関連するものか、後世の遺構かは確認できていない。遺物は床面およびやや浮いた状態で出土した。また、中央やや北東で幅 5 ㎝ほどの炭化材が出土している。遺物からの時期は古墳時代前期前半で、Ⅱ B 期と考えられる。

出土遺物（Fig.22）　124 は在地系の甕で内外面に刷毛目を施し、その後に外面胴部に平行叩き、内面胴部は削りを施す。1/6 からの復元。125、126 は布留式系の甕の口縁部である。127 は外面に平行叩きが深く残り煤が付着する。下半部は削りである。内面は器面が荒れる。外面黄茶色、内面灰褐色を呈し砂粒を多く含む五様式系の甕である。128 は二重口縁の山陰系の壷である。南半部分から床面から少し浮いた状態で出土した。外面は縦方向の刷毛目を施した後、胴部上部には丁寧な横ナデ、最大径部には丁寧な横刷毛目を施す。内面は口縁部から頸部は横ナデ、胴部は削りで砂粒の動きが顕著である。1/6 から 1/8 が残存する。129 は強い横ナデと内面に刷毛目が残る。小型の甕か。淡橙色を呈す。130 から 132 は小型丸底壷である。130 は研磨を施す精製品。赤茶色を呈す。131 は外面に強い横ナデを施し若干煤ける。内面は荒い研磨である。1/6 から復元。淡橙色を呈す。132 は外面を刷毛目、内面は削りの後ナデで 1/3 からの復元で淡橙色を呈す。133 は小型屈曲口縁鉢で、南東側で伏せた状態で出土した。刷毛目の後、横ナデと細かな研磨を施し薄く仕上げる。底部付近は橙色で、他は暗茶褐色を呈す。胴部上部 2/3 を欠く。134 は直口する鉢か。内面は細かな刷毛目、外面はナデ調整で橙色を呈す。135 は内湾気味の口縁部で外面は横ナデ、内面は不規則な研磨仕上げである。橙色を呈す。136 は手づくねの椀で指ナデ痕が残る。胎土は精良である。口縁部は淡黄褐色、胴部は灰褐色を呈す。137 は高坏の口縁部内外面とも横ナデの後に縦方向の暗文を施す。138 は高坏の脚で外面は縦方向の研磨、裾部は内外面とも刷毛目が見られる。1/2 弱からの復元である。淡橙色を呈す。

SC5003（Fig.23）

11-1、3 区中央南寄りで検出した平面 540 × 390 ㎝の長方形、深さ 40 ㎝の竪穴である。短辺両側にコの字状の作りだしのベッド状遺構を持つ。長辺の両側中央部は、ベッド状が 1 ｍほど途切れる。ベッド状遺構の幅は短辺部分で 100 ～ 120 ㎝、長辺部分で 70 ～ 90 ㎝ほどで、高さは 6 ㎝から 13 ㎝

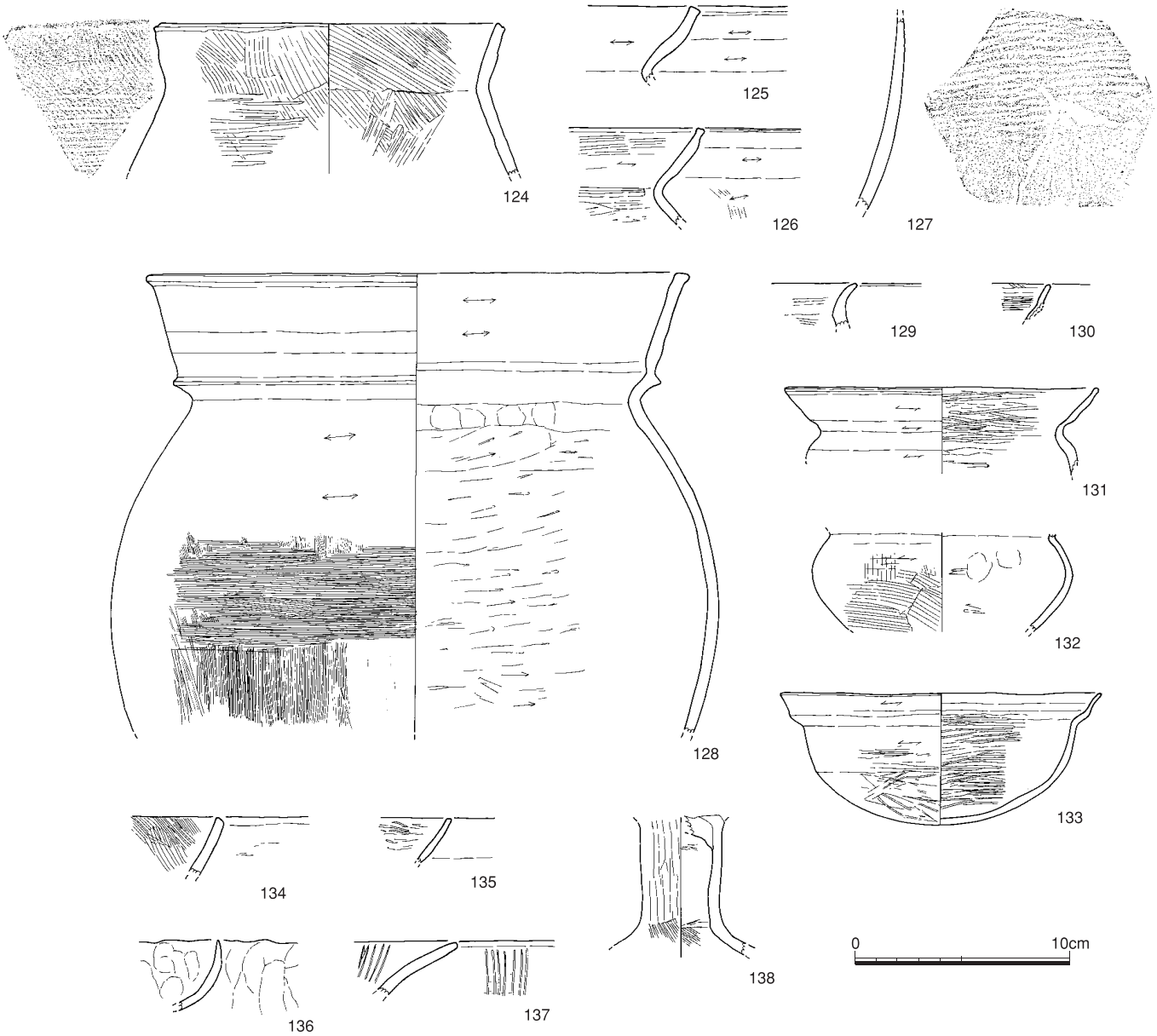


Fig. 22　SC5002 出土遺物実測図 1（1/3）

ほどである。南側部分は一部掘り過ぎた。ベッドに囲まれた中央部は 260 × 190 cmほどの広さで、短辺の際中央に径 25 cm、深さ 45 cmのピットを配し、2 本柱の支柱穴になると考えられる。東壁中央のベッドが途切れた部分には、床よりやや下がった位置に灰白色の砂と炭が薄く広がる。その下では壁に沿って径 45 cmほどのピットを検出した。対面する西壁中央壁際でも深さ 10 cmほどのピットを検出した。遺構の覆土は暗茶褐色から黄灰褐色のやや粘質の土で 2、30 cm大の礫も混じる。中央部分で床面直上からわずかに浮いた位置に土器がつぶれた状態で出土したことは注目される。調査時には 3 層以下の遺物を下層として取り上げ、北側では一部 2 層も含んでいる。以下の遺物の記載では、この時の下層を先に報告し、次に他を上層として報告する。出土位置を記録したものにも上層出土のものもある。ベッドより内側は、下層、床面出土のものが多い。Ⅱ C期を考えられる。

出土遺物（Fig. 24 ～ 29）　175 までは下層出土で、一部上層出土を含む。139 から 155 は布留式系の甕である。139 は中央部で床より 10 cm弱浮いた位置でつぶれた状態で出土した。口縁部の 1/3 と所々で破片が欠けるが全形がわかる。口縁部は直線的に広がり、胴部は球形に近い。口縁部から胴部上部

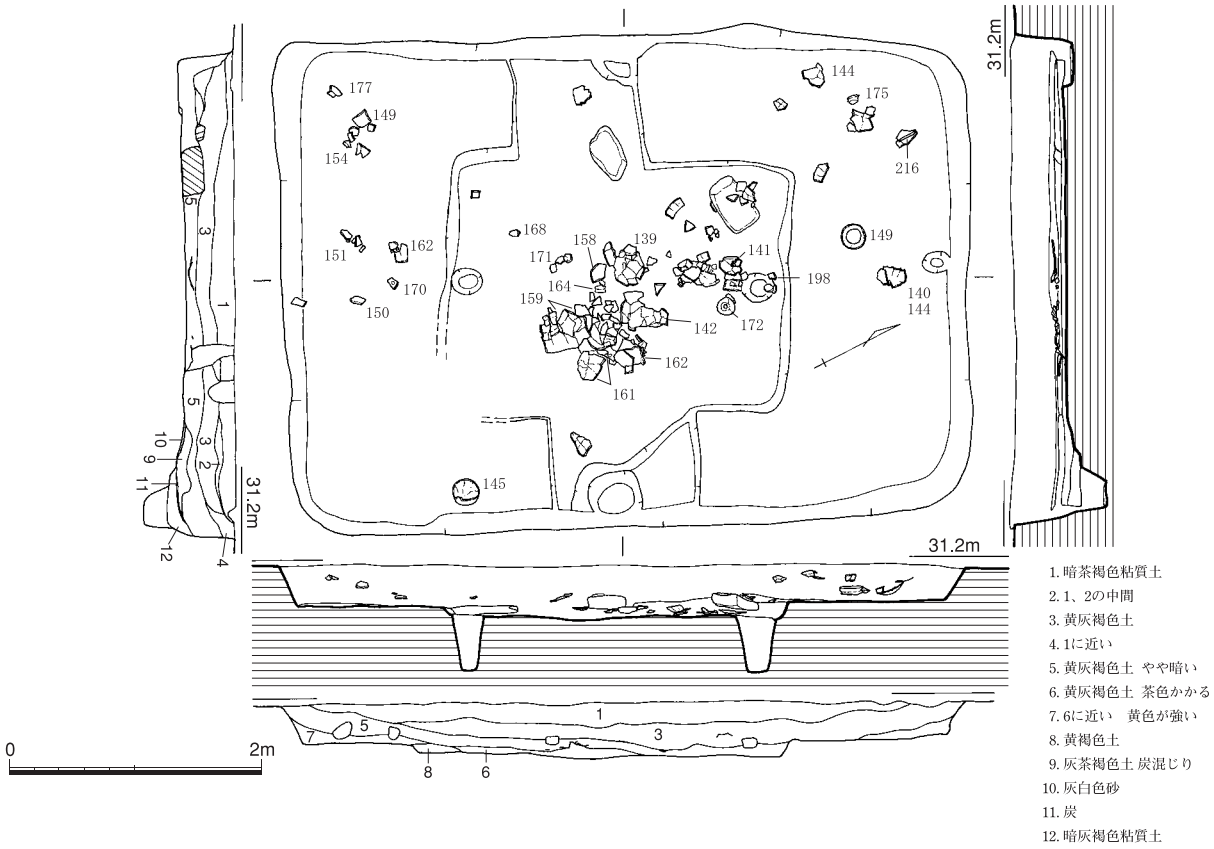


Fig. 23　SC5003 実測図（1/60）

に強い横ナデを施し、肩部では刷毛目を消す。胴部中位では縦方向の刷毛目の後に上部に横方向の刷毛目を施す。胴部下部から底部には、目の細かな上部とは別原体の刷毛目を浅く施し、底部には一方向に胴部下部から連続した刷毛目を一気に施している。また、胴部上部には浅い波状沈線を一周させる。内面は口縁部から屈曲部下まで横ナデを施し、屈曲部下には指押さえ痕が見られる。胴部上部はやや右上がりの削りを屈曲部から下がった位置まで施す。これより下は縦、斜め方向の削りである。外面胴部上部から口縁部は淡灰茶色、それより下は煤けて暗灰褐色から暗茶褐色を呈す。胴部最大径部には所々に炭化物が付着する。内面は口縁部が淡茶色から灰褐色。胴部は灰褐色で下部は暗褐色を呈す。布留式系の甕の調整はこれに類似する。140 は口縁部 2/3、胴部は一部のみの残存である。頸部外面が強い横ナデでくびれる。胴部の刷毛目は荒く、上部に横方向の刷毛目を帯状に施す。外面の所々に煤が残る。内外面ともに淡黄灰色から淡黄茶色を呈す。141 は中央北寄りで床に張り付いて出土した。口縁部は一周し、胴部上部は 2/3 が残存する。胴部はなで肩で縦方向の刷毛目の後、上部に横刷毛目を施す。その後胴部中位より下に斜方向の刷毛目を浅く施す。肩部の浅い沈線は途中 5 cmほど途切れる。外面は薄く煤が残るところがある。内外面とも淡黄褐色を呈す。142 は中央部で 5 cm浮いて出土した。1/5 が残る。肩部の沈線は浅い。淡灰茶色を呈す。143 は北側のベッド中央で 3 cmほど浮いて正置して出土した。上層の胴部片が 1 つ接合した。頸部より上は一周する。胴部外面は縦方向の刷毛目の後に横ナデを施す。肩部に浅い波状沈線が見られる。内面は頸部下まで横ナデで、胴部は削りである。灰褐色を呈す。144 は北西隅のベッド上で出土し、北側中央の 1 片が接合した。2 層または 1 層に含まれ、上層に入れるべきである。胴部の 1/4 弱からの復元。胴部外面は横方向の刷毛目で所々に前段階の縦方向の刷毛目が残る。肩部より下には炭化物が付着する。145 は南側東壁沿いでベッドの床に接して出土した。胴部上部から口縁部を欠く。外面は上部に炭化物が吸着し、下部はそれが剥げた状態である。

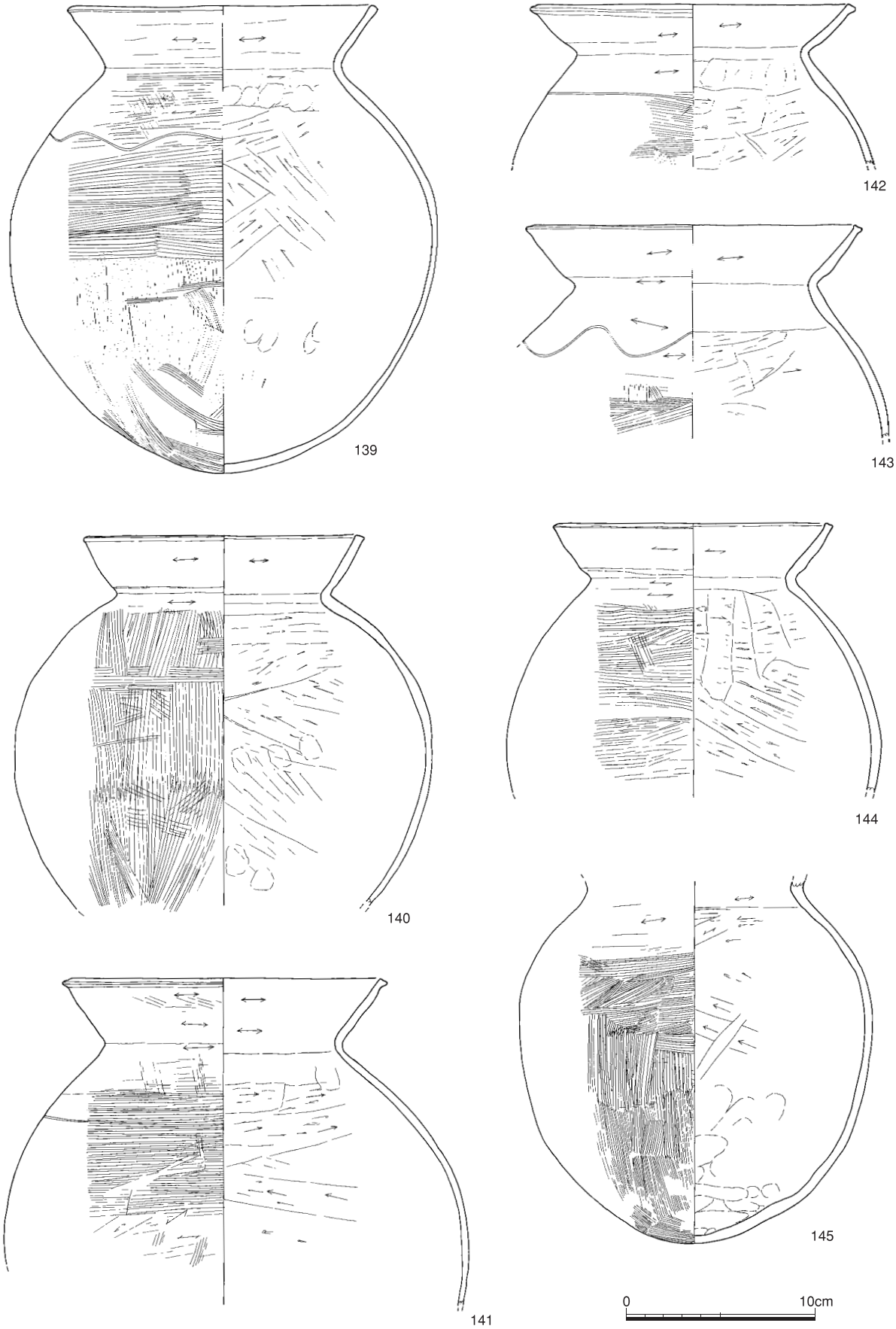


Fig. 24　SC5003 下層出土遺物実測図 1 (1/3)

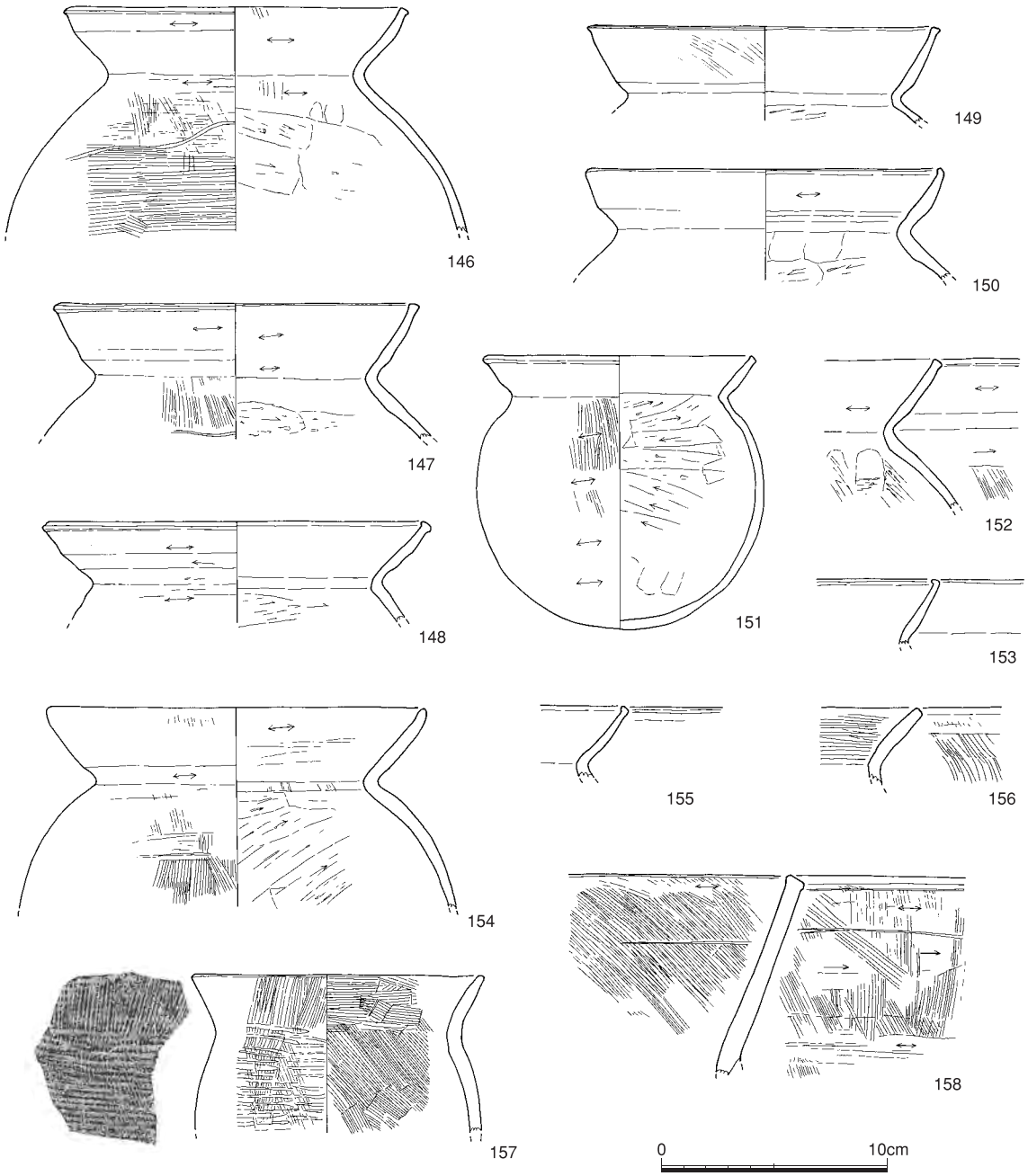


Fig.25　SC5003 下層出土遺物実測図 2（1/3）

146 は南西隅で礫群の上から出土した上層の破片と下層出土破片が接合した。1/3 からの復元。肩部の波状沈線はやや太めである。灰褐色を呈し、外面には煤が付着する。147 は 146 横の上層レベルの出土で 1/6 からの復元である。波状沈線は途切れている。黄色を呈す。148 は下層出土で 1/6 弱からの復元。口縁部外面の横ナデが強く軽い段を成し、口唇部内面の突出が顕著である。内面は屈曲部まで削りを施す。外面には煤が付着する。149 は口縁部外面刷毛目の後に横ナデで、内面は屈曲部まで削る。灰褐色を呈す。150 は南側ベッド中央で床面よりやや浮いた位置で出土した。1/6 からの復元である。淡黄褐色を呈し、外面には煤が残る。151 は 150 の 40 ㎝西で出土した破片と、その他の下層出土破片が接合した。胴部の 1/2 弱と口縁部の一部が残存する。胴部外面は刷毛目およびナデで上部ほど刷毛目が残る。内面は頸部屈曲部まで削り、屈曲部が尖る。内外茶褐色を呈し、底部付近に黒斑が見られる。152、153、155 は下層出土片である。淡橙色から淡橙白色を呈す。155 外面には

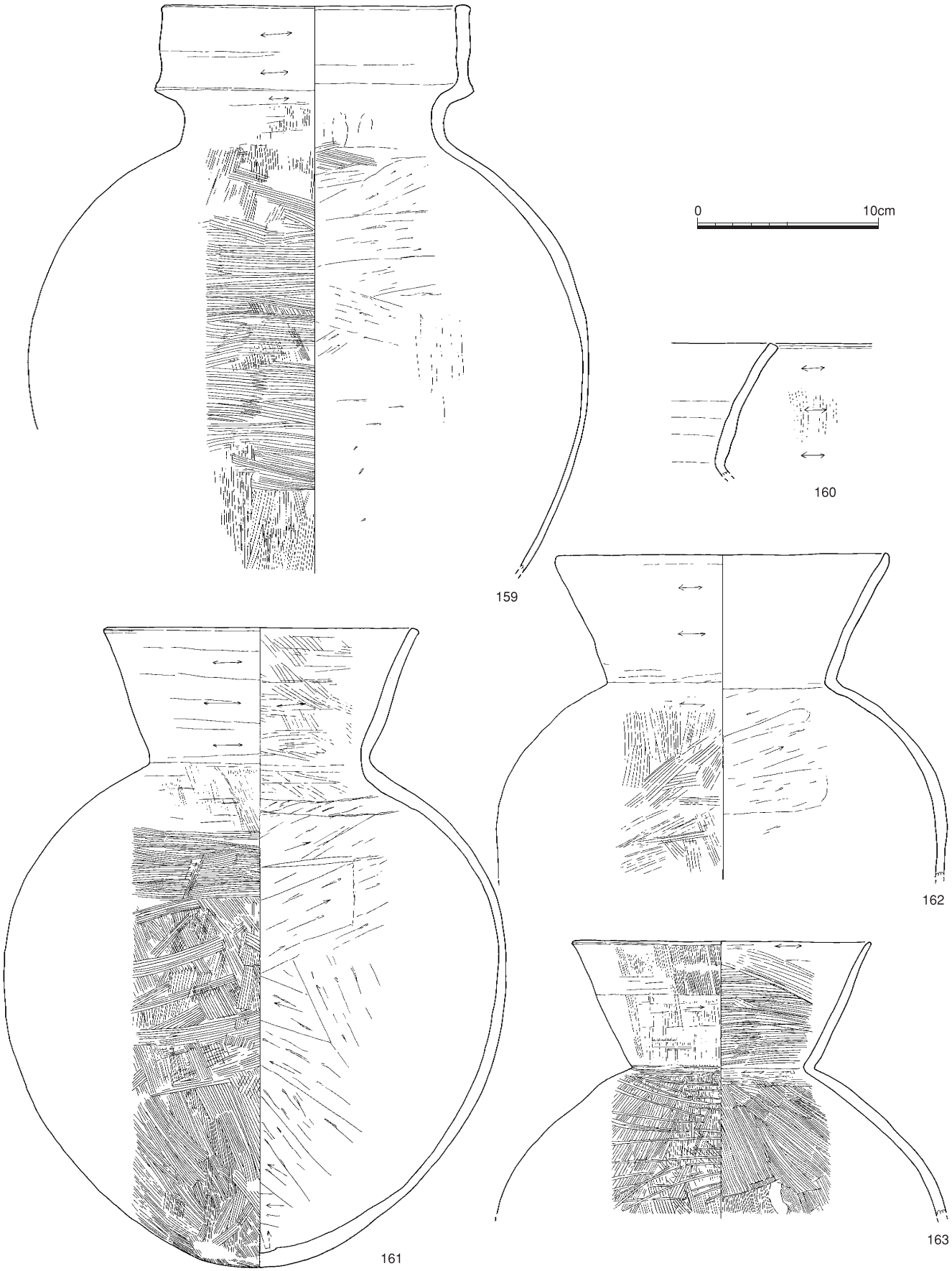


Fig.26　SC5003 下層出土遺物実測図 3（1/3）

煤が付着する。154 は南西隅で 146 と一緒に出土した。上層とすべきものである。接合しない破片を含めて口縁部の 3/4 が残る。内面は屈曲部付近まで削る。淡黄褐色を呈す。156、157 は在地系の甕である。156 の外面は縦方向、内面は横方向の刷毛目が残る。157 は外面叩きの後、縦方向の刷毛目、内面は口縁部横方向、胴部斜方向の刷毛目を施す。外面灰褐色、内面淡橙色を呈す。158 は中央部で 20 ㎝ほど浮いて出土した。大形の甕か。外面は刷毛目の後に横ナデを施し、下部に斜方向の刷毛目を施し、接合面にも刷毛目が見られる。内面は斜方向の刷毛目の後、口縁部と下部に横ナデを施す。

159 は中央部で 5 ㎝弱ほど浮いて、３つに分かれてつぶれた状態で出土した。山陰形の壷で口縁部から頸部は一周し胴部上部は 3/4、下部は一部が残存する。頸部から上は器壁が厚手で、横ナデを施し、頸部外面にわずかに刷毛目が残る。胴部外面は縦方向の刷毛目の後、上部に施した横方向の刷毛目が明瞭に残る。頸部内面はナデ調整で、他はほぼ全体に横方向に削り、一部に刷毛目痕が残る。外面は淡黄灰褐色、内面は灰褐色を呈す。160 は長頸部で、外面刷毛目の後に横ナデを施す。161 は中央部で 5 ㎝ほど浮いて出土した布留式系の広口直口壷である。口縁部を一部欠く。口縁部は横ナデで内面には刷毛目が残る。胴部外面は最上部を縦方向の刷毛目の後に横ナデ、肩部は帯状に横ナデを施し、中位は縦方向と斜方向の、下部は縦方向の刷毛目を施す。内面の胴部最上部はナデ、他は削りを施す。外面肩部に指紋が残る。胴部外面最下部は煤け､底部付近はそれが剥げる。全体に器壁が厚く、淡黄灰褐色を呈す。162 は中央部分から５㎝弱浮いて出土した布留式系広口直口壷である。胴部上部は 1/4 を欠く。やや軟質で器面が荒れ気味である。胴部は刷毛目、内面は削りである。胴部外面中位には黒く炭化物が吸着する。歪んだ器体を復元作図した。163 は中央北西隅で 15 ㎝ほど浮いて出土した。口縁部外面は目の細かな刷毛目の後に横ナデで、一部磨いた質感がある。内面は刷毛目の後に軽くなでる。胴部外面は縦方向の刷毛目の後に軽く研磨を施す。内面は刷毛目を掻きあげるように施し、起点の木口痕と共に明瞭に残る。内外面とも茶褐色を呈し丁寧な仕上がりである。

164 は中央部分の床より 5 ㎝弱浮いて出土した小型屈曲口縁鉢である。上層の破片が 1 つ接合した。口縁部 1/2、鉢部 3/4、底部が残存する。口縁部外面は縦方向の刷毛目の後に横ナデを施し軽く研磨する。屈曲部は縦方向の刷毛目の後に横方向の細かな研磨、鉢部は削りの後に研磨である。口縁部内面は丁寧な横ナデで、鉢部は細かな研磨を施し、底中央はくぼむ。胎土は精良で橙色を呈す。165 は口縁部横ナデで内面に刷毛目が少し残る。鉢部は外面擦過、内面ナデ仕上げで橙色を呈し細砂粒を多く含む。1/6 からの復元。166、167 は小型丸底壷で橙色を呈す。166 は器面が荒れる。167 は内面研磨調整で、外面は荒れる。器壁が非常に薄い。168 は中央部西側で 20 ㎝ほど浮いて出土した。1/5 からの復元で径は不確実。調整は横ナデ、擦痕で仕上げは雑。煤けたような暗褐色を呈す。169 は小型の坏で小片からの復元で径は不確実。外面は手づくね状でナデ､内面は横方向の研磨で灰褐色を呈す。170 は南側ベッド床から 10 ㎝ほど浮いて出土した。胎土は精良で橙色を呈す。外面は荒れ気味で縦方向の削りの後に縦研磨、内面は横ナデである。裾部は 1/5 が残る。171 は中央部で 15 ㎝ほど浮いて出土した。外面は研磨、内面はナデの後に縦方向の暗文風の研磨が見られる。胎土は砂粒を含むが細かい。172 は中央北寄りで床より 10 ㎝弱浮いて出土した。外面横方向の研磨、内面横ナデ状の刷毛目で、接合部面には拓本に示した粘土の隆起線が見られる。173 は外面および体部内面を研磨、脚部内面はナデ仕上げで茶色を呈す。174 は、外面は縦方向の研磨で所々に細かな刷毛目が残る。内面はナデで、裾部に刷毛目が見られる。橙色を呈す。175 は北西隅で 15 ㎝ほど浮いて出土した。底部付近で若干すぼまる。外面は幅 3 から 5 ㎜ほどの擦痕､内面は刷毛目がはっきり残る。淡黄褐色を呈す。

176 から 219 は上層として取り上げた 1、2 層に相当する遺物である。径は復元である。176 から 188 は布留式系の甕である。176 は淡黄色を呈す。177 は 1/6 からの復元で口縁部外面に炭化物が付

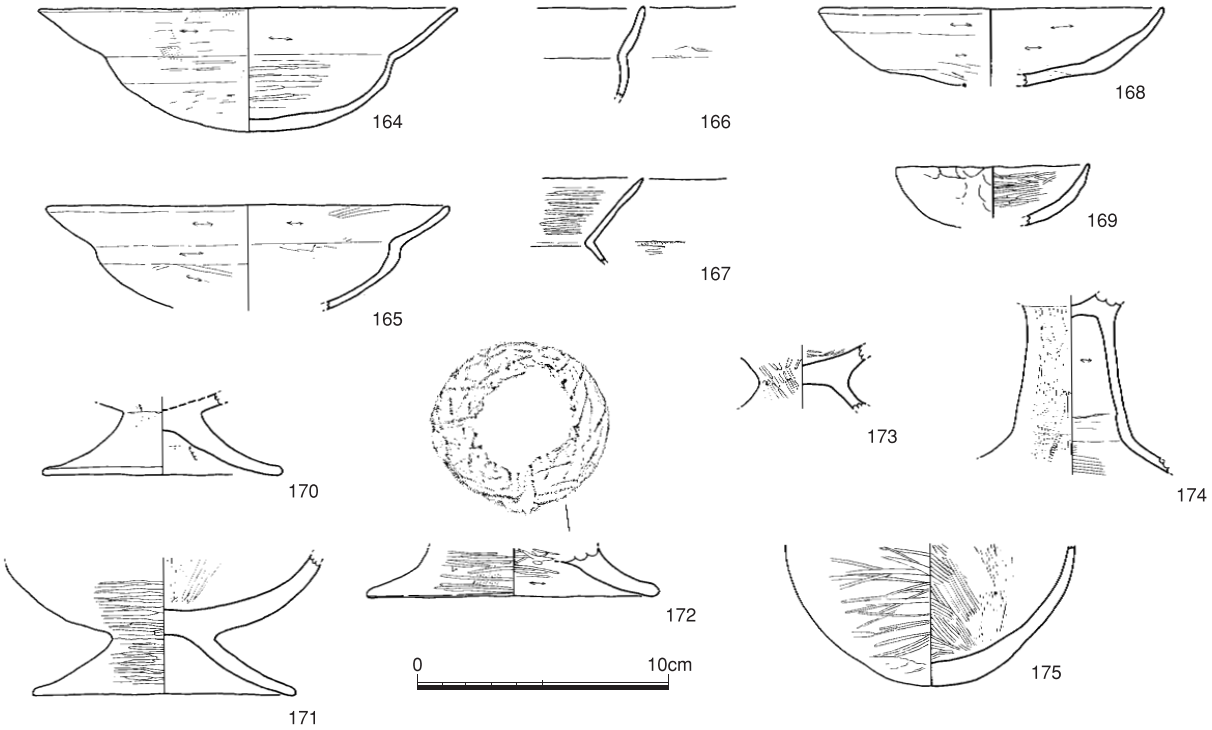


Fig.27　SC5003 下層出土遺物実測図 4（1/3）

着し、頸部に木口痕が残る。178、185、187 は外面が煤ける。181、182 は内面刷毛目調整で外面の横ナデは弱い。189 は外面に、190 は内面に弱い横ナデの下の刷毛目調整が残る。191 は口縁部横ナデで刷毛目痕が残り、胴部外面には目幅が広い刷毛目を施し、内面は細かな擦痕と指押さえが見られる。外面には煤が付着する。器壁が厚手である。192 の口径はかなり大きなものであろう。外面は縦刷毛目の後に横ナデ。淡橙色を呈し胎土は細かい。193 は壷で器面は荒れ、外面の縦刷毛目と横ナデが見られる。194 は内外面を横ナデの後、暗文風の縦研磨で仕上げる。淡灰褐色を呈す。器壁が厚手で傾きは不確実。195 は壷の胴部で、外面は上部を細かな縦方向の刷毛目を丁寧に施し、下部は削る。その後に横方向の細かな研磨状の調整を長い単位で丁寧に施す。内面は丁寧なナデである。胎土は砂粒を少量含むが精良で、明るい橙色を呈す精製品である。北西隅で出土した。196 は「く」の字口縁の鉢である。口縁部はナデ、鉢部外面は荒い研磨状の調整で、内面はナデである。赤みの強い茶色を呈す。197 から 200 は小型丸底壷である。197 は器壁が厚い。外面は口縁部から肩部は横ナデと荒く細い研磨、胴部は刷毛目である。内面口縁部は横ナデと荒い研磨、胴部は削りの後ナデ。淡灰茶色を呈し、外面には煤が付着する。198 は口縁部外面に横ナデ前の刷毛目が残り、胴部は刷毛目である。淡黄茶色を呈す。199、200 は外面研磨仕上げの精製品で、橙色を呈す。201 はやや器面が荒れ、横ナデと内面に刷毛目がわずかに見られる。202 から 205 は坏形を呈す。202 は 1/8 からの復元で径は不確実。ナデと内面の一部に刷毛目が残り、淡黄褐色を呈す。203 から 205 は橙色から茶色を呈す。203 は内外研磨調整の精製品。204 は内外ナデ。205 は内面と口縁部外面とを横ナデの後に細い研磨、体部は削りの後に細い研磨調整で仕上げる。206 は外面擦過、内面刷毛目で淡黄白色を呈す。207 は外面横ナデ、内面刷毛目で鉢型の器形か。208 は内湾する口縁部の内外に刷毛目を施す。

209 は高坏で脚部の一部を欠き、坏上部は 1/4 強残存する。脚部に焼成前の穿孔が 3 カ所ある。内外面とも細かな研磨で外面に光沢が見られる。脚部外面は横ナデの後に研磨し、内面は横ナデである。胎土には砂粒を含む。淡黄茶色を呈し脚部には炭化物が吸着する。210 は外面上部を横ナデの後、下

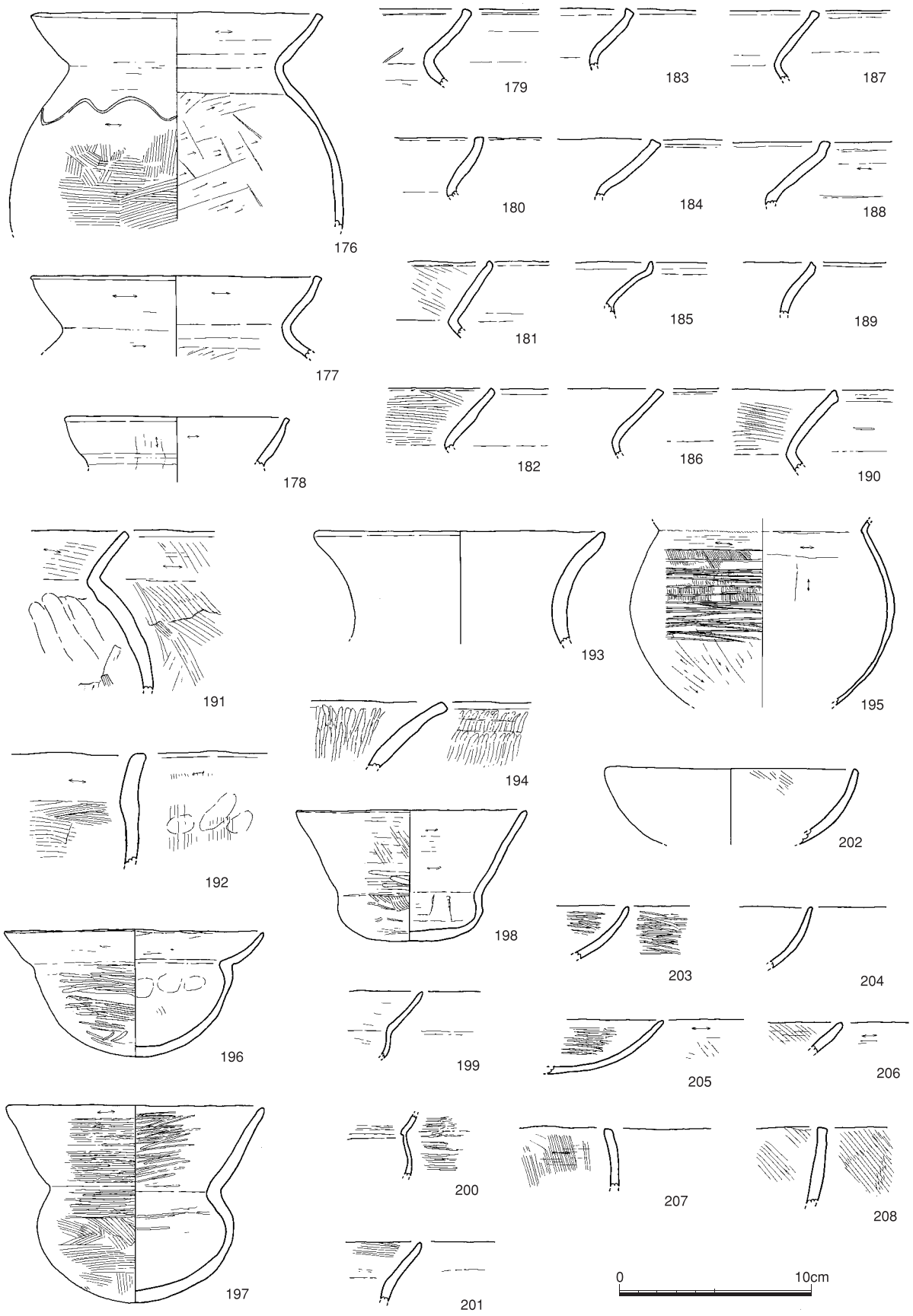


Fig. 28　SC5003 上層出土遺物実測図 1 (1/3)

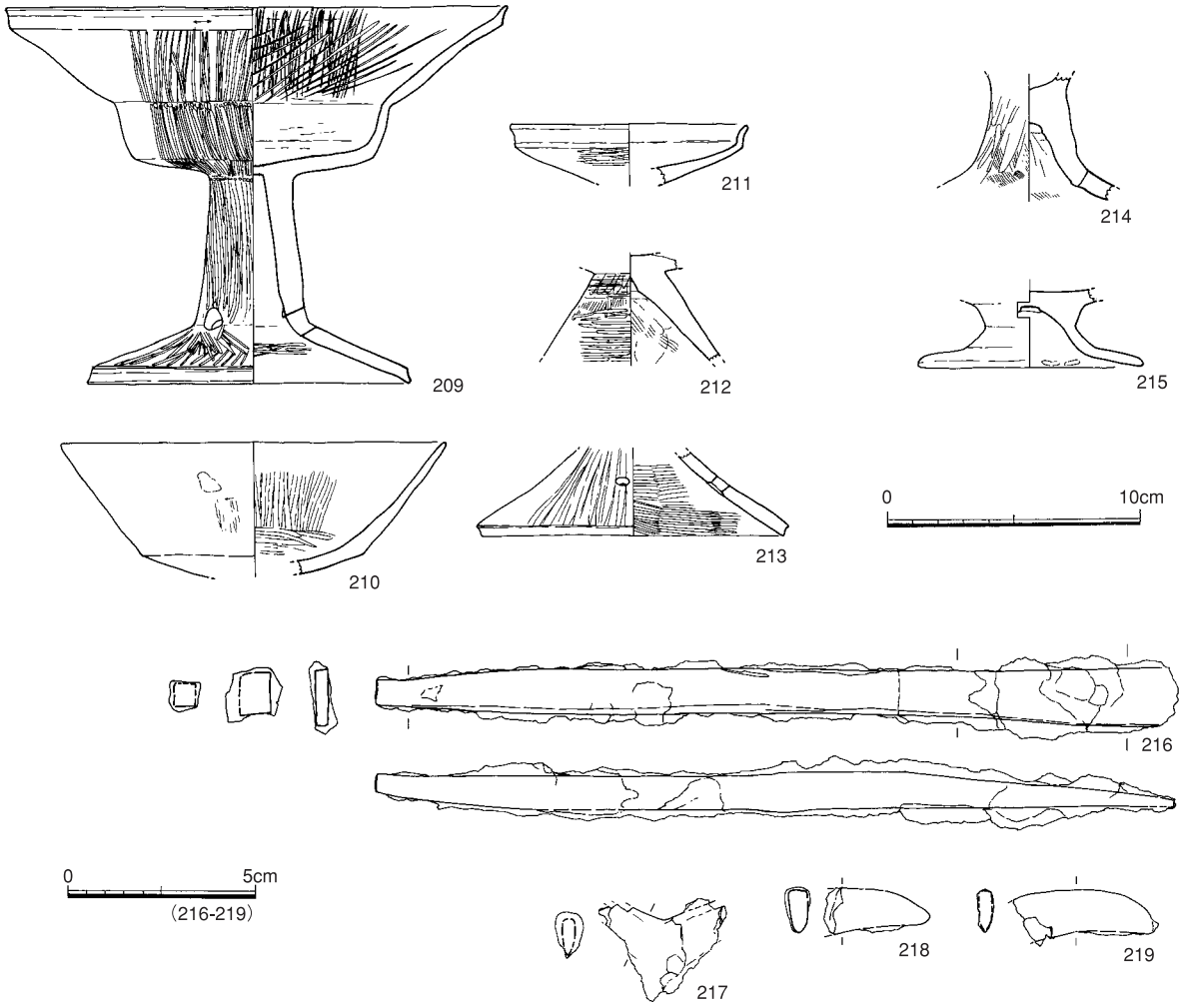


Fig.29　SC5003 上層出土遺物実測図 2（1/3、1/2）

部は削りの後に浅い研磨もしくは丁寧なナデで仕上げる。内面は研磨である。胎土は細かく淡黄茶色を呈す。211 は畿内系小型器台である。器面は荒れ、研磨と横ナデが見られる。黄橙色を呈す。212 は小型器台の脚部で、外面は縦刷毛目の後縦研磨、裾は横ナデである。内面はナデ、坏部は放射状の細かな研磨で橙色を呈す。213 外面は深い研磨、内面は刷毛目である。穿孔の数は不明。外面に赤色顔料状の痕跡がある。214 は外面へラナデ状で裾部に刷毛目が見られる。内面は削りで裾部は刷毛目とナデである。焼成前の穿孔は３、または 4 カ所と考えられる。淡橙色を呈し砂粒を多く含む。215 はナデ、横ナデ調整で淡黄褐色を呈す。

216 は北西隅上層で 195 ほかの上から出土した鏨状の鉄製品である。長さ 21.2 cmを測り、先端は幅 1.5 cmで薄くなる。断面は方形である。217 から 219 は一緒に出土したもので、同一個体と考えられるが、接合できなかった。217 は二股に分かれるか、別個体の重なりか X 線撮影でもはっきりしなかった。基部はどこまで生きているかわからない。218、219 は弧状を描き、内側がすぼまり刃部状をなす。

SC5004（Fig.30）

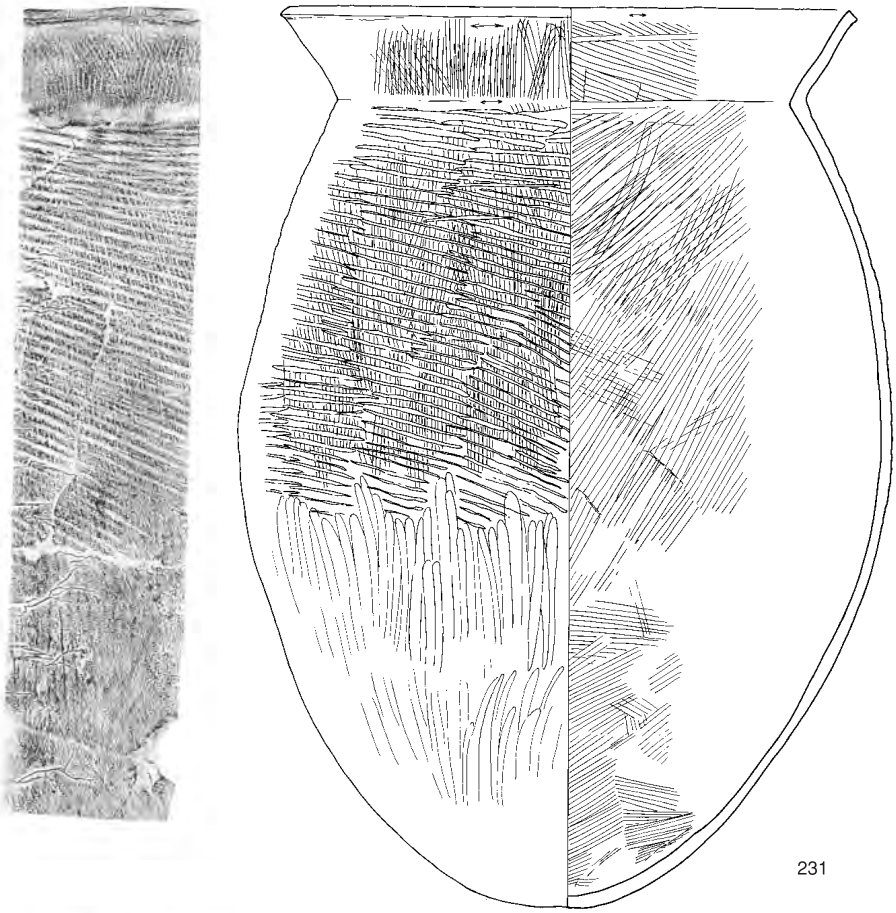
11-1 区南寄りで検出した長方形の竪穴である。平面 560 × 420 cm、深さ 45 cmを測る。床面北西側では幅 10 cm深さ 7 cmほどの壁溝を検出した。中央では径 50 cm、深さ 10 cmほどの土抗を、東壁中央部では平面 65 × 55 cm、深さ 15 cmの土抗を検出した。支柱穴は 4 本柱であれば北側の 2 基、2 本柱で

Fig. 30　SC5004 実測図（1/60）

あれば南側中央の 1 基が相当するが、いずれも浅く確定できていない。中央西よりを中心に茶褐色土に鉄分、炭を含んだ面が広がる。また、東側中央には厚さ 5 cmほどの炭混じり暗褐色土が堆積している。覆土は暗茶褐色から暗褐色の粘質土で、若干の色調の違いで分層したが大差ない。1 層の堆積前に 40 から 10 cm大の礫がまとまって埋まっていた。

遺物は上記礫群の下層の主に 2、3 層で、10 から 15 cm浮いた位置から多くの土器が出土した。まとまってつぶれたものもある。住居跡が廃絶した後、一定期間経て、近い時期に廃棄された土器群と考えられる。以下の遺物はほとんどがそれらの一群である。遺構の時期は ⅡB 期と考えられる。

出土遺物（Fig. 31 ～ 36）　231 から 236 は在地系の甕である。231 は南側土器密集部からの出土で一部を欠くがほぼ全形が復元できた。口縁部外面は右下がりの浅く太い刷毛目の後に、縦方向のシャープな刷毛目と横ナデを施す。胴部上半は右下がりの平行叩きの後に縦方向の刷毛目を施す。下半部は幅 3 mm前後のヘラナデ状の調整を縦方向に密に施す。底部付近はナデ状である。内面は、口縁部を刷毛目の後に横ナデし、胴部は上半に刷毛目を施す。外面は淡黄茶色の器面に煤が付着する。232 も 231 と同様の集中部出土で胴部の一部が欠ける。外面は平行叩きの後に縦方向の刷毛目で、下半部は荒いヘラナデ状の調整と縦、斜め方向の刷毛目で、底付近は刷毛目とナデである。煤が吸着し、底部付近は赤変する。2/3 が残存する。233 は口縁部外面を刷毛目の後横ナデ、胴部上部は平行叩きの後に深い刷毛目、下部は浅いナデ状の刷毛目である。内面は刷毛目と下部はナデである。外面は煤けて、胴部は暗褐色を呈す。235 は 233 に近い。同一個体の可能性もある。236 は頸部付近の 1/2 強が残存し、未接合破片もある。口縁部外面は横ナデが強い。胴部は平行叩きの後に荒い刷毛目を施す。胴部内面は当て具痕状の浅い平行線の後に上部には擦痕状の刷毛目を施す。淡黄褐色を呈し、外面は一部煤が付着し黒斑がある。237 から 239 は五様式系の甕である。237 口縁部は一周する。中央礫群の下から出土した。外面は口縁部を横ナデ、胴部は細かな刷毛目を密に施す。肩部から上は黄茶色を呈し、胴部は暗褐色で煤けて炭化物が付着する。口縁部内面は横方向の刷毛目とナデ、胴部は横方向の刷毛目



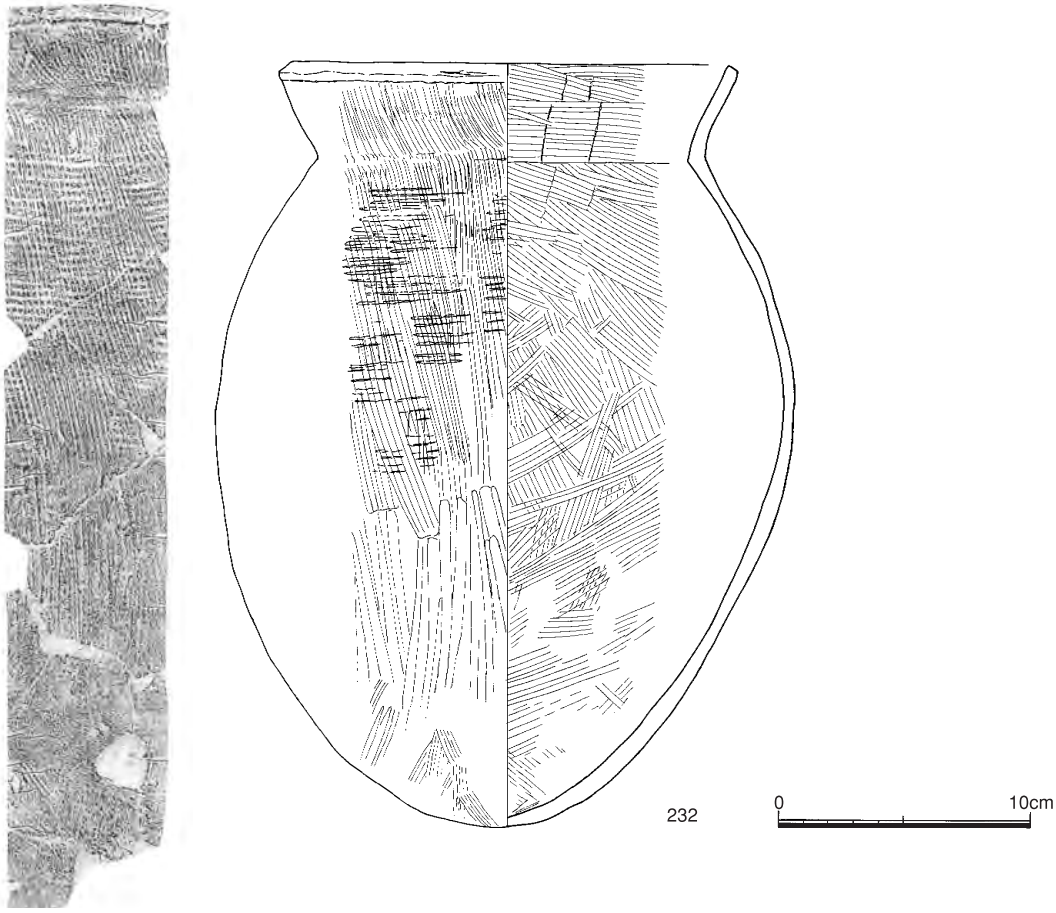


Fig. 31　SC5004 出土遺物実測図 1 (1/3)

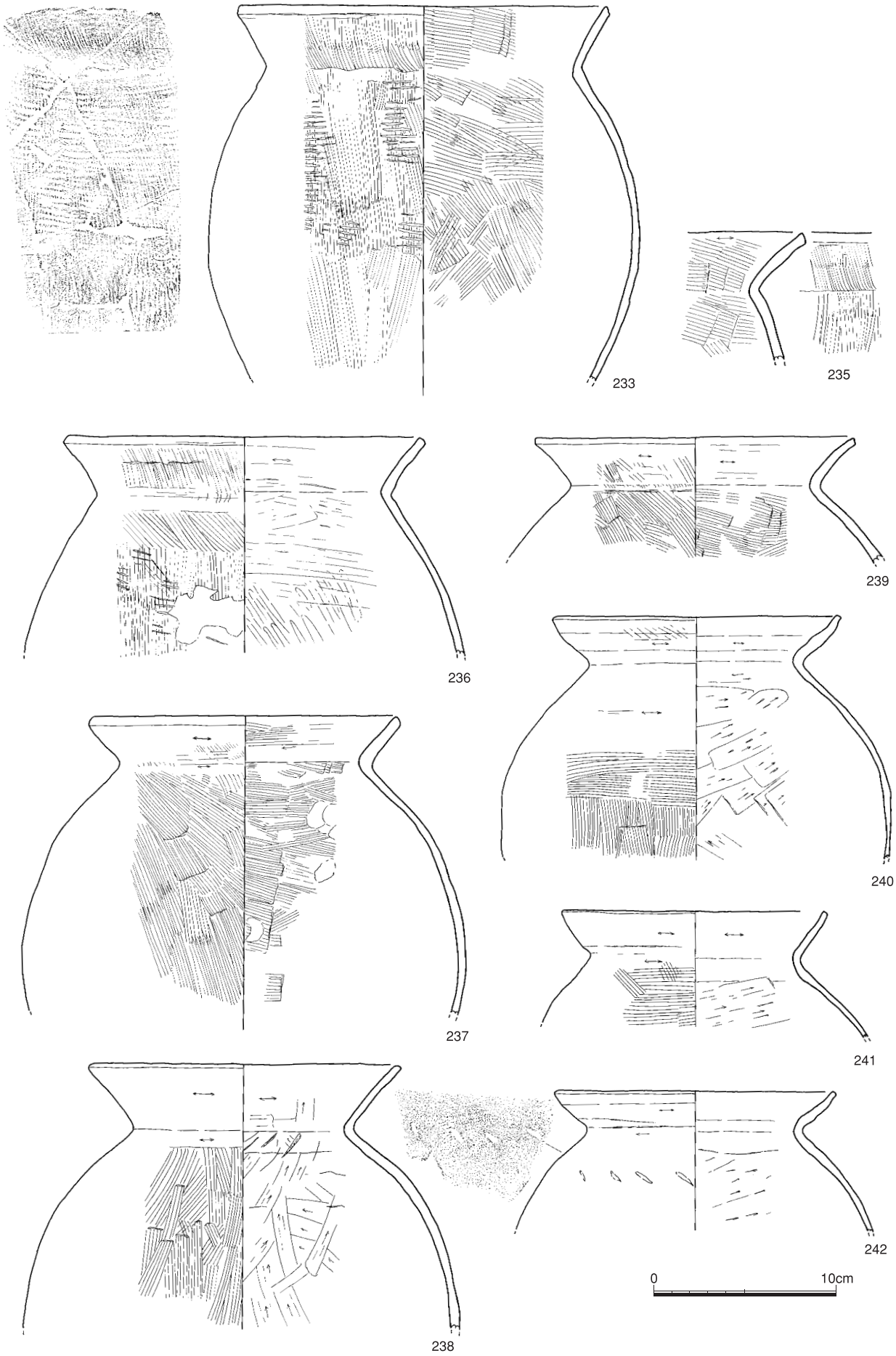


Fig. 32　SC5004 出土遺物実測図 2（1/3）

である。238 内面胴部は主に縦方向の削りで、2 ㎝幅の粘土帯の接合痕が明瞭に残る。淡橙色を呈し、内面は一部煤が残る。239 は胴部に明瞭な刷毛目が密に残る。内面は浅めの刷毛目。240 から 242 は布留式系の甕である。240 は中央部の礫の下から出土した。口縁部の凹凸が顕著である。外面に炭化物が付着する。241 はやや軟質で外面全面に煤が付着する。242 は中央南寄りの出土で器面は全体に荒れる。胴部外面の刷毛目と内面の削り、外面肩部には刺突による列点を施す。

243 は庄内式系の甕で、外面叩きの後に横ナデを施す。内面に一部擦痕が見られ、胴部は削りで屈曲部は鋭い。244 は五様式系の甕で、内面刷毛目の後に口縁部は横ナデ。淡橙色を呈し外面に煤が残る。245 は 1/6 強からの復元。外面は横方向の後に縦の刷毛目、横ナデを施す。246 は山陰系の壷の口縁部か。1/6 が残存。外面は薄く煤ける。247 は二重口縁壷で、胴部の 1/3 を欠き、口縁部は一部のみで、復元的に作図した。口縁部外面は横ナデ、頸部は刷毛目の後に屈曲部に突帯を貼付し横ナデを施す。突帯には刷毛目工具で深く刻目を施す。肩部は浅い刷毛目、胴部中位は縦方向の浅い削りを施し、下部は荒い刷毛目を施す。内面は口縁部を横方向のナデ、頸部から胴部は刷毛目を施す。外面上半は淡黄褐色で下半は煤けて暗褐色を呈し、表面が剥げた部分がみられる。248 は五様式系の甕で、口縁部、胴部の一部を欠く。口縁部外面は刷毛目の後に横ナデで、胴部は荒い刷毛目を重ねる。底部はナデである。内面胴部上部はヘラナデ、中位以下は荒い削りを施す。淡灰橙色を呈し、外面に煤が付着し、下半部は暗褐色から黒色を呈す。249 は在地系の短頸壷で、所々の破片を欠く。外面上部は平行叩きの後に雑な刷毛目、中位は縦方向の削り、下部はナデである。内面は刷毛目を施し、下部は上部とは別の目の幅が狭い原体である。淡黄褐色を呈す。250 は長頸壺と考えられ、細かな横方向の研磨を全体に施し、下部には刷毛目が見られる。内面は屈曲部下には指頭圧痕が明瞭で、下部は削り、他はナデ調整である。外面淡橙色、内面淡黄色を呈す。胎土は細かく砂粒はほとんど含まない。

251 は台付直口壷で胴部下部のほとんど、口縁部と台裾部の 1/3 を欠く。器面は荒れ気味で、胴部上部は縦、中位は斜の荒いヘラナデ状で、下部は刷毛目状を呈す。台部は横ナデを施す。口縁部内面は横ナデの後にヘラナデ状の調整、胴部は刷毛目と指押さえである。淡黄橙色を呈し黒斑が見られる。252 は直口壷で 1/4 からの復元。外面は口縁部を横ナデ、肩部の縦刷毛目と胴部の横削りの後に斜め方向にヘラナデを施す。内面は胴部上部をヘラナデ、胴部は刷毛目の後にヘラナデを施す。外面淡黄茶色、内面灰褐色を呈し、胎土は細かい。253、254 は壷等の台で 251 のような形態が想定できる。253 の底部は 1/3 が残り、外面を刷毛目の後にヘラナデ、内面は削りの後にヘラナデである。脚部は刷毛目の後に横ナデを施す。外面淡黄褐色、内面は一部灰褐色を呈す。接合部に不規則な刻みを入れる。胎土は細かく砂粒が少ない。254 は器面荒れ気味で台部の横ナデ、底部内外面の刷毛目が見られる。淡黄色を呈す。255 は小型の甕か。1/4 弱からの復元である。外面は斜方向の刷毛目の後に肩部を強く横ナデ、内面は削りで頸部下をナデる。赤みを帯びた茶色を呈す。256 は荒い作りの甕で胴部の 1/4 からの復元で径、傾きは不確実。口縁部の残存部分は波状を成し、成形が十分成されていない。外面は若干の擦痕で、粘土の亀裂が残り調整は雑である。内面は荒い刷毛目と擦痕が見られる。外面灰茶褐色から黒色、内面灰茶褐色を呈す。257 は鉢で胴部刷毛目調整。茶褐色を呈し、外面は炭化物が付着し、内面下部は灰褐色から暗褐色を呈し煤ける。258 は小型丸底壷で 1/2 弱が残存。外面は細かな研磨調整を施すが荒い。内面は口縁部を刷毛目の後に横ナデ、胴部は丁寧なナデで仕上げる。明るい橙色で精製品である。259 は小型丸底状の器形で北西側から出土した。外面は口縁部を横ナデ、肩部を刷毛目、底部付近をナデの後に全体に縦方向の暗文風の研磨を施す。内面体部はヘラナデおよび丁寧なナデである。淡橙色を呈し、胎土は細かいが砂粒を含む。260 は小型の台部で中央北東よりから出土した。外面は刷毛目の後に横ナデ、内面は横方向の刷毛目を施す。淡黄褐色を呈す。261 は

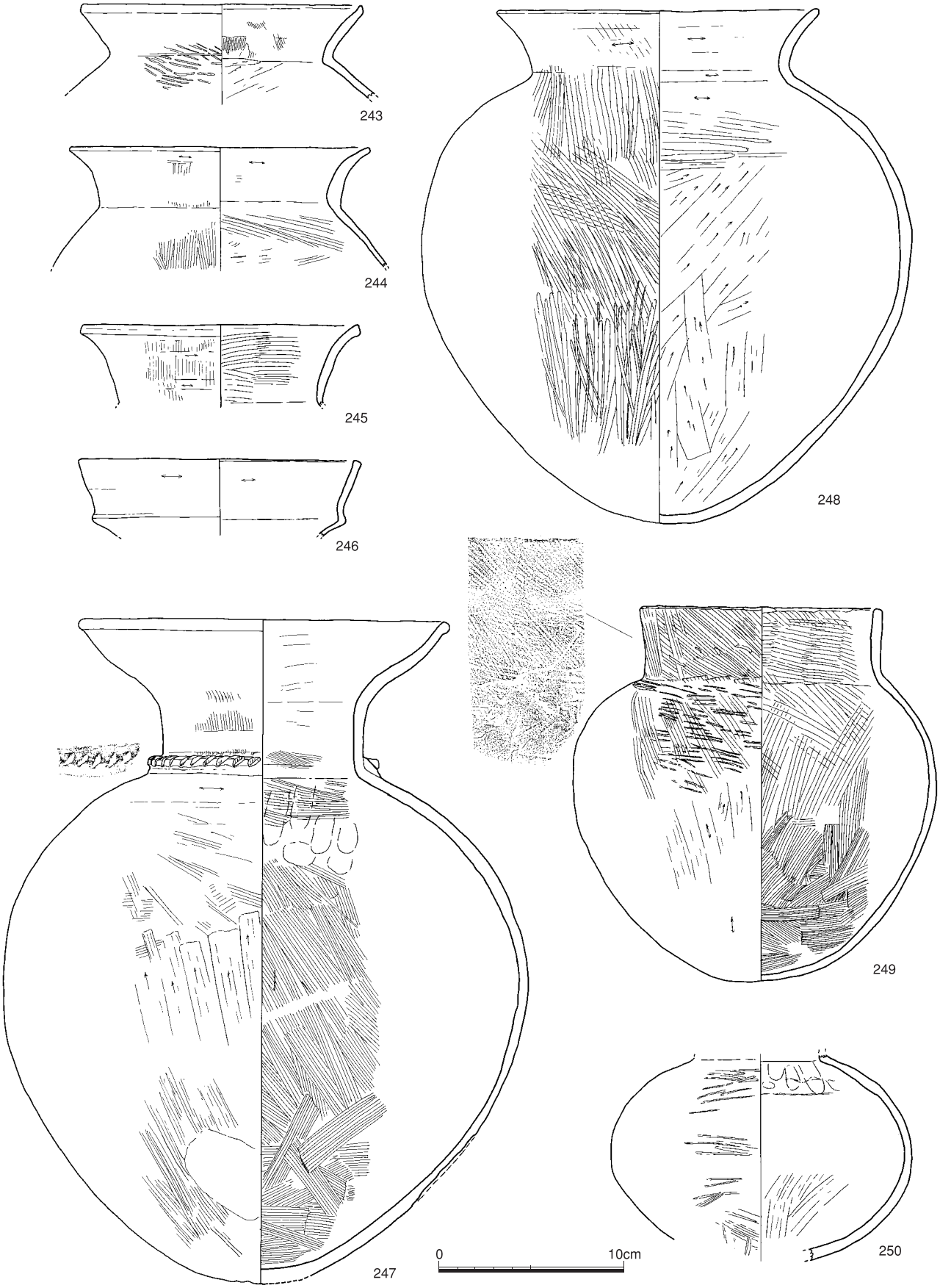


Fig. 33　SC5004 出土遺物実測図 3 (1/3)

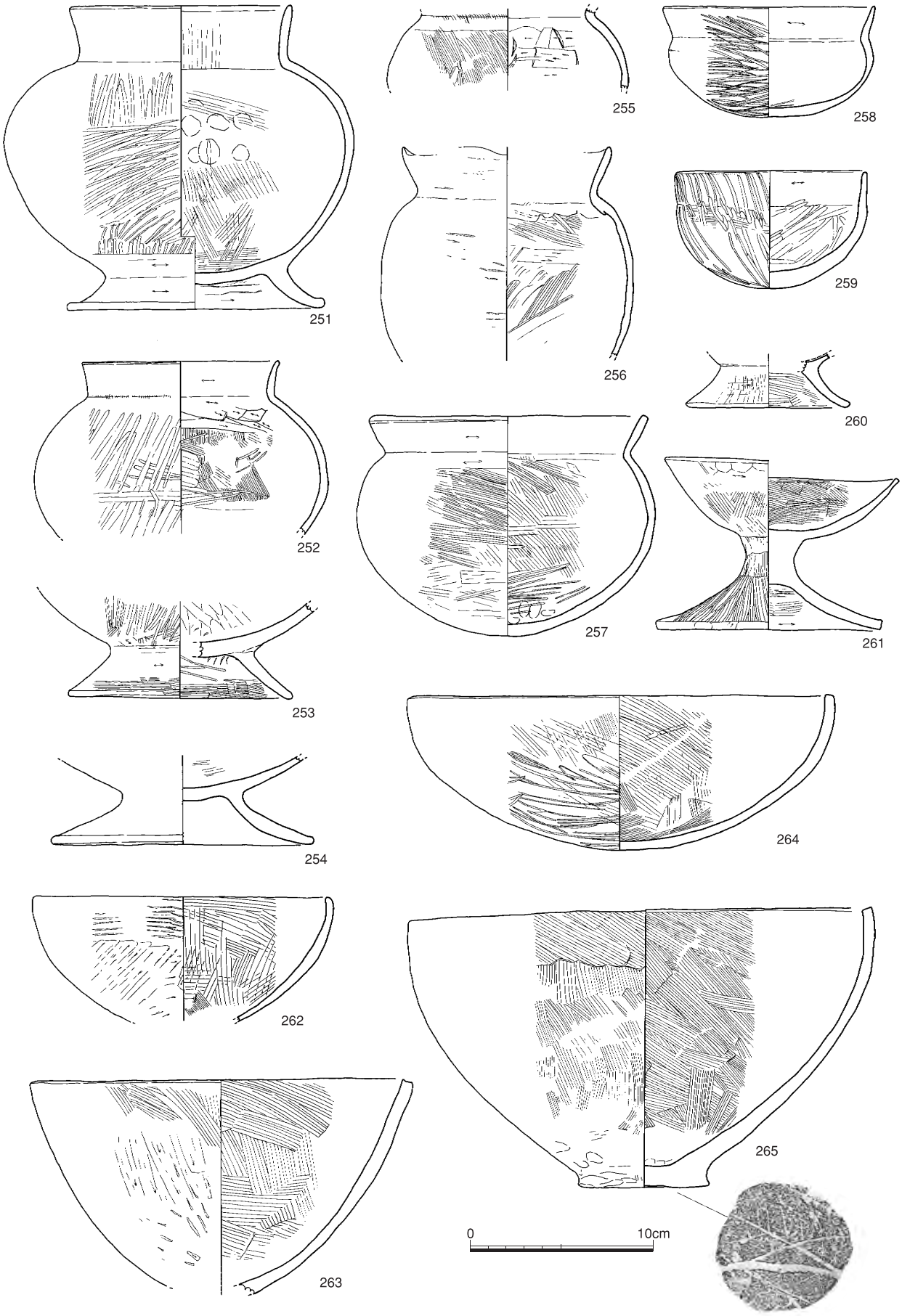


Fig. 34　SC5004 出土遺物実測図 4 (1/3)

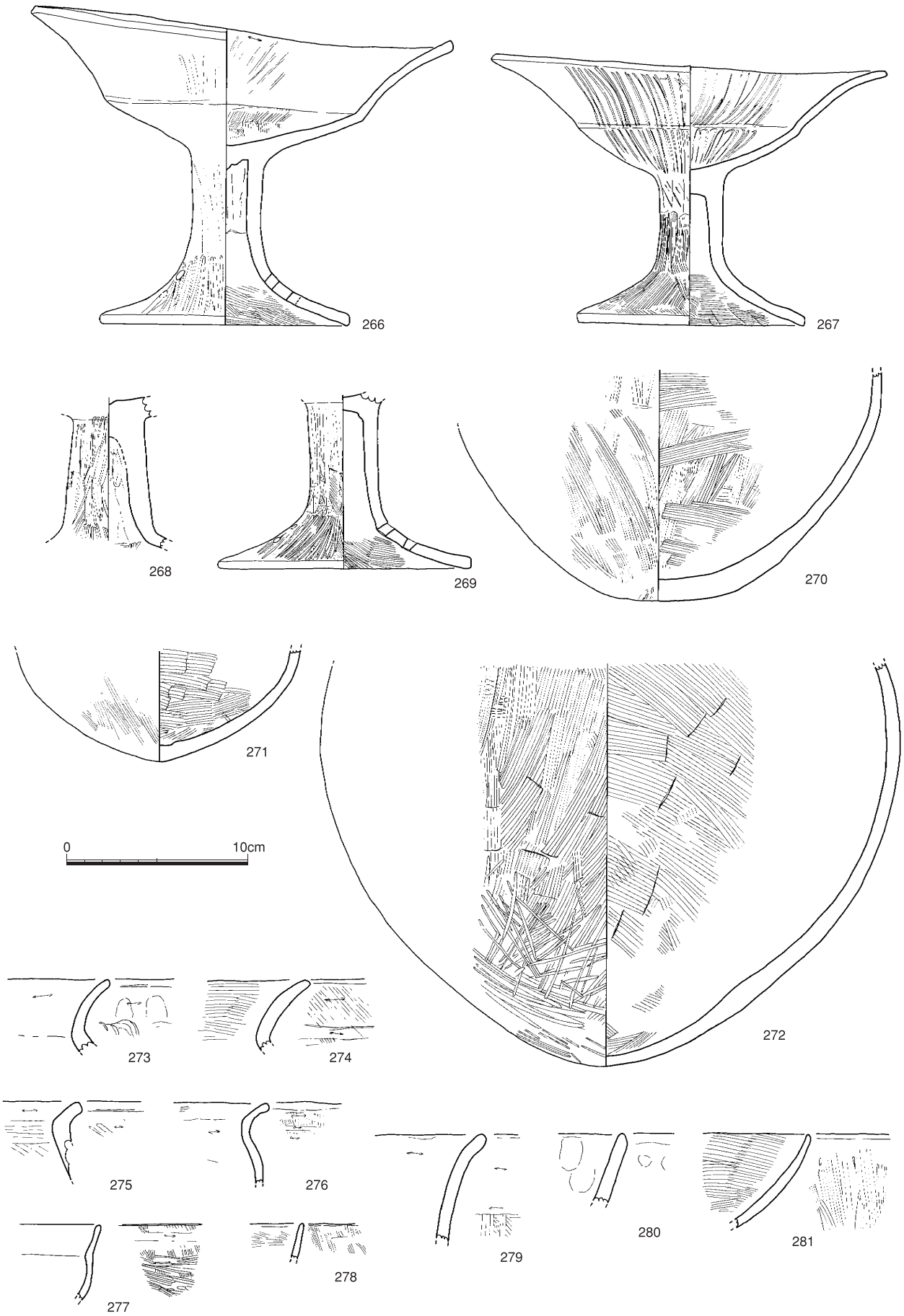


Fig. 35　SC5004 出土遺物実測図 5（1/3）

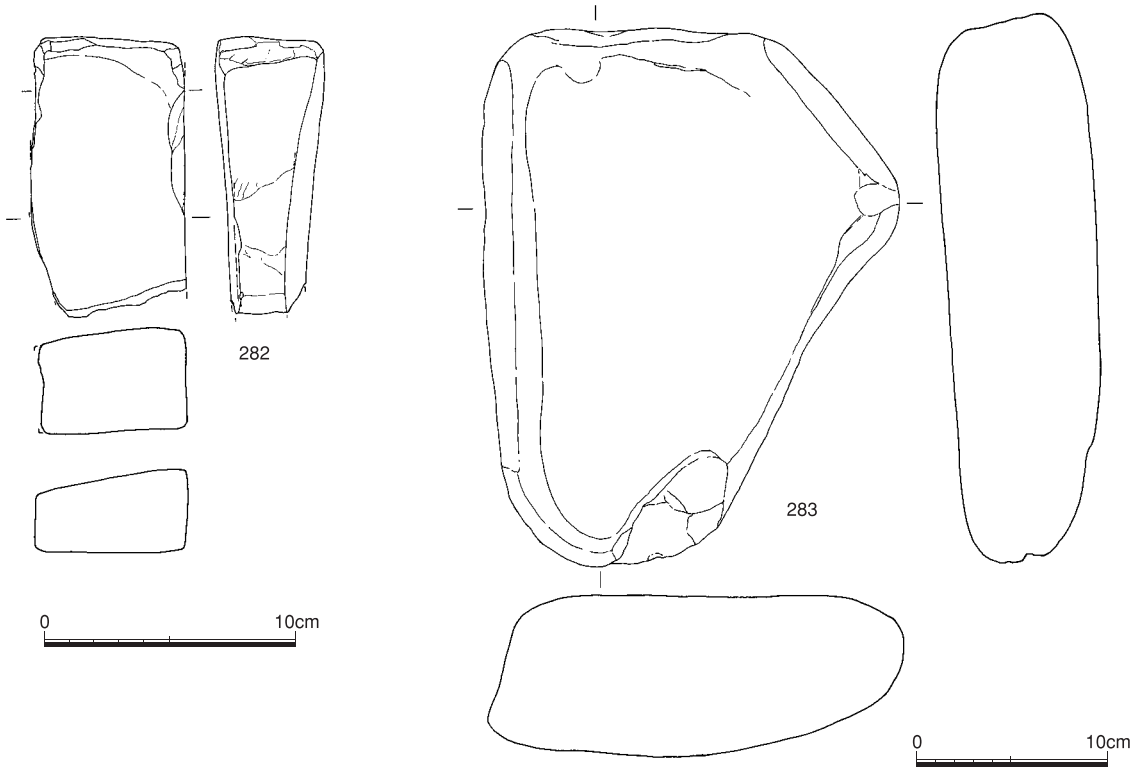


Fig.36　SC5004 出土遺物実測図 6（1/3、1/4）

面茶褐色、内面黄図茶色を呈す。263 は外面が荒れ、剥げた部分が多い。底部は内外面ナデである。砂粒を多く含み、灰茶褐色を呈す。264 は口縁部外面を横ナデ、口縁直下は刷毛目、体部は削り状の深い刷毛目を施す。265 は南側集中部からの出土である。底部は五様式系の輪台底で木葉痕がつく。内外面に刷毛目を施し、底部はナデと擦痕が見られる。口唇部は面取し、鋭い作りである。

266 から 269 は高坏である。266 は器壁が内外面ともに荒れる。脚部に焼成前の穿孔を 2 カ所に配す。外面坏部はおそらく研磨、脚部は深い研磨が残る。坏部内面上部はおそらく研磨。下部は刷毛目が残る。橙色を呈し、胎土は細かい。267 の坏部は横ナデ後の暗文風研磨で、内面下部は刷毛目が残る。脚部は目の細かな刷毛目を施す。胎土は細かめで、赤みの強い茶色を呈す。268 は脚部外面を研磨、内面はナデである。淡橙色を呈し胎土は細かい。269 は脚部に焼成前穿孔を上下に 2 つ行う。反対側は欠けて１つのみ残存するが、２つの穿孔と考えられる。外面は細かな刷毛目の後に研磨を丁寧に施す。脚部内面は刷毛目が明瞭に残る。270 は壷の底部か。内外面とも刷毛目が明瞭に残る。器壁は厚めである。底部外面は若干の平坦で淡黄色を呈す。271 は尖底気味で五様式系か。外面は横方向の擦過、縦方向の刷毛目の後に丁寧にナデる。内面は刷毛目を施し底がくぼむ。272 は五様式系の壷で外面上部は刷毛目で下部は削り状の荒いヘラナデを施す。内面は細かな剥離があり、刷毛目が明瞭に残る。淡茶褐色から茶褐色を呈す。273 は口縁部を横ナデ、胴部外面は抉るような刷毛目で煤ける。274 は煤が吸着し黒色を呈す。275 は口縁部を横ナデ、外面胴部は一部擦過状痕がみえ、煤吸着により黒色を呈す。内面胴部は横方向の刷毛目とナデで淡橙色を呈す。277 は小型丸底壷で外面は刷毛目の後に細かな研磨。内面は横ナデを施す。胎土精良で淡橙色を呈す。278 は外面は刷毛目と横ナデ、内面は刷毛目である。279 は外面は刷毛目の後横ナデ、内面は横ナデである。280 は器面が荒れ、手ずくね状に見える。胎土に赤色鉱物を含む。281 は椀状で外面は刷毛目で器壁に亀裂が入る。

282 は床面で検出した細粒砂岩製の砥石である。青灰色を呈す。4 面が使用により平滑になる。短

辺は破面である。現状で長さ 10.5 ㎝、幅 6.0 ㎝、厚さ 4.0 ㎝、重さ 491.4 ｇほどである。283 は北側中央で出土した花崗岩の台石である。１面が使用により平滑になる。7580 ｇを量る。

SC5005（Fig.37）

11-1 区の南端､SC5004 の南隣で検出した。SD5009､5010､5011 に切られる。平面方形で 536 × 513 ㎝、深さ 34 ㎝を測る。床面中央西寄りには径１ｍほどの不整形の範囲に薄い炭化物層を検出した。また、東壁は中央部に深さ 25 ㎝ほどの掘り込みがあり覆土の淡茶褐色土は炭化物を微量含む。ピットは北寄りに 3 基検出した。径約 20 ㎝の２基は深さ 30 ㎝前後であるが、支柱穴の位置としては合わない。中央東寄り 3 ｍ× 3.8m の長方形の範囲は堅く踏み締まり黒褐色に汚れが沈着する。この範囲の平面形からコ字型に巡るベッドの存在が想定されるが、土層にも現れていない。存在したとしても北側の土器の位置から、５㎝ほどの高さになる。遺物は少ないが、床面近くからまとまって出土した 302、床面出土の 306、その他 301、303 から 306 は出土状況から遺構の時期に近いと考えられる。301 から 306 が覆土下層以下の出土である。遺構の時期は ⅡB 期と考えられる。

出土遺物（Fig.38 ～ 39） 301 は覆土南西側出土の布留式系の甕で東壁際土抗出土の破片が接合した。底部付近は指圧痕が残る。外面は薄く煤ける。302 は北西側床直上で出土した山陰系の壷である。胴部上半は一周し胴部は一部のみの残存で､復元的な作図を行った。全体に器面は荒れ調整は不明確。底付近は器壁が薄い。口縁部外面は横ナデで、頸部付近には横方向の調整痕、胴部上部に横方向の刷毛目が所々残る。頸肩間に沈線を施し、工具木口の刺突による綾杉文風の文様を配する。胴部中位から下は縦方向の刷毛目で煤が付着する。胴部内面に横方向の削り、底には指頭圧痕が残る。淡黄褐色を呈す。303 は精製の脚付椀で外面は細かな研磨を丁寧に施し、刷毛目が残る。内面は横ナデ後に細い研磨を施す。橙色が鮮やかな精製品。304 は成形が雑で厚みが不均一である。口縁部外面は横ナデ

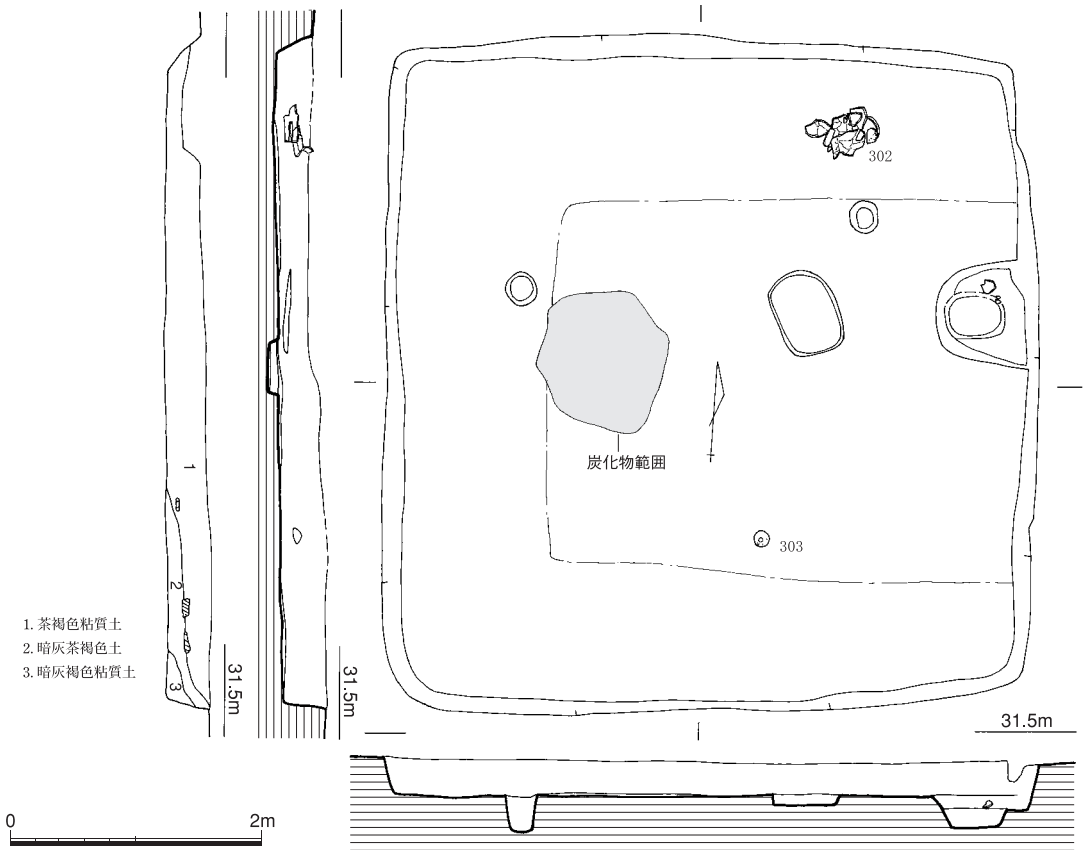


Fig.37　SC5005 実測図（1/60）

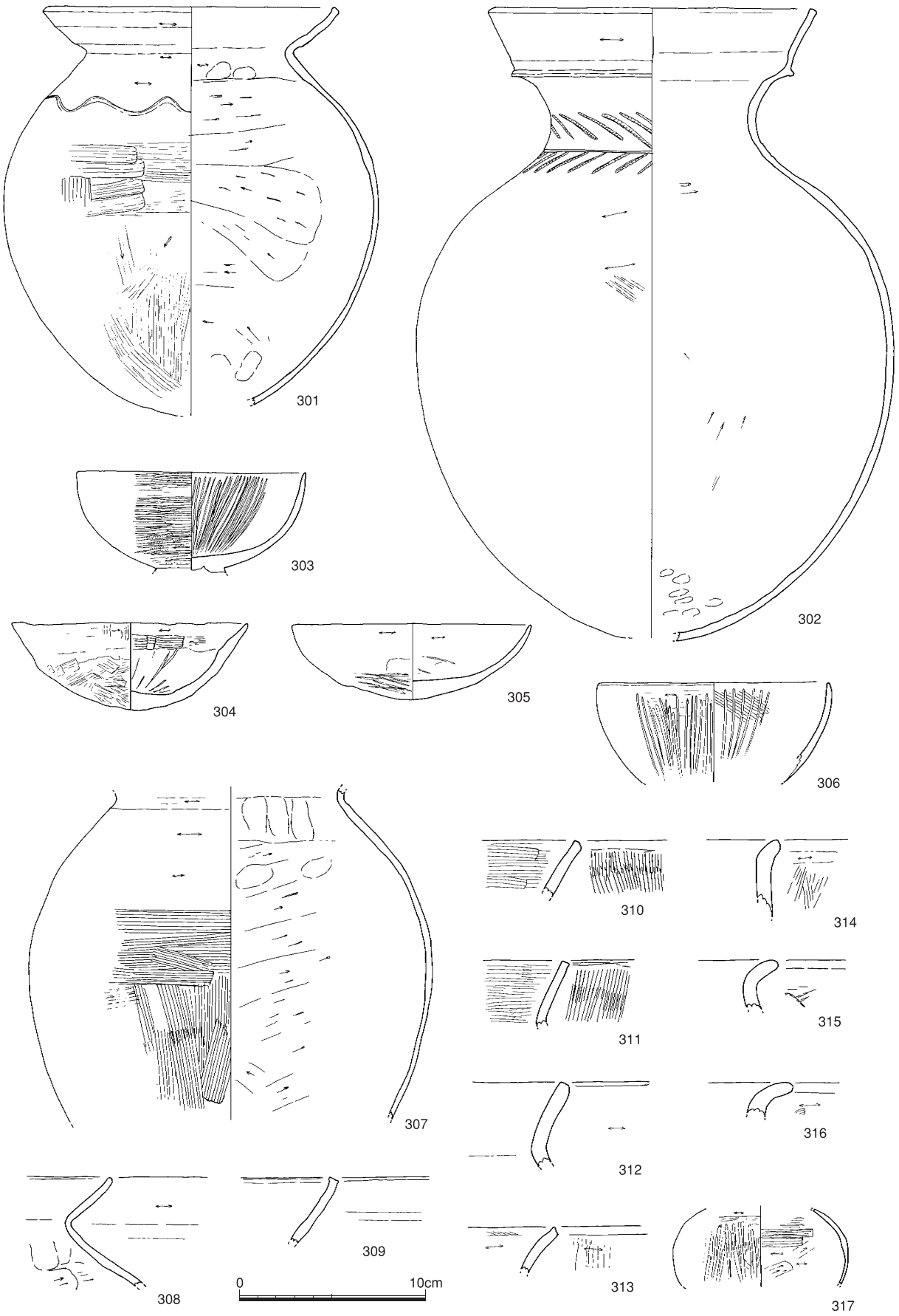


Fig. 38　SC5005 出土遺物実測図 1 (1/3)

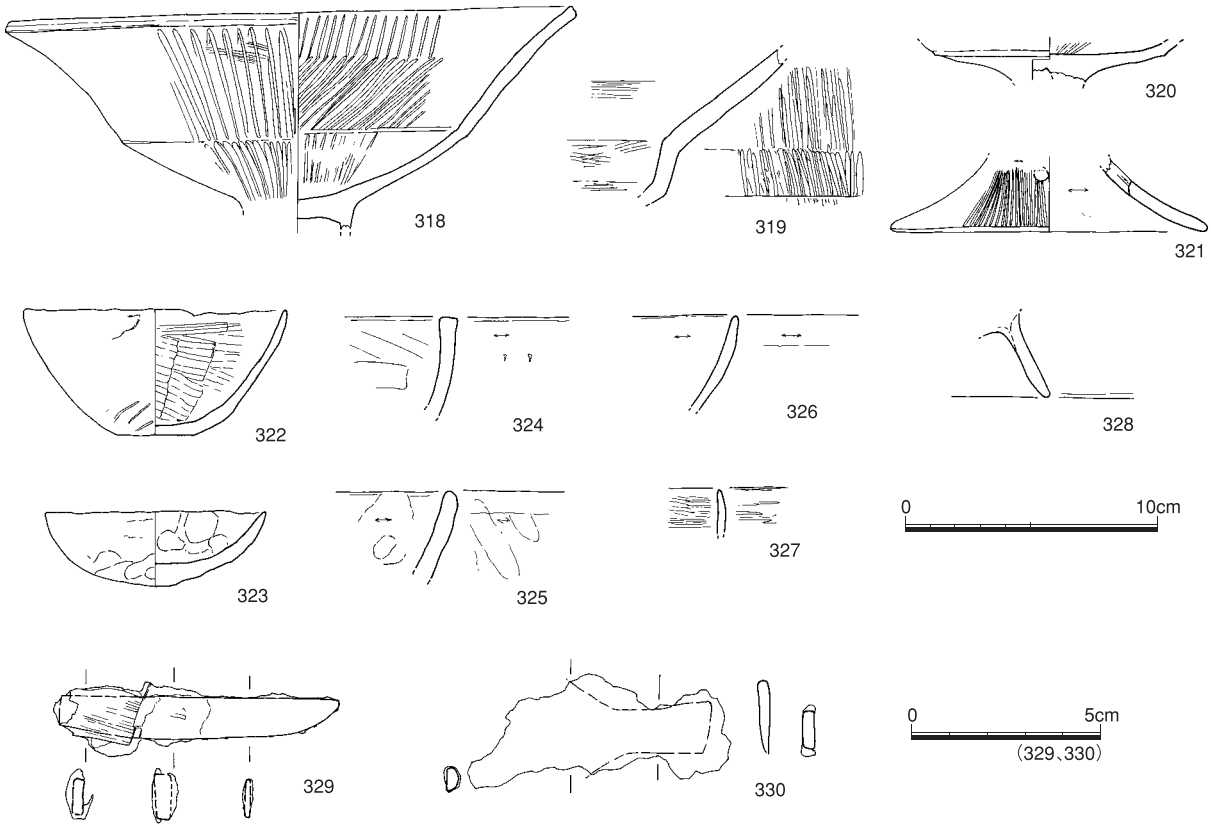


Fig.39　SC5005 出土遺物実測図 2（1/3、1/2）

に刷毛目、体部は荒い擦痕を施す。内面は口縁部を刷毛目、体部は丁寧なナデで木口痕状の痕跡が見られる。淡茶色を呈し胎土は細かい。305 は口縁部の大部分を欠く。口縁部外面は横ナデで、他は削り状擦痕の後に細い研磨を施す。内面は丁寧なナデで削り状の痕跡が残る。細かな胎土で淡茶色を呈す。306 は床面出土で 1/6 弱からの復元。外面はヘラナデ状、内面は刷毛目の後に丁寧にナデ、暗文風研磨を施す。

307 から 309 は布留式系の甕である。307 は全体に煤ける。内面は頸部のナデが広く、指頭圧痕が見られる。308 は頸部の接合が不確実。310、311 は在地系の甕で、311 外面は煤ける。312 は厚手で、外面が煤ける。313 は内外面とも刷毛目の後に横ナデ。314 はやや内径気味か。外面刷毛目、内面ナデ調整で胎土は細かめである。315 は壷か。外面頸部にはヘラ状工具による擦痕がある。胎土は細かめ。316 も壷か。横ナデで淡橙色を呈す。317 は壷で外面は肩部を横ナデ、胴部は縦削りの後に研磨を疎らに施す。内面は上部を刷毛目となで、下部は削り状の擦過である。胎土精良で淡橙色を呈す。

318 は高坏の坏部で器面が荒れる。外面は刷毛目の後に研磨、内面は口縁部横ナデ、他は研磨を施し、刷毛目痕が所々に残る。胎土は細かく橙色を呈す。319 は有段高坏で、外面は暗文風の研磨で仕上げる。中下段に刷毛目が残る。内面は刷毛目とナデである。明橙色を呈し胎土は精良である。320 は畿内系の器台で外面は細かな研磨、内面は刷毛目の後に研磨である。砂粒を含むが胎土は細かく、橙色を呈す。321 は丁寧な作りの脚部で、外面は横ナデの後に細かな研磨、内面は横ナデである。焼成前の穿孔が 2 カ所にあり、位置的に 4 カ所と考えられる。322 は平底で、外面は縦方向の調整の後にナデ、器面成形は荒い。内面は刷毛目である。灰色を帯びた淡黄褐色を呈す。323 は手ずくねの坏形で成形は雑で厚さが一定しない。胎土は細かく、暗灰色を呈す。324 は外面ナデ、内面刷毛目を施す。325 は厚手で、外面は刷毛目と指圧、内面は横ナデを施す。326 は内外面に横ナデを施し、外面に粘土の小亀裂がある。

327 は外面研磨、内面刷毛目で胎土精良で橙色を呈す。328 は壷等の台部で内外面横ナデを施し橙色を呈す。胎土に砂粒少なく橙色を呈す。

329 は床面で出土した鉄製の刀子である。基部に柄の木質が残る。330 は不明鉄器でＸ線撮影を行ったが生きている範囲が判然としない。右側断面は幅１㎝、厚さ３㎜ほどの長方形を確認した。

SC5006（Fig.40）

11-1 区北側で検出した。SC5007 を切り、中世のピットに切られる。覆土は灰褐色土で検出面と類似し、検出しづらかった。平面長方形で 530 × 415 ㎝、深さは残りの良いところで 60 ㎝を測る。西壁と北壁西側にはＬ字状のベッドがある。ベッドは西壁側が幅 110 から 120 ㎝で、西側は南側を掘りすぎた可能性がある。中央の床面との比高差は５㎝ほどと小さい。床面は踏み固められ有機質土壌も混ざり汚れている。中央には径 66 ㎝、深さ 26 ㎝の円形土抗があり、この南北両側に径 30 ㎝前後のピットを配す。また南北の壁沿いにはくぼみ状の土抗がある。他にもピットを検出したが、明確に支柱穴と判断できるものを確認できなかった。遺物は特に１層の上部で集中し、まとまって出土したものは大まかな番号を付けて取り上げた。下層でも Fig.40 のようにまとまって出土した土器があるが、いずれも床面からはやや浮いている。遺構の時期は ⅡB 期と考えられる。

出土遺物（Fig.41 ～ 54）341 から 372 は下層出土である。床面近くから出土したものもあるが、20 ㎝弱浮いたものも含む。341 から 343 は在地系の土器である。341 は 10 から 20 ㎝浮いた状態でまとまって出土した。外面は口縁部から胴部上半を叩きの後に縦方向の刷毛目を施す。胴部上部の刷毛目には間隙があるが、下部は密に重ね工具も異なる。底部はナデ。胴部下半には煤が残る。342 は小型の甕で中央北から横たわり、床面から 12 ㎝浮いて出土した。口縁部は刷毛目の後に軽いナデ。胴部上半は平行叩きの後に刷毛目を疎らに施し軽くナデる。胴下半部は削りである。内面下部はナデである。淡黄褐色を呈し下部に黒半がある。343 は中央西よりから出土した。外面上部は平行叩きの後に軽くナデ。下部はその後に削る。淡橙色を呈し、下部に黒斑がある。

344 は布留式系の甕で淡黄色から淡灰褐色を呈し外面には若干の煤が付着する。345 は器壁が薄い。

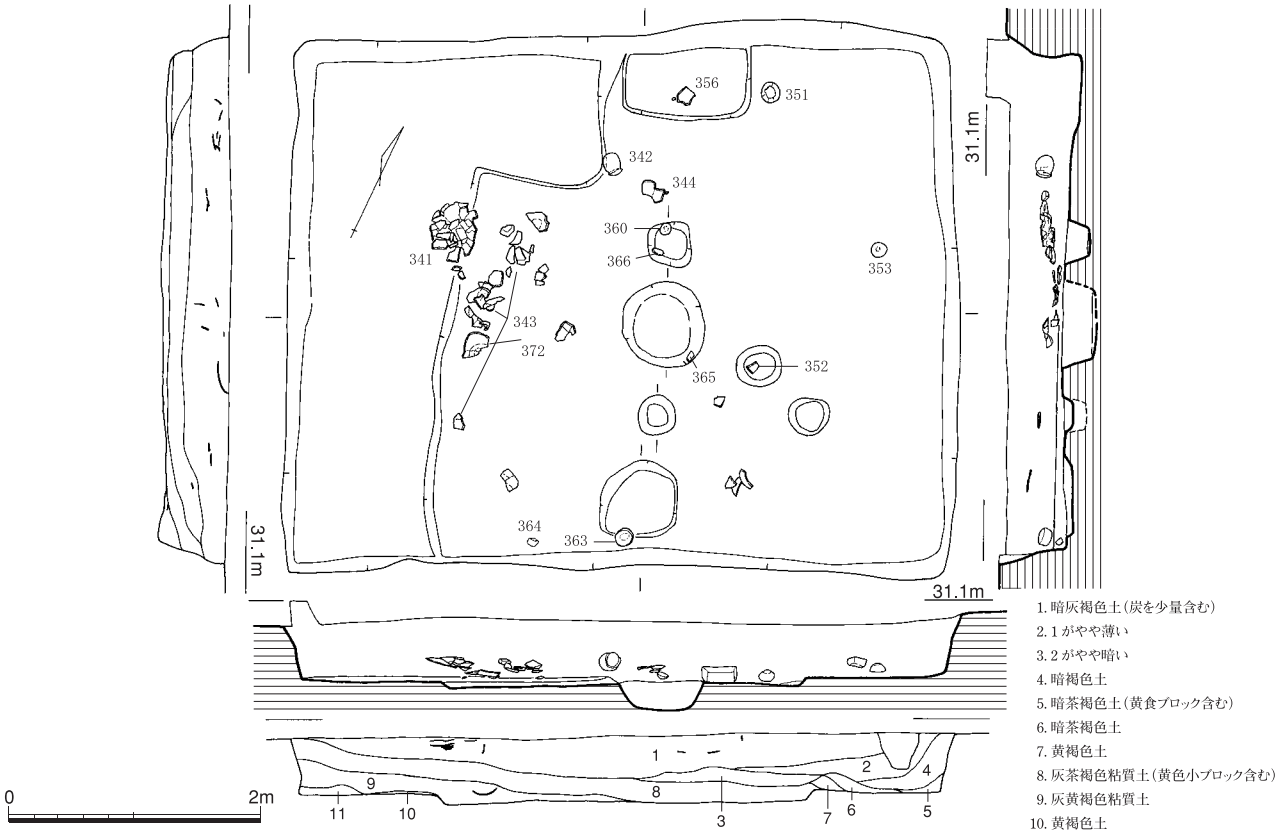


Fig.40　SC5006 実測図（1/60）

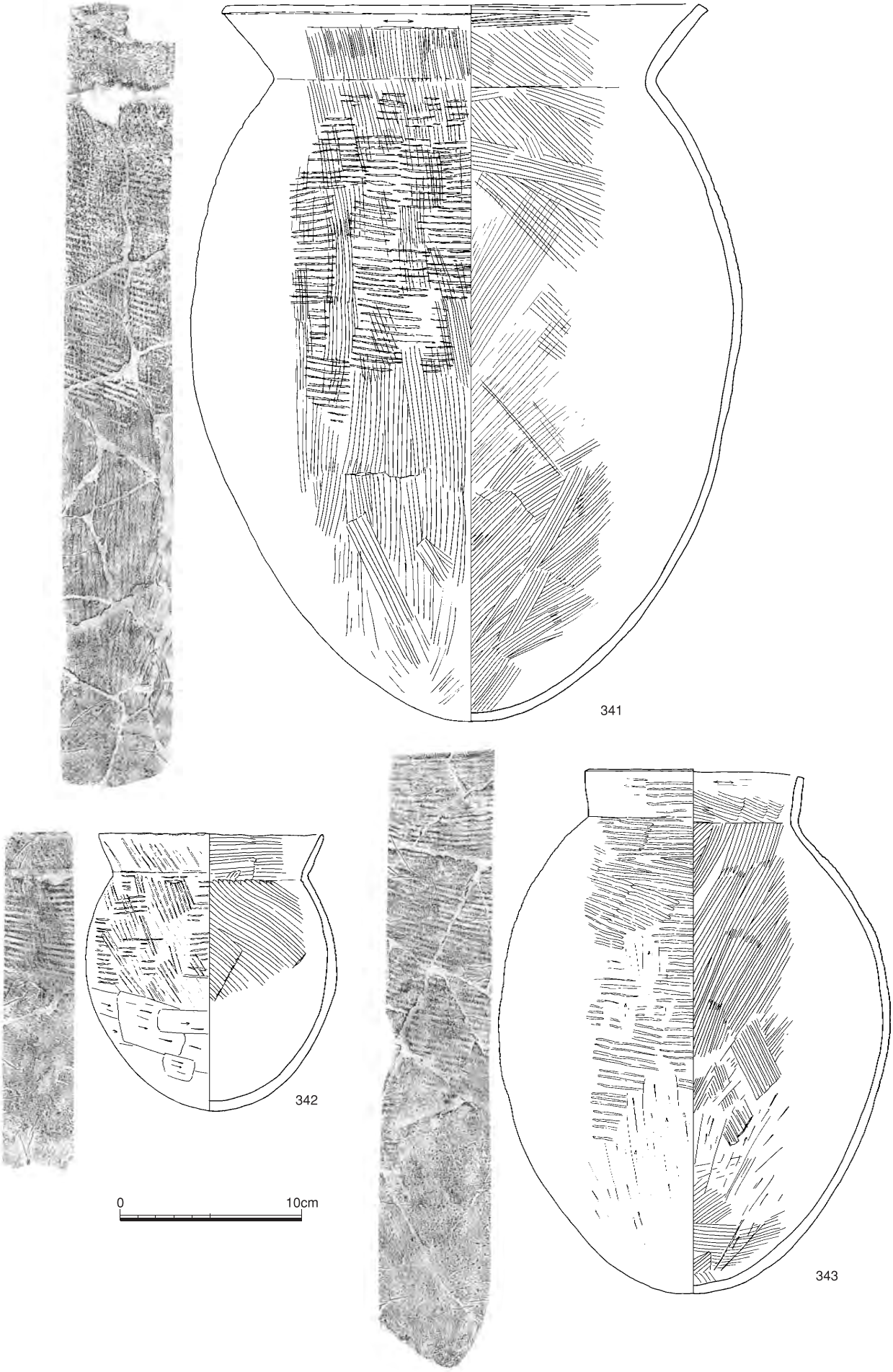


Fig. 41　SC5006 下層出土遺物実測図 1(1/3)

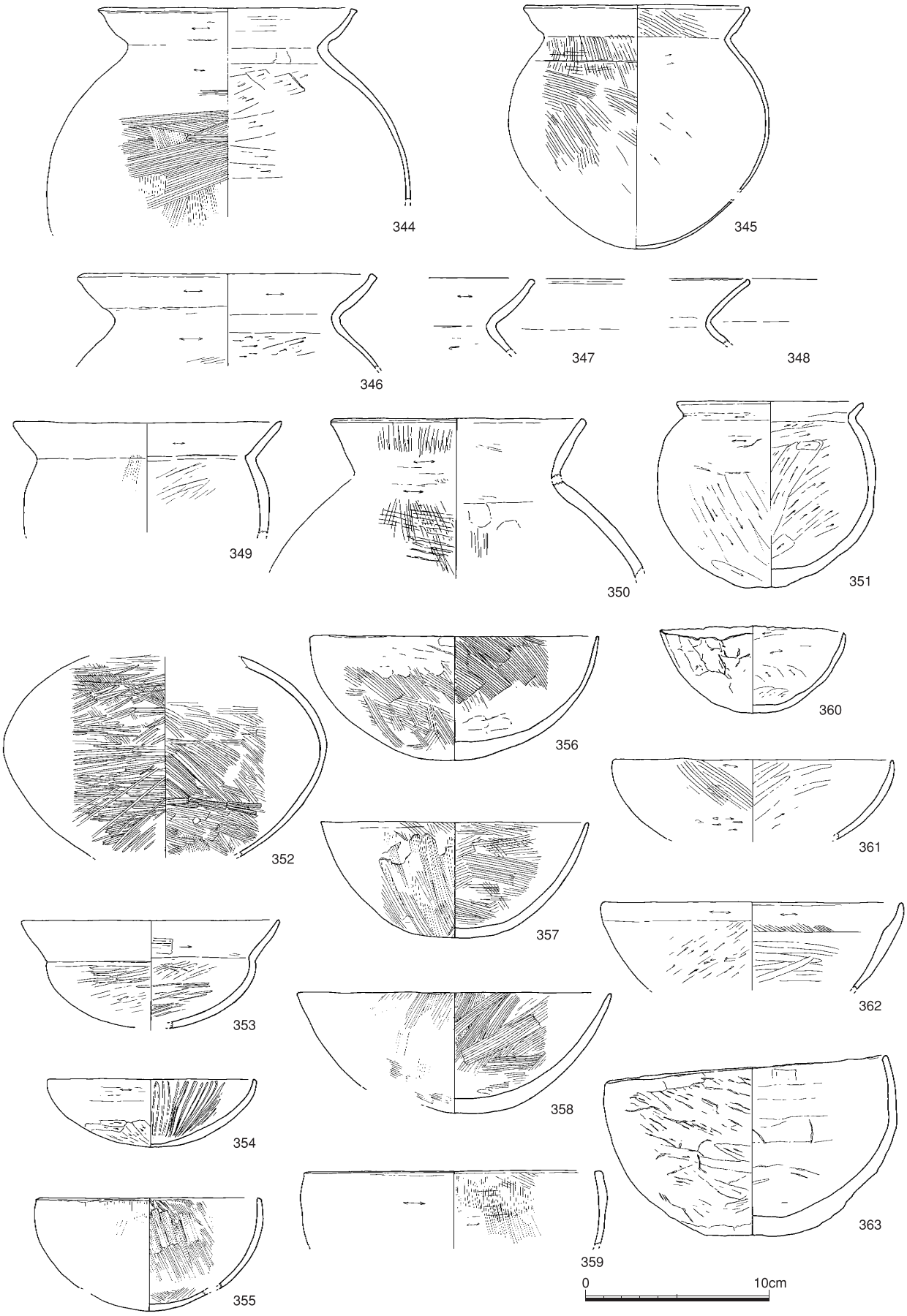


Fig. 42　SC5006 下層出土遺物実測図 2(1/3)

口縁部は強いナデで凹凸がある。内面は口縁を刷毛目の後に横ナデ、胴部は浅い削りおよび擦過である。外面は全体に煤け、底部付近は一部橙色を呈す。346、347 は布留式系の甕である。346 は外面に煤が吸着する。349 は外面器面が荒れて剥げる。淡灰褐色から橙色で、2 次焼成によるものか。肩部の横ナデと胴部の刷毛目が見られる。胴部内面には擦痕が残る。350 は壷で、外面胴部は叩きの後に刷毛目を施し、頸部を横ナデ。内面はナデで刷毛目が残る。1/6 からの復元で頸部の接合は怪しい。351 は小型の甕で口縁部は横ナデ。外面は上部は横方向の調整とナデ、下部は浅い削りを下方向に施す。内面は削りで底は荒い。352 は長頸壷の胴部で、外面は上部を刷毛目、中位以下は削りの後に細かな研磨で仕上げる。内面は斜め方向の刷毛目が明瞭で、上部はナデる。器面は橙色で外面に光沢がある精製品である。353 は小型丸底壷で、口縁部は横ナデ、体部は削りの後に研磨を施す。胎土は精良で器面は茶色である。354 から 363 は椀または鉢状の形である。354 は外面口縁部を横ナデ、他は浅い削り。内面は横ナデの後、底から放射状に研磨する。砂粒を含むが胎土は細かい。355 は底部が接合しない。外面には刷毛目が口縁部に残り、他はナデ仕上げ。内面は細かな刷毛目。淡黄色を呈す。356 は北側中央で正置した状態で出土した。外面はナデの後に刷毛目、内面は上半に刷毛目を施し、底はナデである。淡黄茶色を呈す。357 外面は全体に刷毛目を施す。底部はやや平底気味で削りのままである。内面は全面刷毛目である。淡黄色を呈す。358 は 1/6 からの復元で内外面とも細かな刷毛目を施し、その後、外面は全体をナデ、内面は底に指頭圧痕が見られる。359 は外面横ナデで下部に擦過が見られる。内面は縦刷毛目のあとに横ナデを施す。360 は 3 ㎝ほど浮いて出土した。完形品で手づくね状のナデ仕上げである。外面には粘土の割れがある。淡茶色を呈し底に黒斑がある。胎土は細かい。361 は 1/4 からの復元。外面削りで口縁部には刷毛目と横ナデを施す。内面は擦痕が見られる。362 は口縁部外面を横ナデの他は削りである。内面は口縁部に強い横ナデで段状をなす。段の屈曲部には刷毛目が残り、体部はヘラナデ状である。363 は完形品で外面上部は擦過とナデで粘土の割れが目立つ。下部は荒いヘラ削り状で不整形である。内面はヘラナデとナデで丁寧に仕上げる。外面は淡黄茶色から淡茶色で下部に黒斑があり、内面は茶褐色を呈す。胎土は砂粒を含むが細かい。

364 から 367 は高坏である。364 外面は縦研磨、内面は荒れているが研磨が若干残る。外部に化粧土がかかり鈍い橙色を呈す。365 は器面荒れ気味で、外面は縦方向の刷毛目の後に縦研磨か。裾部に焼成前穿孔が対峙する位置に 2 つ残り、4 穴の可能性もある。366 の調整は 365 と同様で、坏部内面底に 6 ㎜大のくぼみがある。367 は内外面とも刷毛目を横方向の後に縦方向に施し、縦方向の研磨を暗文風に施す。368 は器台か。外面は刷毛の後にナデ、内面はヘラナデ。369 は外面ナデで指頭圧痕状の痕跡が残り、内面は擦痕とナデで両面とも暗灰色を呈す。器壁は薄く堅い。小片のため傾きは不確実。370 は外面縦方向の刷毛目で口縁部には横ナデを施す。内面は刷毛目の後なでる。淡橙色を呈し外面は煤ける。器壁が薄い。床面からの出土。371 は支脚で、脚上部には平行叩きが残り粘土にひびが入る。下部は縦方向の刷毛目を施す。内面下部は刷毛目で、上部はナデを施す。外面淡黄色、内面淡橙色を呈す。372 は輪台状の五様式系の壷の底部で、内外面とも刷毛目。底部近くに黒斑がある。

373 から 517 は上層出土の遺物である。集中して出土する箇所は床面から 40 から 50 ㎝浮いており、下層の遺物とは 20 から 30 ㎝の間層を挟む。373 から 388 は在地系の甕を中心にまとめた。基本的に口縁部から胴部外面を叩き、縦方向の刷毛目を施している。内面は口縁部を横方向の刷毛目、内面は斜め方向の刷毛目である。373 は若干の煤が付着し 374 は一部煤けて黒色になる。375 は煤ける。376 は外面頸部に横ナデが顕著で、内面胴部はナデである。外面は一部黒変する。377 は器面が荒れ、刷毛目が残る。壷の可能性もある。378 は叩きを観察できない。若干の煤が付着する。379 は壷で胴部外面上半に叩きが明瞭に残る。口縁部は煤け、胴部は 2 次焼成により桃色をおびる。380 は傾きが不

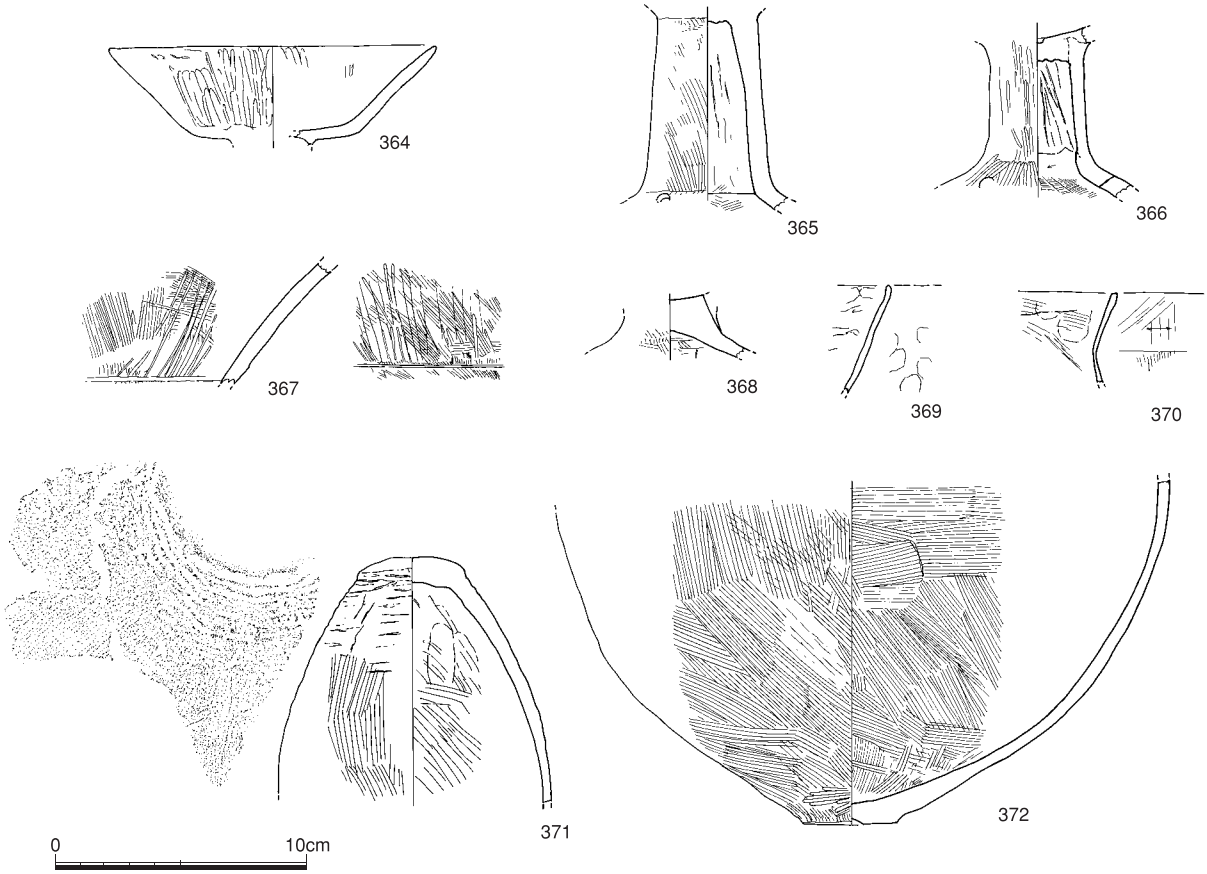


Fig.43　SC5006 下層出土遺物実測図 3(1/3)

確か。器面は橙色で下半部は煤ける。胴部外面上部の刷毛目は浅く、下部は荒い。381 は口縁部ナデ調整で茶色を呈し他と異質である。1/7 からの復元で傾き、径は不確か。382 は外面叩き、内面横ナデを施す。384、385 は器面が荒れて詳細不明。外面に若干の刷毛目が残る。386 は口縁部横ナデで内外面ともに刷毛目が薄く残る。387 は内外面刷毛目の後に横ナデを施す。外面は若干煤ける。388 は大きく外反し、口唇部を跳ね上げる。傾きは不確実。荒れ気味で横ナデが見られ、橙色を呈す。

389、390 は在地系の大形の壷である。外面は刷毛目、内面は口縁部から頸部下までは刷毛目で、胴部は削りを施す。外面頸部には三角突帯を貼付し横ナデを施す。外面胴部上部と下部の対峙する位置に黒斑がみられる。390 は 1/5 からの復元で傾きが不確か。内外面に刷毛目が残り、内面下部はナデ。頸部には断面三角形の突帯を貼付し、刷毛目工具で大きな刻目を入れる。

391 から 444 は布留式系を主とする在来系以外の甕である。414 までは布留式系で 1/4 以上からの復元である。391 は肩部まで横ナデがおよばない。外面は淡橙色を呈し胴部は炭化物が付着する。口縁部から頸部は一周する。392 は外面が若干煤ける。393 は肩部に横方向の擦痕が残り、なで肩である。口縁部には木口痕が残る。外面は若干煤ける。394 は口唇部を鋭くつまみ出す。外面は灰褐色を呈し全体に薄く煤ける。398 は肩部に刷毛目工具で 6 ㎜幅の波状文を描く。器面調整の工具はこれとは異なり目が細かい。灰茶色を呈し外面は若干煤ける。399 内面頸部下に指頭圧痕が見られる。400 は頸部近くまで横方向の刷毛目を施す。外面は一部煤ける。

401 の外面は煤けて黒色を呈す。406 は灰褐色を呈し、外面全体が煤ける。407 は強い横ナデで頸部外面がくぼむ。408 は淡橙色から灰白色を呈し、外面は煤けて下部は黒色を呈す。409 は肩部まで横ナデがおよばない。外面は茶褐色を呈し煤が吸着した部分は黒色を呈す。410、411 は強い横ナデで口縁部と頸部がくぼむ。410 の外面は煤ける。412 は 1/5 からの復元で、頸部の接合のあまさから

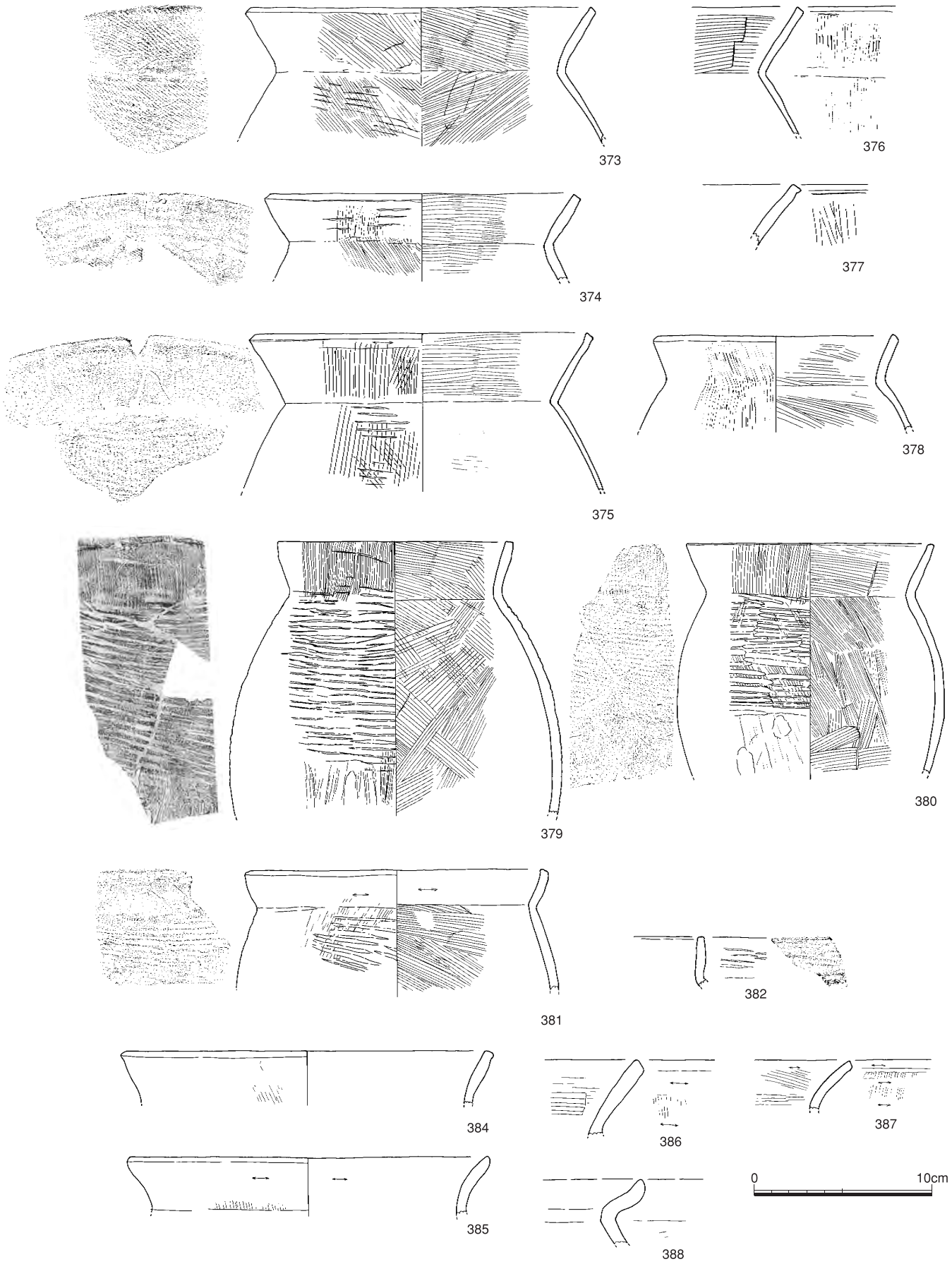


Fig. 44　SC5006 上層出土遺物実測図 1(1/3)

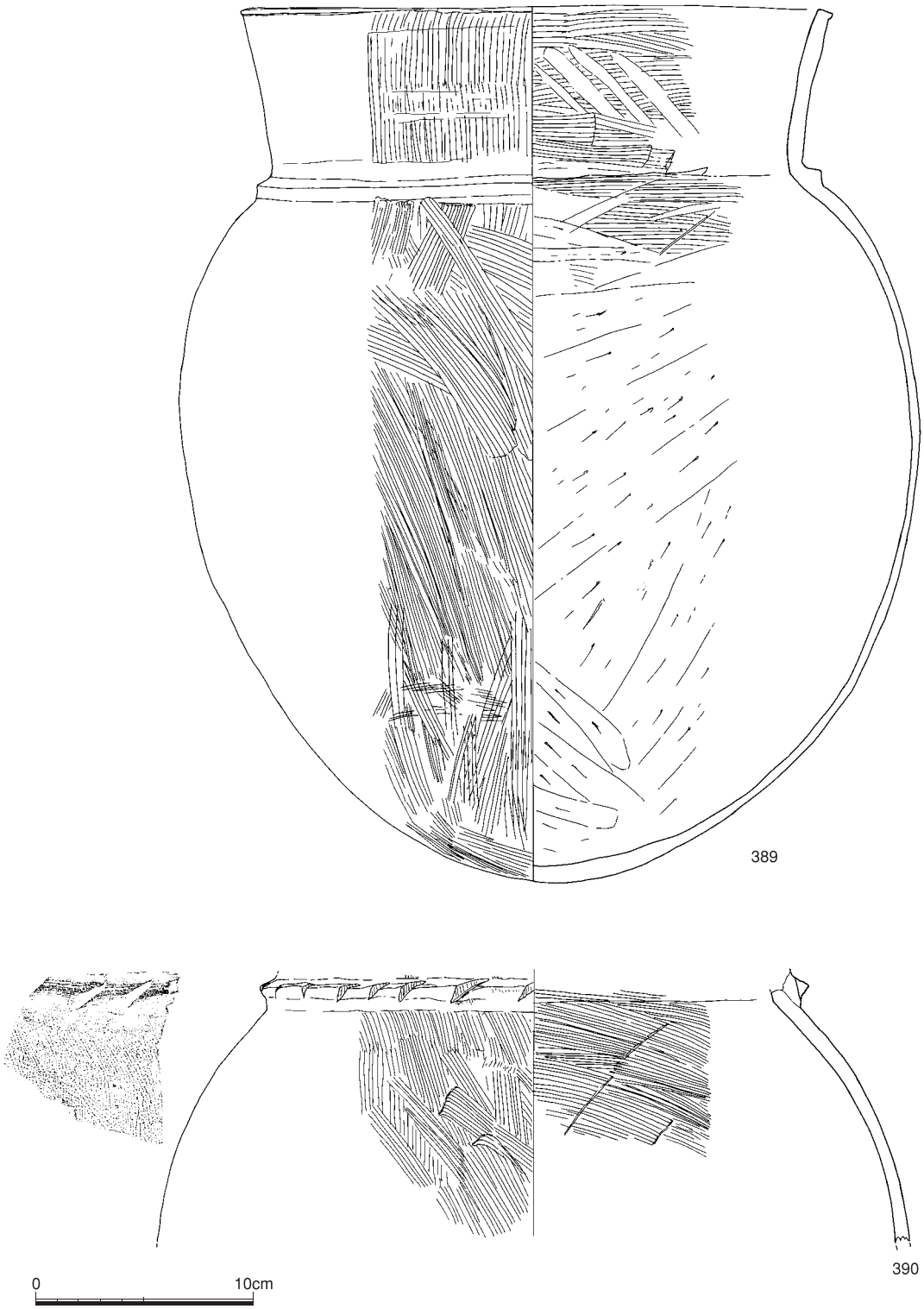


Fig.45　SC5006 上層出土遺物実測図 2(1/3)

傾きは不確かである。413 の肩部にはやや太めの沈線が 1 条巡る。414 はなで肩で淡黄褐色を呈す。

415 は五様式系の甕で、外面は口縁部から肩部は縦刷毛目を施し器面がやや沈み、口縁部には横ナデを施す。胴部は擦過で、煤ける。内面は口縁部を刷毛目、胴部は木目幅が広い刷毛目を施す。416 は頸部が接合せず、傾きが不確か。外面は横ナデで浅い沈線を施す。417 は外面ナデで、刷毛目工具で肩部に波状文を描く。418 から 442 は甕の口縁部片で横ナデ調整。内湾気味の布留式系の甕が大部分を占める。425、427、428、431、432、433、435、438 は外面に煤が付着する。443 は布留式系の甕

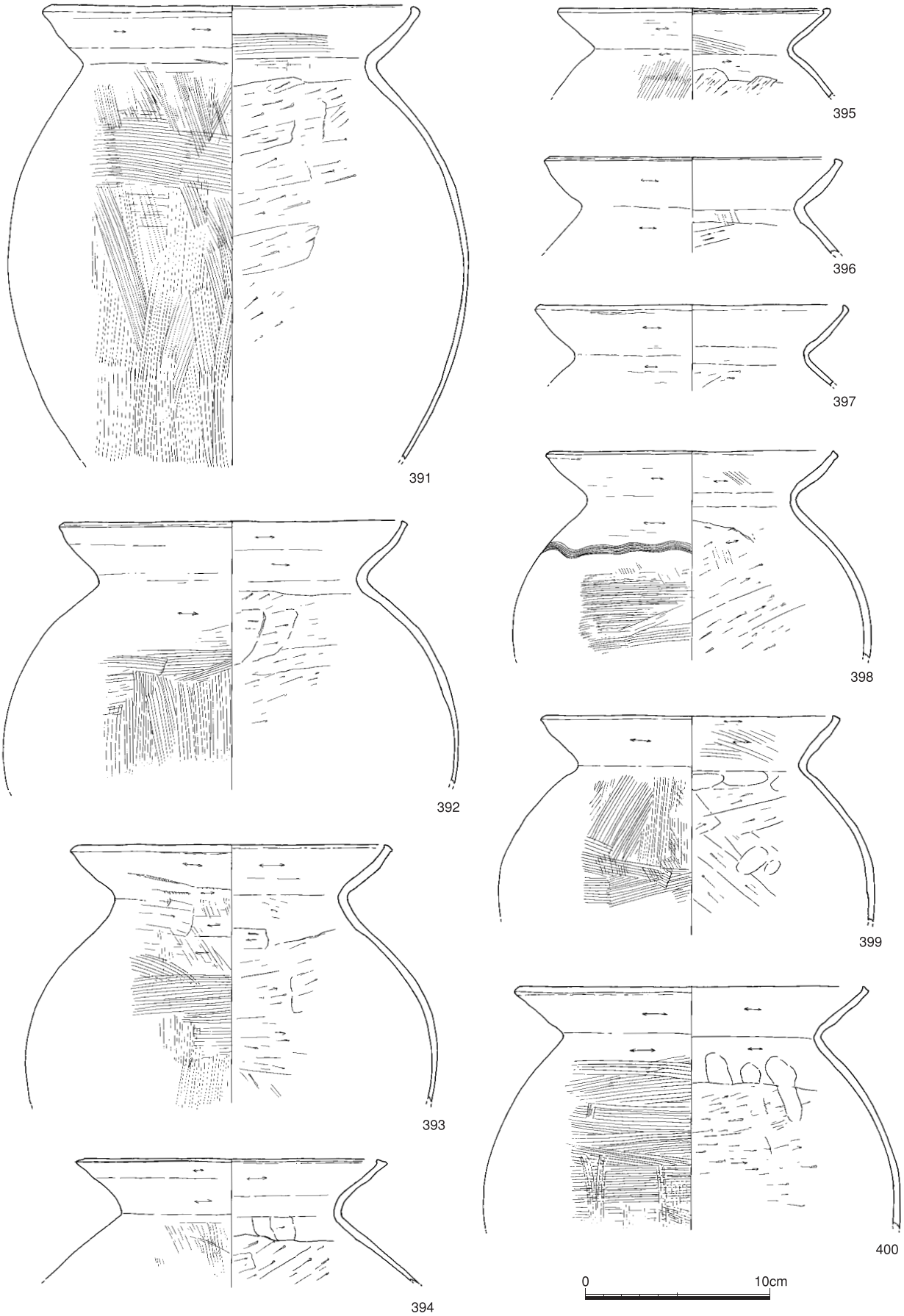


Fig. 46　SC5006 上層出土遺物実測図 3(1/3)

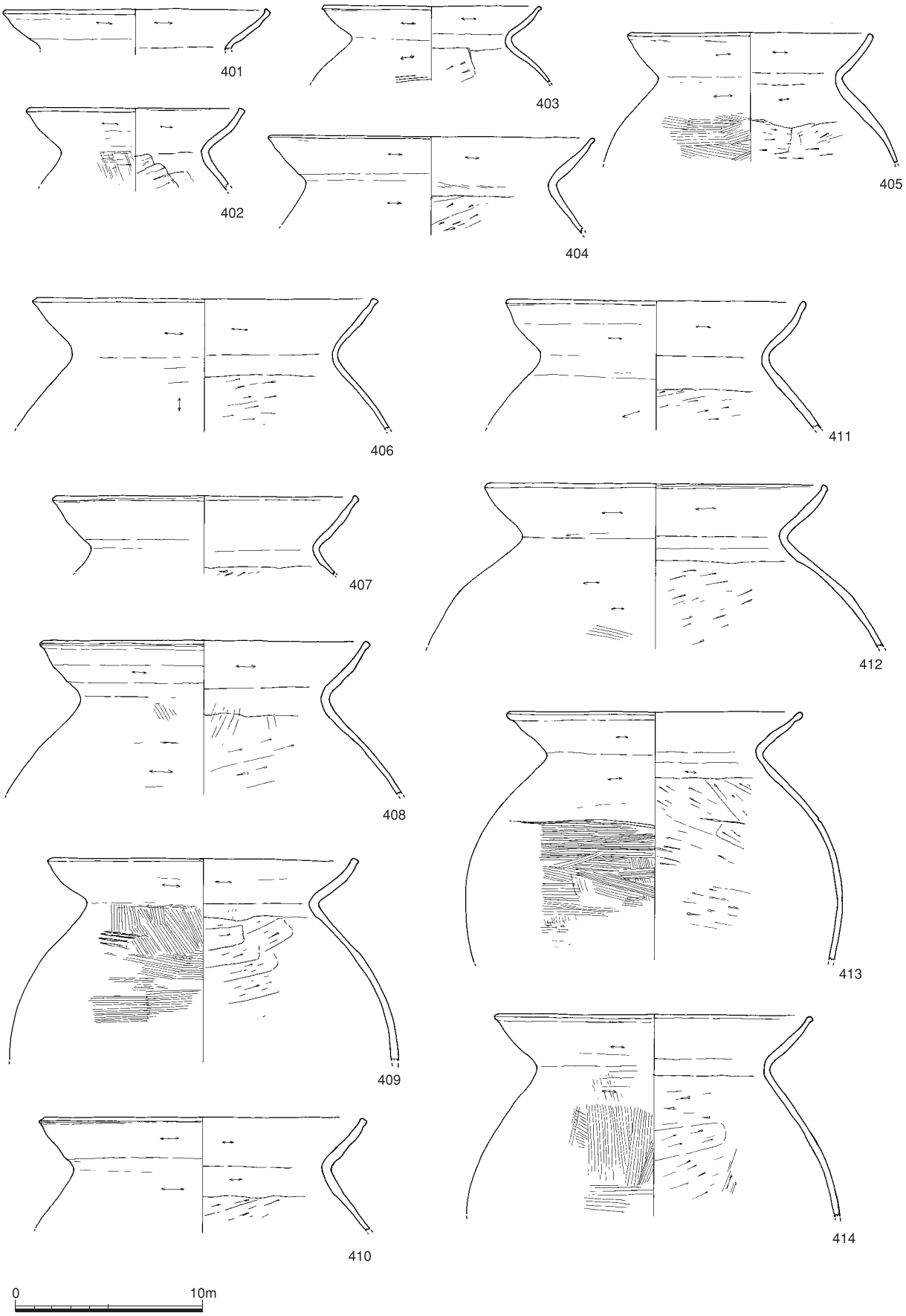


Fig. 47　SC5006 上層出土遺物実測図 4(1/3)

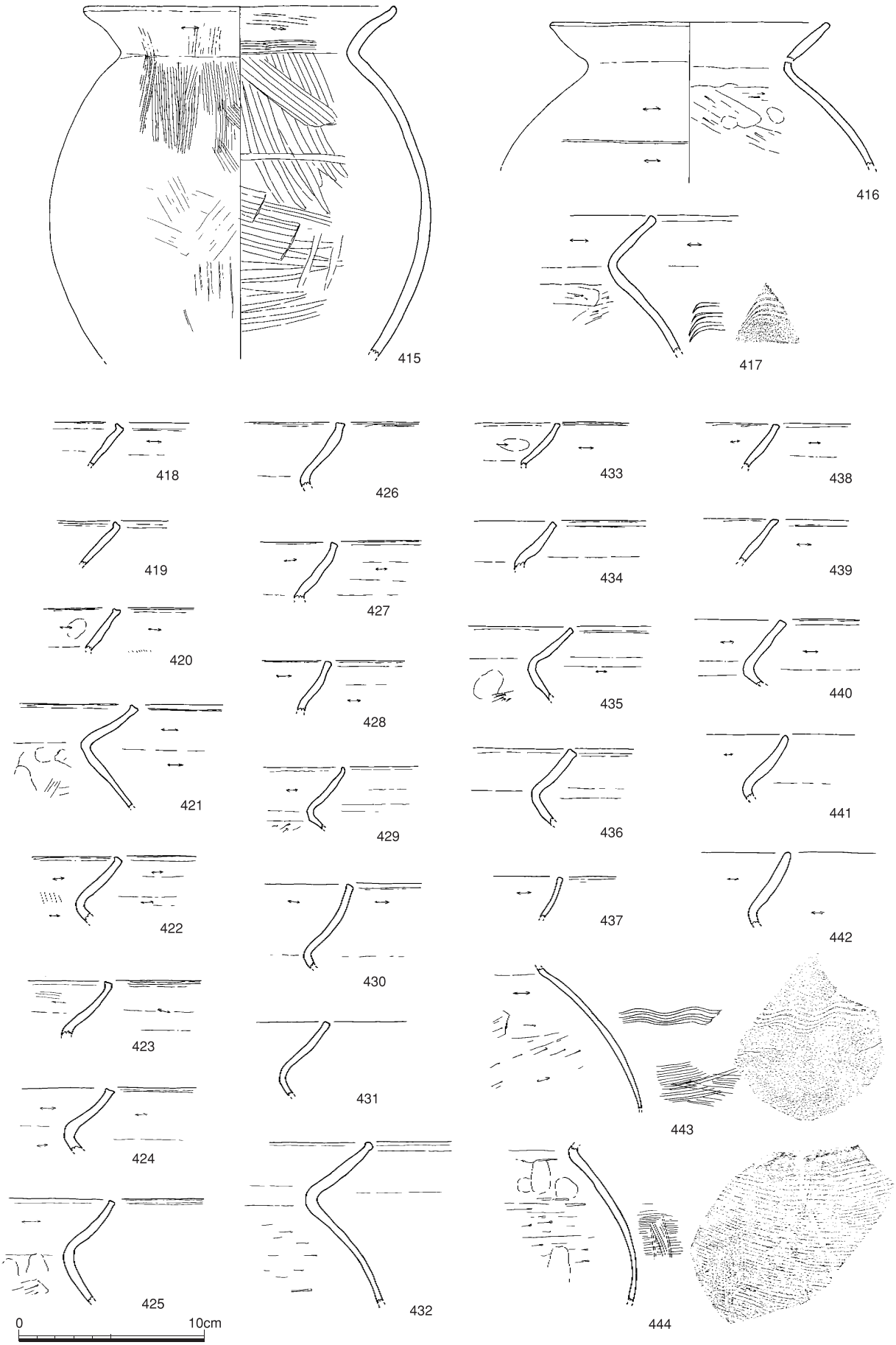


Fig. 48　SC5006 上層出土遺物実測図 5(1/3)

の胴部でナデ調整の肩部に刷毛目工具による波状文が入る。444 は庄内式系で外面全面に平行叩きが残り、わずかに縦方向の擦痕がある。内面上部はナデ、中位以下は横方向の削りである。

445 から 458 は主に壷形で広口のものが多い。445 は胴部が一部欠ける。口縁部外面は横ナデの後に暗文風の研磨を施す。胴部は研磨仕上げで、胴部中位などやや間隙がある部分がある。前調整で胴部上部は斜め方向、下部は縦方向の刷毛目が残る。内面は口縁部横ナデ、胴部は各方向の刷毛目を施し、底に研磨痕が見られる。外面から内面頸部までは化粧土状を施し黄橙色を呈す。内面胴部は淡橙色である。胴部下部と肩部の対峙する箇所に黒斑が見られる。胎土は精良で精製品または半精製品である。446 は長い頸部に横ナデを施す。肩部は刷毛目の後に横ナデ、胴中位には横方向の刷毛目を施す。淡黄色を呈す。1/5 からの復元で径は不確かである。447 は横ナデ調整で斜め方向の刷毛目が残る。448 は器面が荒れる。449 は 1/6 からの反転で外面の刷毛目が明瞭に残り、内面には横方向の刷毛目が残る。やや軟質である。450 は在地系の甕か。器面は全体に荒れ気味である。胴部は荒れて詳細は不明だが、指圧痕と木口または工具端部の痕跡が多く残り砂粒の動きは見られない。刷毛目等の後にナデか。451 内面は刷毛目の後に横ナデを施す。1/6 からの復元。452 は内外面を刷毛目の後に横ナデを施し、内面下部の刷毛目は深い。453 は器面荒れ気味で刷毛目が薄く残る。454 は器壁が薄い。外面は横方向の研磨状で内面は荒れて刷毛目がわずかに残る。精製の長頸壷か。455 は器種不明。内外面刷毛目である。456 は山陰系の二重口縁壺の変容形。口縁部は強い横ナデ、頸部には縦方向、胴部には横方向の刷毛目を施し、灰色かかった淡橙色を呈す。457 は複合口縁壷か。器面が荒れており外面に若干の刷毛目痕が残る。明黄橙色を呈し胎土は細かい。

458 は大形の複合口縁壷で外面口縁部は斜め方向の刷毛目の後に横ナデを施し、4 条の沈線による波状文を描く。頸部は横方向の刷毛目の後に縦方向の刷毛目を施し明瞭に残る。胴部との屈曲部に粘土が剥げた痕跡があり、突帯があったと思われる。内面は横ナデの後に暗文風の研磨、頸部は横刷毛の後に縦刷毛を施す。器壁は厚く胎土は砂粒を含むが細かめである。外面は淡橙色を呈し一部黒変する。内面は赤みのある淡橙色を呈す。口縁部と頸部の粘土帯接合が明瞭で、ここから割れている。

459 から 462 は小型の甕または壷形を呈す。おおむね淡橙色を呈す。459 は小型の甕か。外面は刷毛目で下部はナデである。内面胴部は削りで底に指頭圧痕が見られる。器壁は厚く、黄橙色を呈す。460 は小型の壷形を呈す。外面は縦横の刷毛目、内面は口縁部を横ナデ、胴部上部を削り、下部はナデである。淡橙色を呈し、外面下半部は煤けて暗褐色を呈す。461 は外面の刷毛目で、胴部内面にも刷毛目が残る。器壁は薄い。462 外面は縦方向の刷毛目の後に頸部を横ナデし、胴下半部には削りを施す。内面は口縁部を横ナデと刷毛目、胴部は擦過状の痕跡が残る。胎土の砂粒少ない。463 から 465 は鉢形を呈す。463 は全体に器面が荒れる。口縁部横ナデ、胴部はナデ調整で擦痕が残る。内面は丁寧なナデを施す。胎土は精良である。464 は 1/6 からの復元で、外面縦方向の刷毛目ののちにナデ、内面ナデで削り痕が残る。465 外面は擦痕だが器面を整える意図が見られない。口縁部は手づくね状で波をうつ。内面胴部は削り状の擦過を施す。466、467 は大形の尖底の鉢で底に焼成前の穿孔がある。466 外面は上部を刷毛目、下部は横方向の擦過を施しナデる。内面は細かな刷毛目が明瞭に残り、底付近はナデおよびヘラナデである。橙色を呈し、口縁部の一部に黒斑がある。467 は 1/4 からの復元。調整は 466 と同様で、外部下半はナデで削り痕はわずかである。468 は浅めの鉢で底部は若干平底状を成す。胴部と底部は接合しない。口縁部は横ナデで外面体部はナデ、内面は削りである。淡橙色を呈し、外面は煤けて暗褐色を呈す。469 から 472 は椀、坏状で、淡橙色系を呈す。1/4 前後からの復元。469 は口縁部を丁寧な横ナデ、外面体部はナデで粘土の亀裂が見られる。胎土は精良である。470 は外面ナデ。471 は器面が荒れ気味で研磨の痕跡が残る。明橙色を呈す。472 は口縁部が生きているの

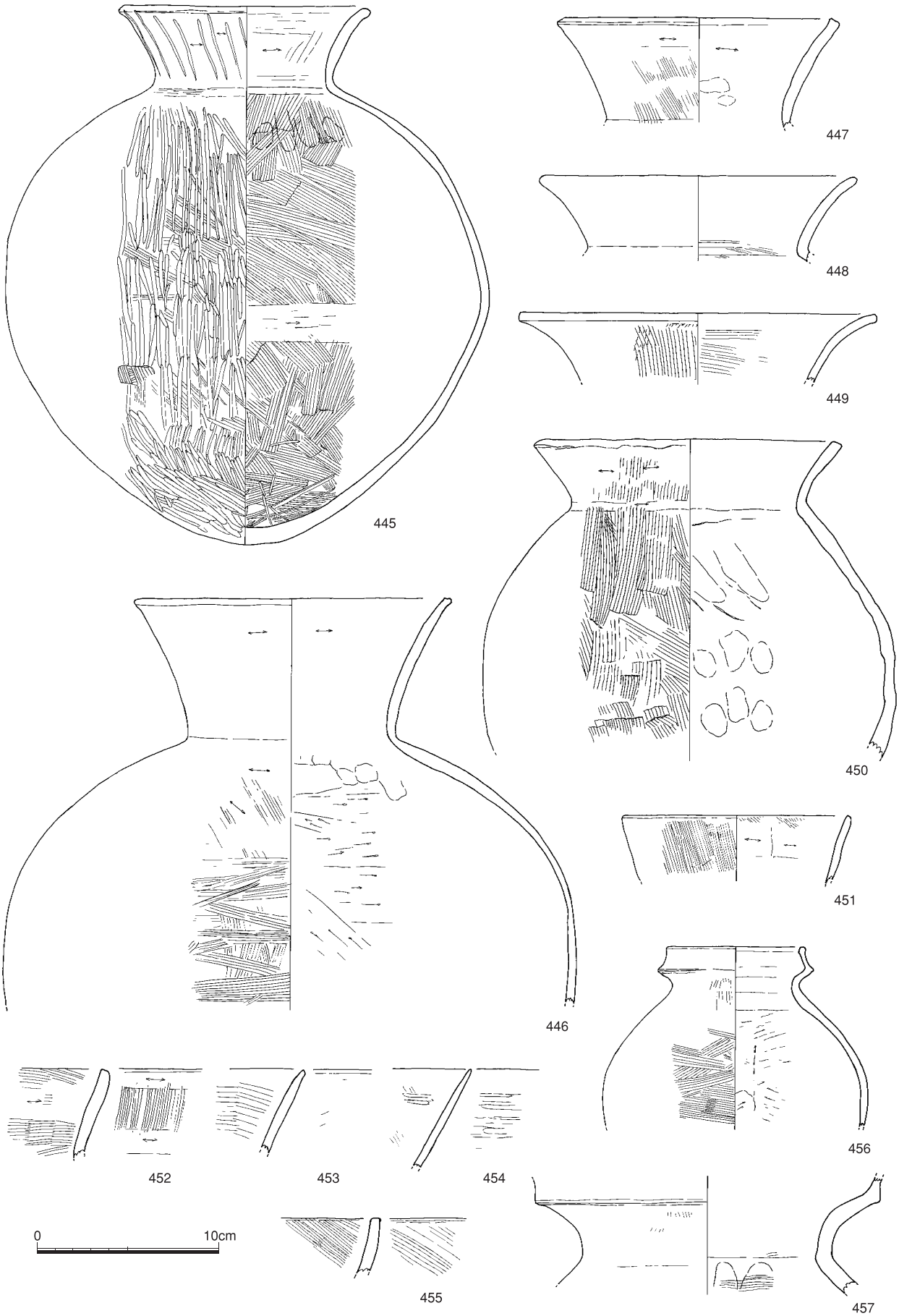


Fig. 49　SC5006 上層出土遺物実測図 6(1/3)

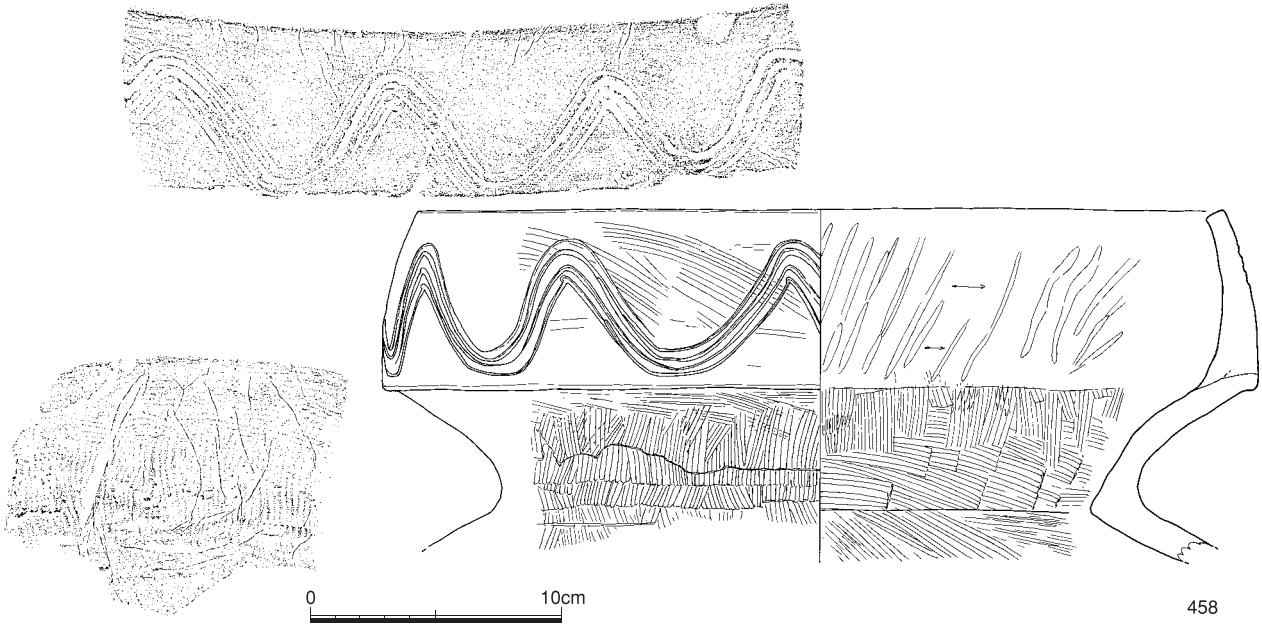


Fig.50　SC5006 上層出土遺物実測図 7(1/3)

か不確実。あまい平底を呈す。器面は荒れ気味で 2 次焼成を受ける。外面下部に小さな粘土の割れが見られる。473 は鉢形で、外面は黒褐色で口縁部に叩き状の痕跡が残り、胴部は削り痕が残る。内面は横方向の刷毛目の後に斜め方向の刷毛目を施す。474 から 477 は鉢、坏状の器形である。474 は黄褐色を呈し、外面はナデ、内面は横方向の刷毛目を施す。475 は外面ナデで粘土の亀裂が入り擦痕を施す。内面は刷毛目の後に丁寧にナデ、暗文状の研磨を施す。淡黄橙色を呈し外面に黒斑がある。器壁は厚め。476 は内外面ナデで、内面に刷毛目の痕跡が残る。477 は手づくね状で指頭圧痕が見られる。暗灰褐色を呈す。478 は外面を細かな刷毛目状、内面は明瞭な刷毛目が見られる。479 は鉢形を呈す。外面は刷毛目の後に口縁部を横ナデし、下部に擦痕と刷毛目を施す。

480 から 496 は高坏である。おおむね橙色を呈し胎土は精良である。480 は坏上部外面を刷毛目の後に横ナデを施し、細い研磨状の線で連続山形の暗文を描く。下部は細かな荒い研磨で屈曲部に細かな刷毛目が残る。内面は刷毛目の後に横ナデを施し研磨で暗文を施す。脚部は外面を縦方向の研磨、裾部は刷毛目を施す。脚部内面はナデで、裾部は細い研磨である。焼成前の穿孔を 3 カ所に施す。以下の在地系の高坏はほぼ同様の形態、調整である。481 は坏部器面が荒れる。脚部外面の研磨は丁寧で内面裾は刷毛目仕上げである。482 は山陰系の形態である。坏部外面にシャープな三角突帯を巡らす。脚部は幅広で短く重心が低い。2 個の穿孔が残り、配置から 3 個と考えられる。坏部外面上部は横ナデの後に丁寧な縦研磨を施し、突帯上端には小口痕が残る。下部は刷毛目の後に細かな研磨を粗に施す。内面は上部を横刷毛目の後に横ナデし、縦方向の研磨を密に施す。下部は研磨である。脚部は刷毛目の後に細い横方向の研磨を粗に施す。裾部は細かな刷毛目である。脚内面は削りの後にナデで裾部は刷毛目、端部は内外面を横ナデである。天井部に径 4 ㎜ほどの刺突を施す。坏部内面と脚部は灰褐色と暗く、坏部外面は淡灰色を呈し、一部橙色の化粧土状の器面が残る。483 は坏と脚部は接合しないが同一個体と思われる。器面の荒れが著しく坏内面の刷毛目、脚の研磨が観察できる。脚部の穿孔は 3 カ所である。484 から 489 は在地系の坏部である。490 は在地系で、坏部の屈曲がなく脚部との境もなだらか。外面は横方向の細かな刷毛目の後に脚部へ続く暗文風研磨を施す。内面の暗文風研磨はだれている。491、492 も在地系で脚部外面は研磨、裾部は内外面刷毛目である。

493 から 496、498 は高坏の脚部である。493 は外面縦研磨で器面は荒れる。3 ヶ所と考えられる穿孔のうち 2 つが残る。494、496 は外面刷毛目。495 外面の研磨は細かく、若干煤ける。498 は 1/6 弱

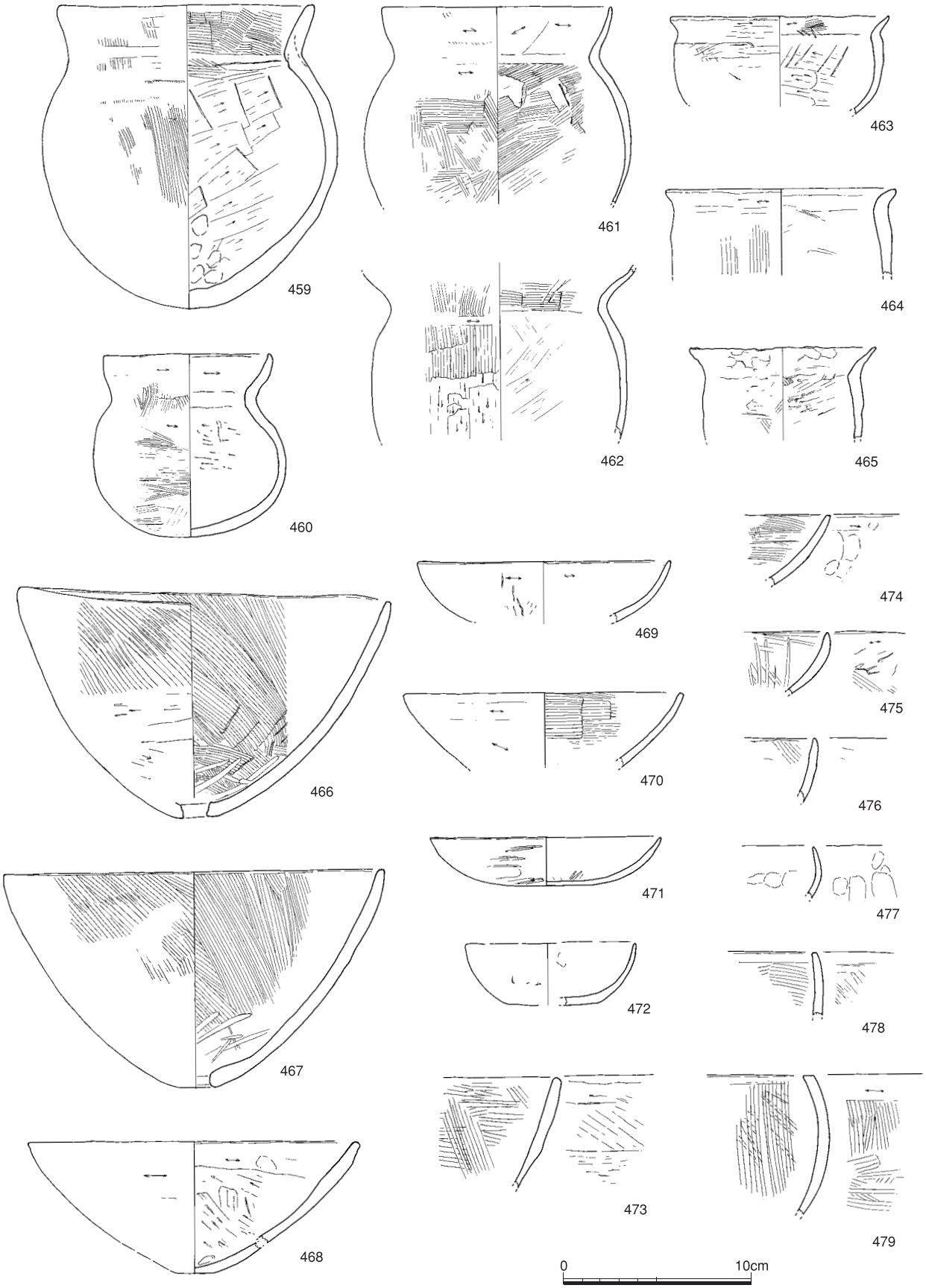


Fig. 51　SC5006 上層出土遺物実測図 8(1/3)

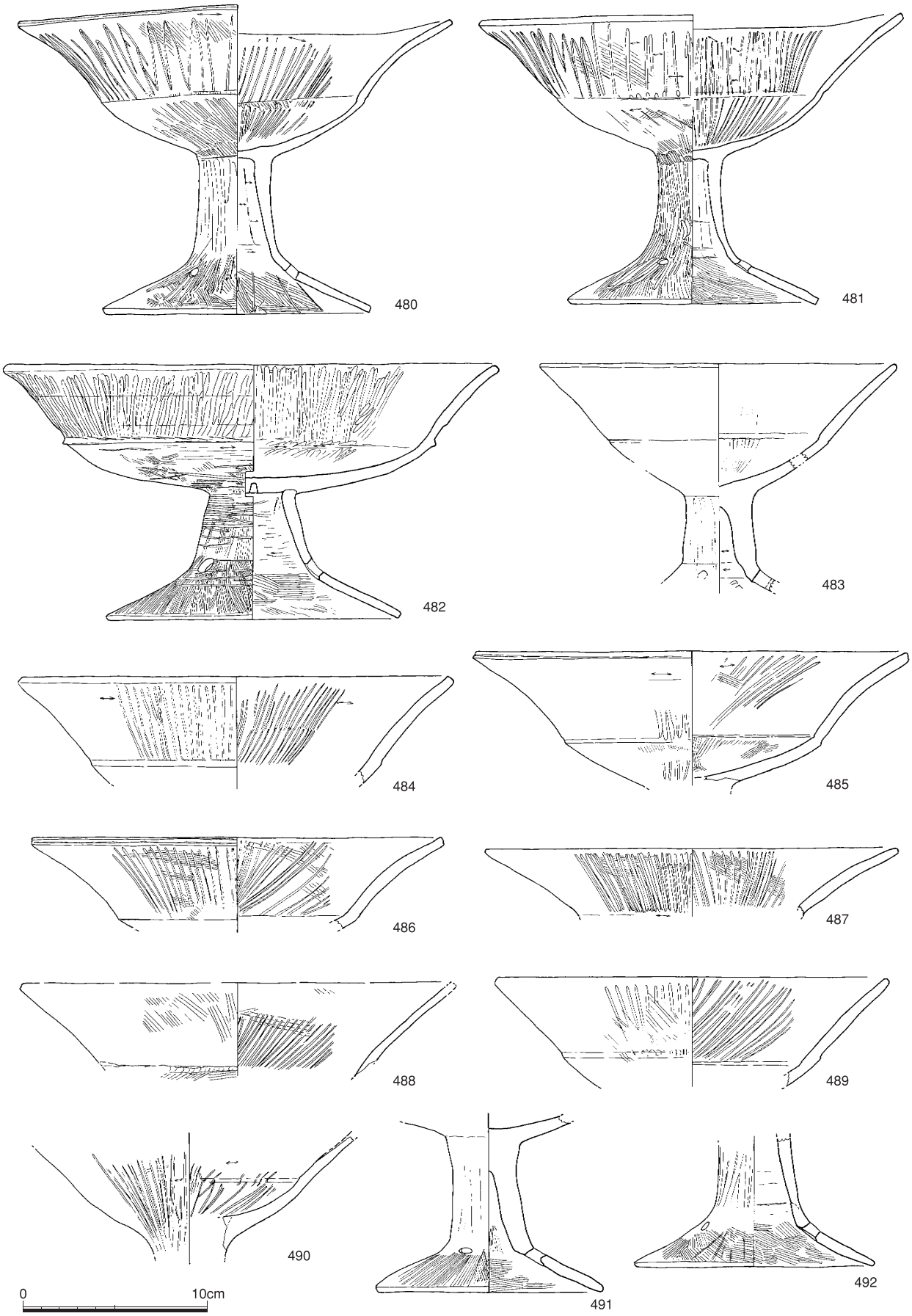


Fig. 52　SC5006 上層出土遺物実測図 9(1/3)

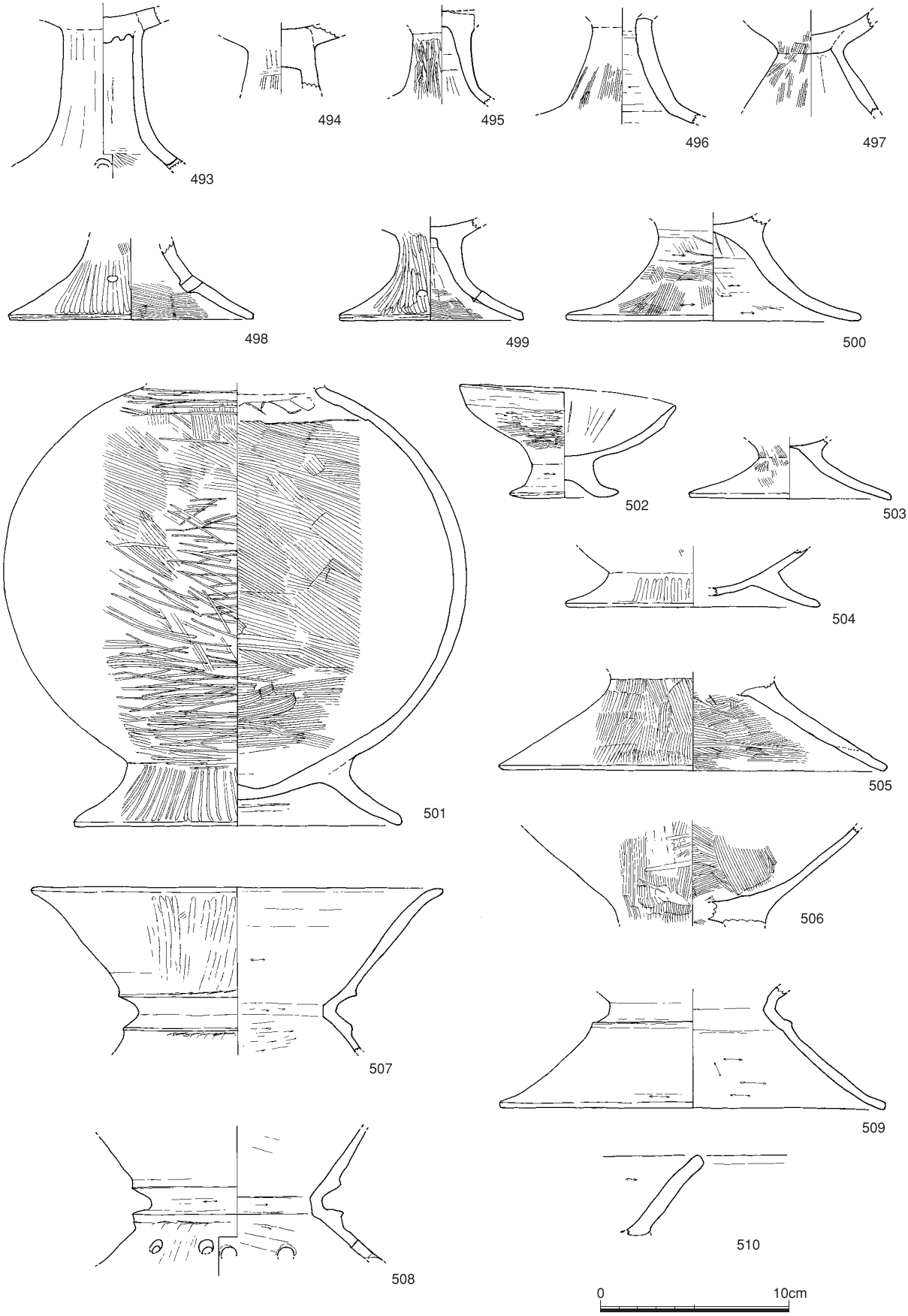


Fig. 53　SC5006 上層出土遺物実測図 10(1/3)

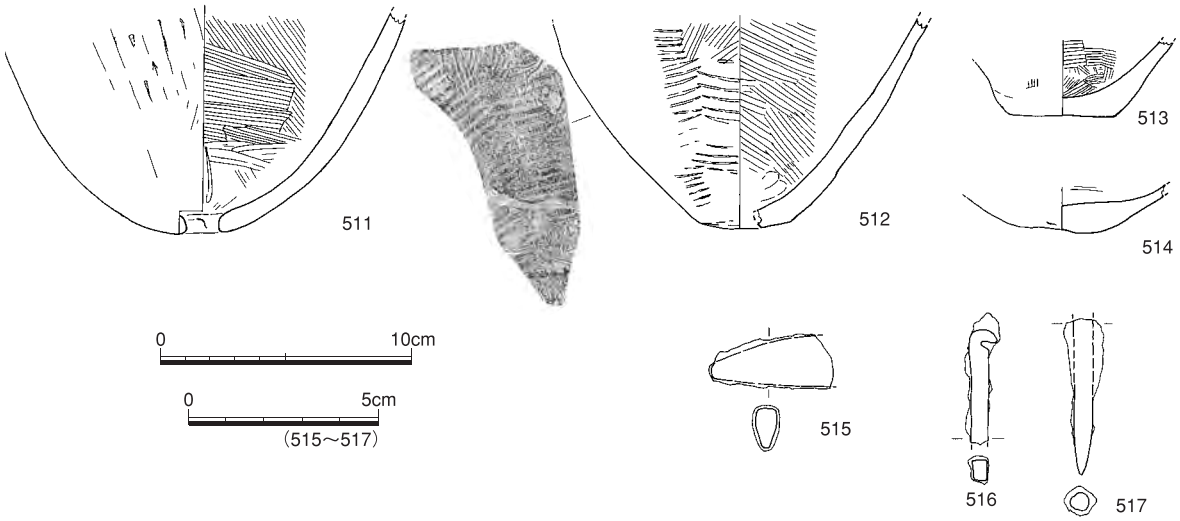


Fig.54　SC5006 上層出土遺物実測図 11(1/3)

が残存し、1 箇所の穿孔が確認できる。497、499、500、503 は椀、鉢等の脚と考えられる。497 は外面刷毛目調整、499 は対峙する 2 カ所に焼成前の穿孔を施す。500 は外面刷毛目の後に横ナデ、内面は横ナデである。502 は口縁部を横ナデ、坏部外面は細かな研磨、内面はナデで擦痕が残る。灰褐色を呈し外面に黒斑が見られる。503 は荒れ気味で外面の刷毛目が見られる。501 は台付直口壷で、半島系の影響を受ける。外面上半は刷毛目、下半は削りをそれぞれ施し、全体に細かな研磨を行う。壷上部の刷毛目は消えずに全面に残る。淡黄橙色から橙色を呈し、器面は滑らかである。内面は全面に刷毛目で底はナデている。頸部下は刷毛目の後に粘土を重ねナデる。裾部は内外面を横ナデし外面には暗文風の研磨を施す。胎土は細かく精製の部類である。504 も同様の器種と考えられる。器面は荒れ、脚裾部の研磨は見られる。505 は内外面に刷毛目を明瞭に残し、明茶褐色を呈す。胎土は均一だが細かくはない。507 から 509 は鼓形器台である。507 上部外面は擦過の後に縦方向の研磨、内面は横方向のナデである。頸部は横ナデで、下部は外面上端に木口痕が残りナデ、内面は横方向の削りである。外面と内面上部はスリップをかけたように橙色を呈す。508 は内外面ナデ調整で黄白色を呈す。2 ㎝ほどの間隔の穿孔 2 つ一組を 3 方に施す。509 は器面が荒れナデが残る。黄白色を呈す。510 は 2 重口縁壷の口縁部か。内外面に丁寧な横ナデを施し、胎土が精良な精製品で橙白色を呈す。

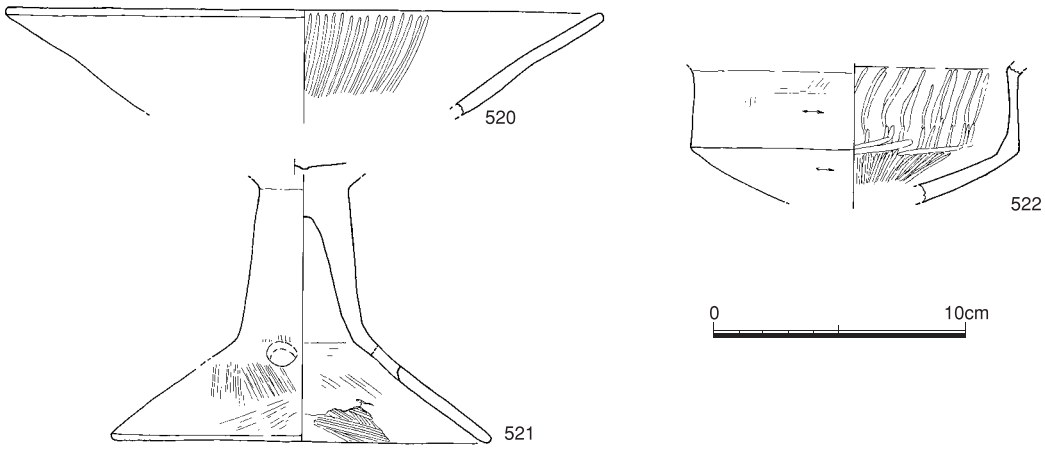


Fig.55　SC5007 出土遺物実測図 (1/3)

511は焼成前の穿孔を底部に施す。底部は外面ナデ、内面は荒いヘラナデ状で淡橙色を呈す。512は外面に平行叩き、内面に刷毛目を施し淡橙色を呈す。底部の大部分を欠く。513外面は丁寧なナデで若干の刷毛目が残り、内面は刷毛目。514は胴部薄手で底のみ厚い。ナデで淡橙色を呈す。

515から517は鉄製品である。515は断面下部がすぼまり刃状をなす。錆化が進み、X線撮影を行ったが、器形ははっきりしない。516は頭が鍵状を呈し、断面方形の釘と思われる。中世遺構の混じり込みか。517は断面円形でやはり釘か。このほかに、土師皿が小袋1袋、石鍋片、陶器片、弥生土器が少量とパンケース1箱の縄文土器が出土している。

SC5007(Fig.56)

11-1区でSC5006に切られ、SC5008を切る。平面長方形で280×295(＋α)cm、深さは10cmと浅い。床面には北東側を中心に鉄分、有機物が沈着した硬化面が見られる。支柱穴、その他の施設も確認できなかった。中央に板状の石が床面状に正置されている。台石等使用した可能性があるが、取り上げていない。覆土は灰褐色粘質土で遺物は少なく、床面より5cmほど浮いて、Fig.56のような分布で土器が出土した。出土土器はⅠb期からⅡa期のものである。

出土遺物 (Fig.55) 520、521は高坏で同一個体の可能性がある。いずれも器面が荒れ、淡橙色を呈す。坏部は外面の刷毛、内面の研磨がわずかに見える。脚部は裾部内外面の刷毛目が残る。穿孔が確認できるが一部のみで数は不明である。胎土は精良である。522は有段高坏で接合しない1/3ほどの破片2つがある。外面は段部を横ナデで上端に口縁部の調整と思われる研磨工具痕が見られる。下部はナデである。内面は段部を横方向の研磨の後に暗文風に研磨を施す。下部は刷毛目、ナデの後に放射状に研磨を施す。淡橙色を呈し、胎土が細かい。このほかに縄文土器が少量出土している。

SC5008 (Fig.56)

SC5007に切られる。平面方形で322×332cmを測り、深さは最大で10cmと浅く、南東側は壁を確認できていない。南壁に沿って幅1mほどのベッド状遺構が東から2mみられる。作り出し成形で、高さは5cmほどである。床面の大部分には鉄分、有機質の沈着した硬化面が薄く広がり、北側は張り床を行っている。また、南西隅の1m四方にはベッドも硬化面も広がらない。ベッドを掘りすぎた可能性もある。支柱穴等の施設は検出できなかった。覆土は灰褐色粘質土である。遺物は床面直上からまとまって出土したものがある。在地系のものが目立ち、ⅡA期のものと考えられる。

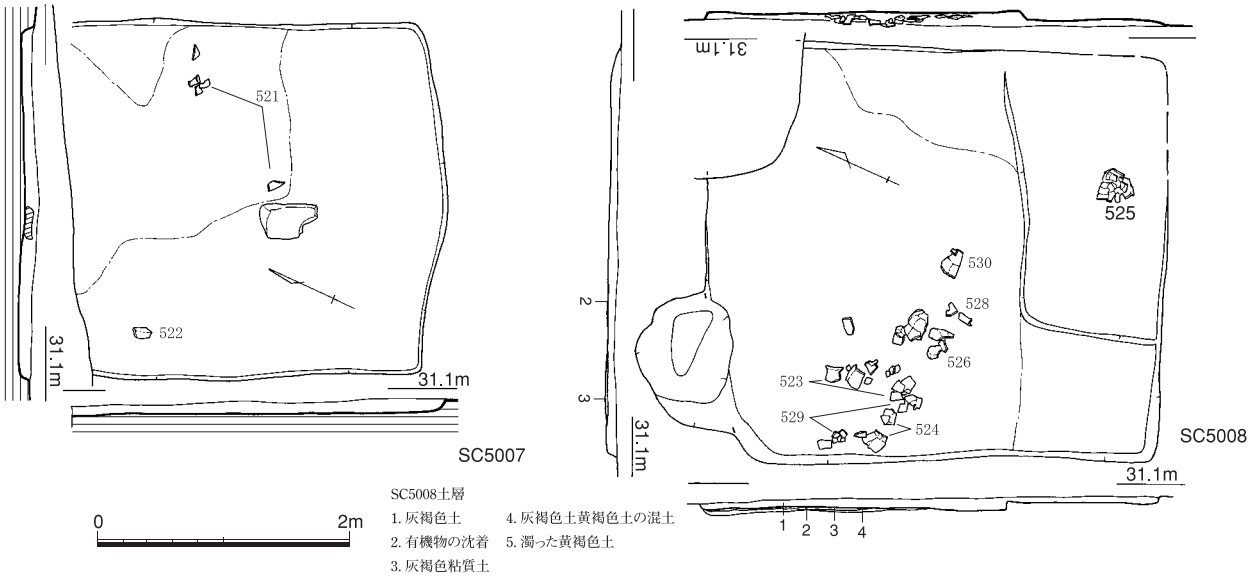


Fig.56 SC5007、SC5008実測図(1/60)

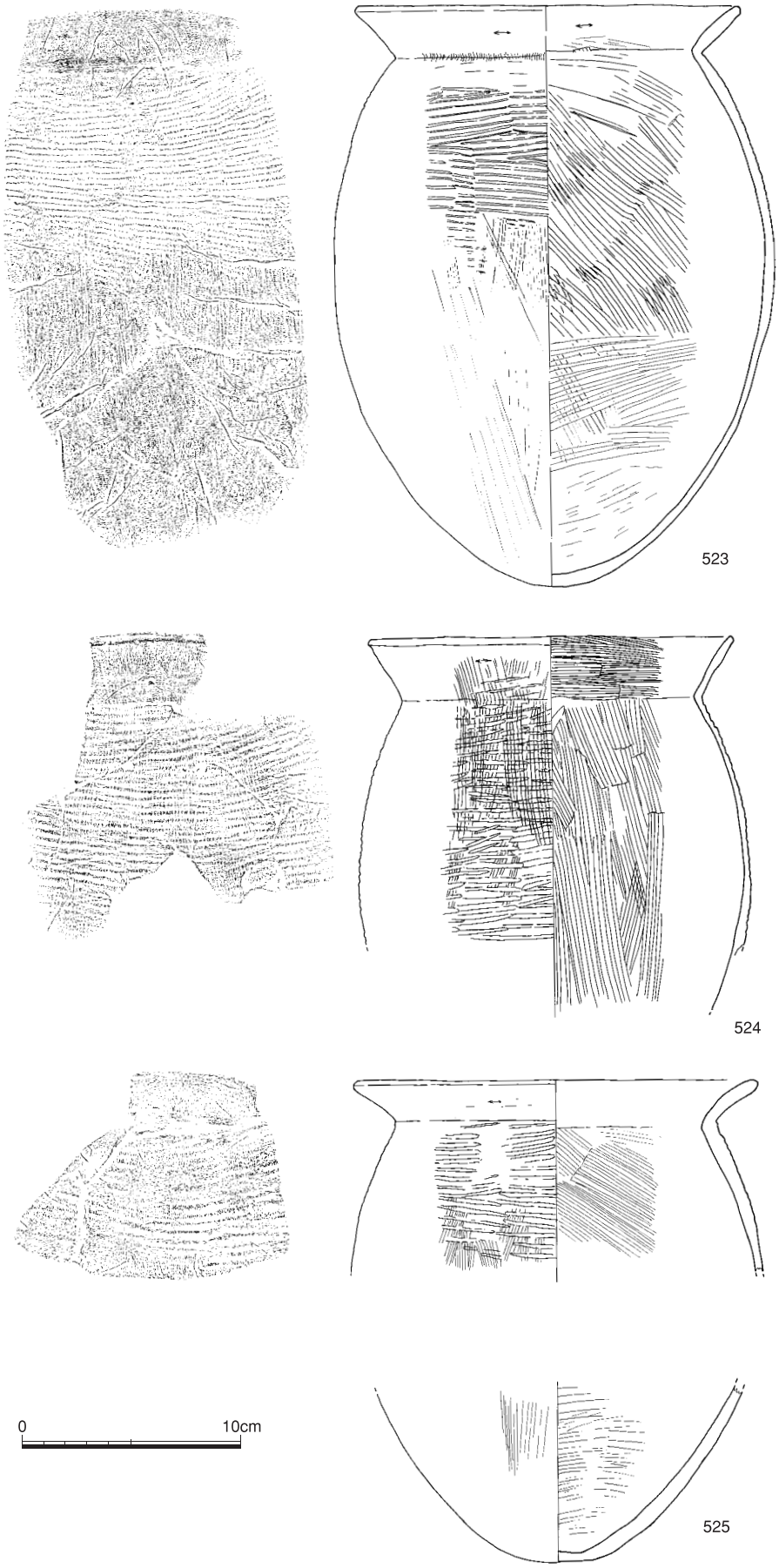


Fig. 57　SC5008 出土遺物実測図 1(1/3)

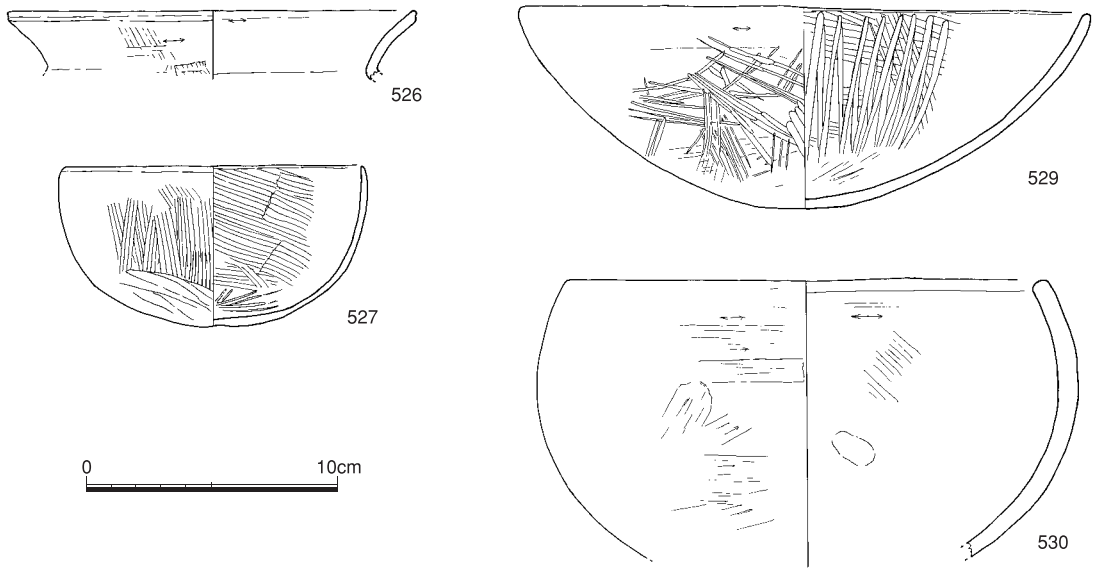


Fig.58　SC5008 出土遺物実測図 2(1/3)

出土遺物（Fig.57、58）　523から525は在地系の甕である。523は外面は口縁部から肩部を横ナデし、頸部に刷毛目が残る。胴部上部は平行叩きで中位以下は細かな刷毛目状の擦痕が残る。全体に煤が付着し下半ほど多い。内面は刷毛目で口縁部は横ナデ、底部はナデを施す。中位以下は灰褐色、底は暗褐色を呈す。524は叩きが外面下部まで残り、上から刷毛目を施す。下部は2次調整で桃色をおび、口縁部には若干の炭化物が付着する。内面は刷毛目が明瞭に残る。525は東側のベッド上でまとまって出土した。胴部中位が不足し上部と底部が接合しないが同一個体と考えられる。外面中位以下は若干煤ける。内面は荒れ気味である。

526は五様式系の甕か。器面は荒れ気味で、外面に刷毛目の後に横ナデが見られる。527の口径は不確かである。外面は刷毛目の後に口縁部を横ナデ、底部付近にはヘラ削りの擦過を施す。内面は刷毛目で底は研磨状である。器壁は薄く黄茶褐色を呈す。529は胴部の一部が欠ける。外面は個縁部横ナデの他は条痕状の深いヘラナデまたは削りを施し、内面は刷毛目の後に暗文状の研磨である。外面に一カ所黒斑が見られる。530は器面荒れ気味で、外面横方の削りの後にナデ、内面は刷毛目の後に横ナデを施す。黄褐色を呈し、上部に黒斑をもつ。他に土師器の胴部が大袋に1袋出土している。

SC5017（Fig.60）

北壁際で方形プランの一部を検出した。一辺260㎝以上で、深さ55㎝を測る。覆土は淡灰褐色粘質土で検出が困難であった。床面の西側が高く、最下層の3層はベッドを掘り過ぎた可能性がある。支柱穴等の施設は検出できなかった。遺物は少ない。

出土遺物（Fig.59）　531は35㎝浮いた状態で正立した状態で出土した甕で、最大径部より下は残り、上は一部のみである。外面上部は刷毛目で中位は深いヘラナデ状、下部はナデ調整。内面は刷毛目の後にナデで、下部の刷毛目は目が細かく

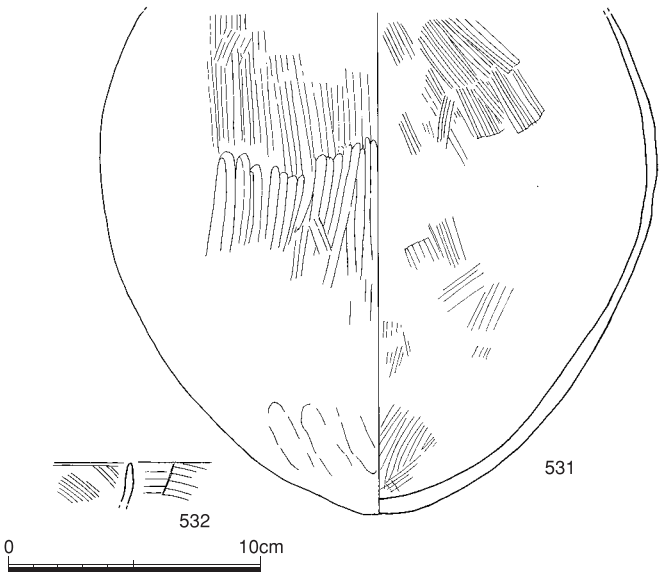


Fig.59　SC5017 出土遺物実測図（1/3）

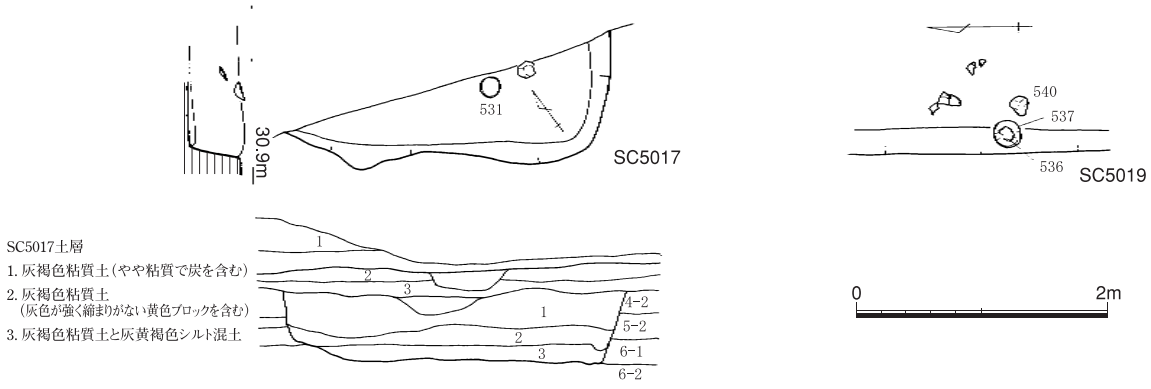


Fig. 60　SC5017、SC5019 実測図（1/60）

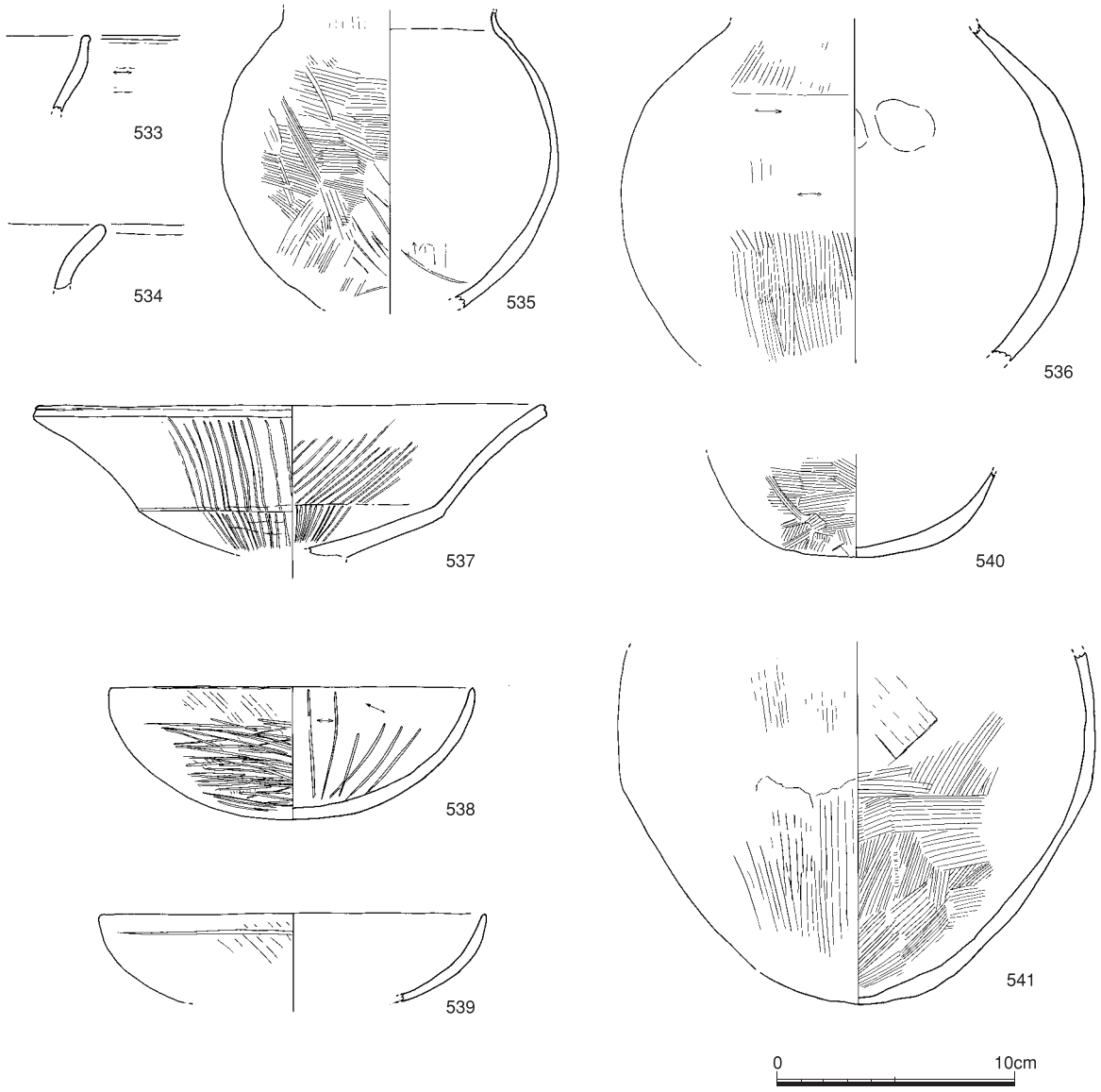


Fig. 61　SC5019 出土遺物実測図（1/3）

上部と工具が異なる。煤により暗褐色を呈し、地は淡黄色で薄く桃色かかった部分がある。532 は鉢で外面は横ナデまたは擦過、内面は刷毛目である。器壁が薄い。赤茶色を呈し、胎土は細かめである。

SC5019（Fig.60）

住居の番号を付したがプランを確認できていない。11-1 区北西際で縄文時代包含層の掘削中に古墳時代の遺物がややまとまって出土した。その直下に有機物が沈着した面があり、床面と考えた。ごく浅い住居を検出できなかったのではないかと考え、ここで扱っている。遺物から時期はⅡｂ期である。

出土遺物（Fig.61）533 は布留式系の甕の口縁部で横ナデを施す。534 は器面が荒れる。535 は壷。外面刷毛目で、下部は削りの後ナデている。内面は浅く丁寧な横方向の擦過で下部に削り痕が残る。橙色から淡橙色を呈す。536 は壷で外面刷毛目、中位をナデ、内面はナデである。外面淡橙色、内面乳白色を呈す。器壁が厚い。537 は内外面とも丁寧なナデの後に研磨を施す。脚部との接合面には刺突痕が残る。538、539 は椀状を呈す。538 は口縁部外面を刷毛目の後にナデ、他は細かな研磨を施す。内面は横ナデで、細く浅い暗文風の線を不規則に放射状に描く。外面は明橙色を呈し光沢があり、下部に黒斑が見られる。539 は器面は荒れ、刷毛目と横ナデが確認出来る。540 は鉢等の底部か。外面刷毛目の後にナデ、粘土の細かな割れがある。内面は荒れる。541 は壺か。外面中位は刷毛目の後ナデで、下部はヘラナデ状である。内面上部は擦過、下部は刷毛目で底部と、胴部の上部が一部残る。

SC5084（Fig.62）

11-2 区北側で、中世遺構面を重機で下げた後に検出した。方形プランの竪穴で、366 × 440 ㎝、深さ 37 ㎝を測る。南壁東よりには焼土が 65 × 36 ㎝の範囲で広がる。カマド等の施設があったのか確認できていない。覆土は暗褐色粘質土で下部に礫を含む。柱穴等の施設は検出出来なかった。遺物は少なく覆土からの出土である。時期は遺物からⅡｃ期と考えられる。

出土遺物（Fig.63）542 は布留式系の甕で淡橙色を呈す。543 は在地系の甕。内外面刷毛目で外面口縁部の荒れが著しい。2 次焼成のためか外面は暗橙色を呈す。544 は椀状で、外面は削り後ナデ、

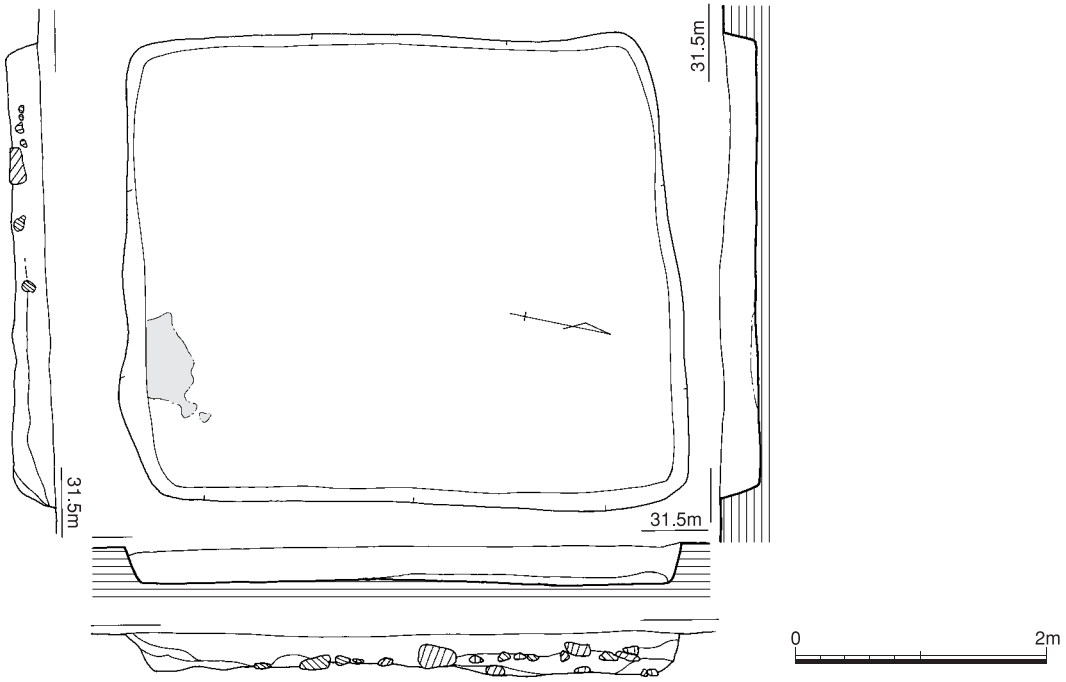


Fig.62　SC5084 実測図（1/60）

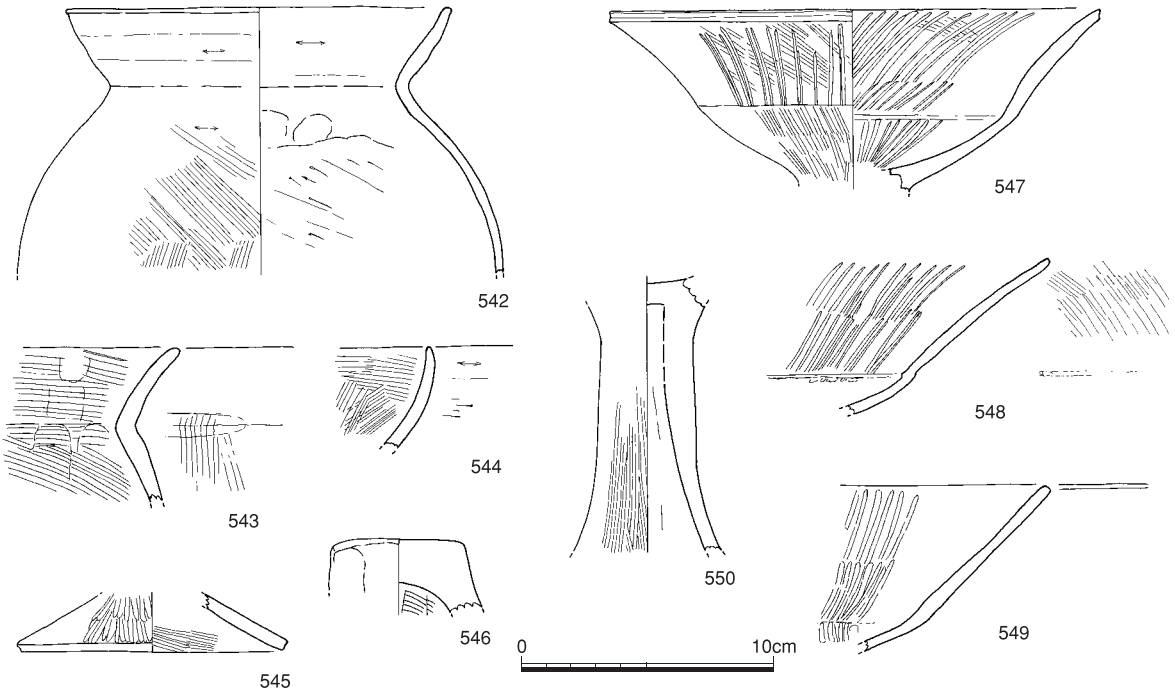


Fig.63　SC5084 出土遺物実測図 (1/3)

内面は刷毛目で下部の縦方向のものは目が細かい。橙白色を呈す。545 は鉢等の脚か。外面研磨、内面刷毛目で、赤褐色を呈し胎土は精良である。546 は支脚で胎土は細かい。淡橙色を呈す。547 から 550 は高坏である。547 は屈曲部が曖昧である。調整は刷毛目の後に研磨を施す。外面下部の刷毛目は顕著に残る。茶褐色を呈し胎土は細かい。548 は器壁が薄く、外面明橙色を呈す。549 は外面器面荒れ、刷毛目と研磨がわずかに残る。屈曲部が曖昧である。550 は砂粒を少量含むが胎土は精良である。

SC5085 (Fig.64)

11-2 区東壁沿いに一部を検出した。方形プランと考えられ、一辺 530 ㎝、深さは 70 ㎝を測る。床では北東隅と南壁際で幅 18 ㎝、深さ 12 ㎝ほどの壁溝を検出した。中央南よりにも東西方向の浅いくぼみ状の溝が見られる。検出した範囲では支柱穴は確認出来ていない。覆土は暗茶褐色粘質土である。

遺物は 552、553 が床近くで出土し、北壁際では浮いた状態でまとまって出土した箇所がある。遺

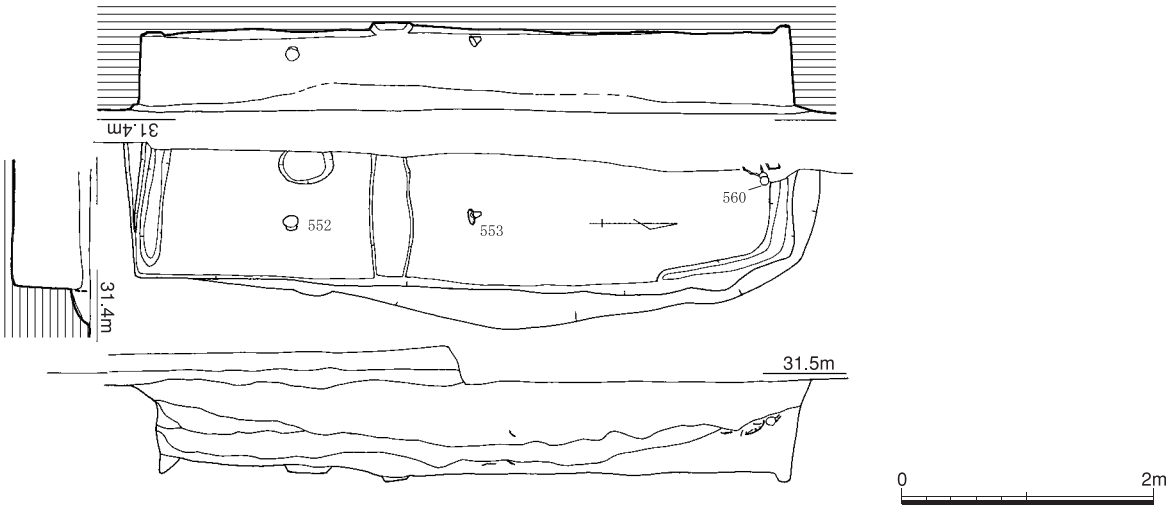


Fig.64　SC5085 実測図 (1/60)

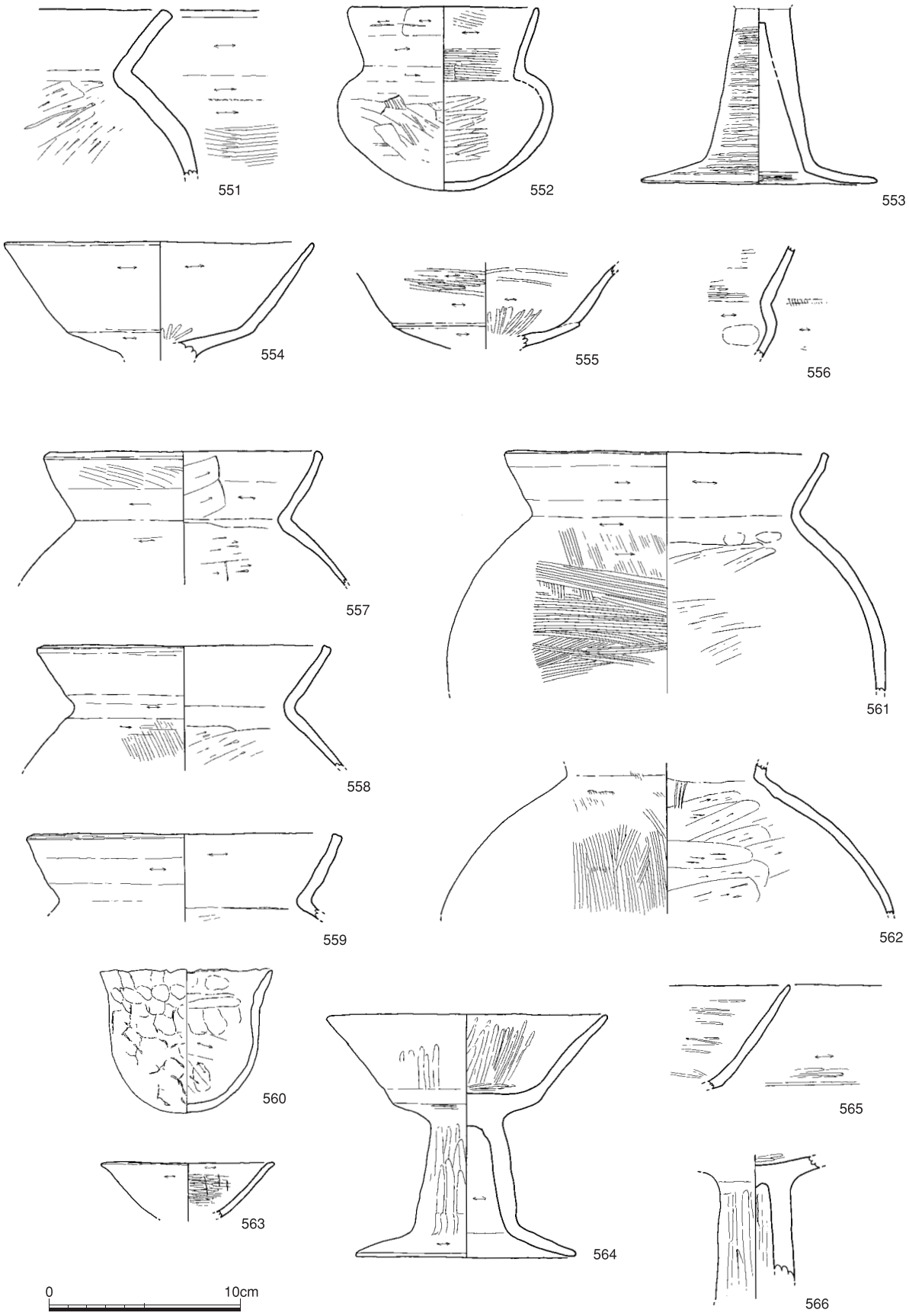


Fig. 65　SC5085 出土遺物実測図 (1/3)

物から、ⅢＢ期と考えられる。

出土遺物（Fig.65）556までは床より20㎝までの覆土下部からの出土、以降は上部からの出土である。551は器壁が厚い「く」の字口縁甕で、調整は胴部外面刷毛目、内面削りと布留式的である。552は床より10㎝ほど浮いて出土した小型壺の完形品である。外面は横ナデと胴部は削り状の擦過の後に研磨を施し器面は滑らかで、内面は口縁部刷毛目の後に横ナデ、胴部は細かい研磨またはヘラナデ状である。外面の広い範囲に黒斑があり橙色から淡橙色を呈す。一部器壁が薄く剥げる。553から555は布留式系の高坏である。553は床面出土。外面は縦方向の整形の後、横方に細かな研磨で調整し、器面に光沢がある。裾部内面は刷毛目である。胎土は精良で、淡橙色を呈す。554は横方向のやや雑なナデで仕上げる。内面底に研磨が見られる。555は外面に研磨が見られる。556は小型丸底壺で、外面屈曲部と内面上部に刷毛目が見られ、他はナデである。以下は上層出土である。557から559、561は布留式系の甕である。561は内面を削りの後に擦過を施し、外面がやや煤ける。560は手づくねの完形品である。内外面に指圧痕が残り、外面には粘土の割れが多い。562は壺の胴部で1/4からの復元で径、傾きがやや不確かである。外面の刷毛目、内面の削りが残る。接合しない下部破片もある。563は小型の坏状をなし、外面横ナデ、内面はヘラナデ状で小口状の痕跡が残る。明橙色で外面に黒斑がある。564は布留式系の高坏が粗雑化したものである。坏部は内外面ともに横ナデの後に縦研磨で、脚部は削りの後に縦研磨で、屈曲部が強い横ナデのためくぼむ。裾部は横ナデを施す。淡橙色を呈し、胎土は細かく焼きが堅い。565は外面に横方向の研磨が見られ、内面は刷毛目の後、ナデ、研磨を施す。566は外面には不明瞭な縦研磨である。ＩＡ期からⅡＢ期と考えられる。

（２）土抗

SK5022（Fig.66）

11-3区南側のSD5009に切られる不整楕円形の土抗で甕と大形壺が接して出土した。高さを記録しておらず、土抗の深さ、遺物の位置は不明である。ＩＡまたはⅡＢ期と考えられる。

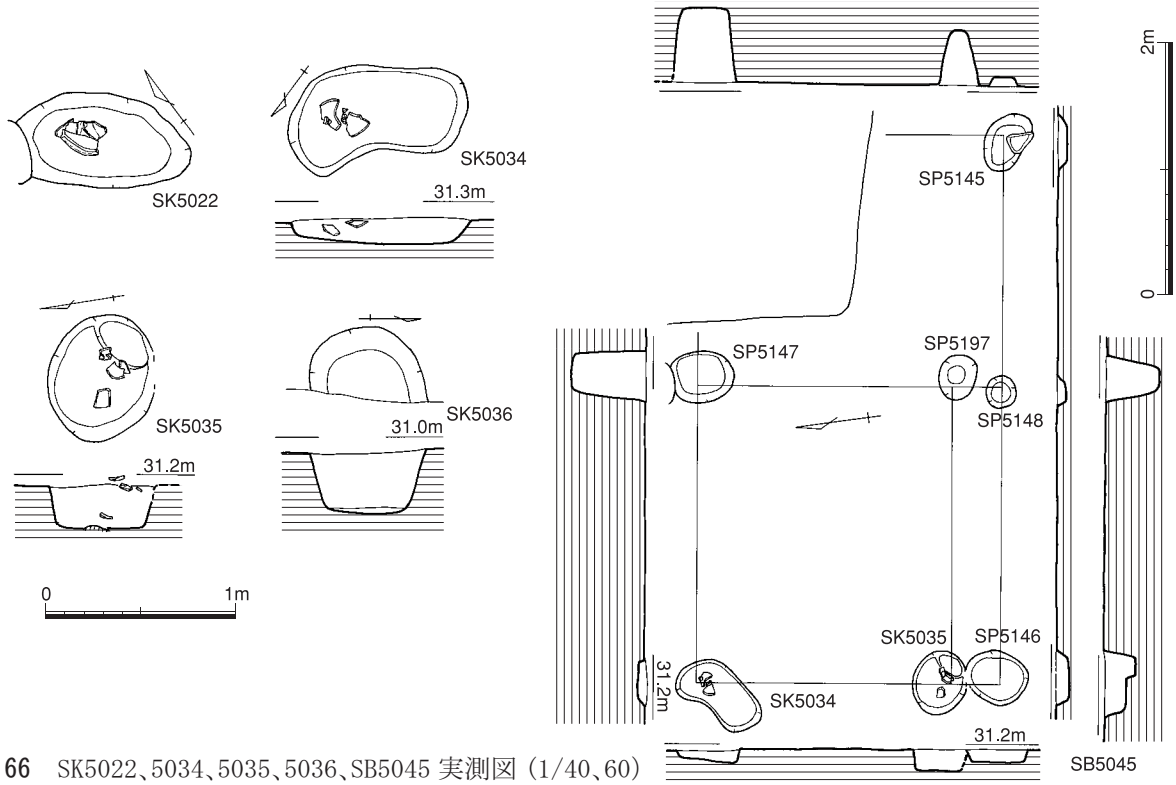


Fig.66　SK5022、5034、5035、5036、SB5045実測図（1/40、60）

出土遺物（Fig.67） 567は在地系の甕で1/2が残る。外面は口縁部に叩きの痕跡が残り、胴部上部は深い刷毛目、中位には荒いヘラナデ状の調整を密に施す。内面は刷毛目が明瞭に残る。胴部の刷毛目は上部のものは幅が広く下部は狭い。外面は炭化物が吸着し黒褐色を呈し、内面は明橙色を呈す。568は在地系の複合口縁壺で、シャープな口縁屈曲部に浅い刻み目を密に施す。外面口縁部は刷毛目の後に強い横ナデを施し、頸部は深い刷毛目、内面は刷毛目を施す。口縁部内面に粘土接合痕がある。外面は淡黄橙色、内面は橙色を呈す。569は568の胴部と考えられる。外面上部に叩きが残り、下部はヘラ削りを施す。内面は上部に刷毛目、下部は擦過が見られる。

SK5034（Fig.66）

11-1区中央のSC5008南で検出した不整形土抗で平面86×44㎝、深さ12㎝を測る。北寄りに土師器の大形甕の厚手の破片2点と黒曜石2点が出土した。甕の内外面に深い刷毛目が残る。

SK5035（Fig.66）

11-1区中央で検出した円形土抗で径64㎝、深さ20㎝を測る。SK5034と同様の大型甕片も出土している。

出土遺物（Fig.67） 571は椀状の器形で口縁部外面を横ナデ、底を擦過、内面擦過で器面は整う。淡黄橙色を呈す。

SK5036（Fig.66）

11-1区北側西壁際で検出したピット状の土抗である。570が出土した。この東側の中世のピットの壁、底で土師器が密に見られる部分があった。さらに遺構が広がるものと考えられる。

出土遺物（Fig.67） 570は布留式系の甕で外面は胴部を刷毛目で肩部は横ナデである。内面には削り調整を施し、屈曲部はナデである。

（３）ピット（Fig.66）

古墳時代のものと特定できるピットは少ない。SC5008の南に1×1軒、もしくは1×2軒の配置に並ぶピットがある。掘立柱建物を想定しSB5045とした。

1×1間とした場合、SK5034、SP5147とSK5035、SP5197。またはSK5034、SP5147とSP5146、SP5148の組み合わせが考えられる。1×2間は北東の柱穴がSC5008に切られ失われていると仮定してのことである。ピットの深さは、SP5147、5197は深めであるが、他は深さ10㎝程と浅い。いずれの場合も出土遺物は少なく、古墳時代におさまる。1×1間の前者が可能性が高いと思われる。

（４）その他の遺物（Fig.68）

ここでは遺構から遊離した遺物で器形が復元できるもの、遺構で出土していない器種等の遺物を取り上げる。出土遺構等を図の番号の横に記した。

572は在地系の甕で外面は平行叩きの後にナデを施す。内面は胴部に刷毛目が明瞭に残る。1/6弱からの復元で橙茶色を呈す。573は台付きの甕で終末期までのものである。内外面に刷毛目が明瞭で、橙茶色を呈す。574は甕で外面の刷毛目が羽状文風を呈し、内面は刷毛目を施す。淡橙色を呈し胎土は細かい。575は壷の口縁部で口唇部をつまみあげる。灰黄白色を呈す。1/6強からの復元である。576は高坏で器面は荒れる。坏部は内外面に細かな研磨を施すが疎らで擦痕、刷毛目が残る。脚部は外面を刷毛目の後に研磨、内面は削りである。淡橙色を呈す。577は口縁部横ナデで、下部外面は荒れ、内面はヘラナデ状で丁寧に仕上がる。茶色を呈す。578は瓦質の破片で、口縁部か破面か不明である。器面は荒れ、内面は回転ナデ調整で、外面は不明である。淡灰色を呈す。579有段高坏で器面は荒れ、内面に刷毛目が見られる。580、581はで同一個体と考えられるが接合しない。外面は刷毛目の後に研磨を施し、内面は刷毛目と暗文風の研磨痕が見られ、下端に削りが残る。胎土は細かく精良で、外

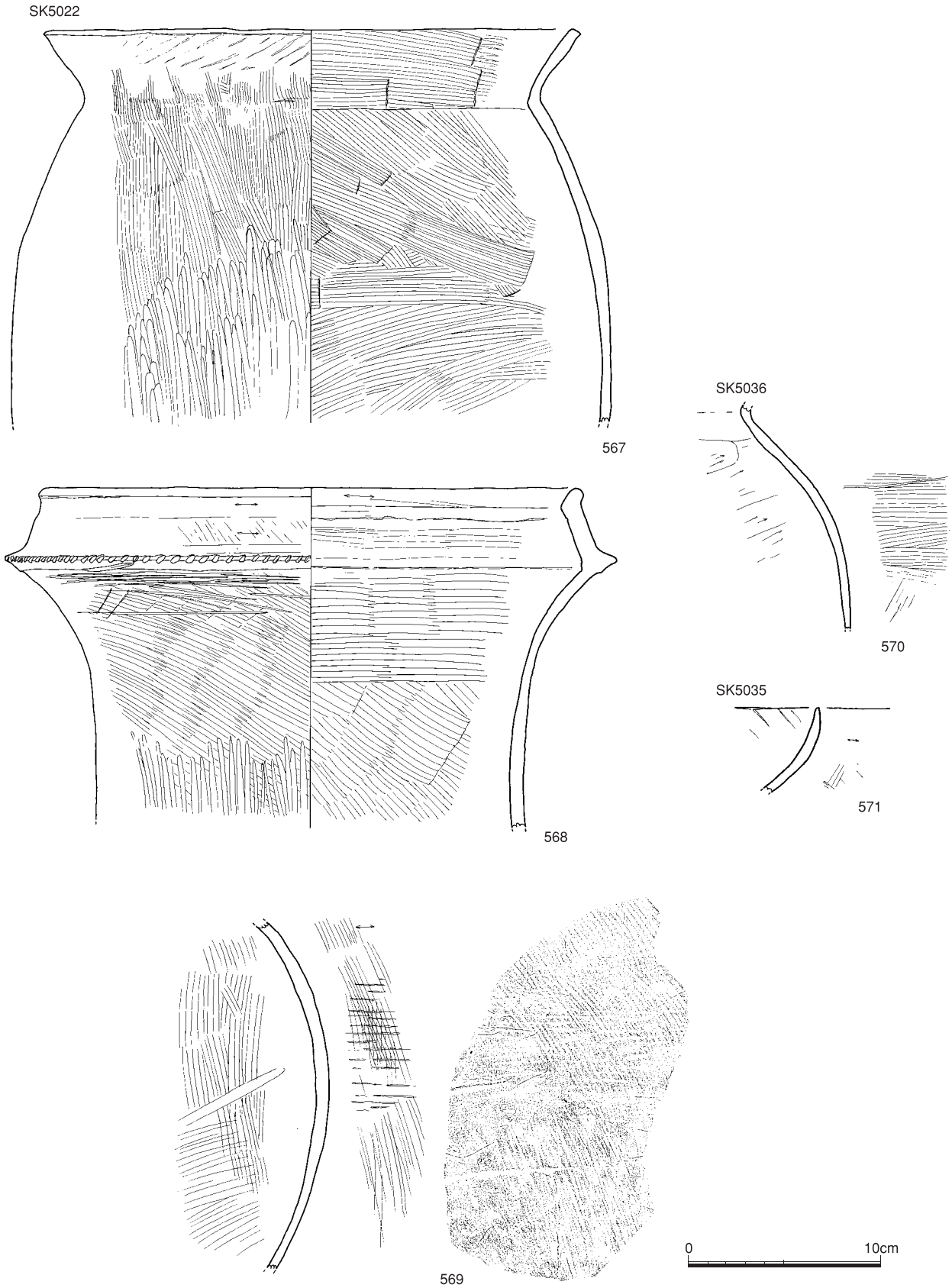


Fig. 67　SK5022、5035、5036 出土遺物実測図 (1/3)

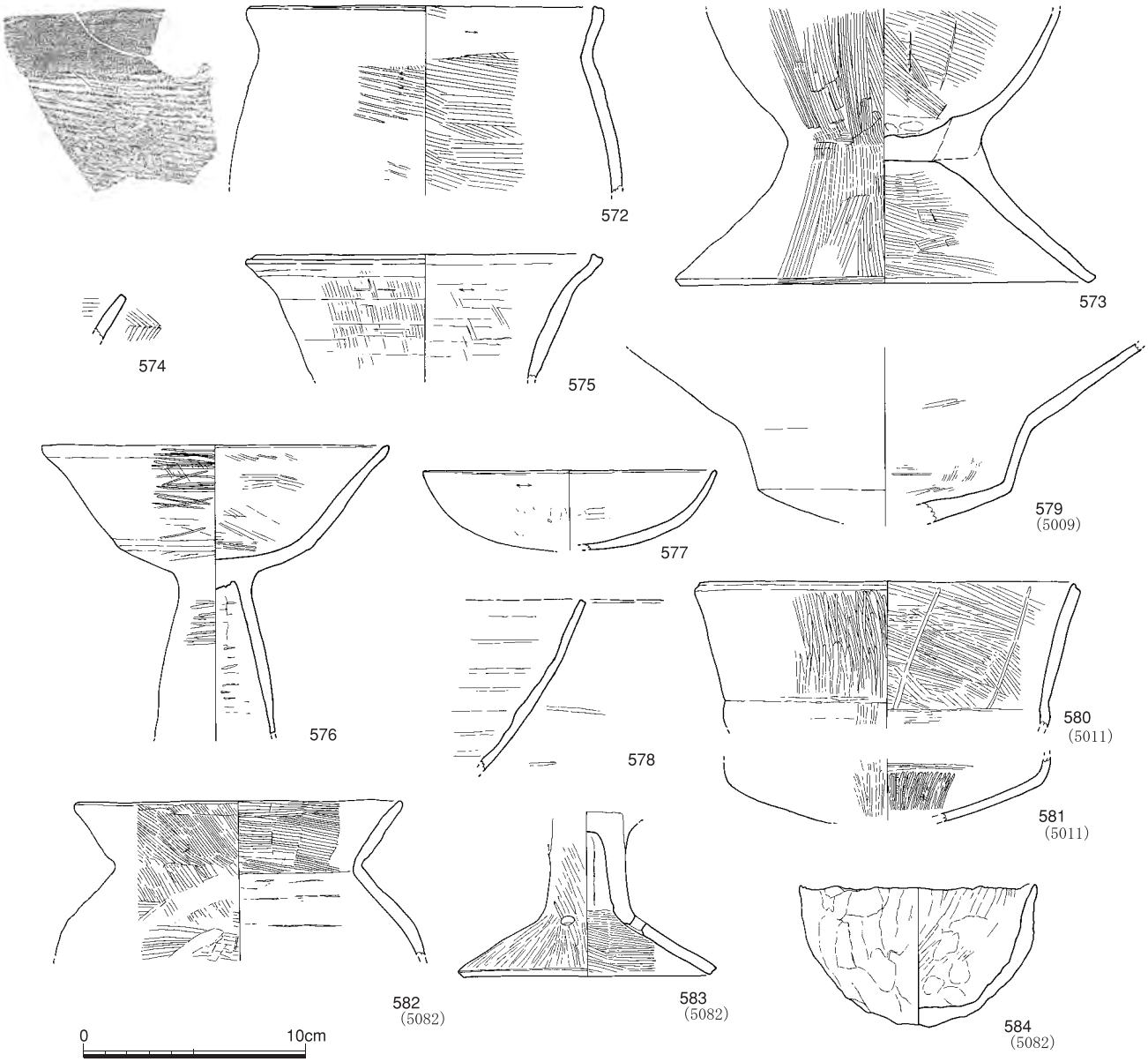


Fig.68　古墳時代遺物実測図 (1/3)

面は淡橙色、内面は橙色を呈す。582 から 584 は 11-2 区南西端の SD5082 で出土した。周囲に古墳時代の遺構が存在する可能性がある。582 の外面は煤け、内面には胴部に接合線が残る。583 の穿孔は 3 カ所。584 は手づくねの鉢で内面に削り状の擦痕が残る。

５．中世以降の遺構と遺物

11 区全域で中世以降の遺構を検出した。特に 11-2 区は密度が高い。11-1 では、古墳時代の遺構掘削時に中世の遺物が出土しているので、検出できなかったものもあると考えられる。しかし、それを差し引いても、11-2 区の方が密集することに変わりはない。遺物は各種類を掲載するようにしたが、未図化の遺物は表に示した。量的には各遺構とも土師皿・坏が最も多い。

（１）掘立柱建物

3 棟を図上復元した。11-2 区はピットが多く幾通りか柱の並びが想定できるが、明確に建物と判断し難い。図示した 2 棟にも疑問があるが、柱の並び具合から取り上げた。3 棟いずれもほぼ南北方向を向き、この他にも同様の方向に並ぶピットがある。周辺に広がるものと考えられる。

SB5044（Fig.70）

11-1 区の北東側で図上復元した。確認した 2 × 1 間が調査区外にも展開し、2 × 3 間の庇、床柱を持つ建物と考えられる。建物方位は N1.5°W である。庇が SC5006 を切る。桁行の全長は 710 m で柱間は 230 cm、240 cm、230 cm、梁間は 210 cmで、2 間とすれば全長 420 mほどである。柱穴は径 30 cm から 40 cmほどで、床柱に相当するものは径 14 cm、24 cmとやや小振りである。12 世紀代か。

出土遺物（Fig.69）　601 は SP5105 から出土した楠葉系瓦器椀で、口縁部内面に浅い沈線を施し、口縁部は暗灰色、体部は灰白色を呈す。胎土は精良である。他の柱穴は縄文土器のみである。

SB5086（Fig.70）

11-2 区中央東側で 2 × 4 間の建物を想定した。建物方位は N2°E である。SK5062、5083 を切り、SK5063 との切り合いは確認できていない。SE5059 と重なる部分ではピットを確認していない。桁行の全長 840 cm、梁行全長 280 cmであるが、柱間隔は桁行が 200 cmから 230 cm、梁行は 130 mから 160 mである。柱穴は径 23 cmから 48 cmほどで、深さ 14 cmから 65 cmである。遺物は少量であるが、4 つのピットから出土した。遺物、切り合いから 13 世紀前半か。

出土遺物（Fig.69）602 は龍泉窯系の青磁椀で深いオリーブ色を呈し、内外面に貫入が入る。603 から 605 は土師器の坏でいずれも小片である。他に土師皿、瓦器片、白磁片が出土している。

SB5087（Fig.70）

SB5086 の西に隣接して 2 × 5 間の建物を想定した。建物方位は磁北で SB5086 と並行する。SX5070 に切られるピットがある。桁行の全長 810 cm、梁行全長 340 cmであるが、柱間隔は桁行が 115 cmから 200 cm、梁行は 160 cmから 180 cmと、特に桁行が揃わず、建物ととらえてよいのか疑問が残る。柱穴は径 24 cmから 42 cmほどで、深さ 16 cmから 38 cmである。遺物は少量であるが、5 つのピットから出土している。時期は遺物、切り合いから 12 世紀後半と考えられる。

出土遺物（Fig.69）606 は土師皿で糸切り底と思われる。607 は須恵器の捏鉢で回転ナデ調整、608、

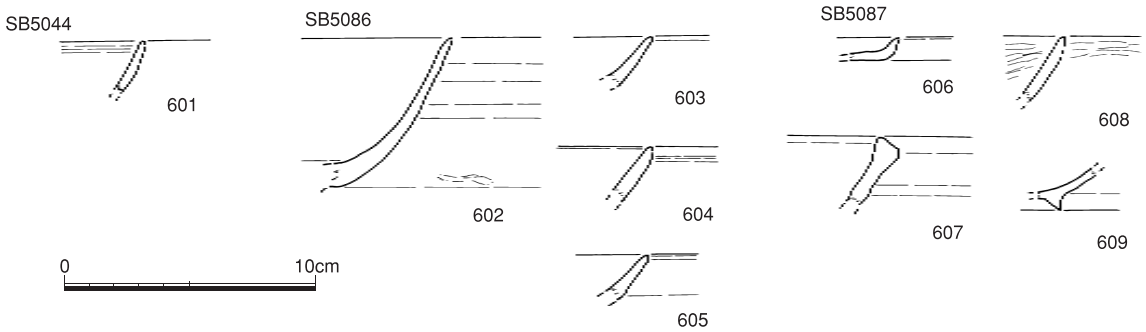


Fig.69　SB5044、5086、5087 出土遺物実測図（1/3）

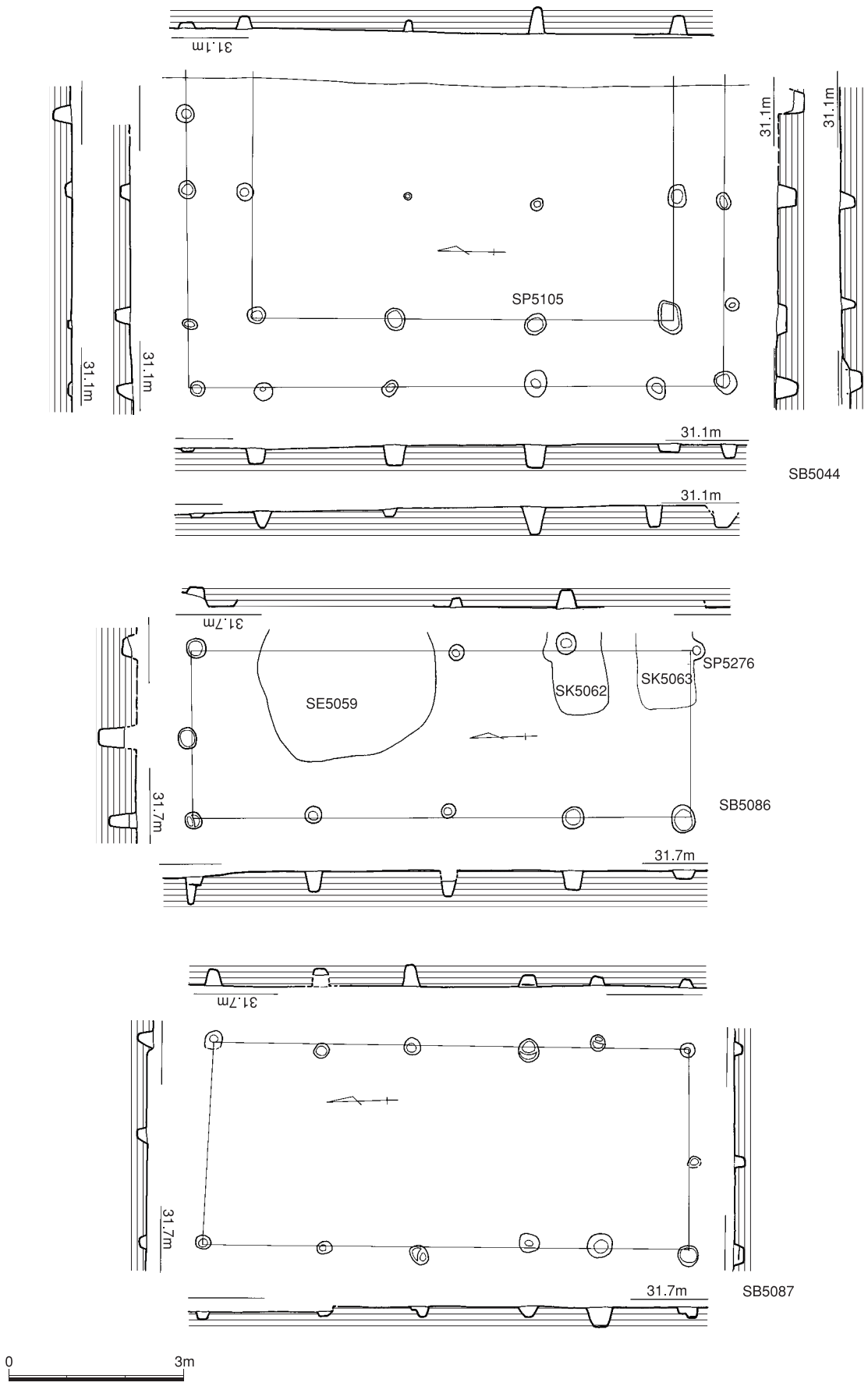


Fig. 70　SB5044、5086、5087 実測図 (1/100)

609は瓦器椀で研磨を施す。他に土師皿片、白磁椀片が出土している。

（２）溝

11-1、2区南端ではSD5009から5011の3本が重なりながら東西方向に走る。現在の畦にほぼ重なるが、遺物は中世前半までである。また、11-2区中央部にはSD5075が他の遺構を切って走る。覆土が淡青灰色の水田土壌と同じで、水田に伴うものと考えている。

SD5009（Fig.4）

11-3、-2区南端部を東西方向に走り、調査区外の東側に抜ける。SC5005を切り、SD5010と交差し切られる。幅86㎝深さ26㎝を測る。土師皿片、古墳時代の土師器579が出土した。

SD5010（Fig.4）

SD5009、SD5011を切る。幅64㎝、深さ20㎝ほどの溝である。13世紀前半か。

出土遺物（Fig.71）611は龍泉窯系青磁椀Ⅱ類で深いオリーブ色を呈す。1/3からの復元である。612は白磁椀Ⅳ類でわずかに青色をおびた白色を呈す。613は白磁椀Ⅷ類である。614から617は糸切り底の土師皿、618は坏で底が一部煤ける。他に土師器片、褐釉陶器片が出土している。

SD5011（Fig.4）

SD5009、5010に沿って東西方向に走り、11-3区西側で南へ直に屈曲する。SC5005を切る。幅200㎝、深さ20㎝ほどである。覆土は淡茶褐色で地山と類似し、掘りすぎた部分がある。12世紀後半。

出土遺物（Fig.71）619から621は白磁椀で621は口縁部に輪花をもつ。622は青磁椀でオリーブ色を呈す。623は龍泉窯系青磁椀Ⅰ類で内面に花文が見られる。624は褐釉陶器の壺で口径10㎝ほどになると思われる。625は白磁で外面は露胎である。鉢等の大型の器種と考えられる。626は陶器で外面に淡緑灰色の釉を施す。1/6からの復元である。627から632は糸切底の土師皿である。復元は1/4ほどからで、627の復元口径9.7㎝である。632内面は茶褐色を呈し、スリップまたは有機物の付着が見られる。635、636は鉄製品で釘と思われる。錆化が進んでいる。

SD5075、5076（Fig.5）

11-2区南半中央を南北に走り、中程で東にまがる。幅45㎝、深さ16㎝ほどである。曲がった延長上にSD5076を検出している。両者とも淡青灰褐色土で類似する。調査中の混同で両者の遺物を一緒に取り上げている。土壌と640から近世の遺構と考えている。

出土遺物（Fig.71）638は龍泉窯系青磁椀Ⅰ-4類。639は同青磁皿Ⅰ類と考えられ復元口径9.6㎝である。640は陶器の椀で淡紫色の地に緑茶褐色の釉がかかり、内面は釉が薄く淡灰白色に緑茶色が混ざる。底部は露胎である。1/6からの復元口径9.2㎝である。641は白磁で外面底と見込みの一部は釉がまわらず露胎である。642は須恵器の坏身である。他に黒色土器、瓦器等の破片も出土した。

SD5077（Fig.5）

11-2区南端部で検出した東西方向の溝状遺構でSD5075に切られる。この付近から12区との境の溝に向かって若干落ちる。幅は115㎝、深さ18㎝ほどである。覆土は灰茶褐色砂質土で、遺物はコンテナ半分ほどが出土した。13世紀後半か。

出土遺物（Fig.71）643から645は鉄製品で錆が進んでいる。643、644は釘と考えられ、643は頭部が大きくなる。645は刀子と考えられる。646は白磁皿で見込みに花文を施し、底は釉を削り取る。647は白磁皿で見込みの所々に釉が回っていない。648は口剥げの白磁皿Ⅸ類である。649は白色の胎土に厚い釉がかかり、畳付より内は露胎である。650は龍泉窯系青磁坏Ⅲ類で外面に連弁文を施す。651は青磁椀Ⅰ類で見込みに花文を施す。652から655は土師皿、坏で糸切り底である。656は瓦器椀で胎土は細かい。657は土師質の土器で土鍋か。外面ナデで暗褐色を呈す。658は土師器の甕で外

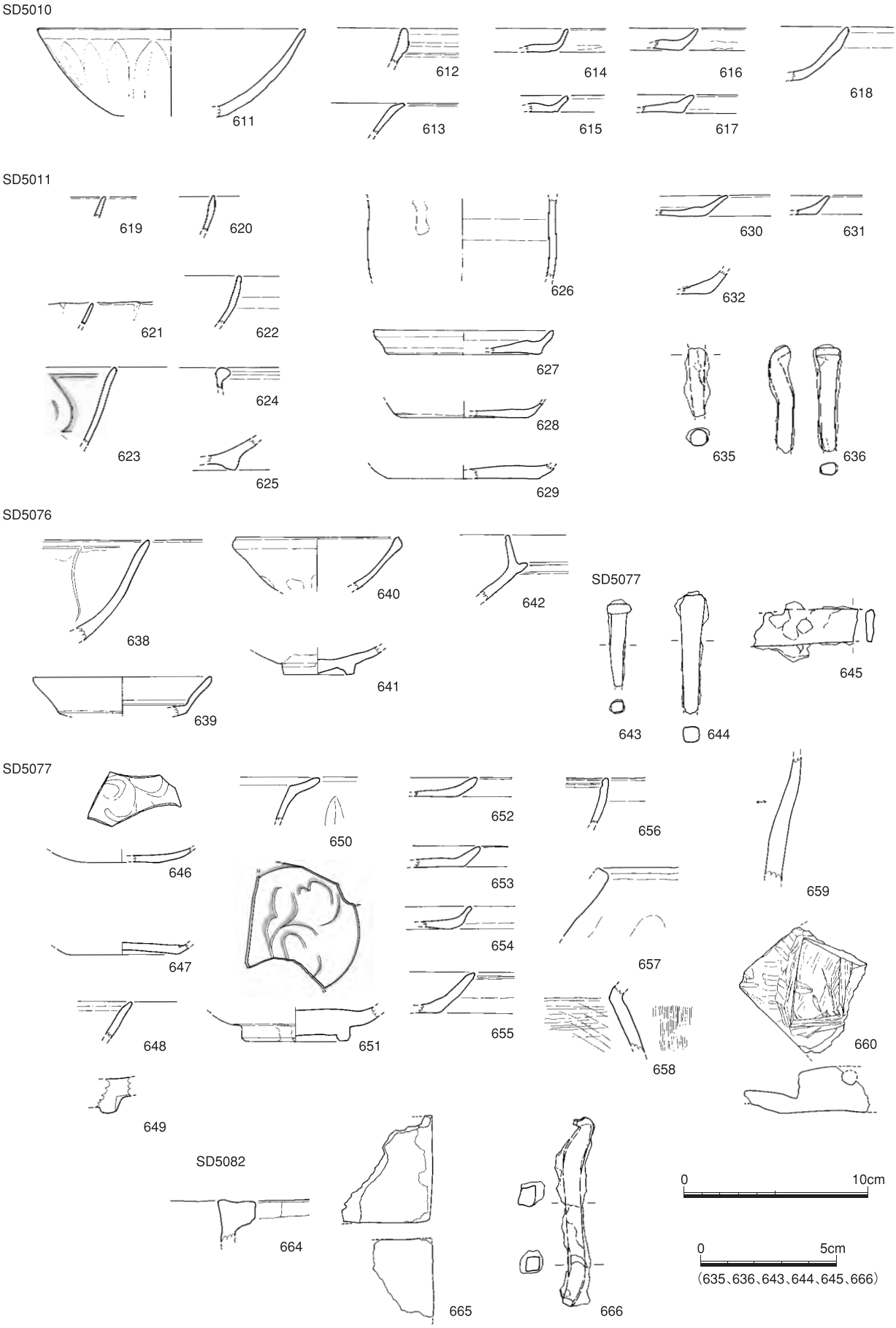


Fig. 71　SD5010、5011、5076、5077、5082 出土遺物実測図 (1/3、2)

面刷毛目を施し煤ける。659は陶器で外面に薄い釉を施し、赤褐色を呈す。内面には横方向の擦痕が見られる。壺か。660は滑石製品で石鍋の転用品である。板状部につまみ状の取手がつき、径8㎜ほどの穿孔がある。対面は滑らかである。他に同安窯系椀、陶器の盤等が出土している。

SD5082（Fig.5）

SD5077の西側延長に位置する溝で、周辺を10㎝ほど下げた時点で検出した。幅68㎝、深さ20㎝ほどで調査区西方向に伸びる。周辺を下げた段階で検出した。覆土は茶褐色砂質土で5077とは異なる。遺物取り上げ時に撹乱SX5082と混ざり区別できなくなった。SX5082は南北方向の延長528㎝、幅140㎝、深さ63㎝のトレンチ状を呈し底はU字状である。ガラス、瓦等の出土から近現代と考える。また古墳時代前期の甕582から584が出土し、周辺に遺構の存在が予想できる。

出土遺物（Fig.71）664は土鍋と考えられる。665はSX5082出土の土製品で胎土に砂粒を多く含みレンガ状であろうか。橙色を呈す。666は鉄製品で断面方形である。錆が進み詳細はとらえにくいが、頭部が曲がる。

（３）井戸

SE5057（Fig.72）

11-2区中央でSX5070の床面で検出した素掘りの竪穴である。検出面では116×110㎝の不整円形で、狭い部分では86㎝ほどになる。深さ220㎝ほどである。覆土上部は灰褐色砂質土で、井戸枠等は検出出来なかった。遺物は小片のみである。出土遺物、切り合いから12世紀後半から末と考えられる。

出土遺物（Fig.73）667は龍泉窯系青磁椀Ⅰ類で内面に花文の一部が見られる。668は黒色土器Aで内外面を研磨調整で仕上げる。669は瓦器椀口縁部、670は同底部である。671は瓦器椀で1/6からの反転で器面は荒れる。672から677は土師器の坏、皿で糸切り底である。678は鉄製品であるが、ほとんど錆化し、器形不明である。土師器の坏皿は中袋1ほどが出土している。

SE5059（Fig.72）

11-2区中央東よりで検出した石組み井戸である。SD5075に切られ、SK5060、5061、5083等を切る。検出面では305×270㎝の不整円形で、これが掘方平面となる。30㎝ほど掘削したところで石組みの井戸枠を検出した。石組みの転端は20㎝×40㎝大の縦長の礫の短辺を内側にして放射状に組み、径140㎝ほどの円形を作る。石組みの深さは310㎝ほどで底は礫層に達する。掘方は掘削していない。井戸枠上部を、一部方形掘方の別遺構5065として掘削している。石組みの上に木枠が存在した可能性がある。この部分については遺物を分けているが、それ以外では掘方と井戸枠内の遺物は混ぜてしまった。掘方の覆土は、上部は灰褐色砂質土で下部は粘質が強くなり礫を多く含む。掘方は茶褐色砂質土である。13世紀前半と考えている。

出土遺物（Fig.73）679は白磁皿Ⅵ-1a類で復元口径10.1㎝である。680は白磁皿Ⅷ-1類、681は同Ⅷ-2 b類である。681は復元口径13.0㎝である。682、683は龍泉窯系青磁椀で682は連弁を持つⅡ類である。684から687は陶器である。684は壺で口縁内面に胎土目がある。685は薄い淡緑灰色釉がかかる盤、686は外面灰茶褐色、内面紫茶色の盤である。687は内外面に薄い緑灰色釉を施す。688は須恵質の捏鉢である。689から706は土師器の皿、坏である。いずれも1/4ほどからの復元で694までの口径は順に8.2、8.2、8.6、8.6、8.4、8.8㎝、696は11.0㎝である。707は瓦器椀、708は土師器の甕か。709は玄武岩の磨石である。表面は滑らかで平面形は不整円形になると思われる。710、711は鉄製品である。710は断面隅丸方形で釘が曲がったような形態である。711は厚さ5㎜ほどの鉄片でどこまでが生きているのか不明である。このほかに白磁Ⅳ類、須恵器等が出土している。

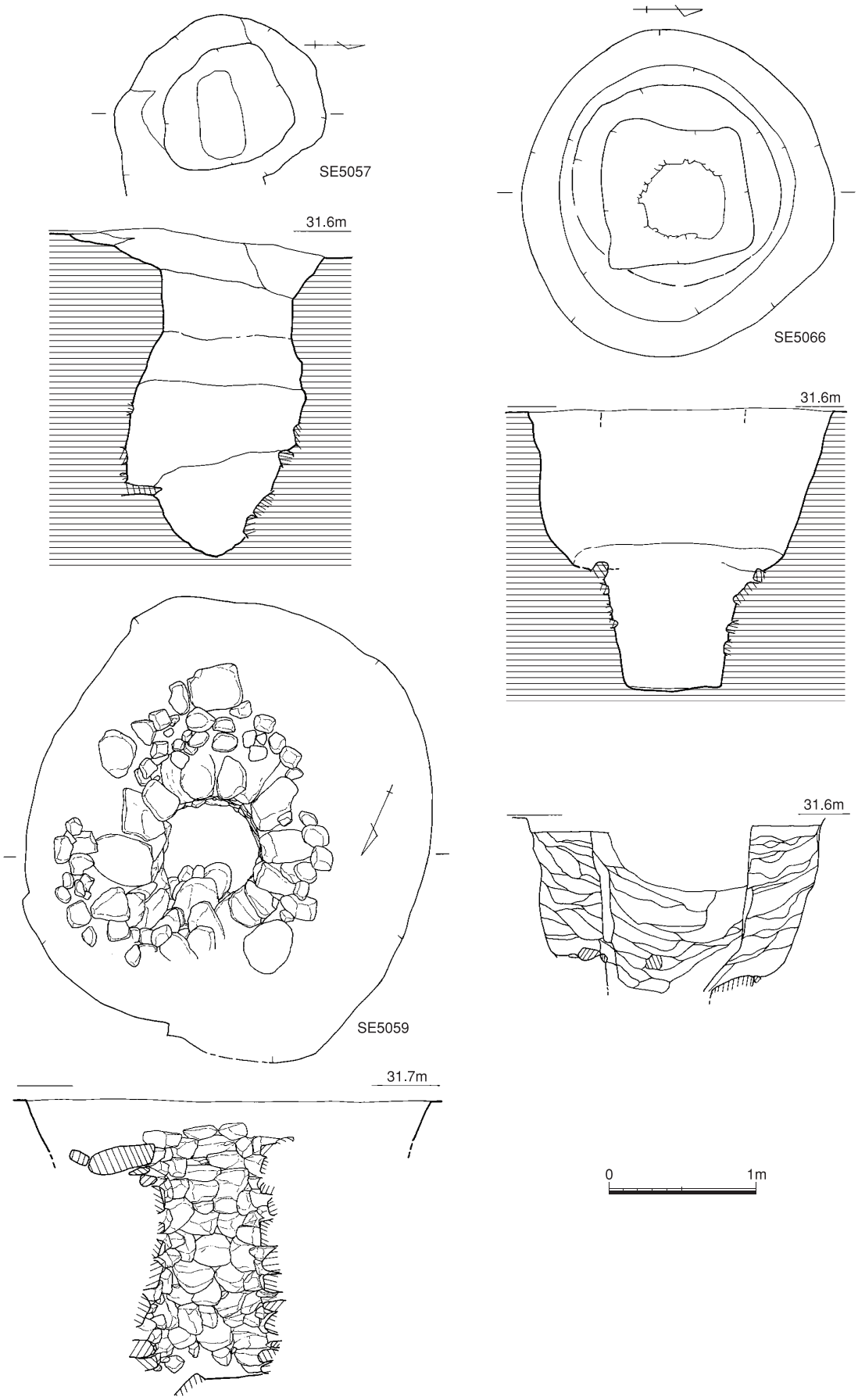


Fig.72　SE5057、5059、5066 実測図 (1/40)

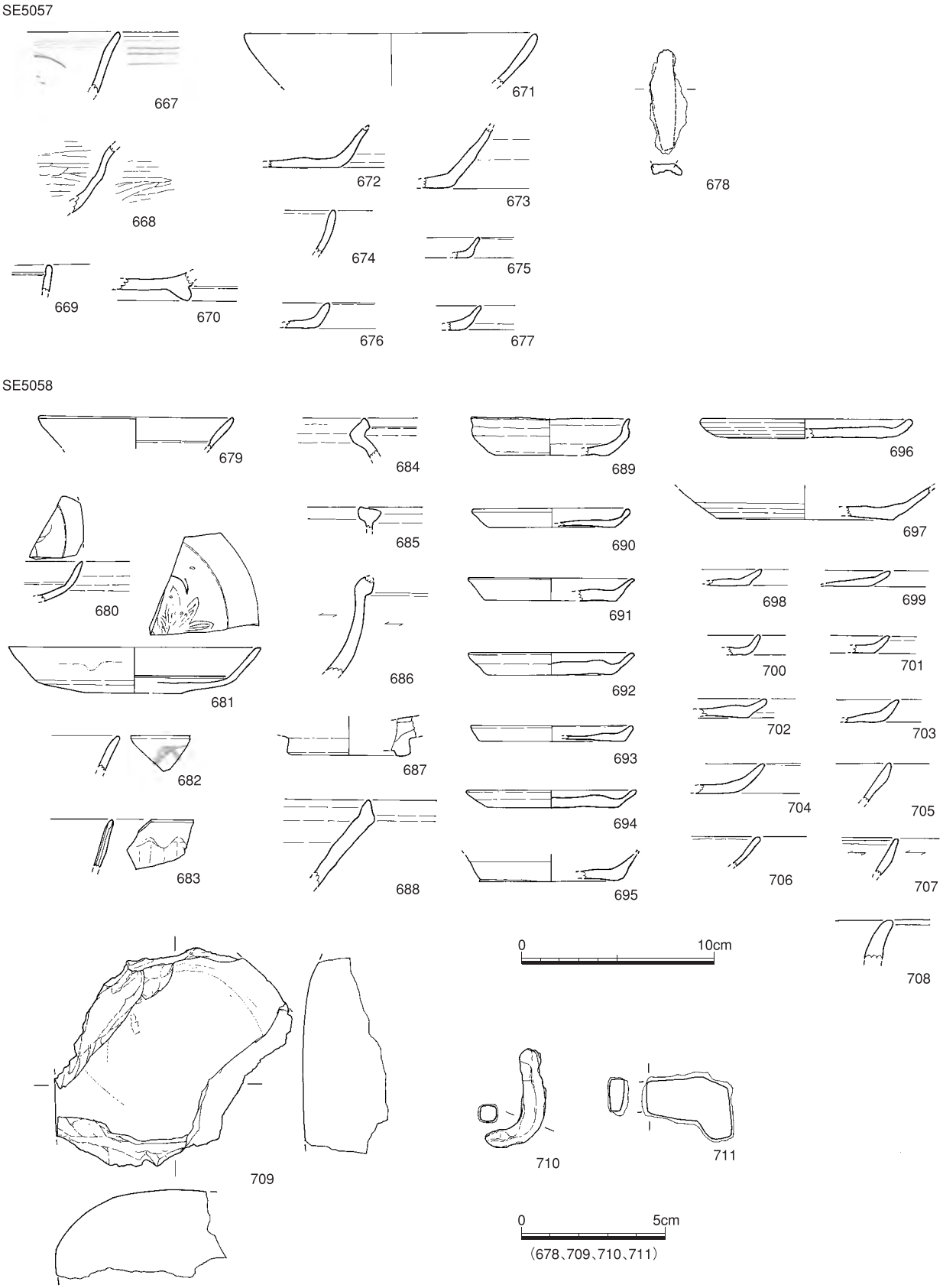


Fig. 73　SE5057、5058 出土遺物実測図 (1/3、2)

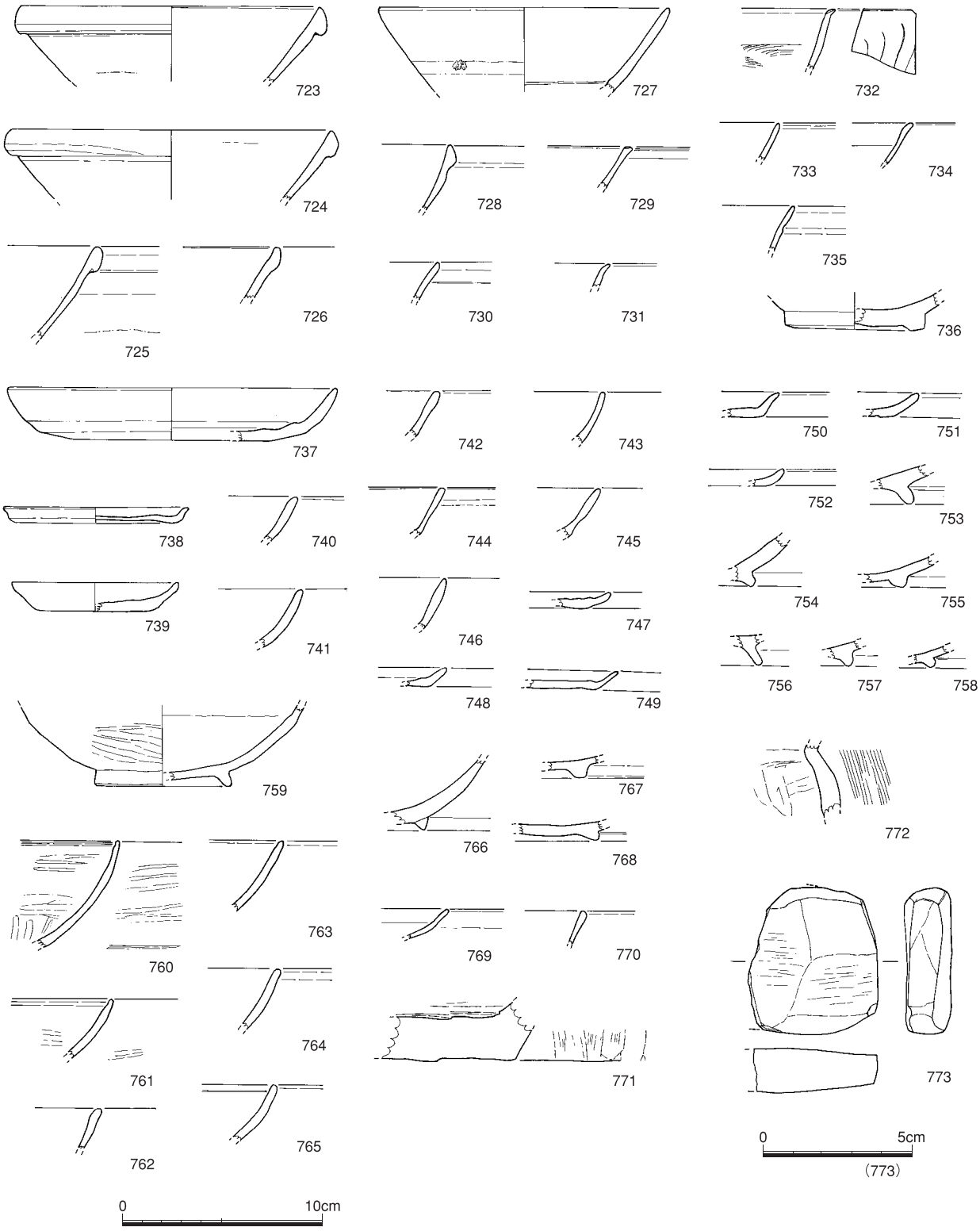


Fig. 74　SE5066 出土遺物実測図 (1/3、2)

SE5066（Fig.72）

11-1 区中央西よりで検出した素掘りの井戸である。検出面の平面形は径約 210 ㎝円形で、深さ 90 ㎝ほどで礫層に達して段を成して狭くなる。底の平面は径 120 ㎝ほどで、検出面からの深さ 190 ㎝である。また、土層図のように径 100 ㎝ほどの井戸枠があったと考えられる。当初、上部は井戸枠内を別遺構（5065）として掘削を行っていたが、途中から掘方出土遺物と一緒に取り上げを行っている。12 世紀前半か。

出土遺物（Fig.74）723 から 733 は白磁である。723 から 726、728 は白磁椀Ⅳ類で 723、724 は復元口径 15.5、16.6 ㎝ほどである。727 は直口縁で内面段があり、胎土に黒色粒を含み外面下部は露胎である。白磁椀Ⅱ類か。復元口径 14.5 ㎝である。732 は椀Ⅴ類である。734 は青磁椀でオリーブ色を呈す。735 はわずかに青みかかった乳白色の釉を施す。736 は白磁で底部外面は露胎である。737 から 758 は土師器の坏、皿、椀である。737 から 739 は復元口径 16.4、9.2、8.4 ㎝である。底ははっきりしないが、ヘラ切りと思われる。749 は底に板目が明瞭に残る。759 から 768 は瓦器椀である。おおむね器面を研磨で仕上げる。760、761 は楠葉系である。769、770 は須恵器である。771 は滑石製の石鍋で外面に炭化物が付着している。772 は土師器の甕である。773 は天草石の砥石で、表面に擦痕が見られるがわずかで薄い。

（４）木棺墓・土抗墓

検出した土抗の中で、長方形プランを持つもの、釘が出土したものを墓の可能性が高いと考え、別に報告する。SK5062 から 5064 は近接して築かれ、時期も近いと考えられる。

SK5062（Fig.75）

11-2 区南東側に位置し SB5086 に切られる。平面長方形で 184 × 90 ㎝、深さ 34 ㎝ほどである。長軸方向は N85°W である。北西隅に段部があり土層図でも確認できる。木棺の立ち上がりを思わせる。中央で 20 ㎝大の礫が出土した。覆土は灰茶褐色砂質土である。釘、副葬遺物の出土はない。遺物は覆土中のものである。土師皿は小袋 1 袋ほどで、陶器の壷片等も出土している。

出土遺物（Fig.76）780 は白磁で貫入はない。皿か。781 は黒色土器Ｂで内外面研磨である。783 から 785 は土師皿で、782 は復元口径 8.7 ㎝を測る。786、787 は瓦器椀で胎土が細かい。

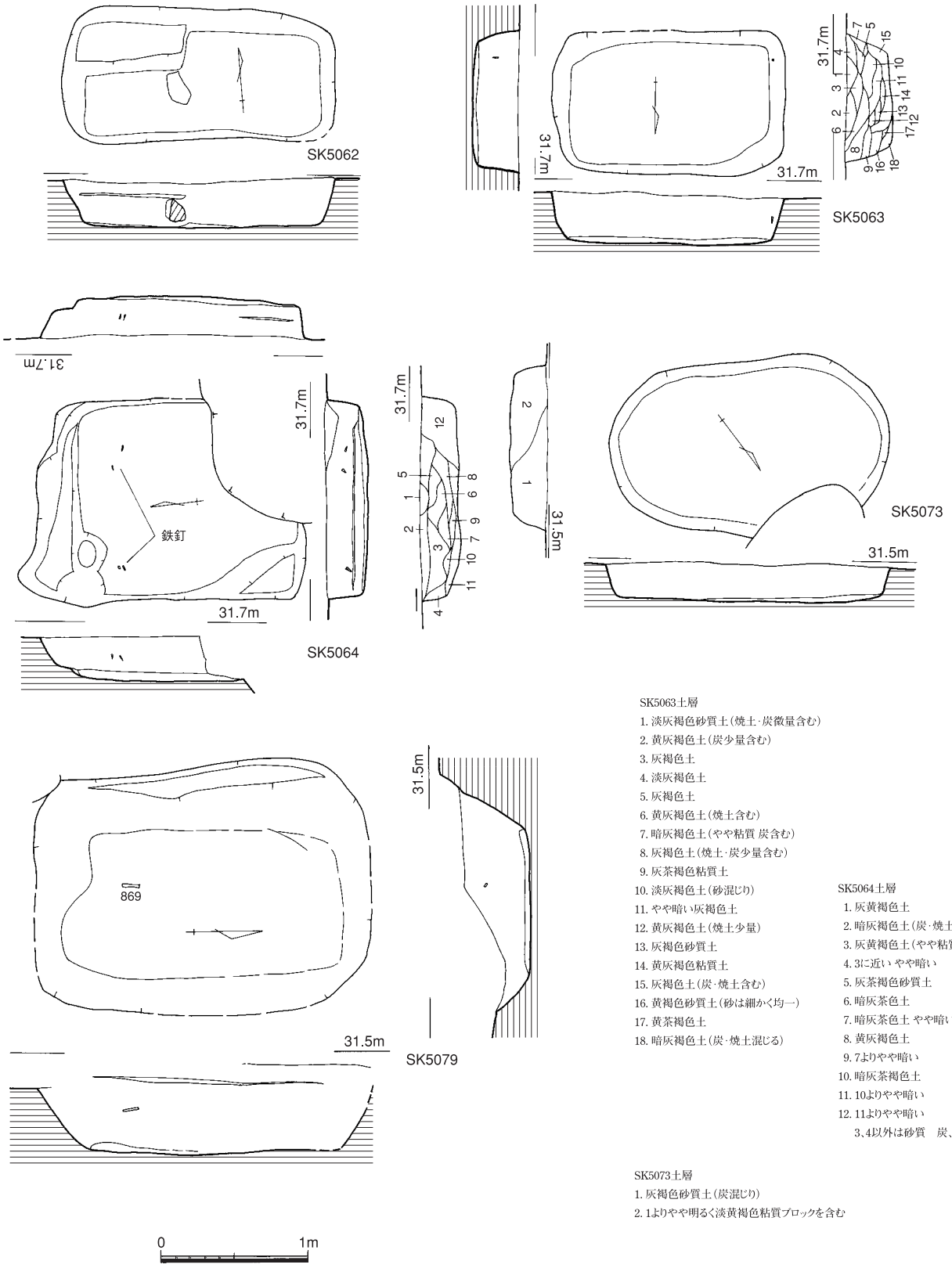
SK5063（Fig.75）

SK5062 の 50 ㎝南に位置し、方位は同じく N90°W である。平面長方形で 158 × 96 ㎝、深さ 32 ㎝を測る。覆土は淡灰褐色砂質土を主体とする。土層図の 15 層の両側に立ち上がりがあり、木棺の存在を想定させるが、釘、副葬品はない。遺物は覆土中のものである。

出土遺物（Fig.76）788 は龍泉窯系青磁椀Ⅱ類でオリーブ色を呈す。789 は龍泉窯系青磁皿である。790 から 805 は土師器の皿と坏である。790、791 は復元口径 8.6、9.2 ㎝を測る。判別つくものは糸切り底で 790、792、795、797、800 に板目が残る。806 は土師器で椀か。807 は須恵器の口縁部である。808 から 812 は瓦器椀でナデまたは研磨調整である。813 は焼きが悪い須恵質の捏鉢で口縁部は黒色、他は灰褐色である。814 は土師質で傾きが不確実。外面ナデで煤け、内面は刷毛目である。

SK5064（Fig.75）

SK5063 の南 15 ㎝に位置し、長軸は南北方向で N8°E である。攪乱 SX5082 に切られる。平面長方形で 180 × 136 ㎝、深さ 30 ㎝程の規模である。北側と南西隅に段がある。北側 2 カ所で釘 2 本ずつの出土位置を確認できた。釘は他に 1 本出土している。覆土は淡灰茶、暗茶褐色砂質土を主とし、不確実ながら立ち上がりが見られる。釘の位置を隅とする木棺が想定できる。鉄器 843 は出土位置を確認できていないが、副葬品の可能性がある。SK5062、5063 とともに 13 世紀後半と考えられる。



SK5063土層
1. 淡灰褐色砂質土(焼土･炭微量含む)
2. 黄灰褐色土(炭少量含む)
3. 灰褐色土
4. 淡灰褐色土
5. 灰褐色土
6. 黄灰褐色土(焼土含む)
7. 暗灰褐色土(やや粘質 炭含む)
8. 灰褐色土(焼土･炭少量含む)
9. 灰茶褐色粘質土
10. 淡灰褐色土(砂混じり)
11. やや暗い灰褐色土
12. 黄灰褐色土(焼土少量)
13. 灰褐色砂質土
14. 黄灰褐色粘質土
15. 灰褐色土(炭･焼土含む)
16. 黄褐色砂質土(砂は細かく均一)
17. 黄茶褐色土
18. 暗灰褐色土(炭･焼土混じる)

SK5064土層
1. 灰黄褐色土
2. 暗灰褐色土(炭･焼土を含む)
3. 灰黄褐色土(やや粘質)
4. 3に近い やや暗い
5. 灰茶褐色砂質土
6. 暗灰茶色土
7. 暗灰茶色土 やや暗い
8. 黄灰褐色土
9. 7よりやや暗い
10. 暗灰茶褐色土
11. 10よりやや暗い
12. 11よりやや暗い
3、4以外は砂質　炭、焼土を少量含む

SK5073土層
1. 灰褐色砂質土(炭混じり)
2. 1よりやや明るく淡黄褐色粘質ブロックを含む

Fig. 75　SK5062、5063、5064、5073、5079 実測図 (1/40)

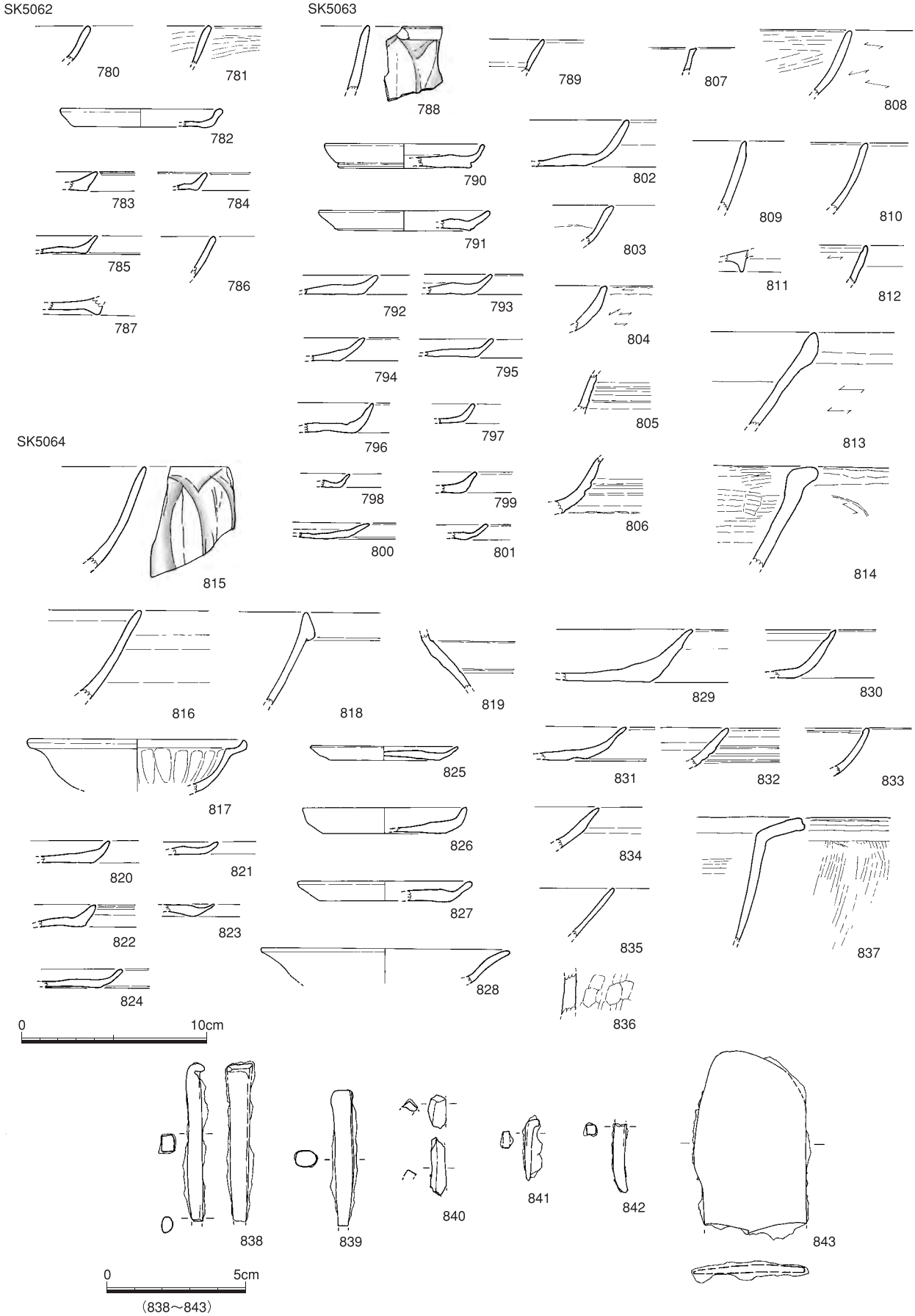


Fig. 76　SK5062、5063、5064 出土遺物実測図 (1/3)

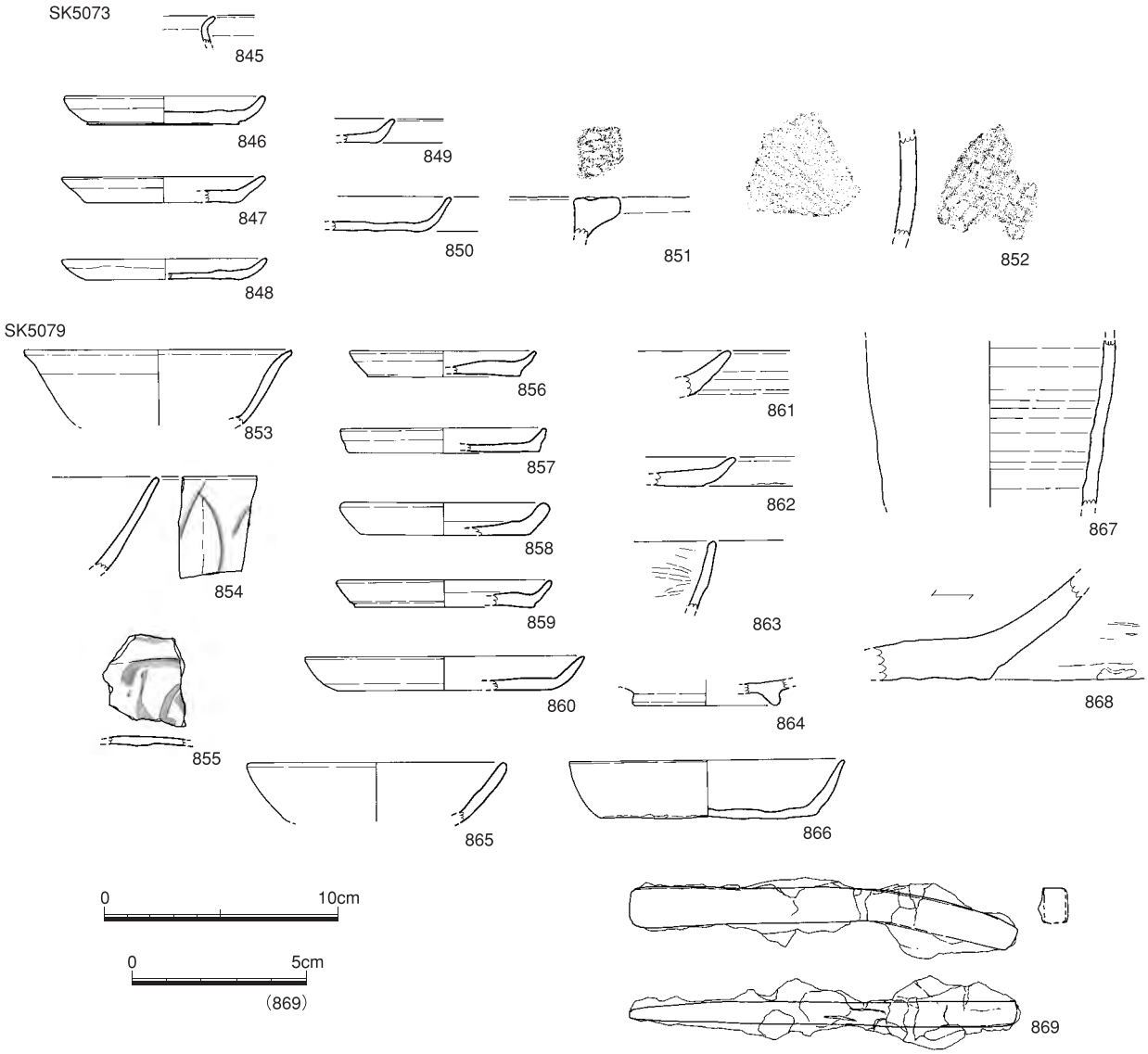


Fig.77　SK5073、5079 出土遺物実測図 (1/3)

出土遺物 (Fig.76)　815 は龍泉窯系青磁椀Ⅱ類で、816 は同 1 類である。818 は白磁椀Ⅳ類、817 は龍泉窯系青磁坏Ⅲ -3b 類で内面に花弁形の凹面の削りを入れる。819 は褐釉陶器で壷か。820 から 828 は土師器の皿、829 から 833 は坏である。825 から 828 は復元口径 8.0、8.8、9.4、13.4 ㎝を測る。834、835 は瓦器椀で胎土は細かい。836 は滑石製石鍋と考えられる。器壁が薄い。837 は土鍋で外面縦刷毛目、内面は荒れる。橙茶色を呈す。838 から 843 は鉄製品である。錆が進み形態が分かりにくい。838 から 842 は釘。838 は頭が鈎状に曲がり断面方形である。841 も頭が曲がる。839 は断面楕円形で他は方形と考えられる。843 は薄い板状でどこまでが生きているか不明である。

SK5073 (Fig.75)

11-2 区中央北よりで SK5055 に切られる。平面楕円形で 190 × 120 ㎝、深さ 25 ㎝を測り、覆土は炭まじりの灰褐色砂質土である。長軸方向は N52° W である。規模以外に墓を想定させるものはない。遺物は覆土出土である。13 世紀後半か。

出土遺物 (Fig.77) 845 は白磁の大きく曲がる口縁部で傾きは不確実。846 から 850 は糸切り底の土師器の皿、坏で、850 は板目圧痕が残る。851 は土鍋で口縁部上に縄文を施す。胎土に砂粒を非常に多く含む。852 は堅い土師質で外面に格子目叩き、内面は荒い刷毛目が残る。天地傾き不明である。

SK5079（Fig.75）

くぼみ状の土抗SK5078の床面で検出した。平面長方形を呈し122×162㎝、深さ60㎝である。長軸の方位は磁北である。掘りすぎのため床の南側の平面は想定線である。北側中央で鉄器869が40㎝ほど浮いて出土したが、上層のSK5078に帰属する可能性がある。13世紀後半。

出土遺物（Fig.77）853は口禿げの白磁皿Ⅸ類で復元口径11.4㎝を測る。854は龍泉窯系青磁Ⅱ類。855は陶器の盤の底で淡黄褐色の器面に褐釉で施文する。856から862は土師器の皿である。復元口径は順に7.8、8.8、9.0、9.2、12.0㎝を測る。860の底には板目圧痕が残る。863、864は瓦器椀片。865、866は土師器の坏で復元口径11.0、11.7㎝を測る。867は陶器で淡灰褐色を呈す。868は陶器で捏鉢と考えられる。外面削り、内面横ナデ、底は板状工具による擦過で砂粒を多く含む。869は鉄製品で断面長方形を呈し、先端の厚みが狭まる。基部側の折れは当初のものか不明。40㎝ほど床面より浮いて出土し、SX5078に帰属する可能性がある。

（５）土抗

調査区全域で大小の掘り方を検出した。やはり11-2区での密度が高い。

SK5012（Fig.78）

11-3区中央で検出した。平面楕円形で110×90㎝、深さ13㎝の規模である。灰色砂質土を覆土とし、遺物は確認していない。

SK5013（Fig.78）

11-3区中央で確認した。平面炭丸方形で97×74㎝、深さ20㎝の規模である。灰色砂質土を覆土とし、遺物は確認できていない。

SK5014（Fig.78）

11-3区中央南寄りで確認した。径80㎝の円形土抗の中央に鉄滓が出土した。焼土面等は確認できなかった。滓は砂粒を非常に多く含み、鍛冶滓と考えられる。243ｇを採集している。遺物は覆土中からの出土である。西側に重なる土抗5173からは古墳時代の甕小片が出土している。

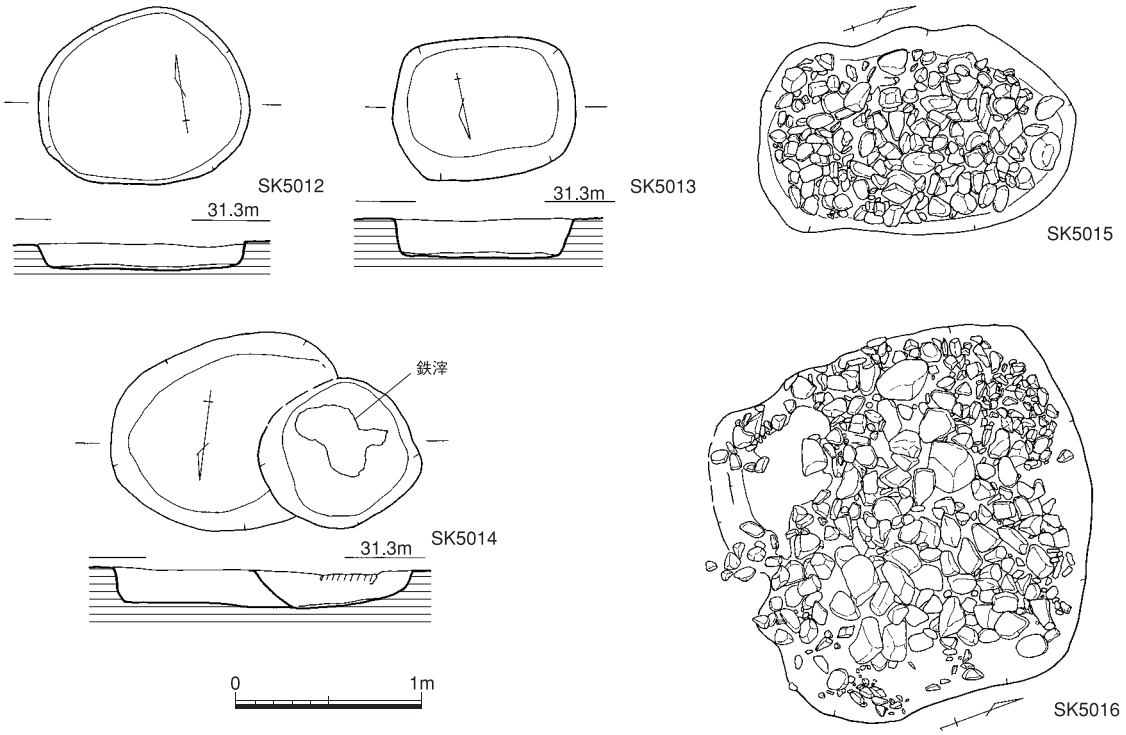


Fig.78　SK5012、5013、5014、5015、5016実測図（1/40）

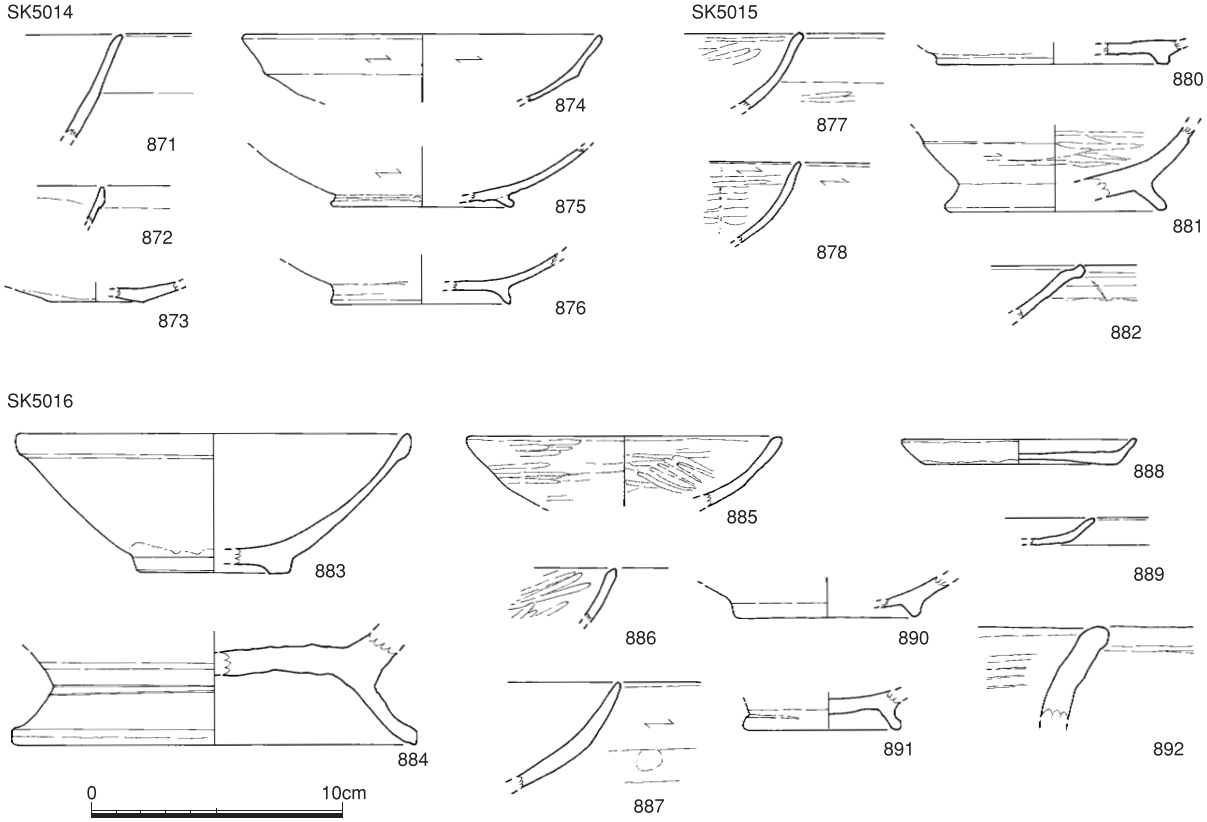


Fig.79　SK5014、5015、5016 出土遺物実測図（1/3）

出土遺物（Fig.79）871 は白磁の椀。872 は土師器の椀で白磁模倣品。玉縁口縁で淡橙色を呈し胎土が極めて良い。873 は白磁皿で底部は露胎である。874 は土師器の椀で 1/6 から復元した口径 14.4 ㎝は不確実である。875、876 は瓦器椀で胎土は良い。12 世紀前半か。

SK5015（Fig.78）

11-3 区西よりで検出した。平面不整楕円形で 166 × 110 ㎝、深さ 30 ㎝を測る。全面に 25 ㎝大までの丸みのある礫が充填されている。保存されるため、南側半分のみ掘削した。12 世紀前半か。

出土遺物（Fig.79）877、878 は土師器、黒色土器 A の椀で内面の研磨が残る。880 は須恵器の坏で混入である。881 は黒色土器 A の椀で外面削り、内面研磨調整である。882 は陶器で黄茶色の釉がかかり、外面下部は露胎である。瀬戸か。

SK5016（Fig.78）

11-3 区西壁沿い中央で検出した。平面不整円形で、200 × 190 ㎝、深さ 35 ㎝を測る。全面に 50 ㎝大までの礫が入り、中央で深さを確認した他は掘りあげていない。12 世紀前半か。

出土遺物（Fig.79）883 は白磁椀Ⅳ類で 1/6 からの復元口径 15.6 ㎝を測る。884 は須恵質で 1/6 からの復元である。内外面底以外は回転ナデ調整である。885 から 887 は土師器の椀である。885 は復元口径 12.5 ㎝を測り、内外面研磨調整である。888、889 は土師皿で、888 は完形で口径 9.3 ㎝を測り、糸切り底で板目圧痕が残る。890、891 は黒色土器 B で胎土はよい。892 は土師質で外面擦痕風、内面荒い刷毛目で内外面が煤ける。

SK5051（Fig.81）

11-2 区北側で検出した不整形土抗である。全体の平面は 200 × 210 ㎝を測り、南西側が高い。北東側は不整長楕円形に深くなり、床面で 144 × 64 ㎝ほどである。覆土は灰褐色砂質土を主とする。遺物

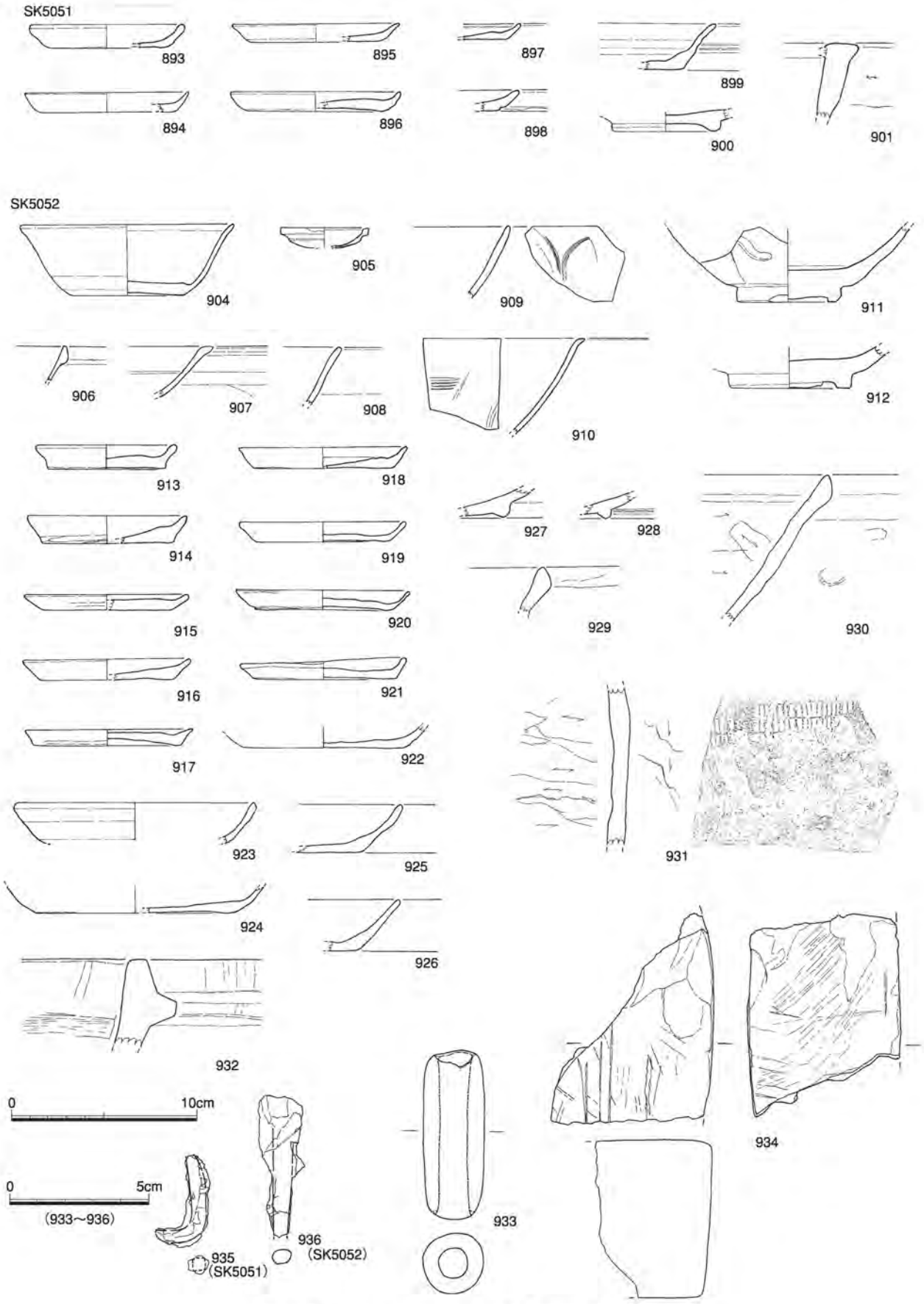


Fig. 80　SK5051、5052 出土遺物実測図 (1/3、2)

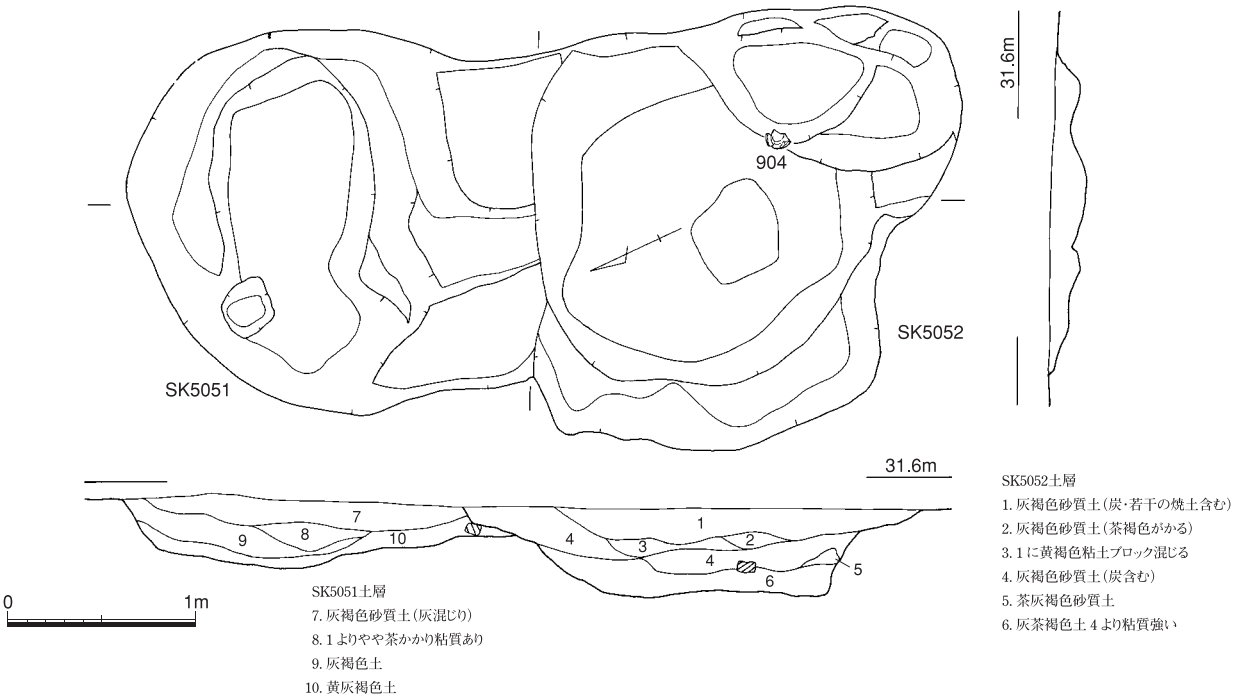


Fig.81　SK5051、5052 実測図 (1/40)

は覆土中からの出土である。

出土遺物 (Fig.80) 893 から 899 は糸切り底の土師皿、坏である。893、895、897 には板目が残る。893 から 896 の復元口径は 8.3、8.8、9.0、9.1 cmを測る。894 は 1/6 が残る。900 は瓦器で外面底に板目が残る。901 は土師質で内外面に回転ナデを施し灰茶褐色を呈す。935 は鉄釘か。

SK5052 (Fig.81)

SK5051 を南側で切る。南東側の掘り込みと一緒に掘削し、プランを確認できていない。遺物も混ざっているが、SK5052 が切る関係である。130 × 80 cmの平面隅丸方形で、深さ 43 cmを測る。床は平坦で、南東隅から白磁皿が正置された状態で出土した。また、釘状の鉄器が出土しており墓の可能性がある。覆土は灰褐色砂質土を主とする。遺物は覆土からの出土である。13 世紀後半か。

出土遺物 (Fig.80) 904 は床面から出土した白磁皿Ⅸ類である。完形に復元し、口径 11.4 cmを測る。905 は白磁の合子で外面下半は露胎である。906 は白磁椀Ⅳ類、907 は白磁皿Ⅳ類である。908、909 は青磁椀で 909 は連弁文を施す。910 は白磁椀で内面に櫛目文がある。911、912 は青磁椀の底部である。913 から 922 は糸切底の土師皿で、921 以外は 1/4 前後からの復元で、口径は順に 7.6、8.6、8.8、9.0、9.0、9.0、9.0、9.3、8.95 cmを測る。913、915、920、921 には板目圧痕が残る。923 から 926 は土師器の坏で 924 の 1/6 からの復元口径 13.0 cmを測る。927 は土師器、928 は瓦器椀の底部。929、930 は須恵質の捏鉢でナデ仕上げである。灰褐色を呈し、930 の口縁部は黒色である。931 は常滑の大甕で叩き目が見られる。932 は石鍋で鍔から下に煤が付着する。933 は土錘で長さ 6.1 cm、重さ 28.1 g を量る。934 は天草石の砥石で 3 面を使用し擦痕が見られる。936 は鉄釘である。

SK5053 (Fig.82)

11-2 区北側で検出した。不整楕円形を呈す。平面 120 × 82 cm、深さ 40 cmを測る。SK5054 に切られる。

出土遺物 (Fig.83) 937、938 は白磁椀、皿で乳白色を呈す。939、940 は青磁椀である。940 は内面に圏線を施す。941 は陶器の壷で外面に薄くオリーブ色釉を施す。942 から 946 は土師皿である。947、948 は瓦器椀で 947 は 1/7 からの復元口径 15.8 cmを測る。949 は黒色土器 A と考えられる。

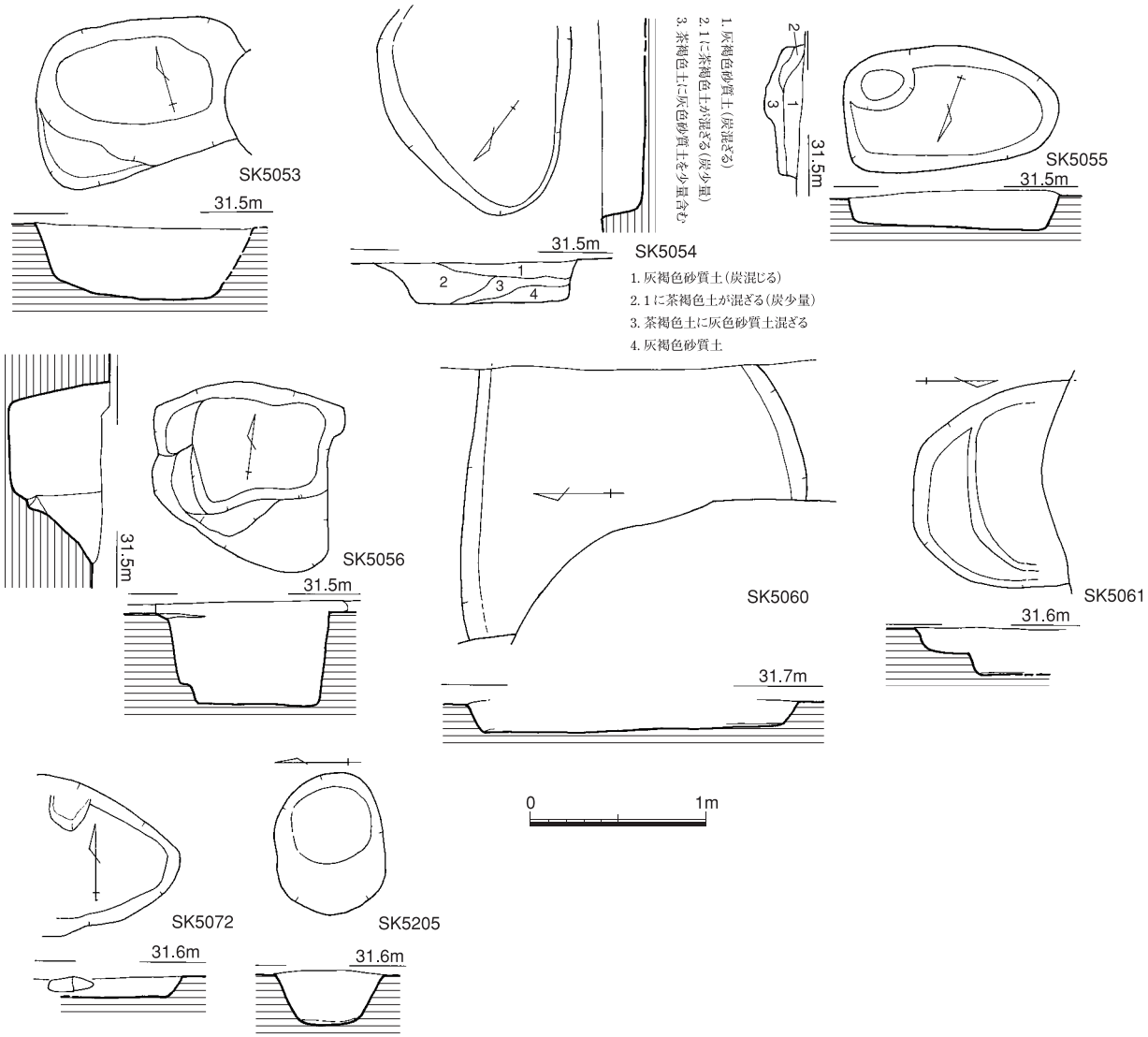


Fig.82　SK5053、5054、5055、5056、5060、5061、5072、5205 実測図（1/40）

SK5054（Fig.82）

不整形土抗で平面 110 × 110 cm＋α、深さ 24 cmを測る。SK5055 に切られる。

出土遺物（Fig.83）950 から 952 は土師器の坏、953 は皿である。954 は瓦器椀である。

SK5055（Fig.82）

長楕円形土抗で平面 120 × 70 cm、深さ 20 cmを測る。SK5054、5073 を切る。

出土遺物（Fig.83）　955 は白磁皿の小片。956 から 959 は土師皿、坏で 956 に板目が残る。958 は土師器の高台で大振りである。960 は須恵質の捏鉢で東播系か。切り合いから 13 世紀後半と思われる。

SK5056（Fig.82）

11-2 区北東側の SX5080 を切る。方形の土抗で、平面 84 × 66 cm、深さ 58 cmを測る。覆土は灰褐色砂質土である。14 世紀以降。

出土遺物（Fig.83）961 から 964 は土師器の坏、皿で 962、963 に板目が残る。965 は瓦質の釜で横ナデ調整を施し、外面は暗褐色、内面は白色で化粧土を施しているようである。固く土師質に近い。

SK5060（Fig.82）

11-2 区中央東壁際で検出した浅い土抗である。SE5058、SD5075 に切られ、調査区外に広がるため全形は不明である。幅 190 cm、深さ 3 cm程を確認した。黒褐色土を覆土とする。13 世紀前半か。

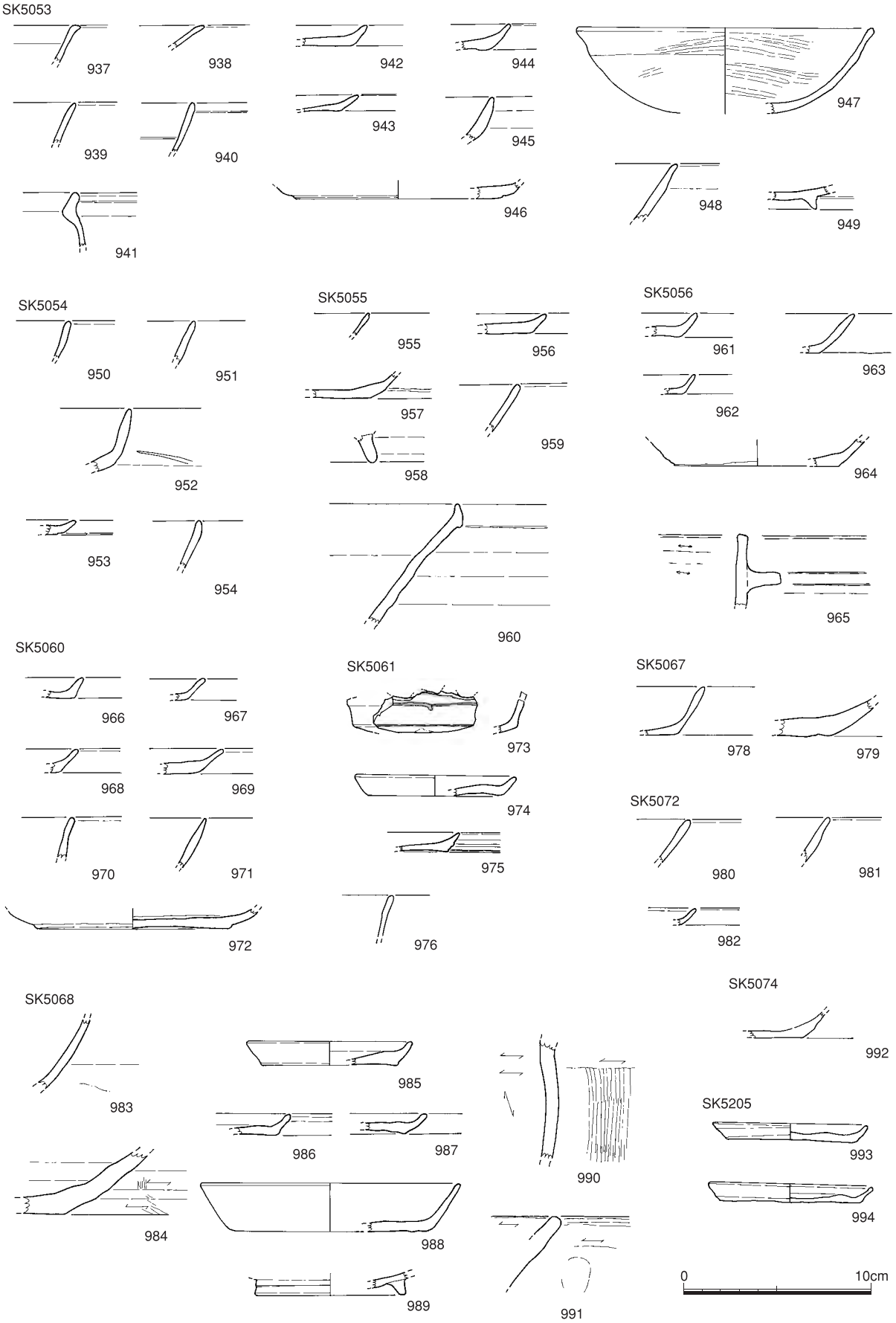


Fig. 83　SK5053、5054、5055、5056、5060、5061、5067、5068、5072、5074、 5205 出土遺物実測図 (1/3)

出土遺物（Fig.83） 966から969、971、972は土師器の皿、坏で969の内面には暗褐色の付着物がある。970は瓦器で黒色を呈す。

SK5061（Fig.82）

SK5058に切られ、SK5060を切る。半円形プランを確認した。幅112㎝で段を成し、深さ26㎝を測る。茶褐色砂質土を覆土とする。

出土遺物（Fig.83）973は青白磁の香炉で口縁部に山形の装飾が施されるが割れる。内面下部は露胎である。1/5からの復元。974から976は土師器の皿、坏で、974は復元口径8.5㎝で板目が残る。

SK5067（Fig.82）

11-2区南端で確認した平面円形のくぼみ状の土抗で径2.5mほどの規模である。平板での略側しか行っていない。茶褐色を覆土とし礫が多く出土し、集石状であった。

出土遺物（Fig.83）978、979は土師器の坏である。

SK5068（Fig.82）

11-2区南端に位置し、平面楕円形と考えられるが西側をSK5067が切る。幅160㎝で浅いくぼみ状を呈す。遺構とは言い難い。灰黄褐色砂質土を覆土とする。平板略測での平面形のみの記録である。遺物は少量出土している。

出土遺物（Fig.83）983は陶器で薄い淡黄茶色の釉を内外面に施し、外面下端は露胎である。984は須恵質で東播系の捏鉢と考えられる。985から989は土師器の皿、坏、椀である。985は1/4からの復元口径8.8㎝を測る。987は板目が残る。988の復元口径13.8を測るが不確かである。990は甕で外面刷毛目で煤ける。991は土師質で土鍋か。外面ナデで暗褐色を呈す。

SK5072（Fig.82）

11-2区北側でSK5051に切られる。先が狭まる楕円形プランの一部か。幅90㎝ほどで深さ12㎝を測る。灰褐色砂質土を覆土とする。

出土遺物（Fig.83）980から982は土師器の坏、皿の小片である。

SK5205（Fig.82）

11-2区北側でSC5084を切る。平面楕円形で80×61㎝、深さ31㎝を測る。

出土遺物（Fig.83）993、994は土師皿で口径8.2、8.75㎝を測る。993には板目が残る。

（６）くぼみ状土抗

11-2区の広い範囲で遺物包含層が広がっていたが、そのなかで、浅いくぼみ状をなす部分があり、遺物が出土した。

SX5070（Fig.5）

11-2区中央西側に位置し調査区外に延びる。平面規模は幅290㎝、延長482㎝を測り調査区外に広がる。深さ最大で10㎝ほどである。覆土は灰褐色砂質土で、遺物はコンテナケース2箱分になり、土師皿、坏の小片が多い。12世紀後半と考えている。

出土遺物（Fig.84）995から998は白磁である。995は椀Ⅳ類、996の口縁部はごく小さな玉縁状をなす。997は皿、998は椀Ⅴ類か。999、1000は青磁皿で1000の外面下部は露胎である。1001は青磁椀で見込みに櫛描き圏線を施す。畳付きから内は露胎である。1002から1009は土師皿で、1002は板目が残る完形品。1002から1004は復元口径9.2、9.8、12.0㎝を測る。1010から1015は土師器の坏で1010の口縁部は一部のみの残存で、1011は1/6からの復元、1012は完形復元品である。口径12.1、15.0、15.0㎝を測る。1012は板目が残る。1016は瓦器椀。1017は須恵質の捏鉢で口縁部は暗褐色を呈す。1018は須恵器の皿。1019は須恵器で鉢形を呈しナデ調整である。1020、1021は瓦器椀

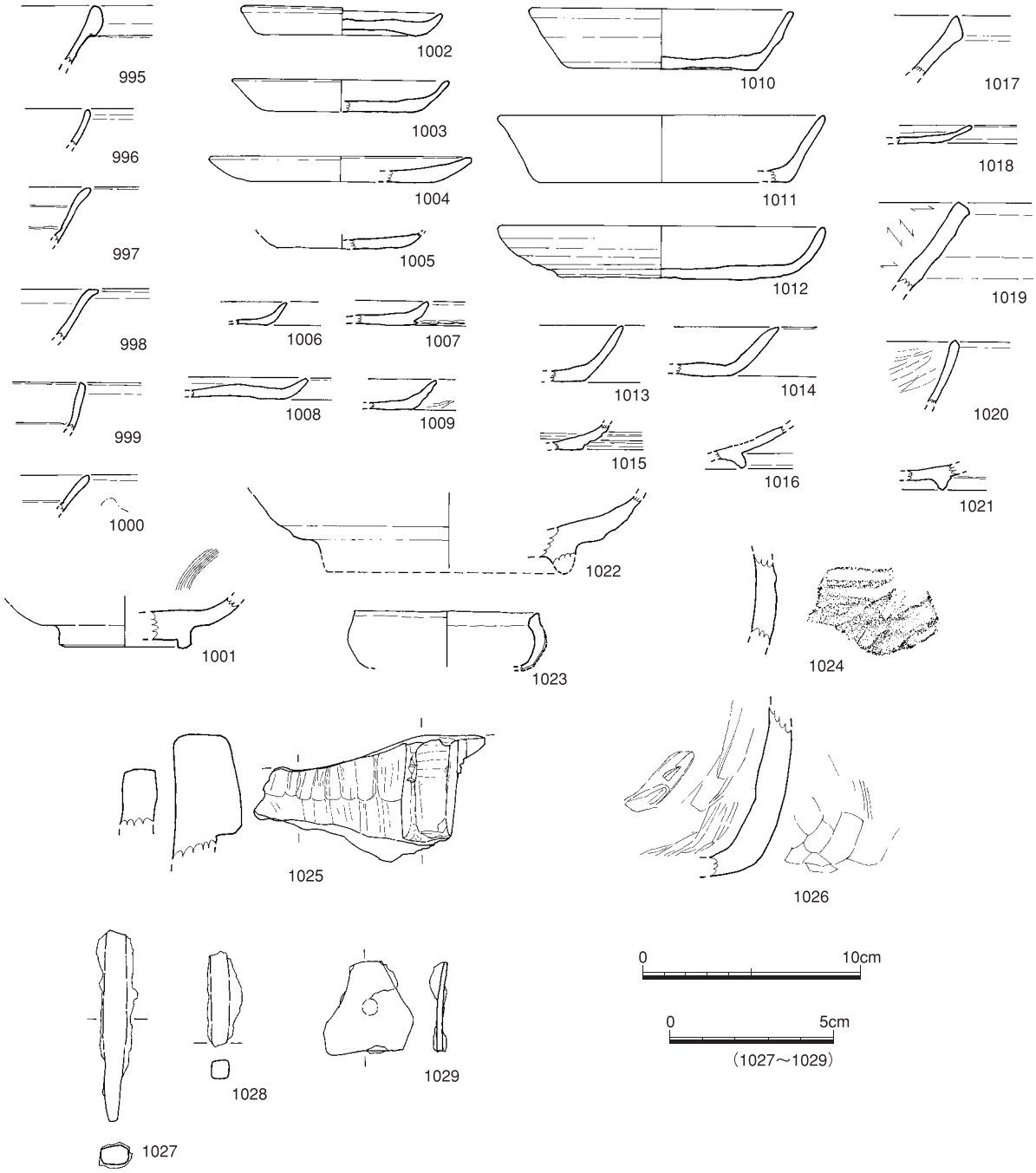


Fig. 84　SX5070 出土遺物実測図 (1/3)

である。1022 は土師質で明るい淡黄橙色を呈し胎土は細かい。径は不確か。1023 は土師器で外面は荒れる。口縁部は束口状で外面には煤が、内面下部には炭化物が付着する。1024 は土師質で外面に叩き痕が残る。甕か。1025 は滑石製石鍋で縦方向の鍔を持つ。1026 は石鍋の底部で外面に煤が付着し、内面には深いくぼみが残る。1027 から 1029 は鉄釘で断面方形である。1029 は薄い板状の鉄器で X 線写真では中央に 5 ㎜大の穴が見られる。他に同安窯系青磁片も出土している。

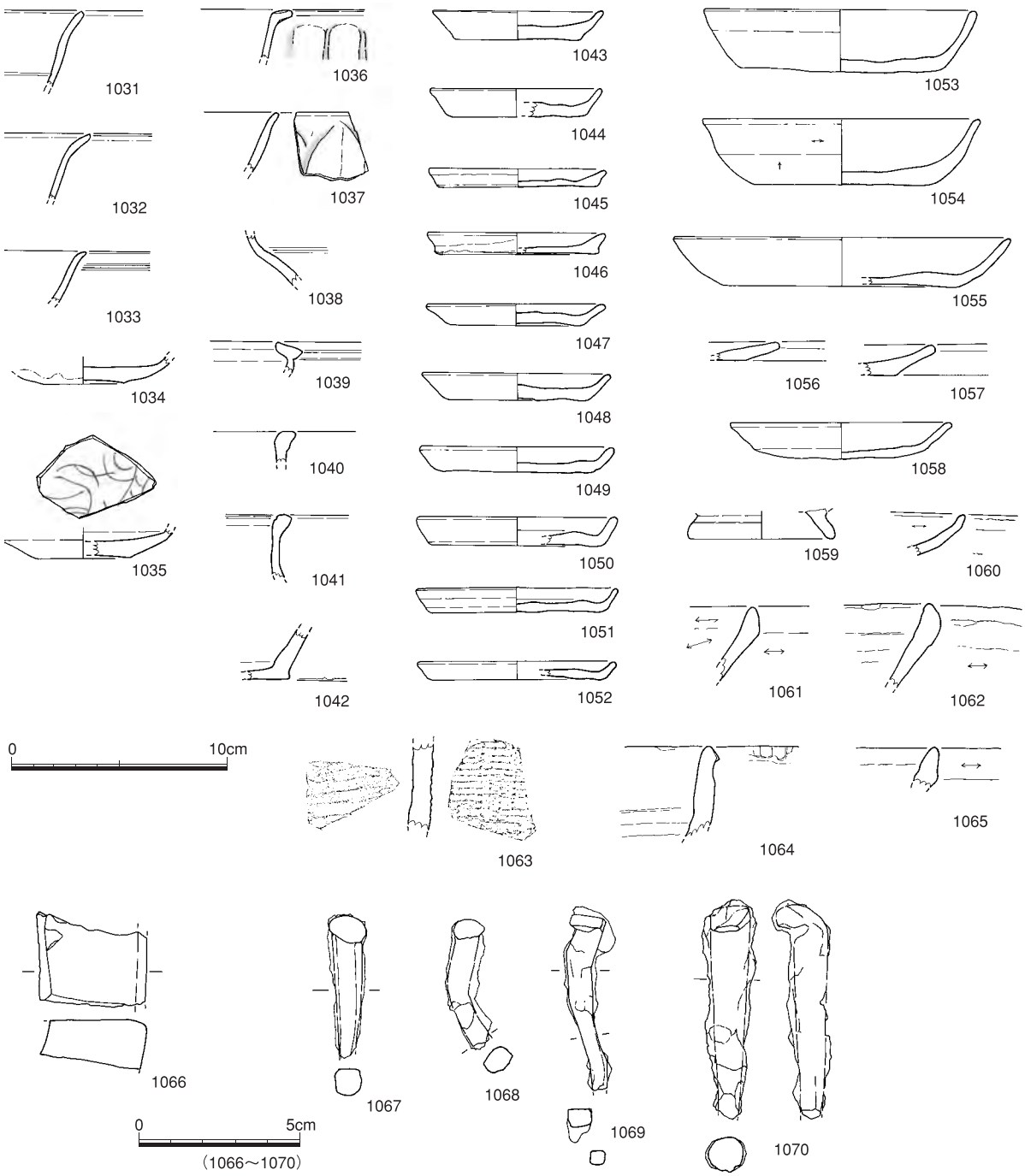


Fig. 85　SX5078 出土遺物実測図 (1/3、2)

SX5078（Fig.5）

11-2 区北東側で SK5079 を覆う。平面規模は幅 480 ㎝、延長 385 ㎝を確認し調査区外に広がる。

北側は深さ 13 ㎝ほどで、南側は深く最大で 45 ㎝ほどになる。別の遺構があった可能性があるが分離できなかった。覆土は全体に灰褐色砂質土で、遺物は小片が多く、土師皿、坏はコンテナケース 1 箱分出土した。13 世紀後半と考えている。

出土遺物（Fig.85）1031 から 1035 は白磁である。1031、1032 は口剥げの椀Ⅸ類である。1034 は皿で底付近は露胎である。1035 は内面に花文状ヘラ描文を施し、底部は釉を掻き取る。1036 は龍泉窯系青磁坏Ⅲ類、1037 は龍泉窯系青磁椀Ⅱ類である。1038 から 1042 は陶器である。1038 は壺で肩部に沈線を施し外面は茶褐色の釉を施す。1039 は鉢で外面灰緑色の釉を薄く施す。1040 は暗茶褐色、1041 は暗褐色の釉を施す。壺か。1042 は外面オリーブ色の薄い釉を施し外底は露胎である。1043 から 1052 は土師皿で 1043、1052 は 1/4、他は 1/2 弱以上の残存で、復元を含む口径 7.9、8.0、8.2、8.2、8.2、8.7、9.0、9.2、9.3、9.3 ㎝を測る。1045、1046、1052 には板目圧痕が残る。1048 は器面化粧土様で外面橙色である。1053 から 1055 は土師器の坏で復元口径 12.6、12.8、15.6 ㎝を測る。

1056、1057 は土師皿で浅く広がる器形である。1058 は瓦器皿で 1/4 からの復元口径 10.2 ㎝を測る。底はナデ調整である。1059 は瓦器または土師器の椀の底部、1060 は瓦器皿である。1061、1062 は須恵質で捏鉢と考えられる。1062 は注口部分で口縁部黒色である。1063 は土師器で外面は平行叩き、内面は当て具痕が残る。胎土精良で淡灰色を呈す。1064 は土師質で口縁部に板目の押圧を施す。外面は煤けて暗茶褐色である。1065 は瓦質で捏鉢と考えられる。1066 は石製の砥石で縦方向の擦痕が見られる。1067 から 1070 は鉄製の釘で、1067、1068 は頭が若干大きく、1069、1070 は曲げる。1070 は断面円形、他は方形である。このほかに土師質の鍋片、須恵器甕片等が出土している。

SX5081（Fig.5）

11-2 区南西隅で周囲を下げた段階で検出した。平面不正方形で、295 ㎝× 270 ㎝、深さは最大 13 ㎝ほどを測る。覆土は茶褐色土で SD5082 に近い。13 世紀代。

出土遺物（Fig.86）1071 から 1075 は白磁である。1071 は玉縁口縁の椀Ⅳ類、1073 は口禿げで外面下部は露胎である。1074 は壺等の底部か。外面底部は露胎で、外面に墨書が成される。中央上の「二」は明瞭だが、その上ははっきりしない。右側にも墨痕らしき痕跡がある。1075 は白磁皿で外面底は露胎である。1076 は龍泉窯系青磁椀Ⅱ類で畳付内は露胎である。1077 は龍泉窯系青磁椀Ⅰ類片である。1078 は青白色釉を施す合子である。1079 は陶器の壺で肩部に 5 本の浅い沈線が巡る。外面は深い緑色を呈す。1080 は陶器の壺で淡黄緑色の釉が薄くかかる。1081 は陶器の盤で淡黄茶色の器面に茶色で施文する。1082 から 1090 は糸切底の土師皿で 1082 から 1085 は復元口径 8.8、8.6、9.1、10.0 ㎝を測る。1083、1085 には板目圧痕が残る。1091、1092 は土師器の坏で 1091 には板目が残る。1093 から 1095 は土師器で鍋と考えられる。1095 には若干の煤がみられる。1096 から 1098 は瓦器椀である。1099 は黒色土器 A の椀である。1100 は須恵器の坏身である。1101 から 1105 は捏鉢で 1102 と 1103 は須恵器、他は瓦質である。1106 は常滑産の陶器で叩痕がみられる。1107 は土師器で外面に平行叩き痕、内面には当て具痕が残る。1108 は鉄釘で頭は曲げ、断面方形である。このほかに須恵器の甕片、同安窯系椀片、古墳前期土師器等が出土した。土師皿、坏片はコンテナケース 1 箱分である。

SX6805（Fig.5）

南東端で検出した。幅 190 ㎝、延長 170 ㎝を確認し調査区外に広がる。深さ最大で 12 ㎝ほどの浅い土抗である。

出土遺物（Fig.86）1109 は白磁椀でⅤ類か。1110 は高麗陶器で外面に削りだし突帯がみられ灰黒

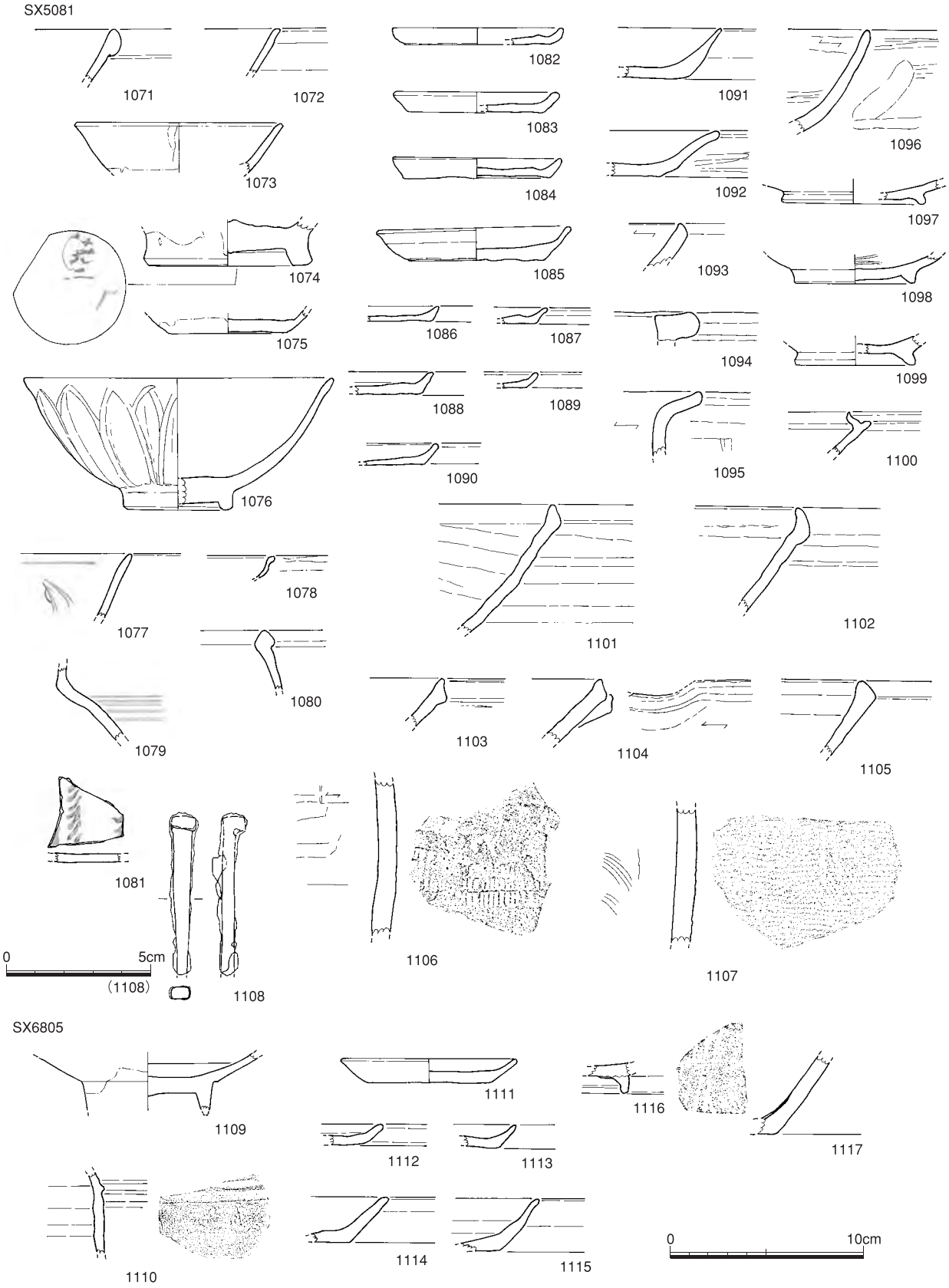


Fig. 86　SX5081、6805 出土遺物実測図 (1/3)

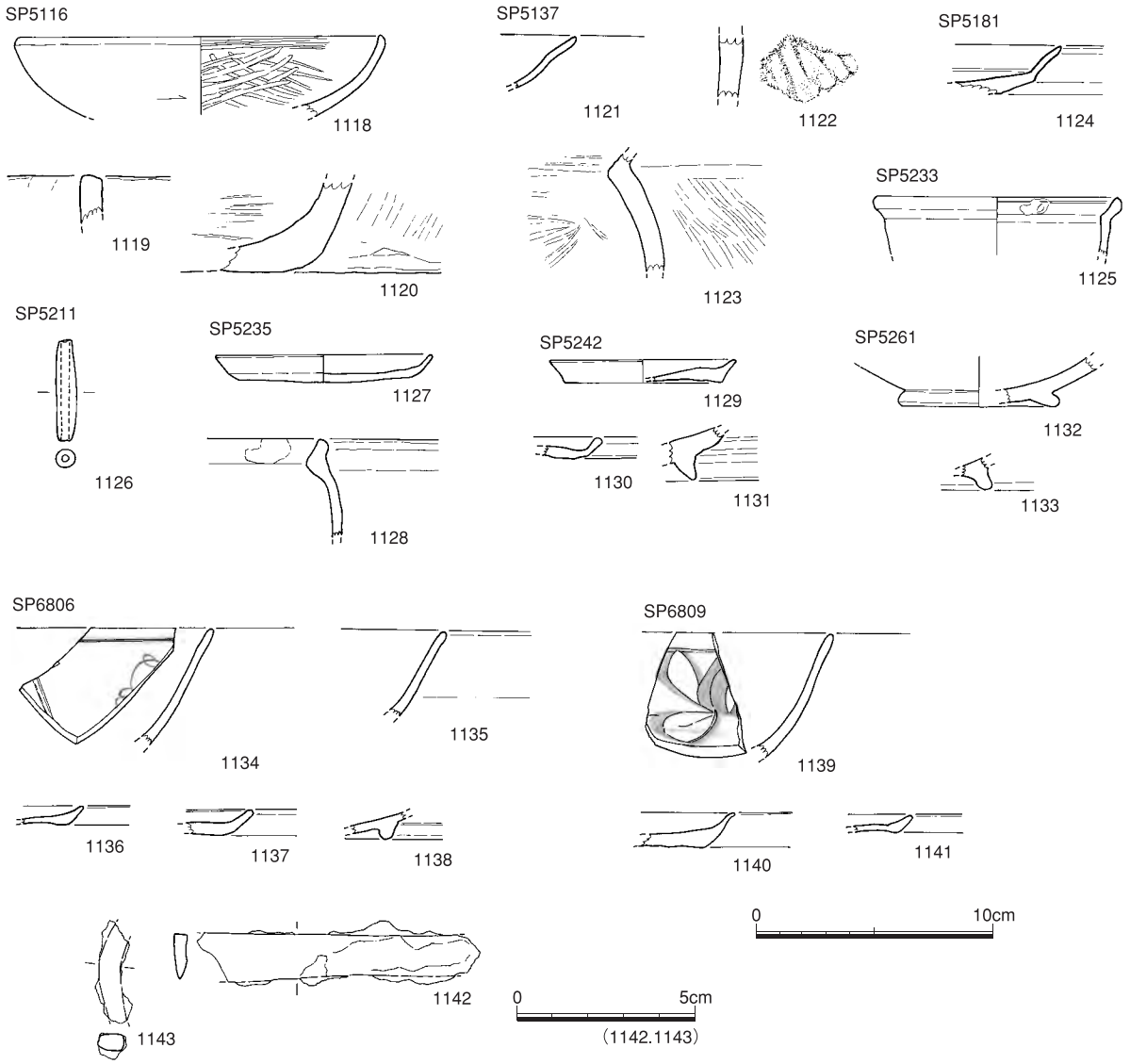


Fig.87　ピット出土遺物実測図（1/3､2）

色を呈す。1111 から 1115 は土師器の皿、坏で、1111 は体部の 1/2 を欠き、底に板目圧痕が残る。復元口径 9.1 ㎝を測る 。1116 は須恵器の坏の高台。1117 は土師器の鉢で擂目がみられる。

（7）ピット

検出したピットのうち 11-1、3 区で 97 基、11-2 区で 102 基で遺物が出土した。遺物のほとんどは小片で土師皿が多い。特徴的なものについて図示した。

出土遺物（Fig.87）　1118 は黒色土器 A で内面の研磨、外面下部の削りが残る。1119、1120 は滑石製石鍋で器面が荒い。1119 の外面には煤が付着する。1121 は土師器の坏。内面で小さく屈曲し研磨を施す。1122 は土師器の甕で外面に叩き痕が残る。1124 は白磁皿で外面下部は露胎、見込みの釉を掻き取る。1125 は褐釉陶器で口縁部内面に粘土目が残る。1126 は土錘で長さ 2.8 ㎝、重さ 2.2 g を測る。1127 は土師皿で口径 9.1 ㎝を測り板目圧痕が残る。1128 は陶器の鉢で内外面露胎である。口径 24 ㎝ほどが想定される。1129、1130 は土師皿で 1129 の復元口径は 8.8 ㎝を測る。1131 は土師器の高台で盤等の大形品である。1132 は土師器の椀である。1133 は黒色土器 A の椀である。1134

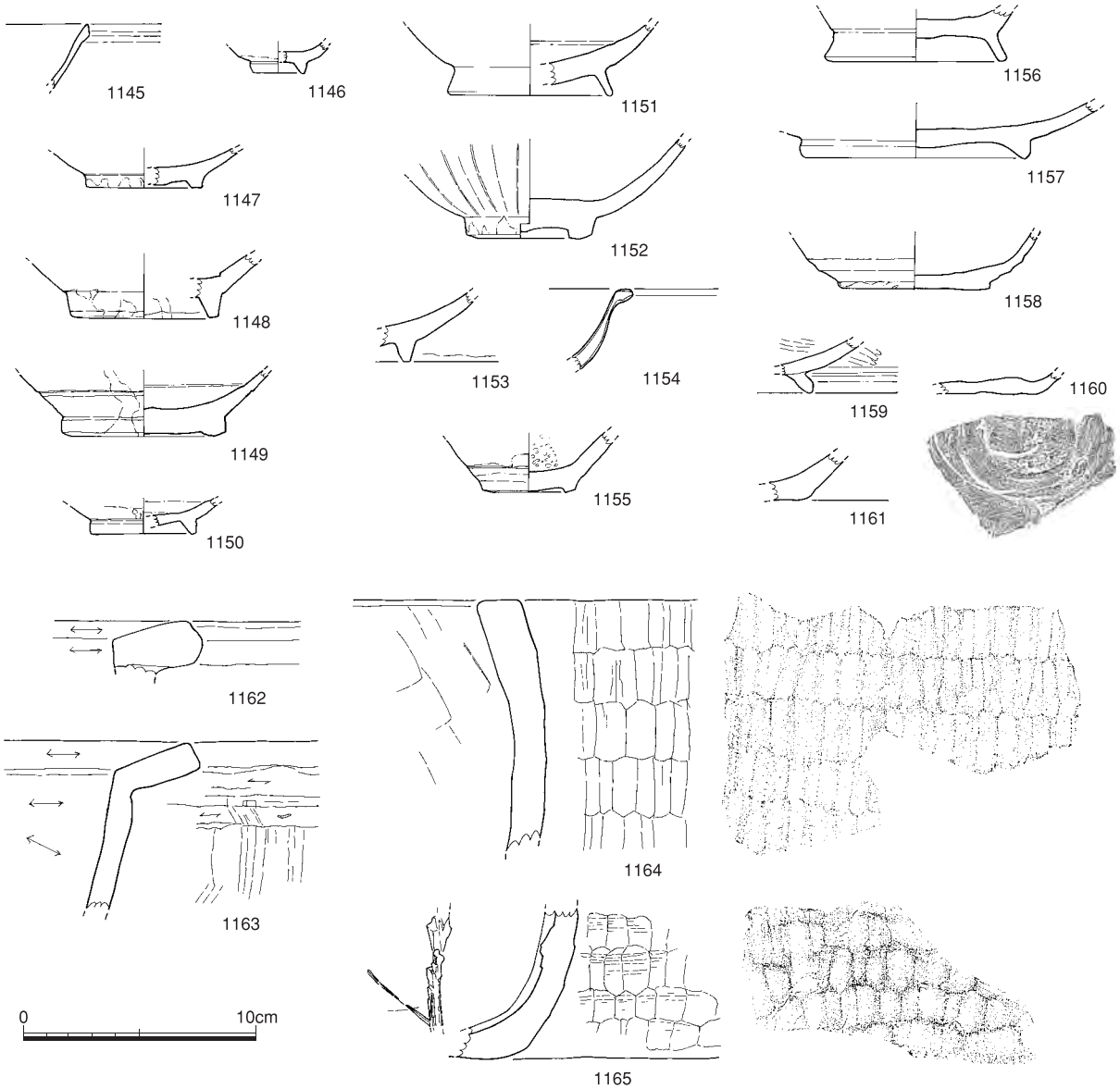


Fig. 88　その他の遺物実測図 1(1/3)

は龍泉窯系青磁椀 I 類で内面に飛雲文を施す。1135 は青磁椀である 。1136、1137 は土師皿で 1136 には板目が残る。1138 は瓦器椀である。1139 は龍泉窯系青磁椀 I 類で内面に花文を描く。1140、1141 は土師皿で 1140 には深い板目が残る。1142 は鉄器で刃部を持ち、刀子と考えられる。1143 は鉄釘である。

（8）その他の遺物

遺構から遊離した遺物のうち、残りが比較的よいものを掲載した。

出土遺物 (Fig. 88 ～ 89)　1145 はごく小さな玉縁口縁の白磁椀で、2 次焼成により内面の釉が剥げる。1146 から 1149 は白磁椀の底部である。畳付内は露胎である。1150 から 1153 は青磁椀である。1151 は高麗青磁で全面に施釉し、底部外面に粘土目が見られる。1152 は畳付き内が露胎。1153 は畳

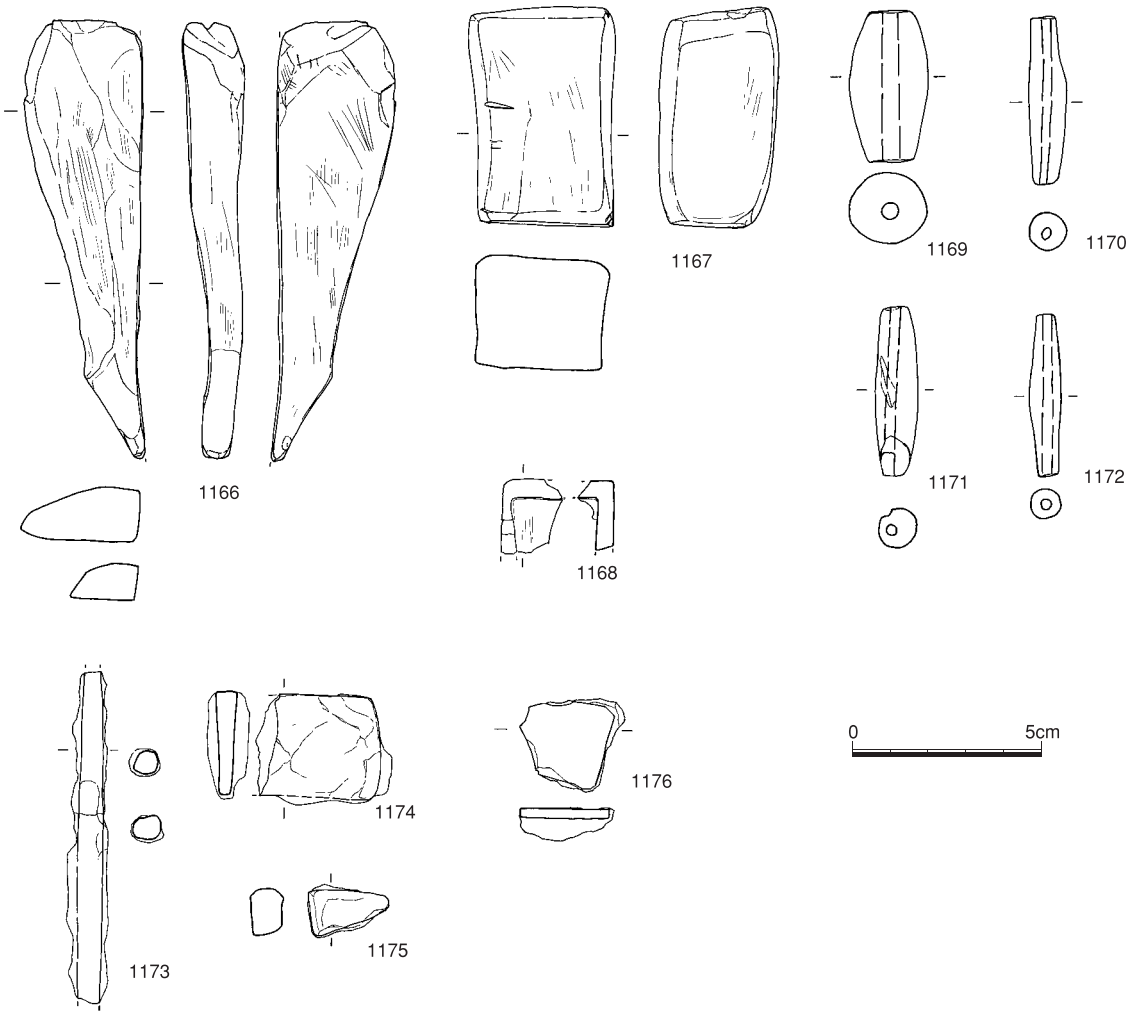


Fig.89　その他の遺物実測図 2(1/2)

付のみ露胎で外面に鎬連弁を浅く施す。1154 は青磁の坏で外面に鎬連弁をうすく施す。1155 は天目椀で外面下部は露胎。内面は黄灰色に黒斑点が見られる。外面は底が 2/3 残存する。胎土は淡黄褐色を呈し瀬戸産と考えられる。1156、1157 は土師器の椀で、1157 は内面研磨、外面底には板目が残る。1158 はヘラ切り底の土師器の坏である。1159 は土師器の椀で胎土は細かい。1160 はヘラ切り底の土師器の坏で外面は煤けて黒色をなす。1161 は瓦質で外面底に刷毛目が見られる。1162、1163 は土師質の鍋で外面に煤が付着し茶褐色を呈す。1163 は外面に刷毛目が見られる。1164、1165 は滑石製石鍋で成形痕が明瞭に残る。1164 は径 46 ㎝ほどか。1165 は内面に深さ 3.4 ㎜の工具痕を残す溝が入る。外面に煤が付着し黒色を呈す。1166 は堅い頁岩製の砥石で暗灰色を呈す。左側の面が破面である。3 面に擦痕がみられ、斜面部は深く顕著である。1167 はいわゆる天草石製の砥石で全面を使用で平滑だが、擦痕は少ない。両側面は研ぎによりくぼむ。上下面は滑らかさに欠く。1168 は滑石製の硯である。滑石の質はよく、薄く仕上げる。側面には縦方向の擦痕がみられる。1169 から 1172 は土錘で長さ 4.0、4.4、4.5、4.25 ㎝を測り、重さは 14.8、4.7、5.5、2.7g を量る。

1173 から 1175 は鉄器である。1173 は断面方形の可能性があるが錆膨のためはっきりしない。1174 は幅 3 ㎝ほどの板状を呈す。図の右側は端部と考えられるが錆のため不確実である。図の下側は厚みが薄くなるが刃となるか分からない。1175 はどこまでが生きているのか不明である。1176 は板状で全面が破面である。

６．おわりに

東入部遺跡２次調査 11 区の調査成果のうち、弥生時代以降についての報告を行った。調査は 11-1,-2 区については終了したが、11-3 区（Fig.3）は工事の影響がおよぶ部分までにとどめ、調査を最後まで行わずに保存したことを繰り返しておきたい。遺構検出も途中で、さらに遺構が広がる。

以下、各時代の遺構の時期を中心に概要を示しておきたい。

（１）弥生時代

前期の土抗１基（SK5083）、中期初めの円形住居１軒（SC5018）、甕棺、石棺墓各１基を検出した。中期初頭前後の遺構は、北側に近接する１次調査Ⅱ区、Ⅳ区においても検出している。11 区で検出した住居跡 SC5018 も一連のものと考えられるが密度は薄い。10 区、12 区でも円形住居が１軒ずつ検出されており、未調査部分内にも分布が予想される。周辺では、貞島川を隔てた北東の岩本遺跡２次調査（343 集）で前期を含めて 18 棟、180 ｍほど南の東入部２次調査８区（652、685 集）では合計 63 棟、同７次調査 48 区では８棟の竪穴住居が確認されている。細かな時期の検討をする必要があるが、住居が集中する拠点的な集落と、その周辺にも住居が散在する状況が伺われる。

SK5053 は前期中頃と考えられる遺構で、遺物がまとまって出土する例は、周辺の調査では少ない。西側 180 ｍほどの６区では突帯文期の甕棺墓 16 基が出土しており、古い時期からの集落の存在が予想される。

甕棺墓 ST5041 の上甕は、くびれが強く古い要素を残すが胴部径は大きく金海式の形態を呈す。下甕は細身で伯玄社式の形態を持つ。甕棺墓としては両型式の移行期的な様子を示し、金海式古段階と考えられる。25 の小壷も微妙な形態だが、城越式の古い段階にとらえることができよう。ST5042 の壷 26 は頸部の立ち上がりがはっきりし城越式の古い時期と考える。これらの 12 ｍほど北西には、１次調査Ⅳ区（577 集）で２基の前期の甕棺墓が出土している（Fig.3）。同じ墓域をなすと考えられる。

（２）古墳時代

竪穴住居 11 棟、土抗、ピットを検出した。遺構は 11-3 区、調査区外に広がると考えられる。遺構の時期は久住編年（久住 1999）の 1A 期からⅢ A 期におよび、およそ次のように考えられる。

Ⅰ：SK5022　　ⅡA：SC5001、SC5007、SC5008　　ⅡB：SC5002、SC5004、SC5005、SC5006、SC5019
ⅡC：SC5003、SC5084　　ⅢB：SC5085 切り合い関係が SC5006 から 5008 にある。SC5008 に切られる SC5007 が古い可能性もあるが、遺物が少なく同じⅡ A の範囲でとらえておきたい。

Ⅰ期の SK5022 からは在地系の甕、壷が出土した。ⅡA 期は SC5001、5008 でまとまった量の遺物が出土し、在地系の土器が主体で畿内系の高坏等が若干出土している。ⅡB 期は在地系の甕に加えて布留式系の甕が多く伴い、五様式系・庄内式系の甕、山陰系の壷や鼓形器台、畿内系の広口壷等が加わる。また半島系爐型土器の影響を受けたと考えられる 251、501 が出土している。ⅡC 期は SC5003 で出土土器のほとんどを布留式系が占め、在地系はわずかに小片を含む程度である。ⅢB 期の SC5085 では、甕が粗雑化した布留式系のみになる。在来系土器に外来系土器が加わり、やがて主体となる変化とその時期は、これまで説明されていたものと同様の様相を示す。

周辺では北東 100 ｍほどに位置する岩本遺跡２調査地点で 15 棟、北西に隣接する東入部遺跡１次４区で 10 棟の古墳時代前期の住居跡を検出している。これらは 11-3 区の保存部分への広がりを含めて同じ集落域ととらえることができよう。重留遺跡、岩本遺跡、東入部遺跡にかけて古墳時代前期の住居が検出されているが集中した集落は確認できていない。今回の集落域は当該期の中心的集落と考えられる。

（３）中世以降

掘立柱建物３棟、溝５条、井戸３基、土抗･木棺墓５基、土抗、くぼみ状土抗を検出･報告した。遺構の分布は、11-1 区では散漫で、11-3 区も十分検出できていない可能性があるが薄い。これに対して 11-2 区は遺構が集中し切り合いも多い。

（遺構の時期） SD5075 は他の遺構に切られることなく、近世陶器を出土し検出遺構の中では新しい。その他の出土遺物は 12 世紀代から 14 世紀初めにほぼおさまり、主に 13 世紀代と考えられる。しかし遺物のほとんどは小片でかつ覆土出土であり、混じり込みもあり得る。遺構の下限を示すものには必ずしもなり得ない。大枠では上記の時期に収まると考えられるが､細かな時期は決めがたい。以下、遺物が遺構に所属する事を前提にして遺構の時期をたどりたい。まず、切り合い関係がある遺構の遺物と時期を確認する。

SD5009 から SD5011 は少ない遺物から判断すると SD5011 が 12 世紀後半、SD5009 が 13 世紀前半で切り合いに矛盾はない。

SX5070 は SE5057 に切られ、SB5087 を覆う。SX5070 は復元した土師皿の径、龍泉窯系青磁Ⅰ類、東播系捏鉢から 12 世紀後半から末。これを切る SE5057 も同様の組成である。SB5087 は遺物が少ないが、東播系の捏鉢 607 から時期は近い。3 遺構とも 12 世紀後半から末と考えられる。

SX5078 は SK5056 に切られ、SK5079、SB5086 を切る。さらに SB5086 は土抗墓 SK5062 を切る。SK5056 は瓦質土器の釜 965 が 14 世紀代以降で新しい。SX5078 は白磁椀Ⅸ類、青磁坏Ⅲ類と土師皿から 13 世紀後半と考えられる。SK5079 は白磁皿Ⅸ類 853 から、同様の時期と思われる。SB5086 は龍泉窯系青磁 1 類が最も新しく矛盾はない。土抗墓 SK5062 は SK5063、SK5064 と位置的に並んでおり、時期は近いと考えられる。そのなかでは SK5064 の龍泉窯系青磁坏Ⅲ類 817 の存在から 13 世紀中頃以降と考えられる。以上、この切り合いに関連する遺構は 13 世紀中頃から後半に構築、埋没し SK5056 が築かれたと考えられる。

SK5052 は白磁皿Ⅸ類と土師皿から 13 世紀後半とした。これに切られる SK5051 は覆土、出土土師皿径が近く、大きな時期差はないと考えられる。

土抗 SK5053 から 5055、5073 は互いに切り合う。SK5073 の土鍋 851 が 13 世紀代でこれを切る SK5055 も近い時期と考えられる。

（遺構の変遷） 以上を踏まえておよそではあるが遺構の変遷をたどっておく。

12 世紀前半から中頃に 11-1、-3 区の SK5014 ～ 5016、SB5044 と 11-2 区の SE5066 が築かれる。この時期は調査範囲内での分布は薄い。

12 世紀後半から 13 世紀初めには SD5011、SD5009 が掘削され井戸 SE5057、掘立柱建物 SB5087 が築かれる。その後 13 世紀以降には 11-2 区で遺構が密になる。13 世紀前半には井戸 SE5059 や土抗 SK5060 が、後半には SK5064、5079 等の土抗･木棺墓、SK5052、SK5073 等の土抗、溝 SD5077 等が築かれる。

11-2 区の遺構の集中は、12 世紀後半から 13 世紀を中心とした屋敷地と考えられる。SD5009 ～ 5011 がその区画溝としては位置的に合うが、遺物の時期がやや古く量も他の遺構と比べて少ない。周辺の調査を待ちたい。また、南側の 12 区で 12 世紀代の遺構･遺物が多量に出土している。中世の遺構の分布については、12 区報告時に再度考えたい。

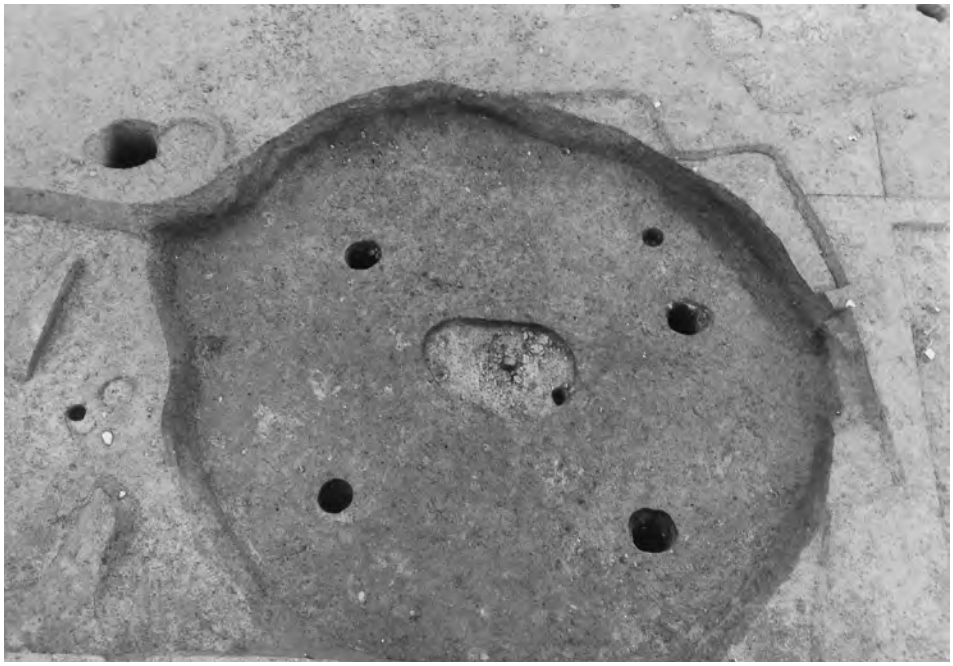
最後に、少破片ではあるが楠葉系瓦器椀（601、760 等）、白磁Ⅳ類を模倣の精製土師器椀（872）、墨書白磁（1074）、高麗陶器（1110）、高麗青磁（1151）が出土したことを繰り返しておきたい。

東入部遺跡第２次 11 区遺構台帳（弥生時代以降）

遺構番号	種類	区	形態	規模(長さ×幅×深さ)cm	出土遺物	図	写真	時期
5001	竪穴住居	11-1	方形	405×306×20	古式土師器、弥生・縄文土器、玄武岩片、黒曜石	18	9	古墳前期
5002	竪穴住居	11-1	方形	280×258×20	古式土師器、弥生・縄文土器、炭化物、黒曜石	21	10	古墳前期
5003	竪穴住居	11-1	方形	540×390×40	古式土師器、弥生・縄文土器、黒曜石・安山岩・玄武岩片、鉄製品	23	11	古墳前期
5004	竪穴住居	11-1	方形	560×420×45	古式土師器、弥生・縄文土器、柱状片刃石斧、砥石、台石、黒曜石	30	12	古墳前期
5005	竪穴住居	11-1	方形	536×513×34	古式土師器、弥生・縄文土器、中世遺物少量、黒曜石	37	13	古墳前期
5006	竪穴住居	11-1	方形	480×435×60	古式土師器、弥生・縄文土器、土師皿(小袋1)、石鍋・陶器片、黒曜石、鉄滓小１鉄釘	40	14	古墳前期
5007	竪穴住居	11-1	方形	280×295(＋α)×10	古式土師器、弥生・縄文土器、黒曜石	56	15	古墳前期
5008	竪穴住居	11-1	方形	一辺260 深さ55	古式土師器(大袋１)、弥生・縄文土器、黒曜石	56	16	古墳前期
5009	溝	11-1		幅86　深さ26	古式土師器(大袋1)、弥生・縄文土器、土師皿・坏(小袋１)、黒曜石	5		13世紀前半
5010	溝	11-1		幅64×20	古式土師器、弥生・縄文土器、土師皿、白磁椀片、青磁椀Ⅱb他、褐釉壷片、黒曜石	5		13世紀
5011	溝	11-1		幅200×20	縄文土器(小袋1)、弥生土器(小袋1)、土師器甕、須恵器片、土師皿・坏(大袋1)、白磁椀・花輪皿片、龍泉系青磁椀Ⅰ類、陶器片、黒曜石、鉄滓小１、鉄釘	5		12世紀後半
5012	土抗	11-3	不整円形	110×90×13		78		中世
5013	土抗	11-3	不整円形	97×74×20				中世
5014	土抗	11-3		径80	白磁皿・椀、土師皿・坏、瓦器椀、縄文土器、古式土師器少量、鉄滓(243ｇ)	78		12世紀前半
5015	集石	11-3	不整円形	166×110×30	土師器坏少量、須恵器台坏、瓦器、黒色土器、陶器	78	21	12世紀前半
5016	集石	11-3	不整円形	200×190×35	土師皿・坏、甕、瓦器椀、黒色土器、白磁椀Ⅳ類・皿、陶器、須恵器甕、弥生土器、黒曜石	78	22	12世紀前半
5017	竪穴住居	11-1	方形	幅160+深さ50	古式土師器、黒曜石	59	17	古墳前期
5018	竪穴住居	11-1	円形	5.5×5.1	弥生中期土器、叩き石、石斧、土師器甕、縄文土器、黒曜石	7	3	弥生中期
5019	竪穴住居?	11-1	方形		古式土師器甕、黒曜石	59		古墳前期
5034	土抗	11-1	不整形	86×44×12	古式土師器片	66		古墳前期
5035	土抗	11-1	円形	径64×20	古式土師器片	66		古墳前期
5036	ピット	11-1			古式土師器、弥生土器、黒曜石	66		古墳前期
5041	甕棺墓	11-1		径110	前期甕棺上下、小壷、弥生土器、縄文土器、古式土師器、瓦器	11	5、6	弥生前期
5042	石組墓	11-1		長さ50、幅25	中期壷、土師皿片、縄文土器	13	5、7	弥生前期
5044	掘立柱建物	11-1		2×3間　庇付き	瓦器、土師皿	70		12世紀前半
5045	掘立柱建物	11-1		2×1間	古式土師器	66		古墳前期?
5051	土抗	11-2	円形	200×210	土師皿、青磁片、白磁片、瓦器片、石鍋、古式土師器、弥生・縄文土器、鉄滓(143ｇ)、黒曜石、鉄釘	81	28	13世紀後半
5052	土抗	11-2	円形	130×80×43	土師皿・坏・椀(箱1)、瓦器椀、土師器甕、白磁椀Ⅳ類、青磁椀Ⅱ-1a類・皿Ⅸ・合子・壷、陶器、須恵器捏鉢、石鍋、土錘、砥石、縄文、鉄釘	81	28	13世紀後半
5053	土抗	11-2	楕円形	120×82×40	土師皿、瓦器椀、土師器鍋?、須恵器、同安窯系青磁椀Ⅰ類、白磁椀Ⅴ類・皿、石鍋、縄文土器、黒曜石、鉄釘、陶器、黒色土器	82		13世紀後半
5054	土抗	11-2	楕円形	110×110×24	土師皿(小袋1)、瓦器椀、陶器壷、縄文土器、瓦質釜	82	29	13世紀後半
5055	土抗	11-2	楕円形	120×70×20	土師皿(小袋1)、瓦器、土師器甕、白磁椀、陶器甕、須恵器捏鉢、縄文土器、黒曜石	82		13世紀後半
5056	土抗	11-2	方形	84×66×58	古代?土師器甕、黒曜石、瓦質釜	82		14世紀～
5057	井戸	11-2	円形	116×110	土師皿(小袋1)、龍泉窯系青磁椀1-2類、瓦器椀、黒色土器A、鉄鏃、鉄滓小１、鉄釘	72	23	12世紀後半
5058	井戸	11-2	円形	5057の一部	土師器皿・坏(中袋1)、瓦器椀、白磁皿Ⅵ1a・Ⅷ1・Ⅷ2b、陶器、須恵器、石鍋、縄文土器、玄武岩、黒曜石、鉄滓小１、鉄釘、鉄製品			12世紀後半
5059	井戸	11-2	円形	305×270	土師器皿・坏(中袋1)、瓦器鉢、白磁、青磁椀Ⅱ類、陶器	72	25	13世紀前半
5060	土抗	11-2	不整円形	幅190 深さ3	土師皿・坏(中袋1)・甕、瓦器、陶器、滑石、弥生・縄文土器、黒曜石	82		13世紀前半
5061	土抗	11-2	不整円形	幅112　深さ26	土師皿・坏・甕、青白磁、弥生土器	82		13世紀前半
5062	木棺墓?	11-2	長方形	184×90×34	土師皿・坏(小袋1)・鍋?、瓦器、白磁、陶器壷・盤、弥生土器、黒色土器	75	26	13世紀前半
5063	木棺墓?	11-2	長方形	158×96×32	土師皿・坏(中袋1)、土師器鍋?、瓦器椀・捏鉢、白磁Ⅳ・Ⅵ類、龍泉青磁椀Ⅱ類・皿Ⅰ類、陶器壷、須恵器、石鍋、鉄釘、黒曜石	75		13世紀後半
5064	木棺墓?	11-2	長方形	180×136×30	土師皿・坏(小袋1)・鍋?、瓦器椀、白磁坏Ⅲ4b類・Ⅳ類、龍泉青磁Ⅰ?・Ⅱa類、陶器壷?、石鍋、鉄釘、鉄板	75	27	13世紀後半
5065	井戸	11-2	円形	5066の一部	土師皿・坏(小袋1)、瓦器椀、白磁、砥石			12世紀前半
5066	井戸	11-2	円形	径約210 深さ90	土師皿・坏(小袋1)・椀、瓦器椀、白磁Ⅳ・Ⅴ類、青磁、須恵器、石鍋、縄文土器、鉄滓(4g)、砥石	72	24	12世紀前半
5067	集石	11-2	円形	径250	土師器甕、瓦器皿、青磁、弥生中期壷	82		中世
5068	土抗	11-2	不整形		土師皿・坏(小袋1)、瓦器、青磁、陶器、須恵器捏鉢、弥生土器、土鍋	82		13世紀
5069	集石	11-2	円形	径160		5		中世
5070	土抗	11-2	不整形	幅290　延長482	土師皿・坏(箱1)・台付坏・甕・鍋、白磁椀Ⅳ・Ⅴ類・皿、青磁椀・皿、瓦器、須恵器、石鍋、黒曜石、鉄釘、鉄片	5		12世紀後半
5071	溝	11-2		幅50		5		13世紀
5072	くぼみ状土抗	11-2	円形	幅90 深さ12	土師皿・坏、縄文土器	5		中世
5073	木棺墓?	11-2	楕円形	190×120×25	土師皿・坏・甕・鍋、白磁小壷?、陶器壷・盤、縄文土器	75		13世紀後半
5074	くぼみ状土抗	11-2			土師皿・坏、縄文土器、龍泉青磁椀Ⅱ類、陶器盤、弥生土器、黒曜石	5		13世紀
5075	溝	11-2		幅45 深さ16	土師皿・坏、瓦器	5		近世?
5076	溝状	11-2			土師皿・坏(中袋1)、瓦器椀、陶器捏鉢、龍泉青磁Ⅱb？・1-4b・皿Ⅷ2、古墳土師器、弥生・縄文土器、黒曜石、鉄釘、刀子？須恵器陶器	5		近世?
5077	溝	11-2		幅115 深さ18	土師皿・坏(大袋1)、瓦器椀・皿、龍泉椀Ⅰ・皿Ⅰ類、青磁皿Ⅲ4類、弥生土器、石鍋再利用品、黒曜石、鉄釘、陶器	5		13世紀後半
5078	くぼみ状土抗	11-2	不整形	幅480、延長385	土師皿・坏(箱1)・甕・鍋、白磁椀Ⅴ・Ⅸ・Ⅸ・皿Ⅳ?類、龍泉青磁椀Ⅱb・Ⅲ?・皿・坏Ⅲ4類、陶器壷・盤・小鉢Ⅳ?、弥生・縄文土器、玄武岩、砥石、黒曜石、鉄釘	5		13世紀後半
5079	土抗	11-2	隅丸長方形	122×162×60	土師皿・坏(中袋1)、瓦器坏、白磁皿Ⅸ類・椀、龍泉青磁Ⅱb、陶器盤、石鍋、鉄製刀子?、弥生縄文土器、黒曜石、鉄製品	5		13世紀後半
5081	くぼみ状土抗	11-2	不整形	295×270	土師器皿・坏(箱1)・椀・鍋?・甕、瓦器椀・捏ね鉢、黒色土器、白磁椀Ⅳ・皿Ⅳ・Ⅸ2・合子・墨書底部、龍泉青磁椀Ⅰ2・Ⅱa・Ⅱb、同安青磁椀Ⅰ、陶器壷・盤、須恵器甕・坏・捏ね鉢、弥生縄文土器、玄武岩、石鍋、石包丁、黒曜石、鉄釘	5		13世紀
5082	溝・撹乱	11-2		幅68 深さ20	土師皿・坏(小袋1)、白磁片、龍泉青磁椀Ⅱ2-1・坏、伊万里椀、陶器皿、褐釉、石鍋、瓦質土器、ビー玉、瓦、古式土師器、須恵器、黒曜石	5		中世・現代
5083	土抗	11-2	円形		弥生前期土器、黒曜石	9	4	弥生前期
5084	竪穴住居	11-2	方形	366×440×37	古式土師器、弥生土器、黒曜石	62	18	古墳前期
5085	竪穴住居	11-2	方形	一辺530×深さ70	古式土師器、弥生土器、黒曜石	64	19	古墳前期
5086	掘立柱建物	11-2		2×5間	青磁椀、土師器坏	70		13世紀後半
5087	掘立柱建物	11-2		2×4間	土師皿、須恵器捏鉢、瓦器	70		12世紀後半
5205	土抗			80×61×31	土師皿・坏、瓦器、須恵器、陶器	82		13世紀
6805	くぼみ状土抗			幅190 延長170	須恵器、土師皿・坏、瓦器、白磁椀、高麗陶器	5		14世紀～

Ph. 1　11 区全景（北から）

Ph. 2　11 － 1、2 区全景（東から）

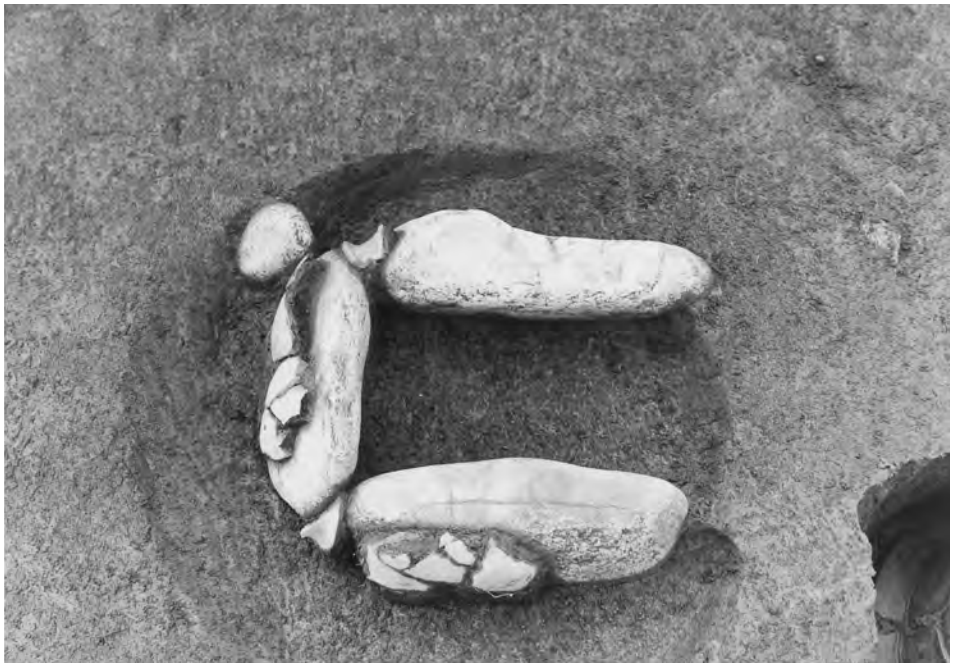


Ph. 3 SC5018（東から）

Ph. 4 SK5083（西から）

Ph. 5 ST5041、5042（東から）

Ph. 6 ST5041（南から）



Ph. 7 ST5042（東から）

Ph. 8 ST5042（南から）

Ph. 9 SC5001（北東から）

Ph. 10 SC5002（東から）

Ph. 11 SC5003（東から）

Ph. 12 SC5004（北から）

Ph. 13 SC5005（南から）

Ph. 14 SC5006（北から）

Ph. 15 SC5007（西から）

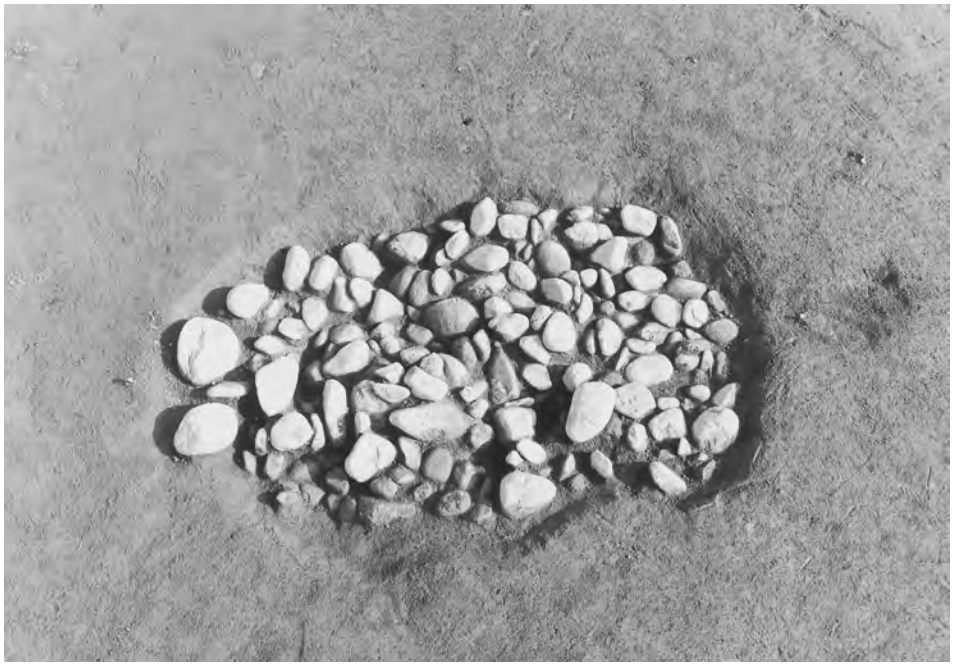
Ph. 16 SC5008（南から）

Ph. 17 SC5017（南から）

Ph. 18 SC5084（北東から）

Ph. 19 SC5085（北から）

Ph. 20 SK5022（南から）



Ph. 21 SK5015（西から）

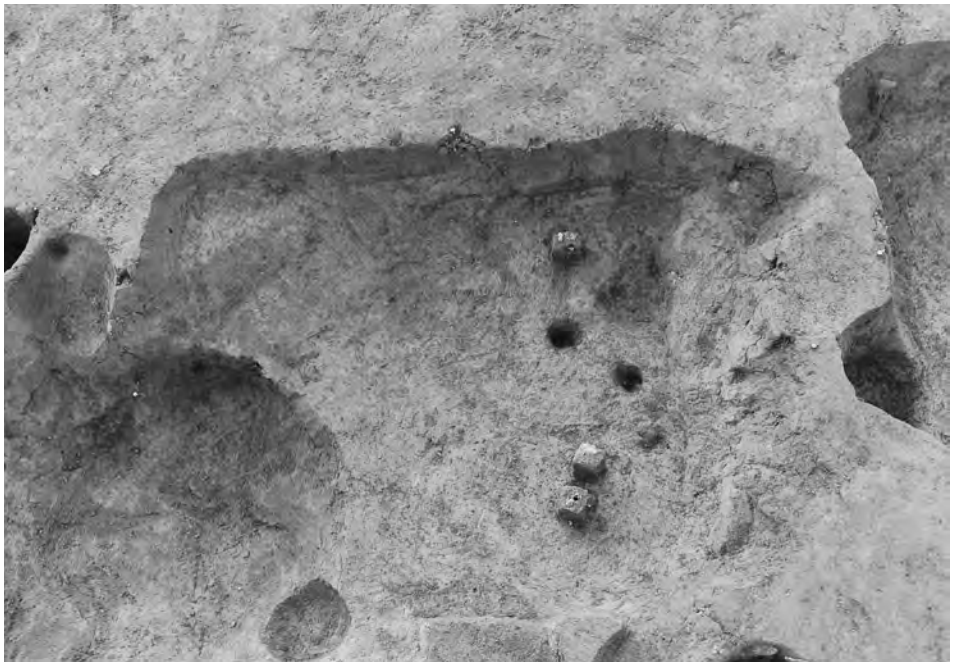
Ph. 22 SK5016（西から）

Ph. 23 SE5057（東から）

Ph. 24 SE5066（南から）

Ph. 25 SE5059（北西から）

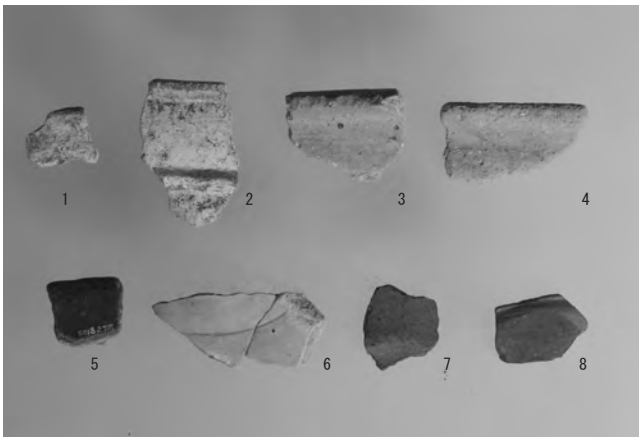
Ph. 26 SK5062（北から）



Ph. 27 SK5064（東から）

Ph. 28 SK5051、5052（北西から）

Ph. 29 SK5054（北東から）

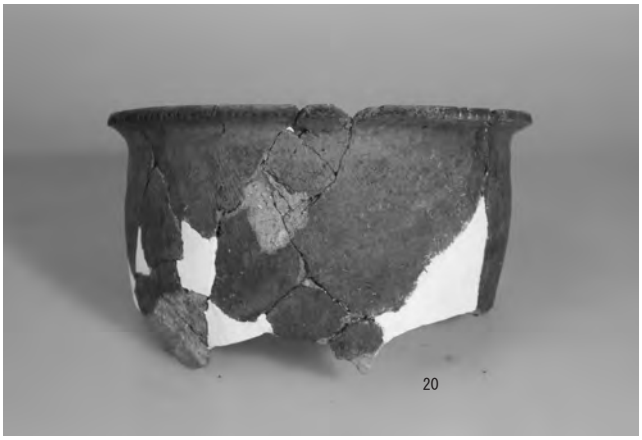

1
2
3
4
5
6
7
8

16

17

18

19


20

21

22

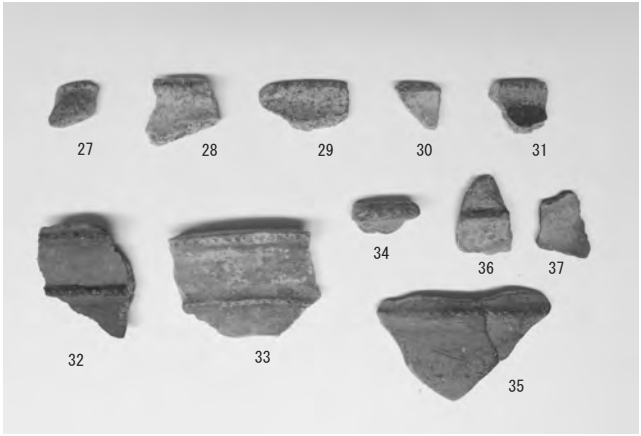
23

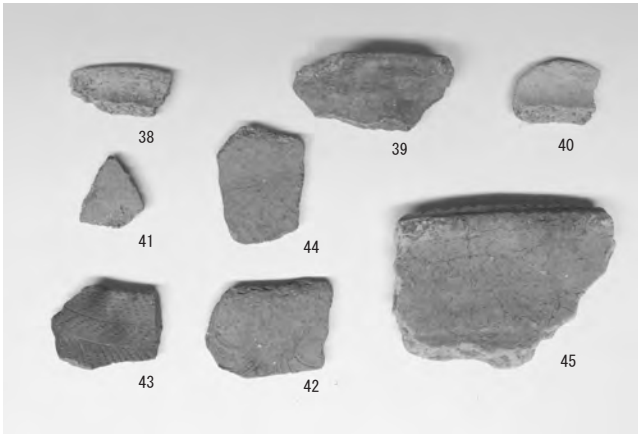
23-2

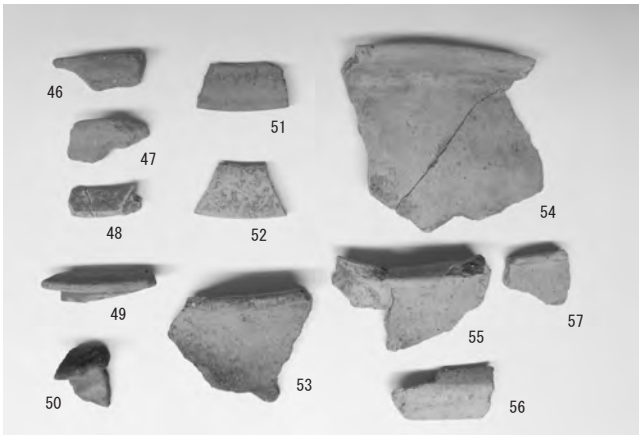
24

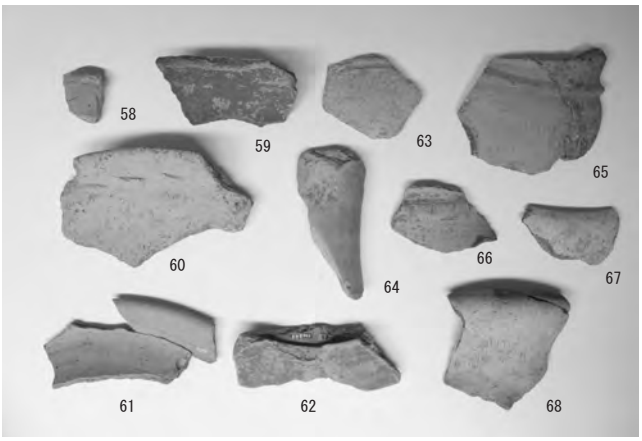
25

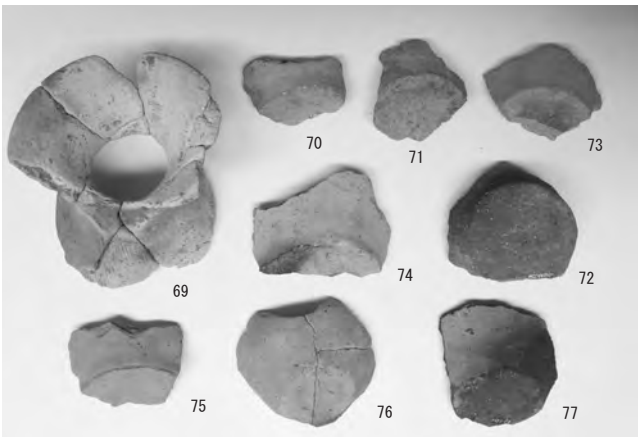
26


27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37

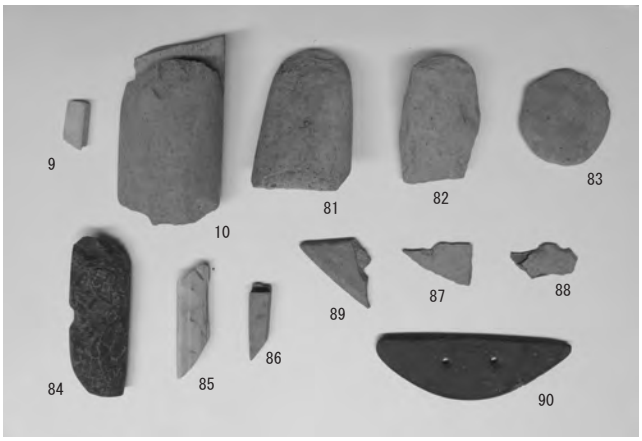

38
39
40
41
44
43
42
45


46
51
47
48
52
54
49
55
57
50
53
56

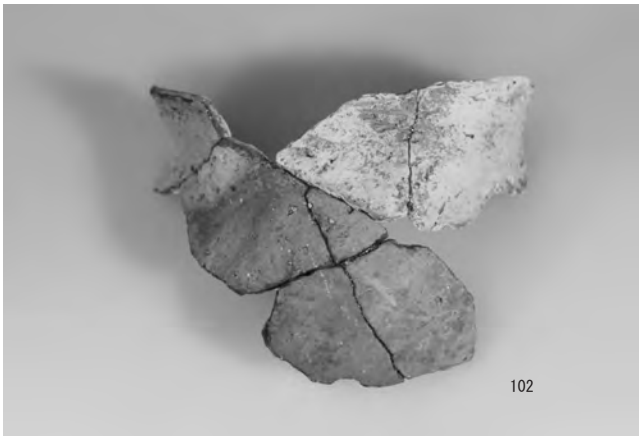

58
59
63
65
60
64
66
67
61
62
68

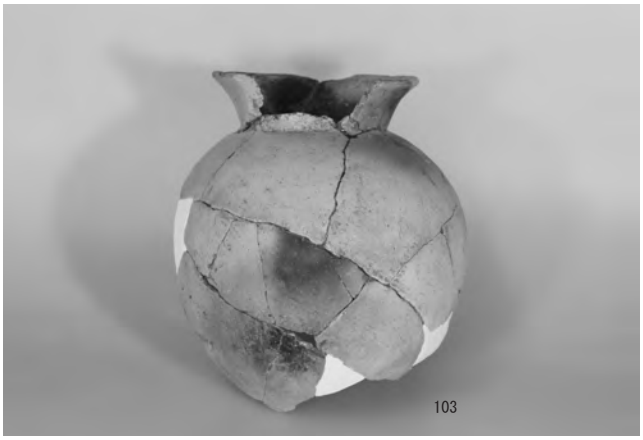

70
71
73
69
74
72
75
76
77

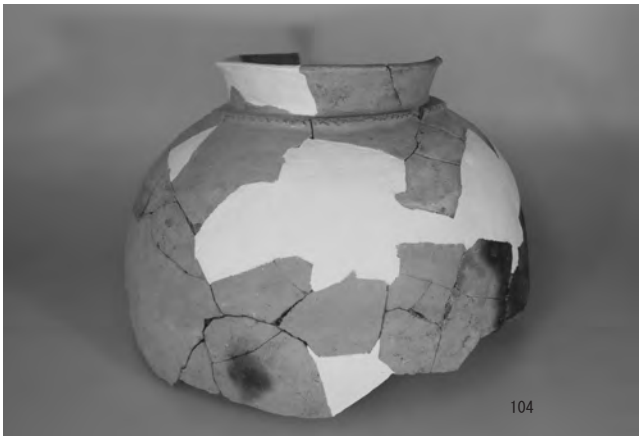
13
12

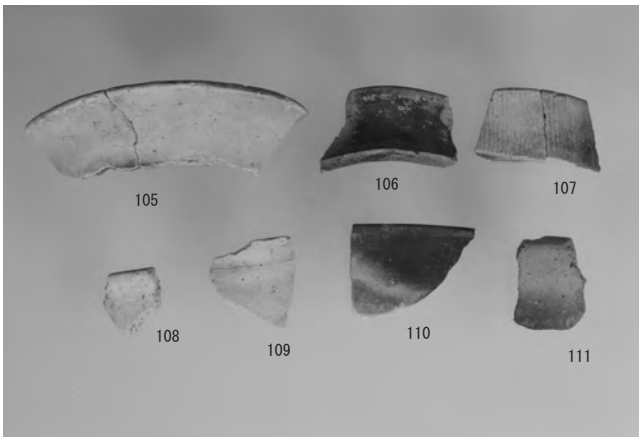

9
10
81
82
83
87
88
89
86
84
85
90

101


102

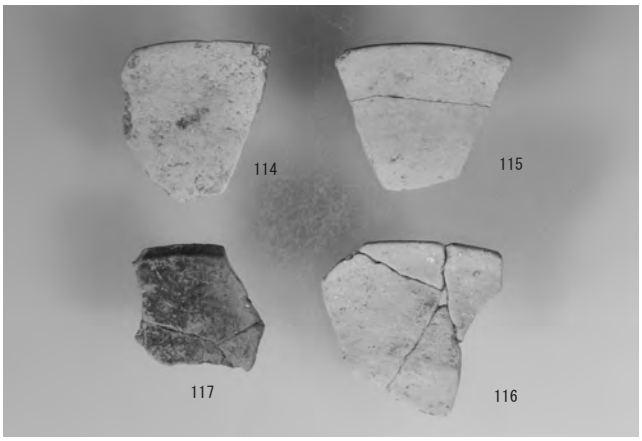

103

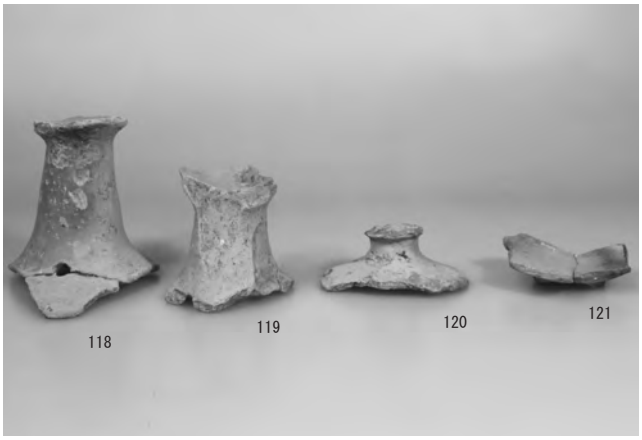

104


105
106
107
108
109
110
111

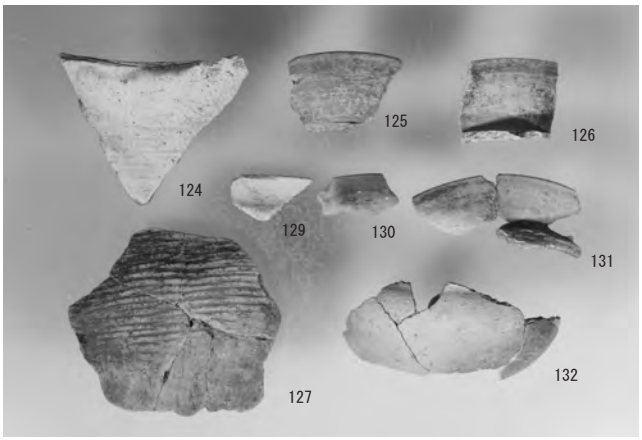
112

113


114
115
117
116

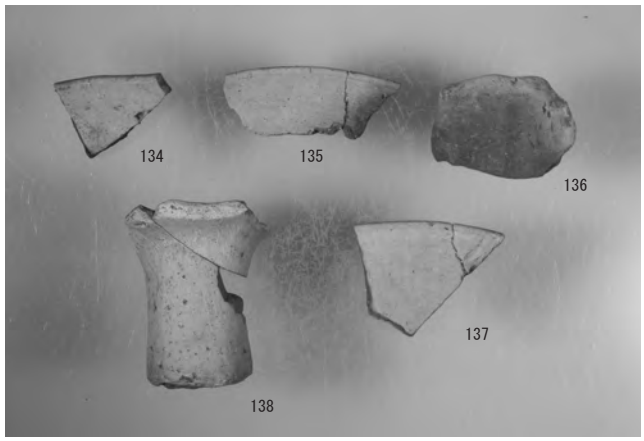

118
119
120
121

123
122

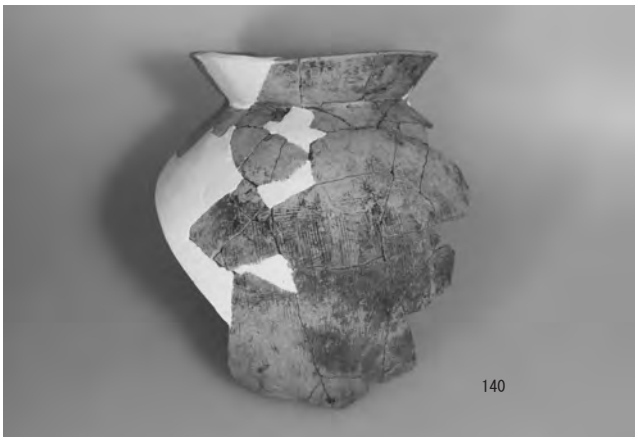

125
126
124
129
130
131
127
132

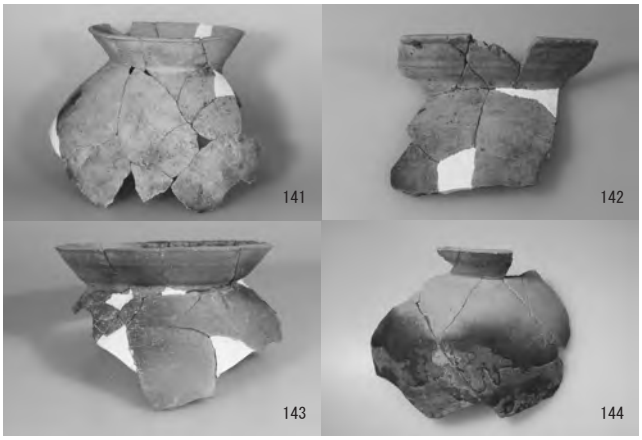
128

133


134
135
136
137
138

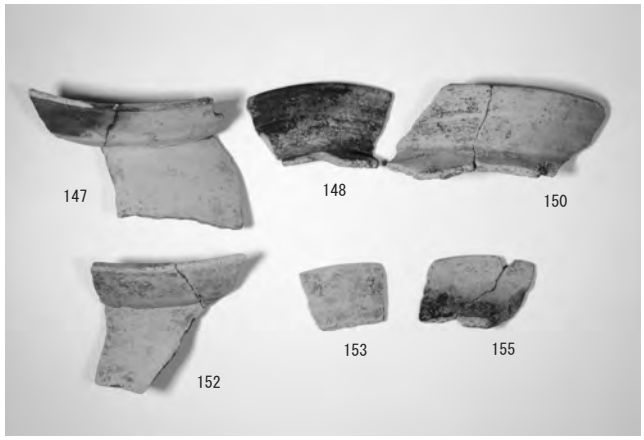
139


140


141
142
143
144

145

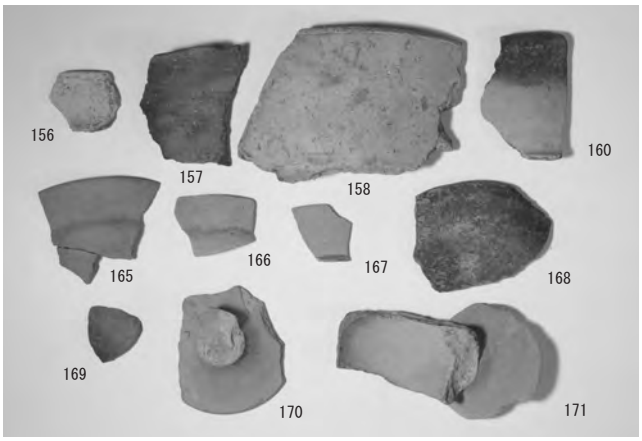
146


147
148
150
152
153
155

149

151

154


156
157
158
160
165
166
167
168
169
170
171

159

161

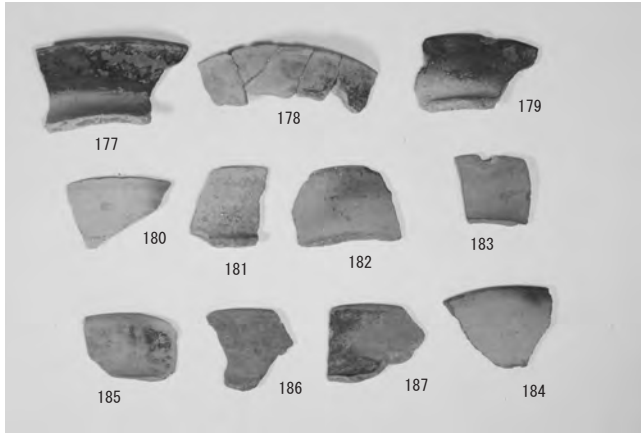
162

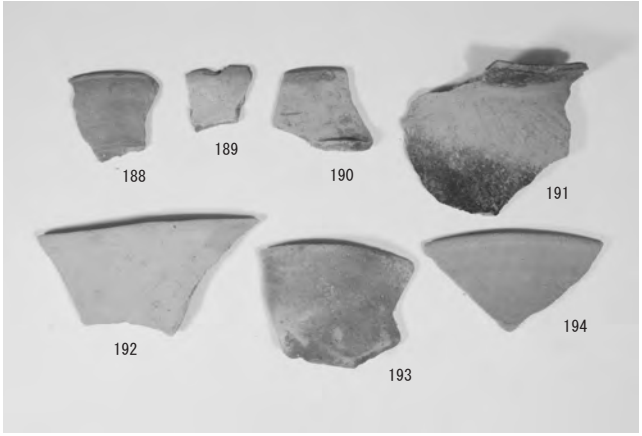
163

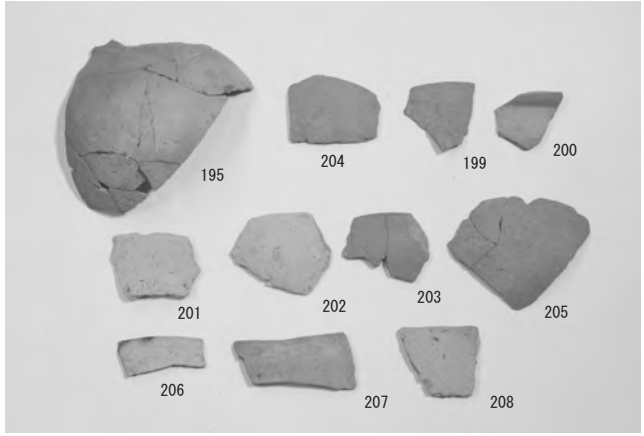
164

175
172
173
174

176


177
178
179
180
181
182
183
185
186
187
184

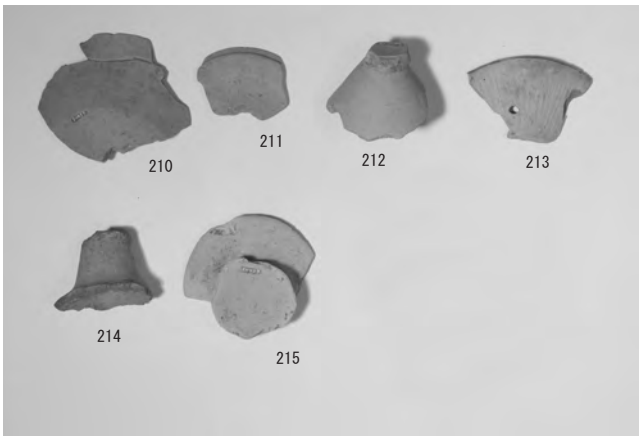

188
189
190
191
192
193
194


195
204
199
200
201
202
203
205
206
207
208

196

198
197

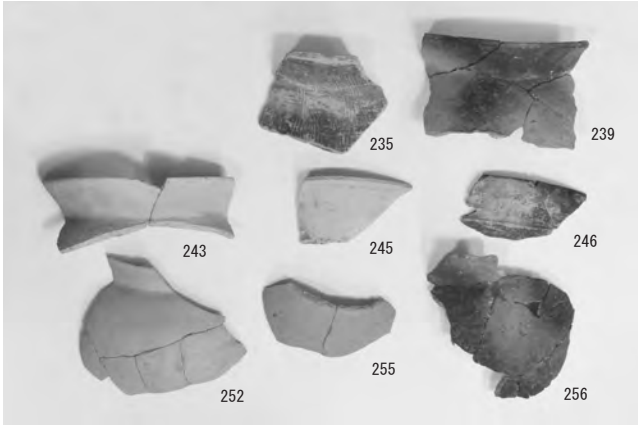
209

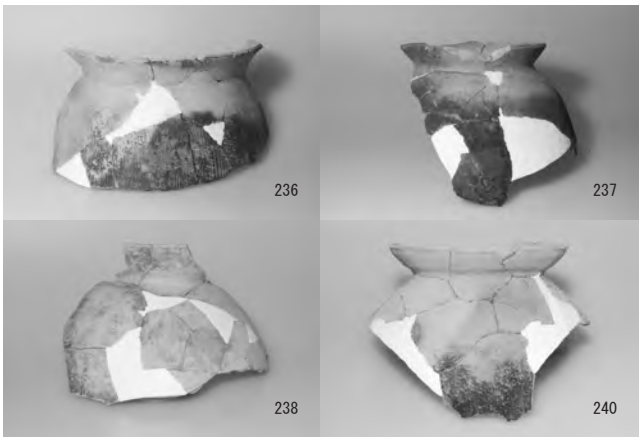

210
211
212
213
214
215

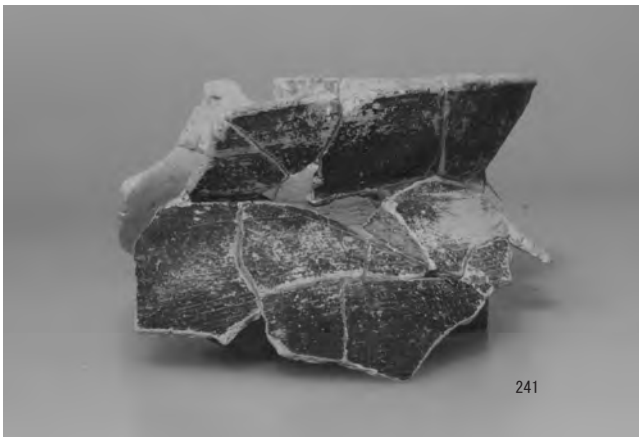
231

232

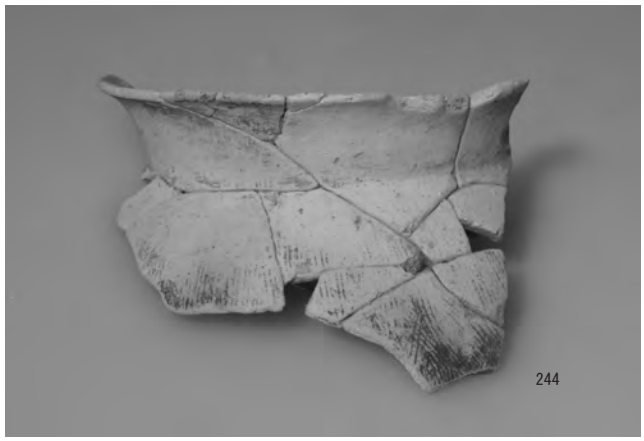
233


235
239
243
245
246
252
255
256


236
237
238
240


241

242


244

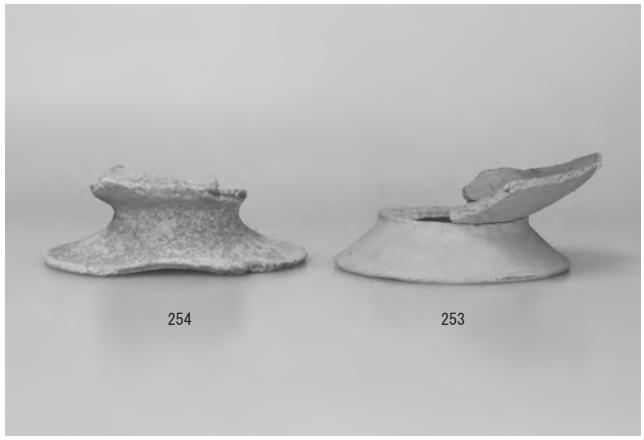
247

248

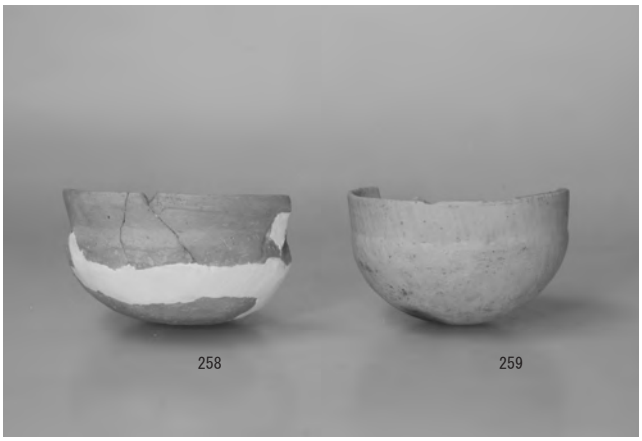
249

250

251


254
253

257


258
259

260
261

263

264

265

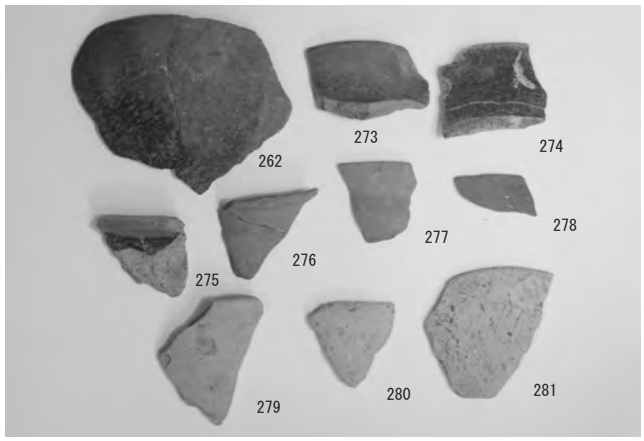
266

267

268
269

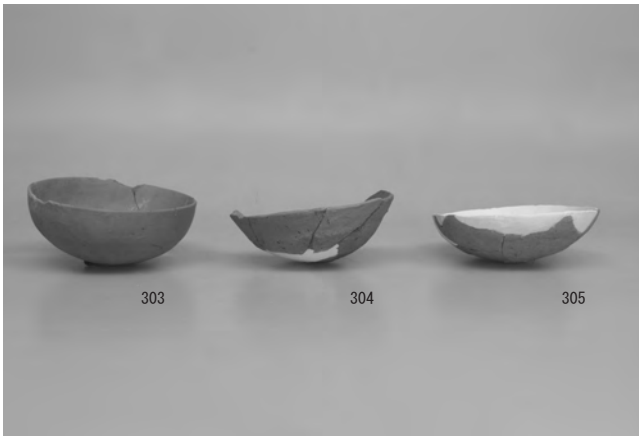
270
271

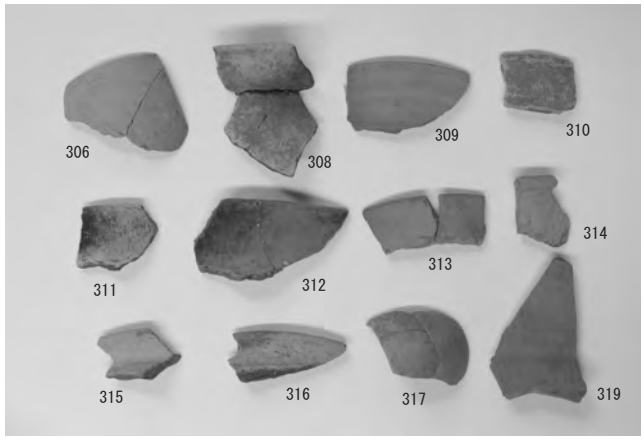
272


262
273
274
275
276
277
278
279
280
281

301

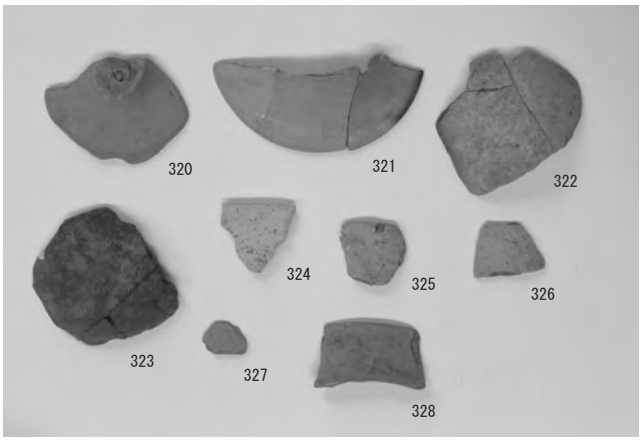
302

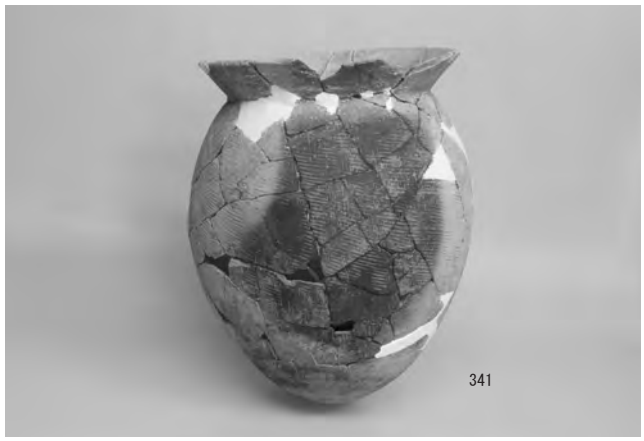

303
304
305


306
308
309
310
311
312
313
314
315
316
317
319

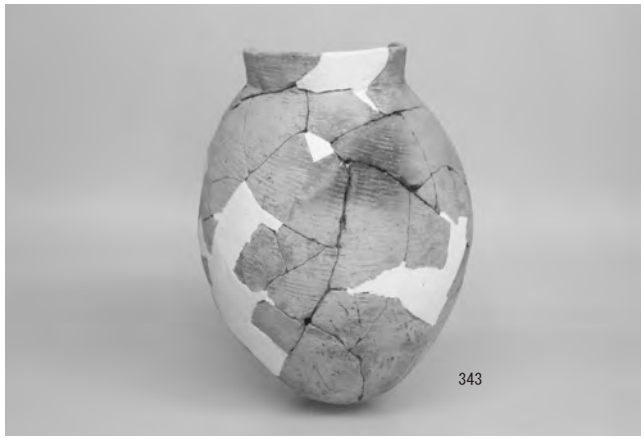
307

318


320
321
322
323
324
325
326
327
328


341

342

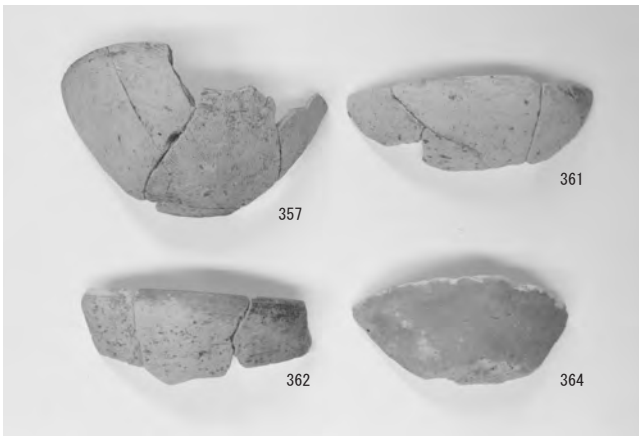

343

344
345

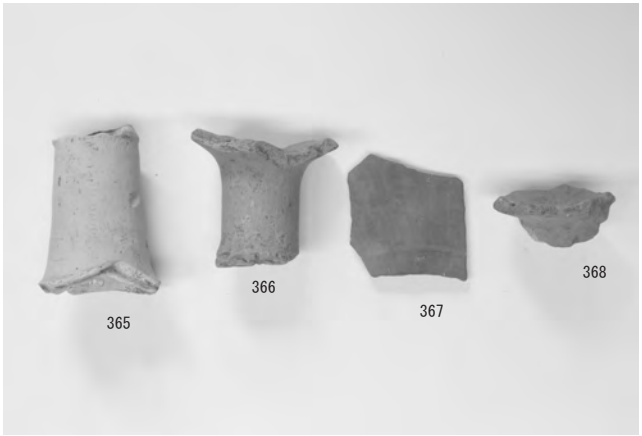
346
347
348
349
353
355
359
390

351
352
354

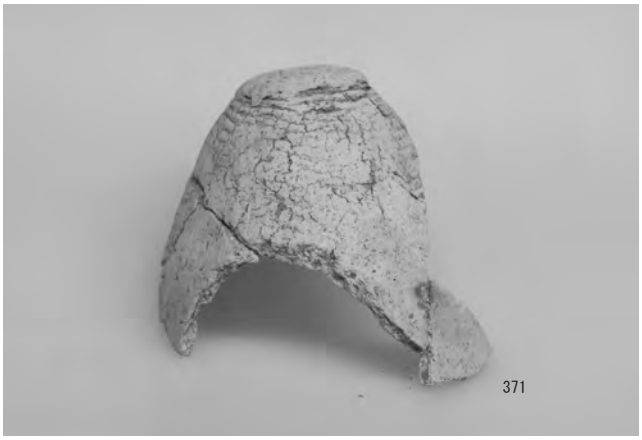
356
358


357
361
362
364

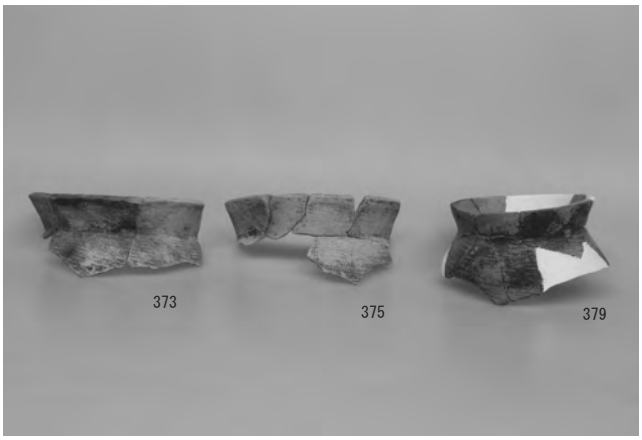
360
363


365
366
367
368

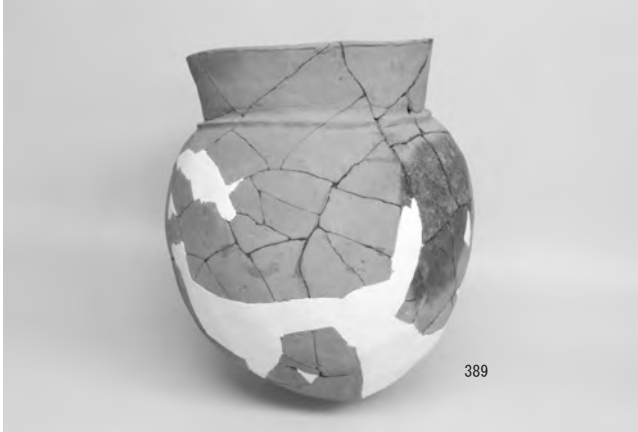
374
376
377
378
369
381
370
380
382


371

372


373
375
379

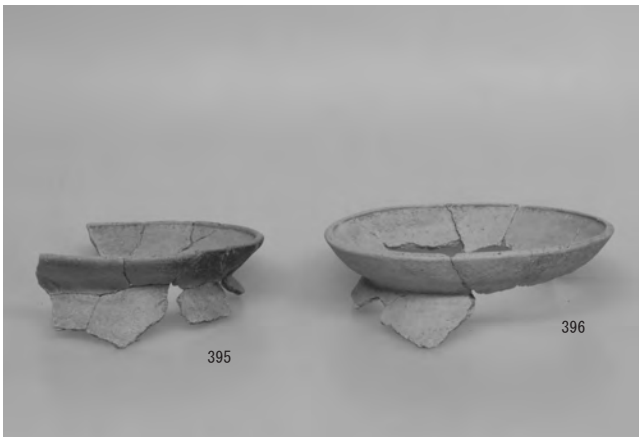
384
385
386
387
388


389

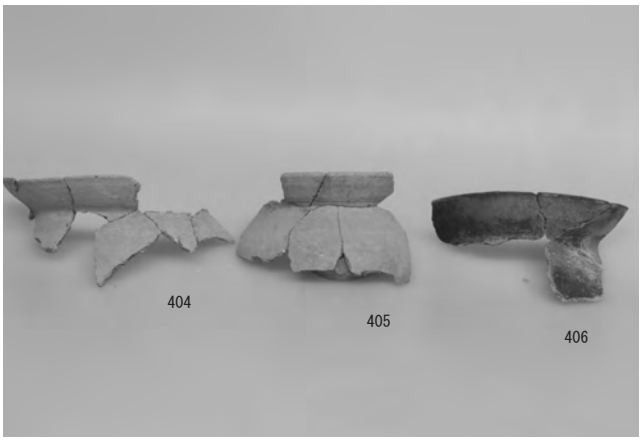
391

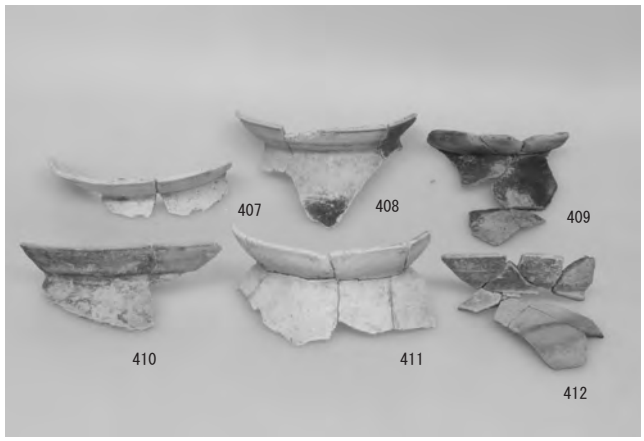
392

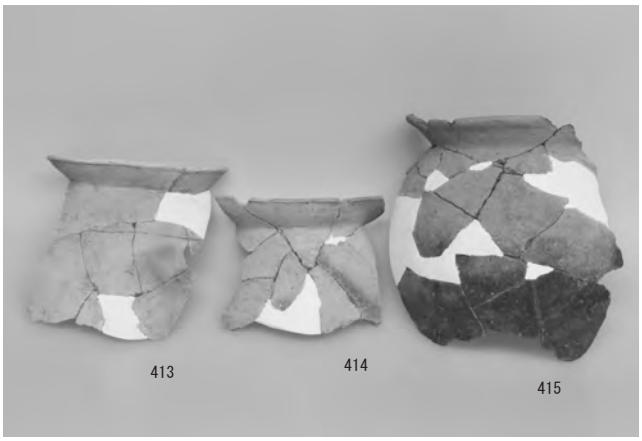
393
394

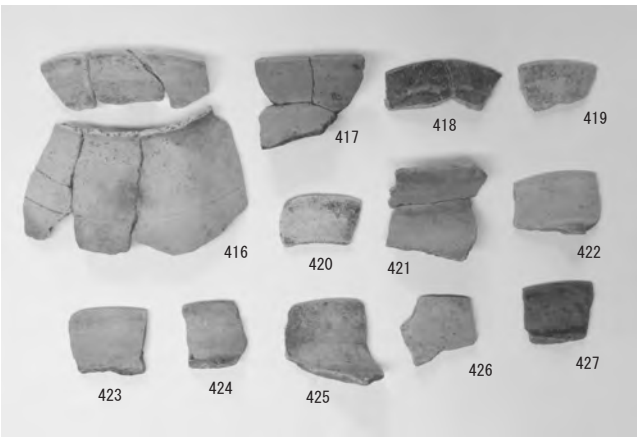

395
396

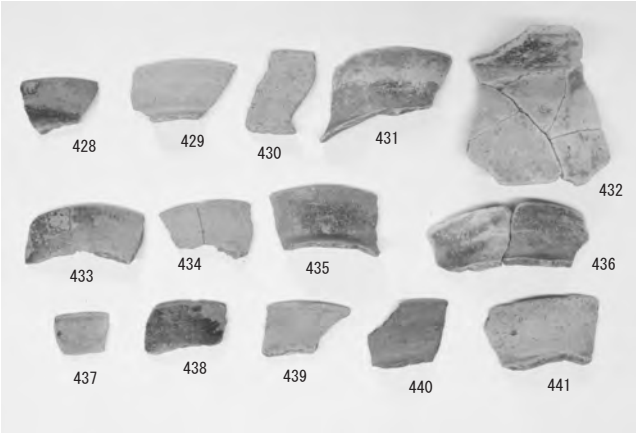
398
399
400

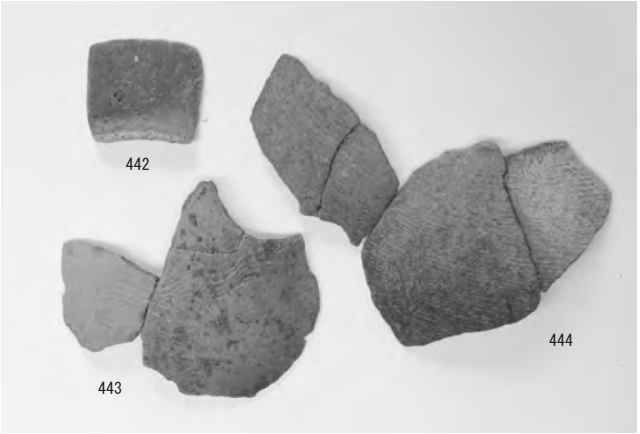

404
405
406


407
408
409
410
411
412


413
414
415

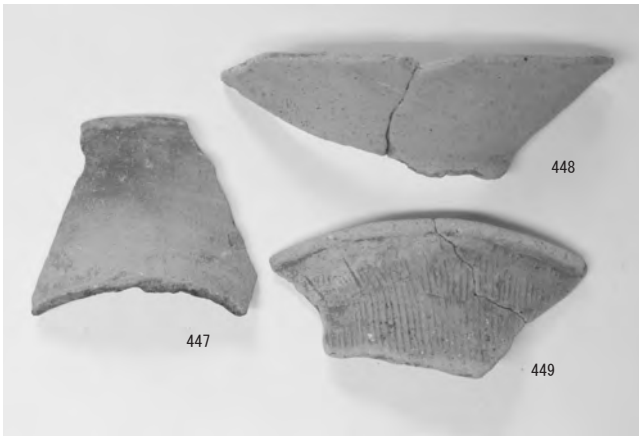

417
418
419
416
420
421
422
423
424
425
426
427


428
429
430
431
432
433
434
435
436
437
438
439
440
441


442
443
444

445

446

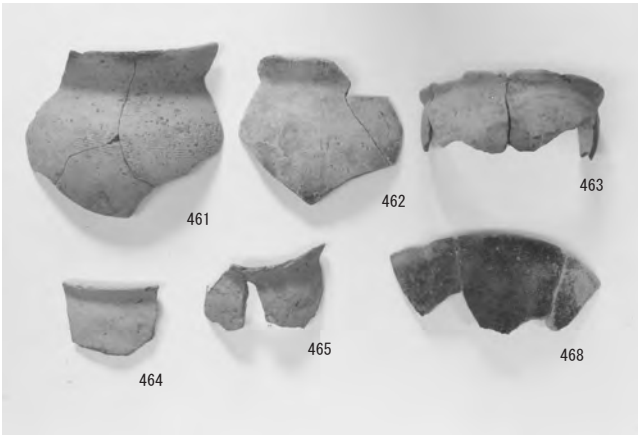

448
447
449

450

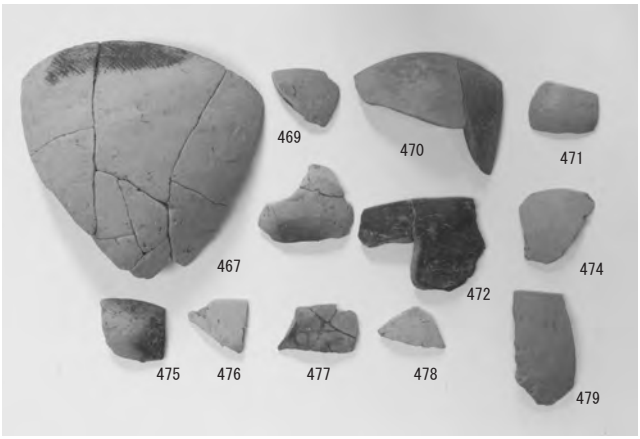
456
457

458

459
460


461
462
463
464
465
468

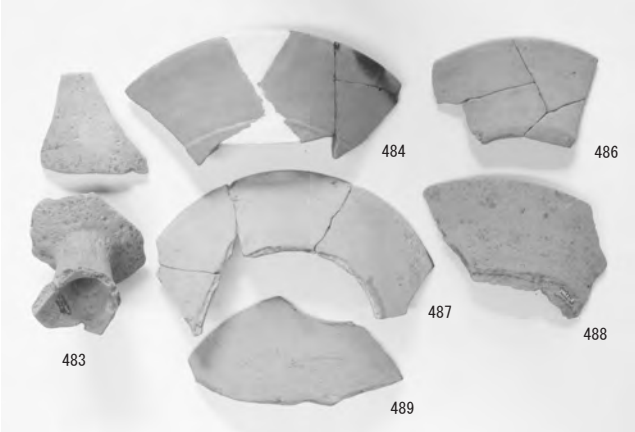
466

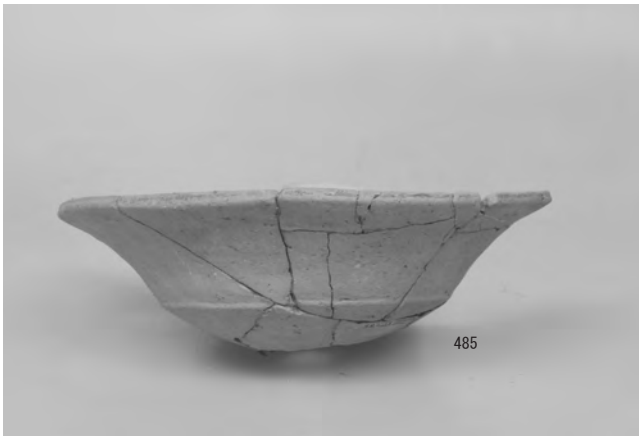

469
470
471
467
474
472
475
476
477
478
479

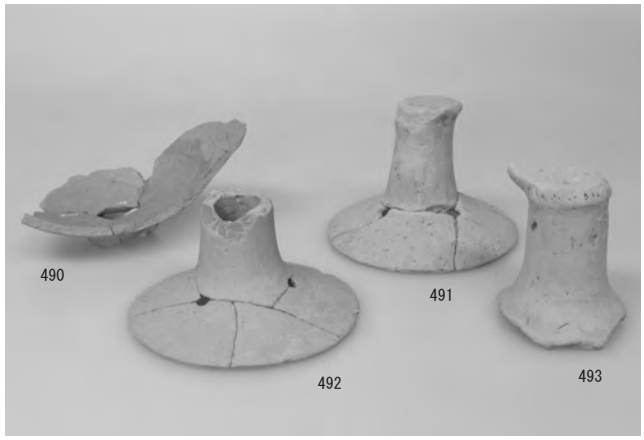
480

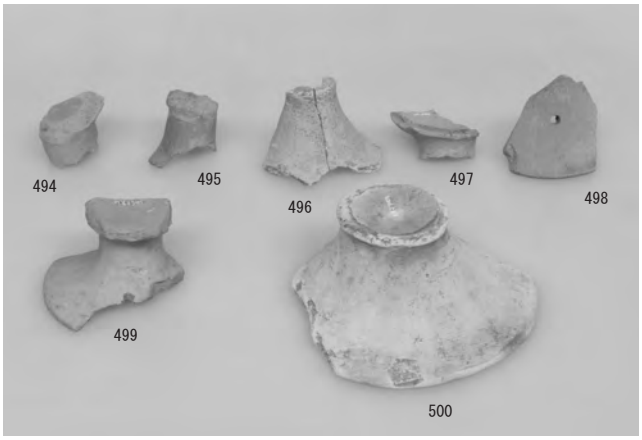
481

482

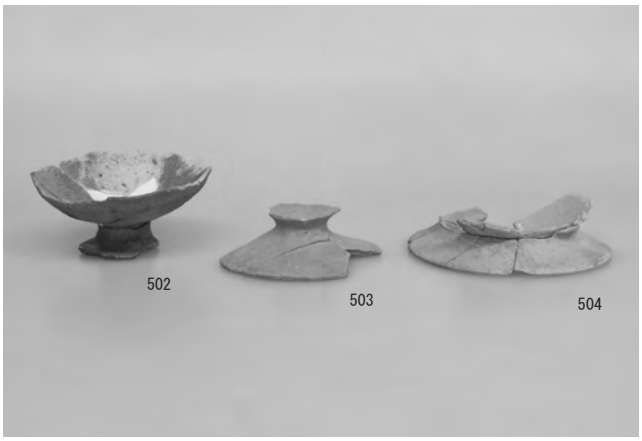

484
486
487
488
483
489

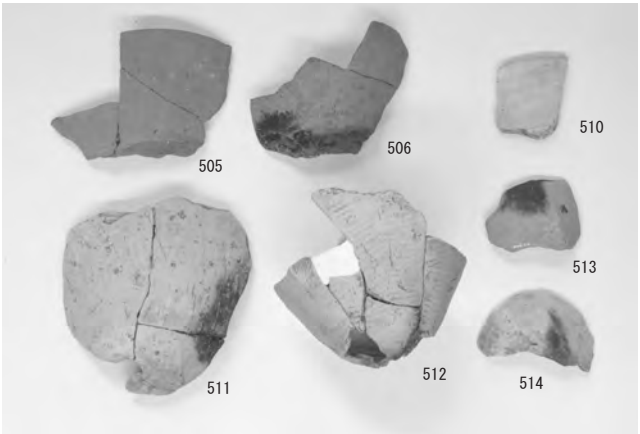

485

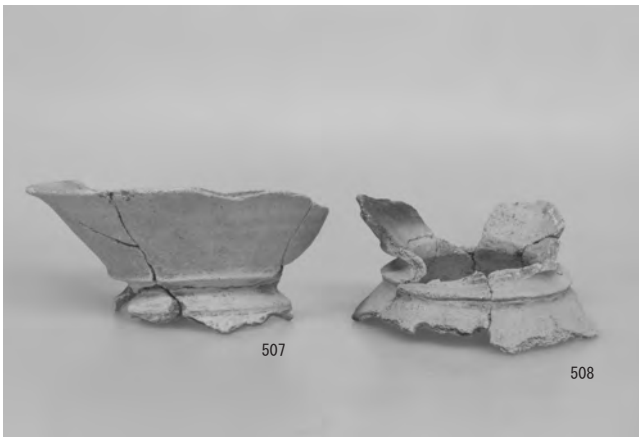

490
491
492
493


494
495
496
497
498
499
500

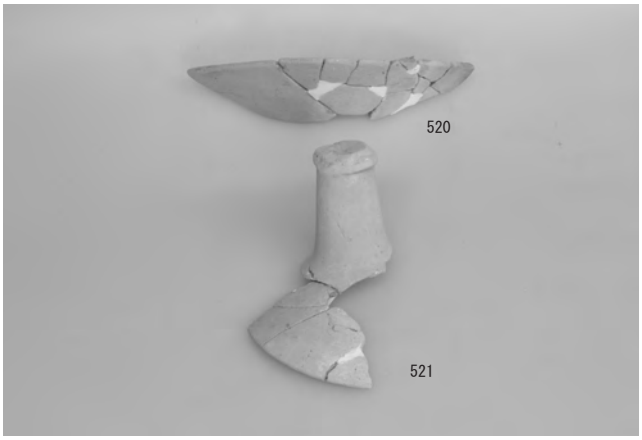
501


502
503
504


505
506
510
511
512
513
514


507
508

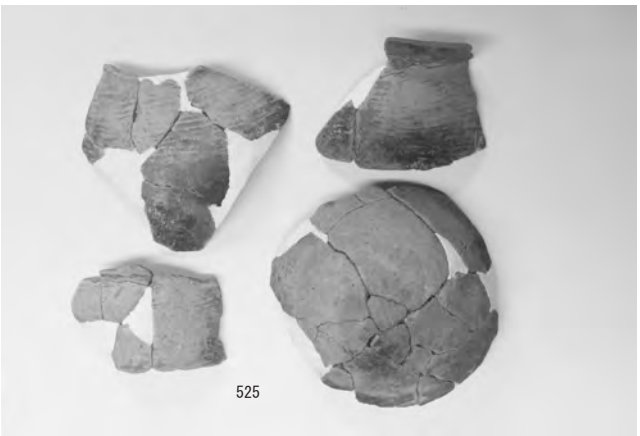
509


520
521

522

523

524

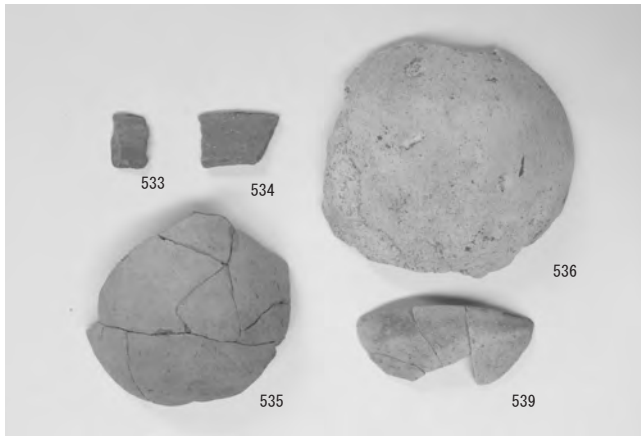

525

527

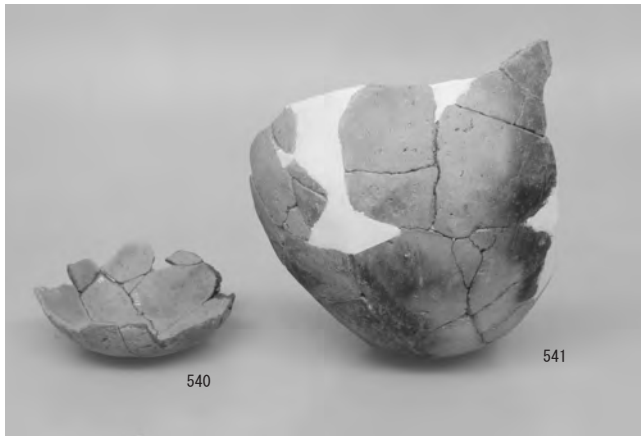
529

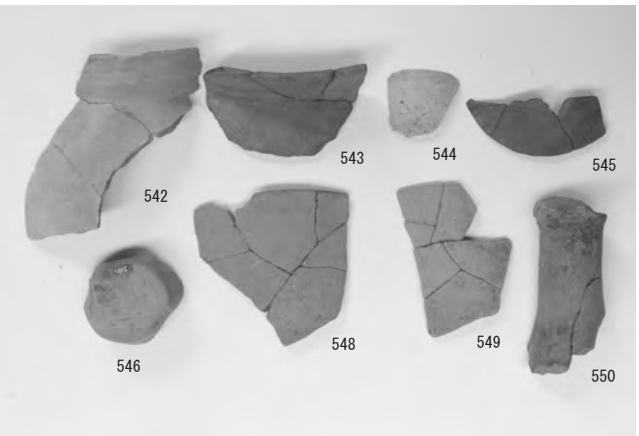
530

531 532

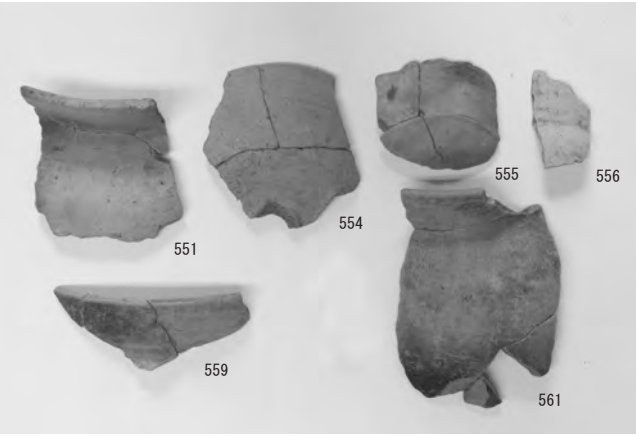

533 534 536 535 539

537 538

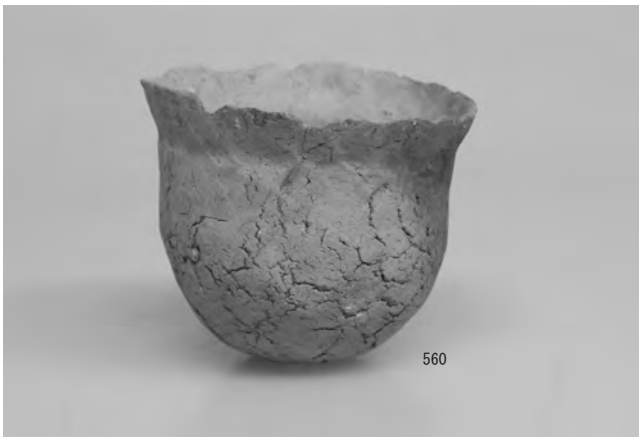

540 541


542
543
544
545
546
548
549
550

547

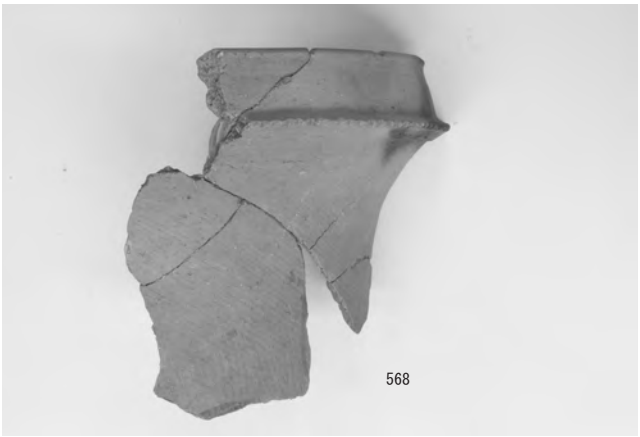

551
554
555
556
559
561

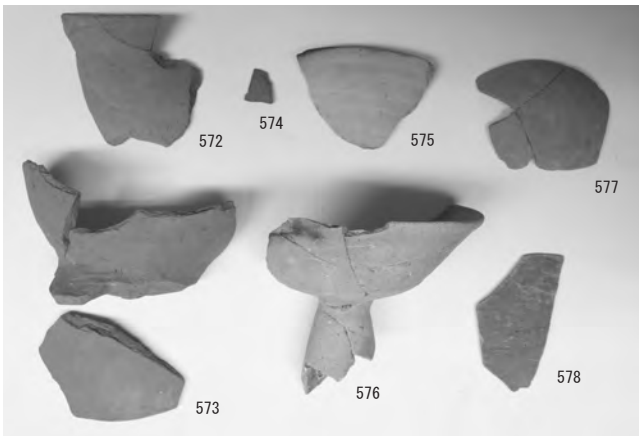
552
553
564


560

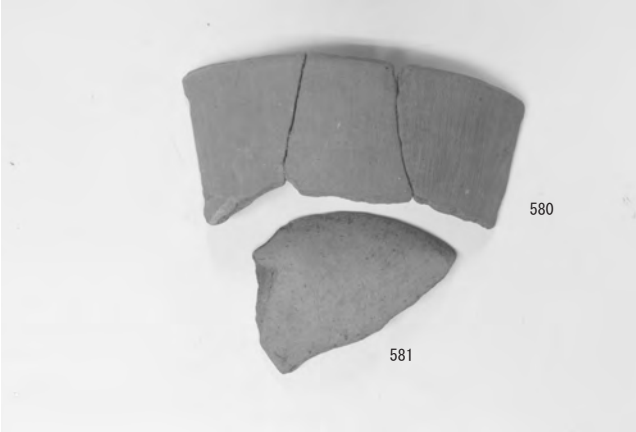
562
563
565
566

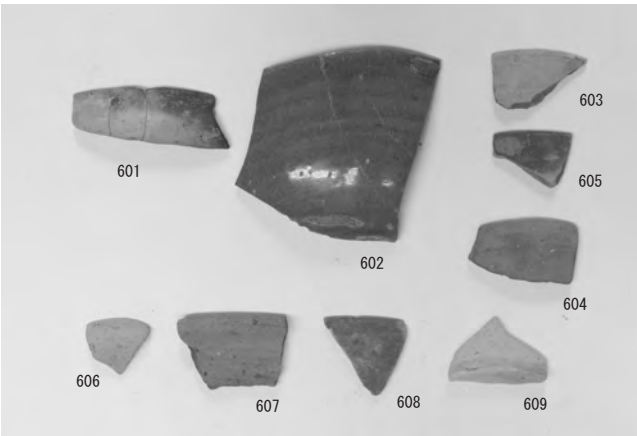
567

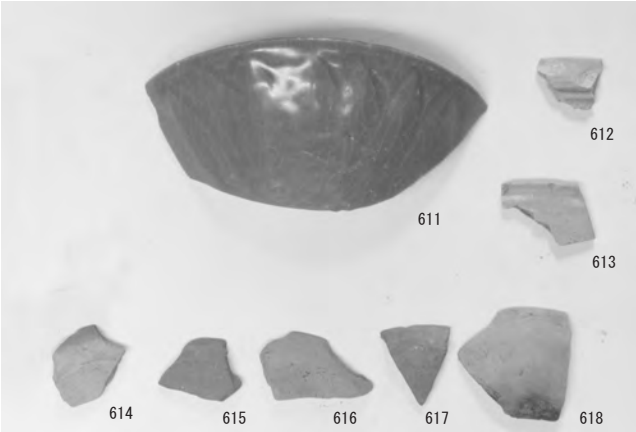

568

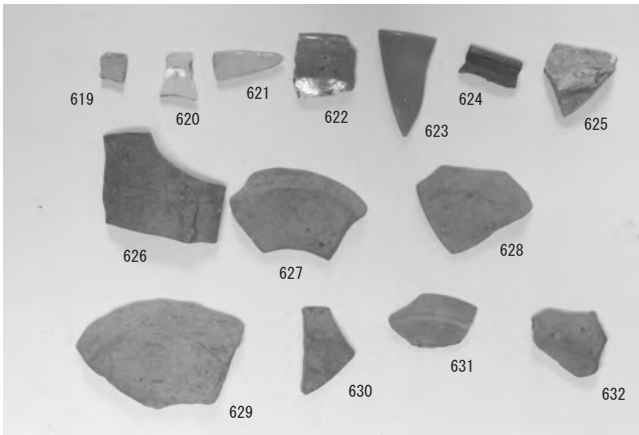

572
574
575
577
573
576
578

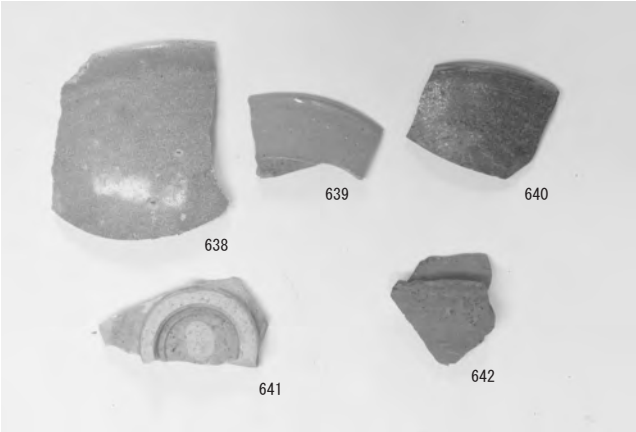
584
579
582
583

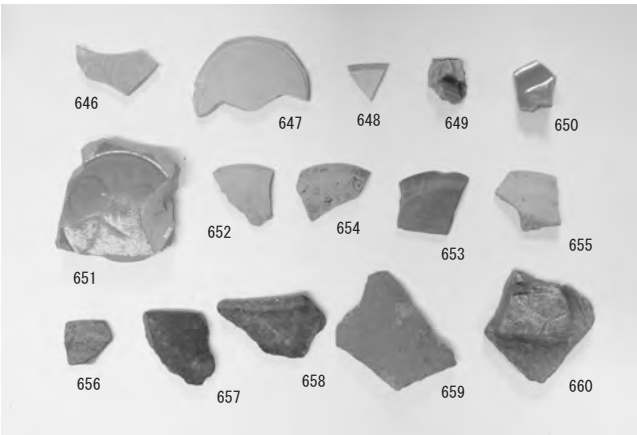

580
581

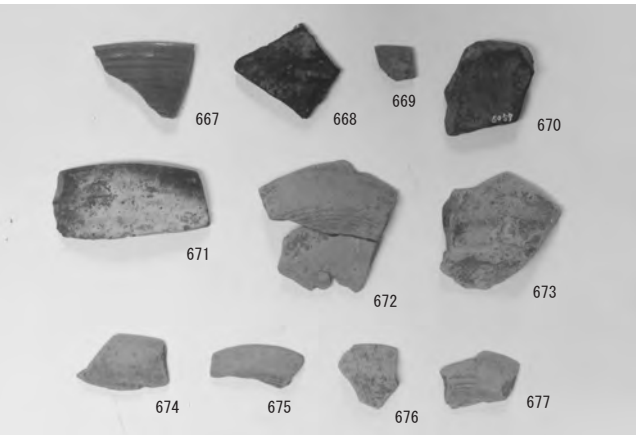

603
601
605
602
604
606
607
608
609

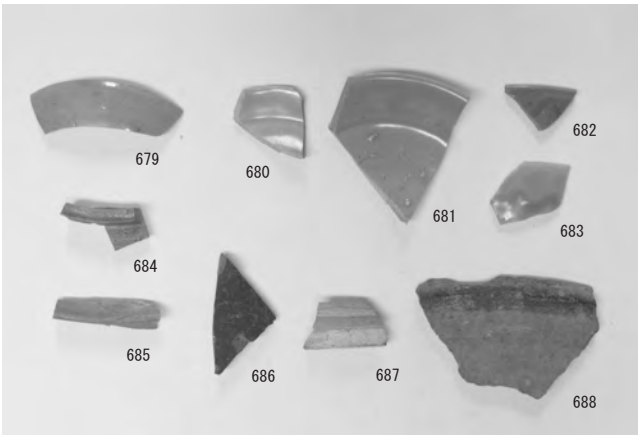

612
611
613
614
615
616
617
618

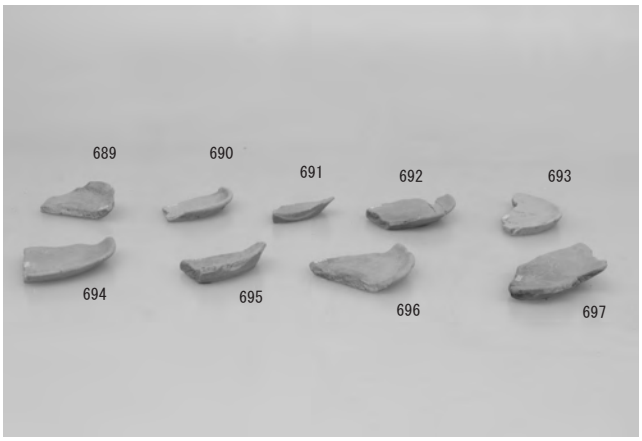

619
620
621
622
623
624
625
626
627
628
629
630
631
632

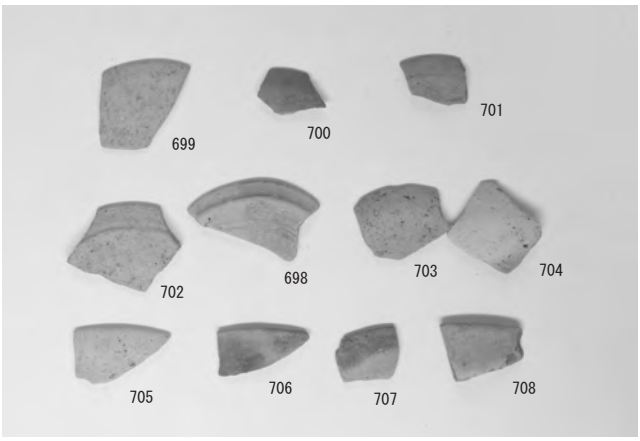

638
639
640
641
642

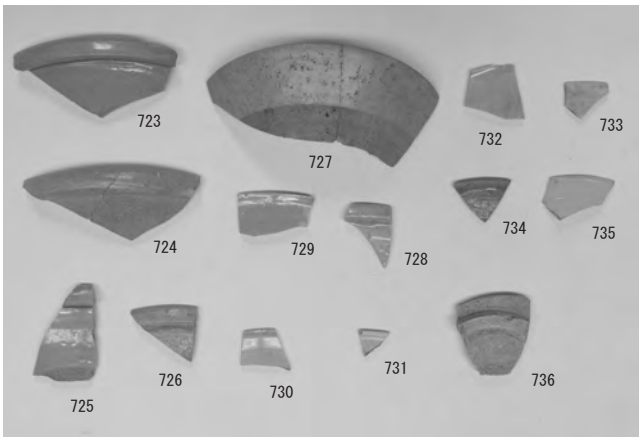

646
647
648
649
650
651
652
654
653
655
656
657
658
659
660

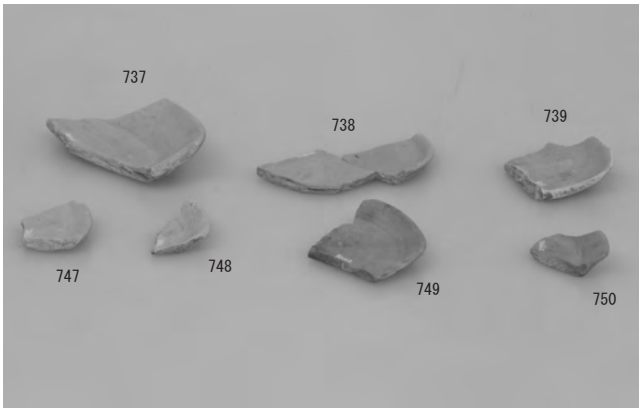

667
668
669
670
671
672
673
674
675
676
677

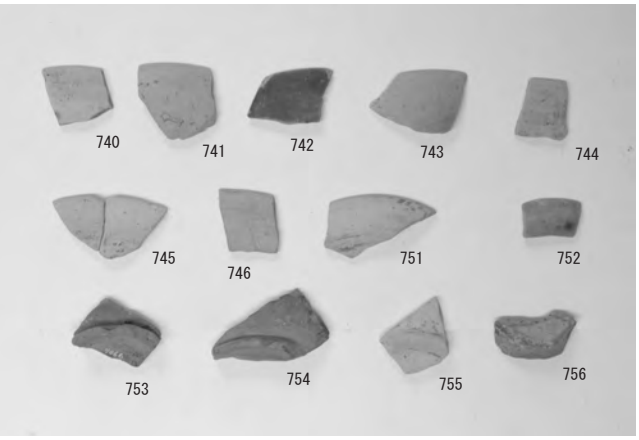

679
680
681
682
683
684
685
686
687
688

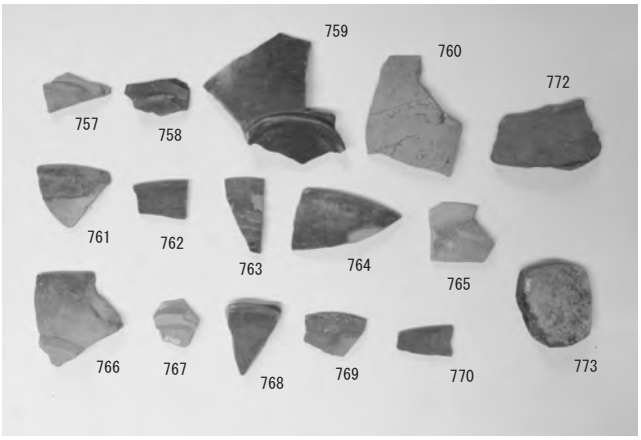

689
690
691
692
693
694
695
696
697


699
700
701
702
698
703
704
705
706
707
708

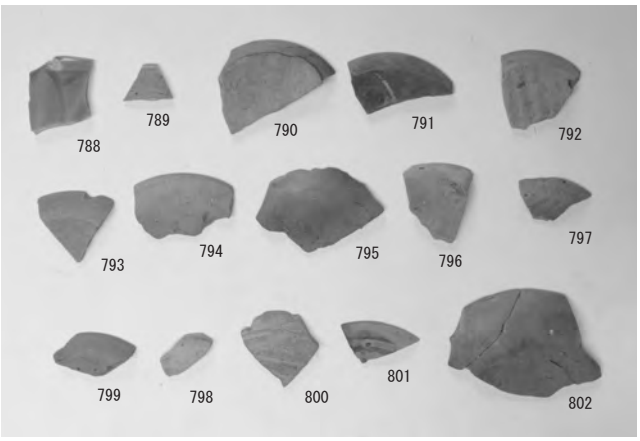

723
727
732
733
724
729
728
734
735
725
726
730
731
736

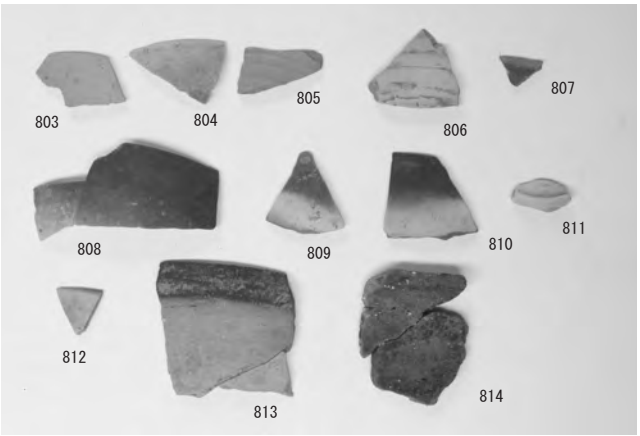

737
738
739
747
748
749
750

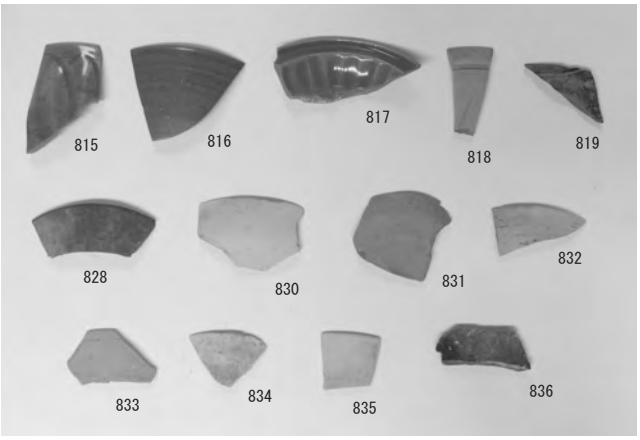

740
741
742
743
744
745
746
751
752
753
754
755
756

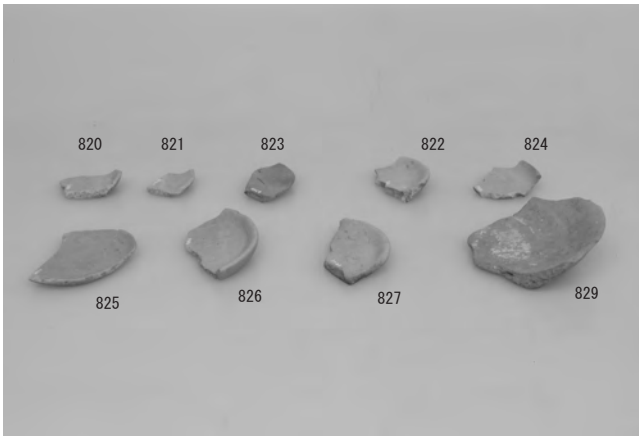

759
760
772
757
758
761
762
763
764
765
766
767
768
769
770
773

780
781
782
783
784
785
786
787

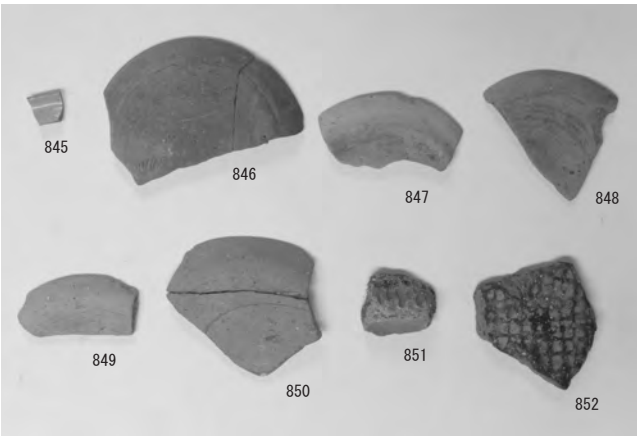

788
789
790
791
792
793
794
795
796
797
799
798
800
801
802

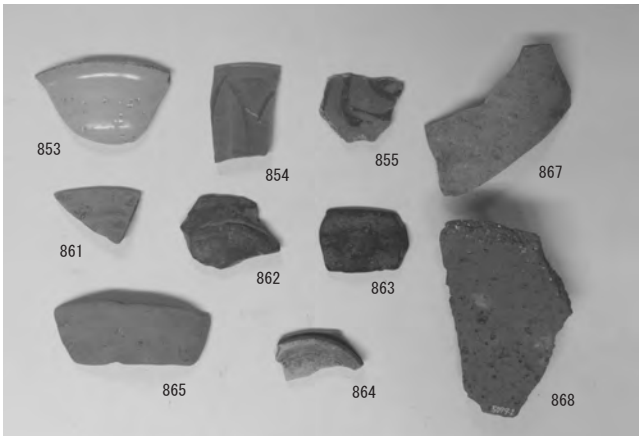

803
804
805
806
807
808
809
810
811
812
813
814

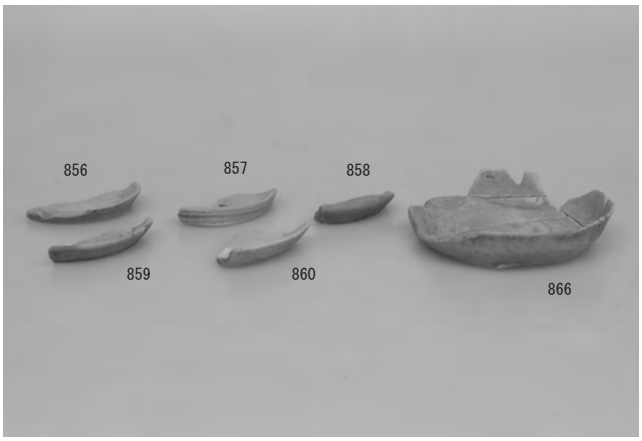

815
816
817
818
819
828
830
831
832
833
834
835
836

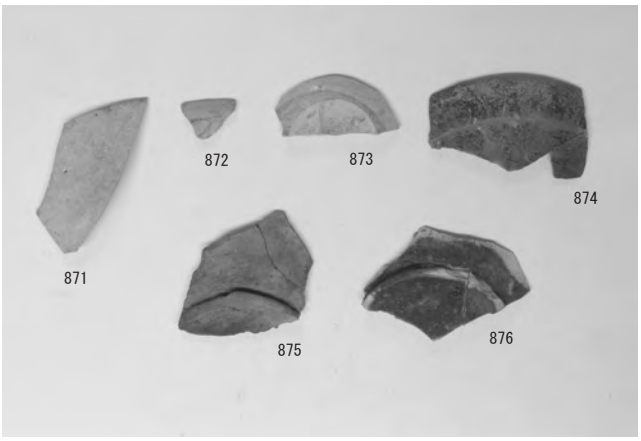

820
821
823
822
824
825
826
827
829

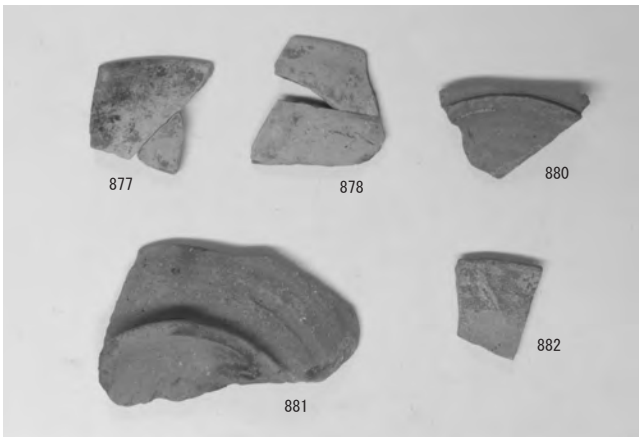
837

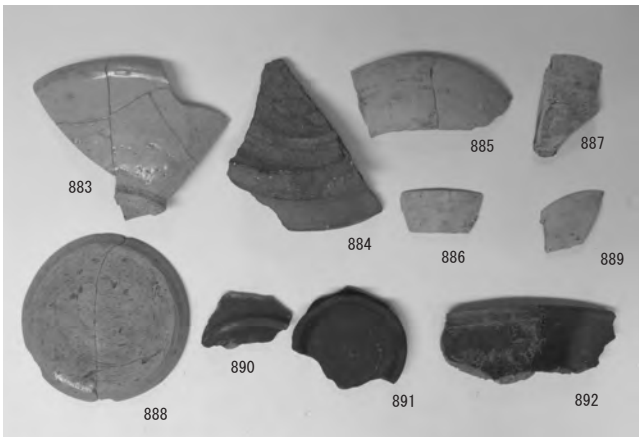

845
846
847
848
849
850
851
852

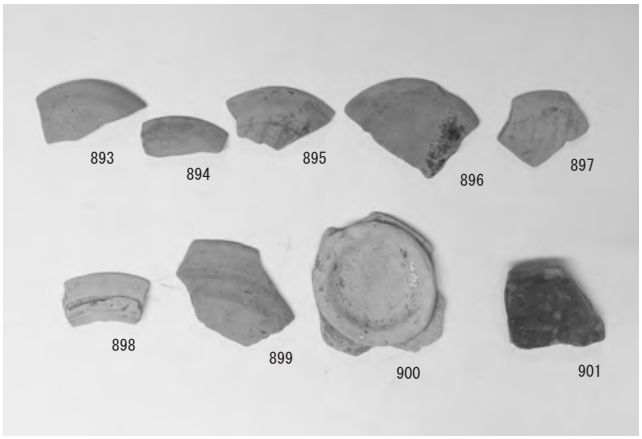

853
854
855
867
861
862
863
865
864
868

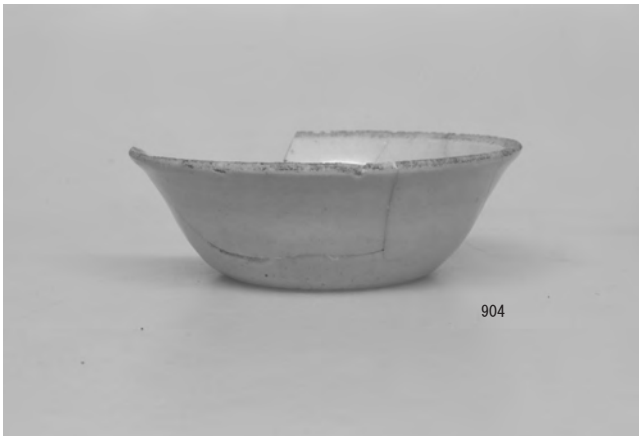

856
857
858
859
860
866

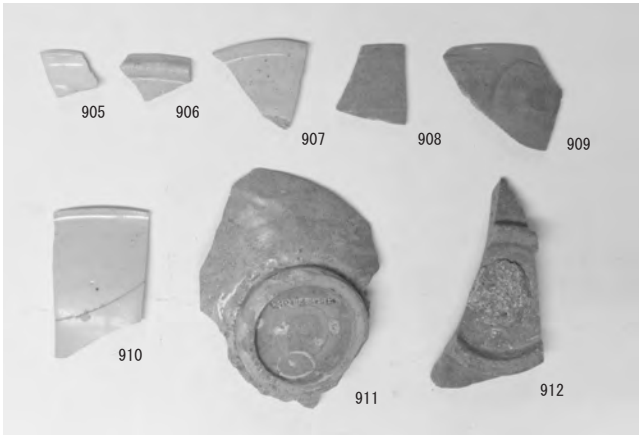

872
873
874
871
875
876


877
878
880
881
882

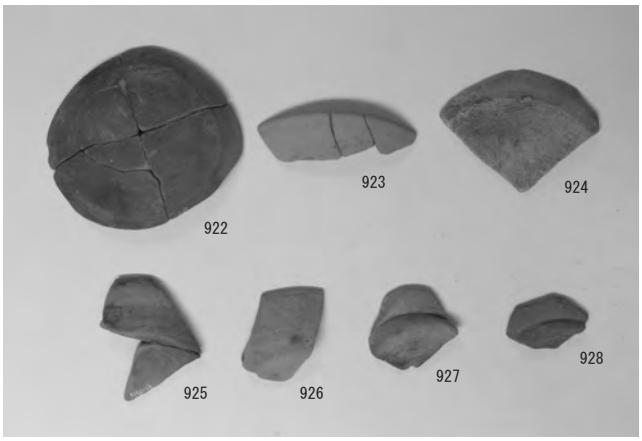

885
887
883
884
886
889
890
888
891
892

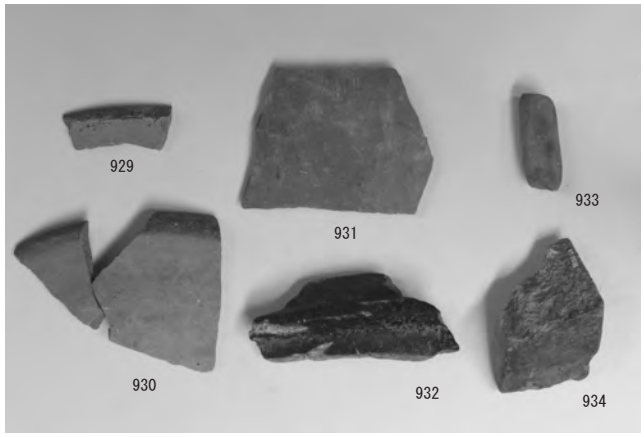

893
894
895
896
897
898
899
900
901

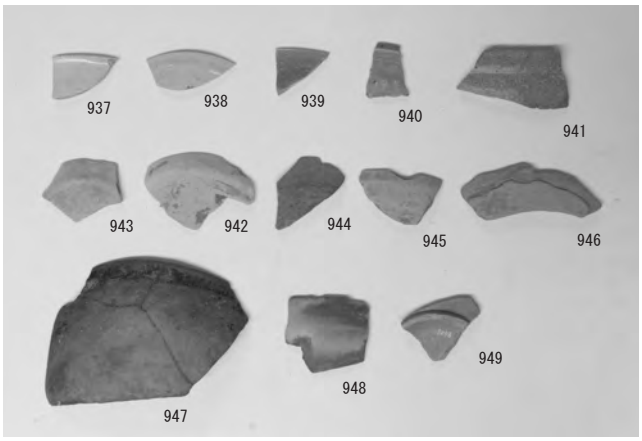

904

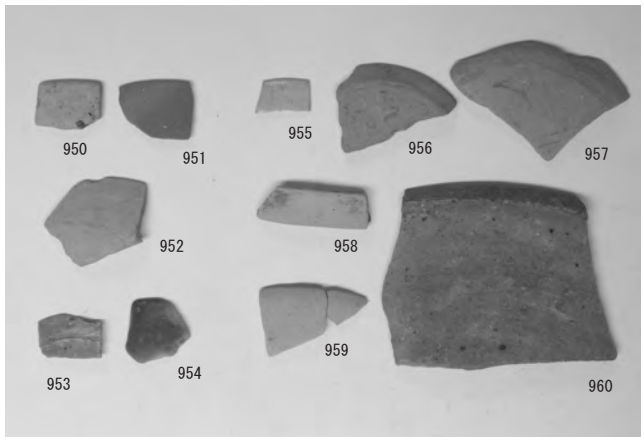

905
906
907
908
909
910
911
912

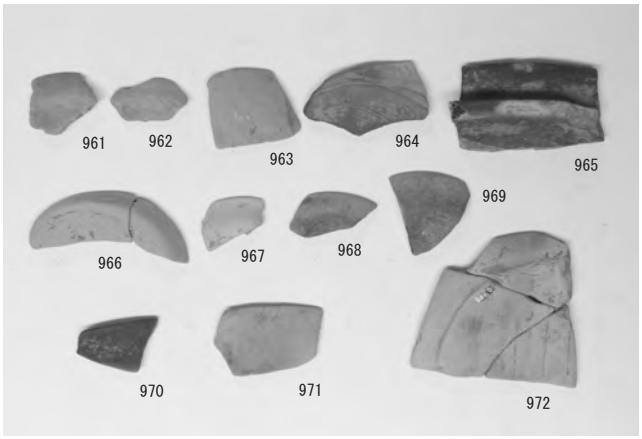
913
914
915
916
917
918
919
920
921

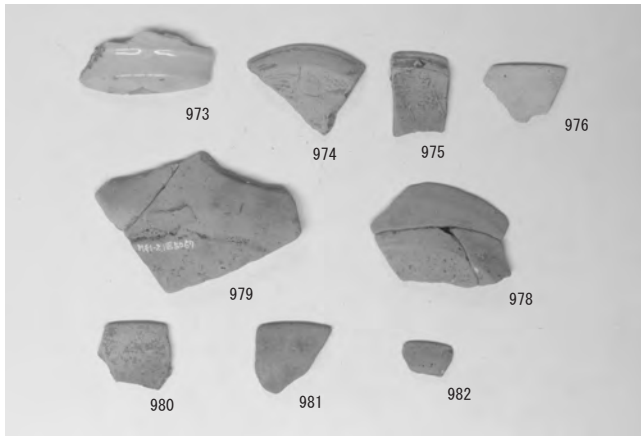

922
923
924
925
926
927
928

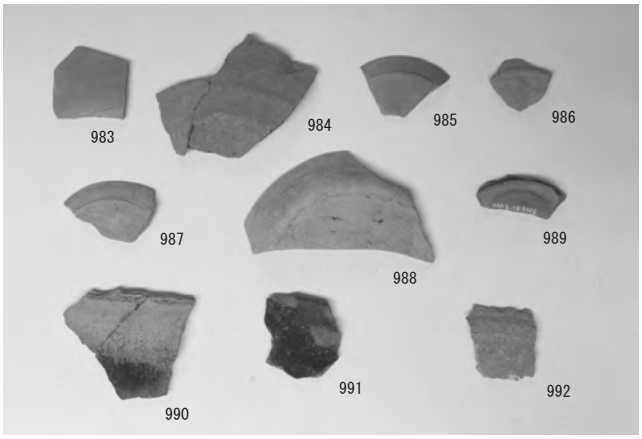

929
930
931
932
933
934

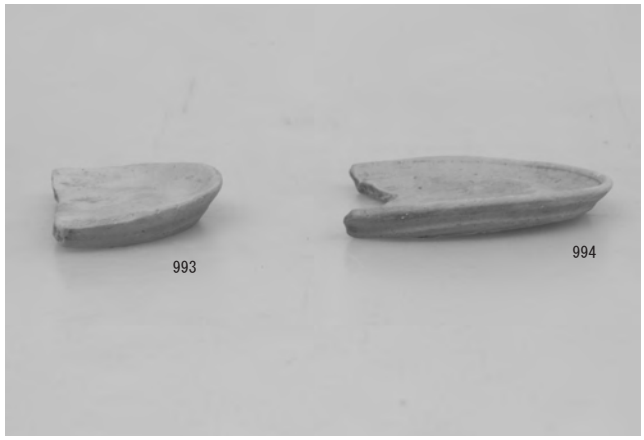

937
938
939
940
941
942
943
944
945
946
947
948
949

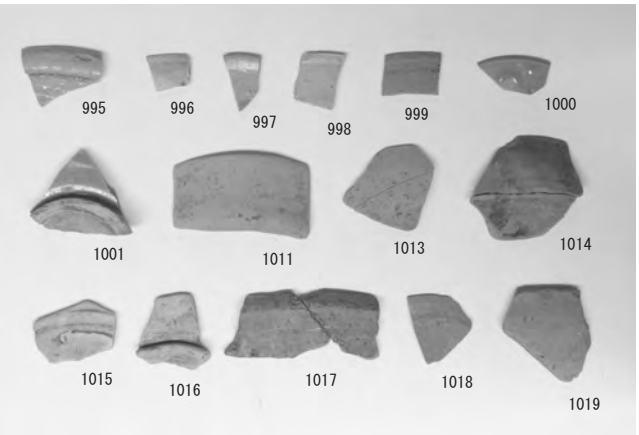

950
951
952
953
954
955
956
957
958
959
960

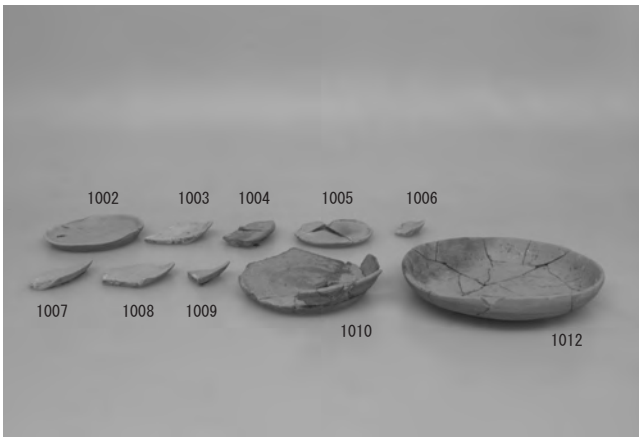

961
962
963
964
965
966
967
968
969
970
971
972


973
974
975
976
978
979
980
981
982

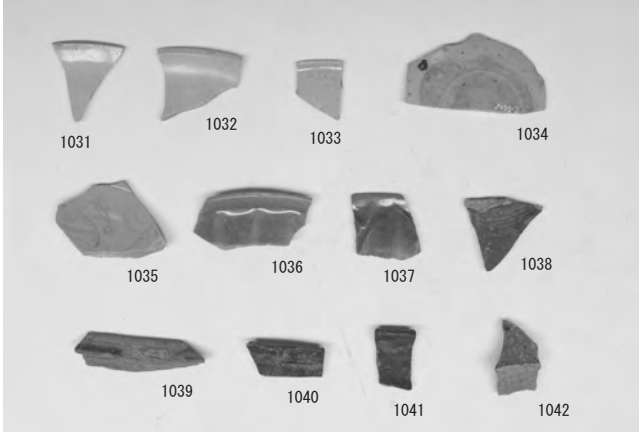

983
984
985
986
987
988
989
990
991
992

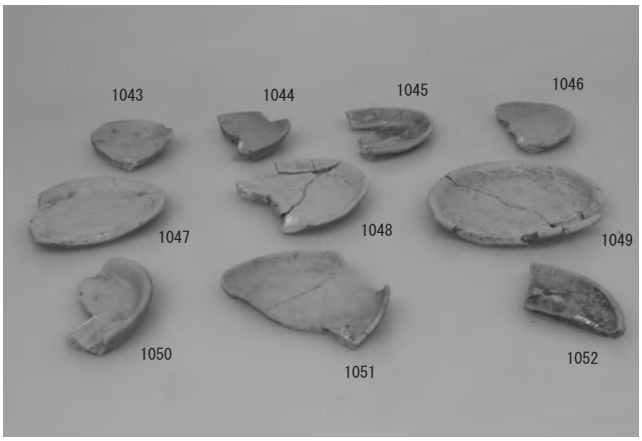

993
994

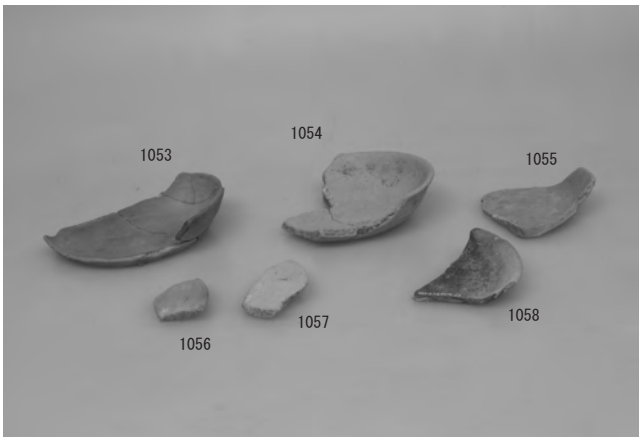

995
996
997
998
999
1000
1001
1011
1013
1014
1015
1016
1017
1018
1019

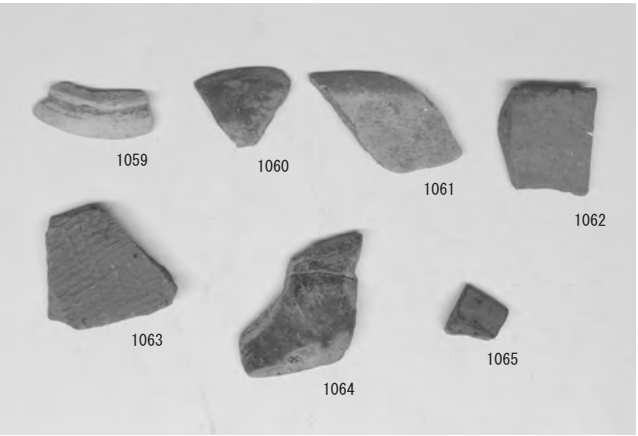

1002
1003
1004
1005
1006
1007
1008
1009
1010
1012

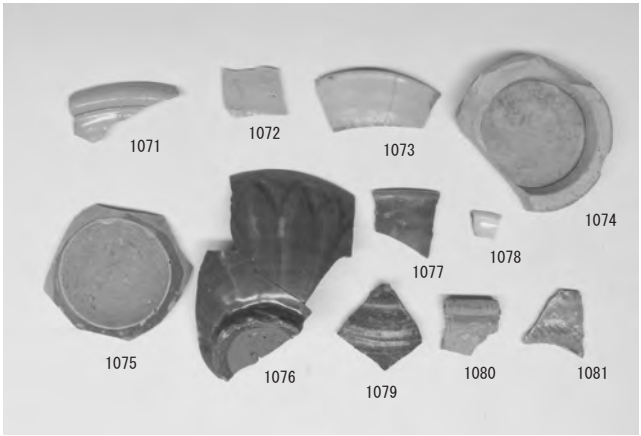
1020
1021
1022
1023
1024
1025
1026


1031
1032
1033
1034
1035
1036
1037
1038
1039
1040
1041
1042

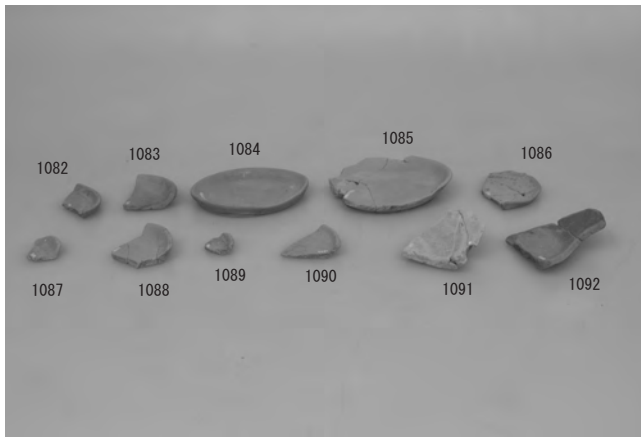

1043
1044
1045
1046
1047
1048
1049
1050
1051
1052

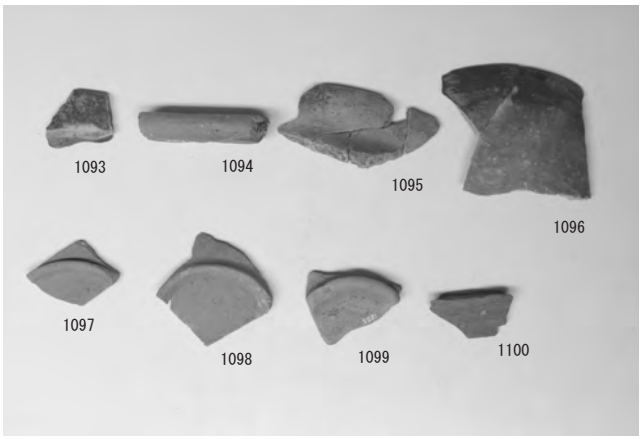

1053
1054
1055
1056
1057
1058

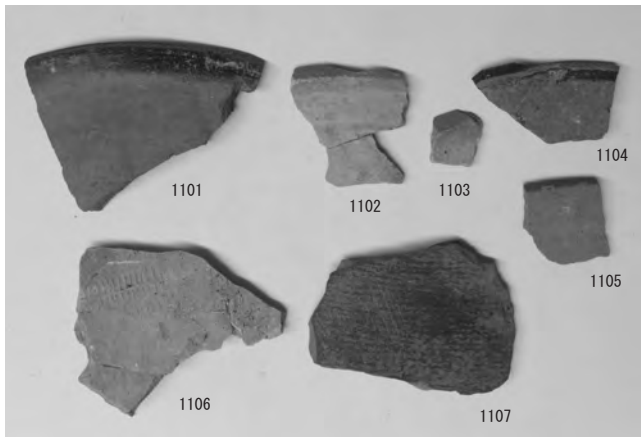

1059
1060
1061
1062
1063
1064
1065

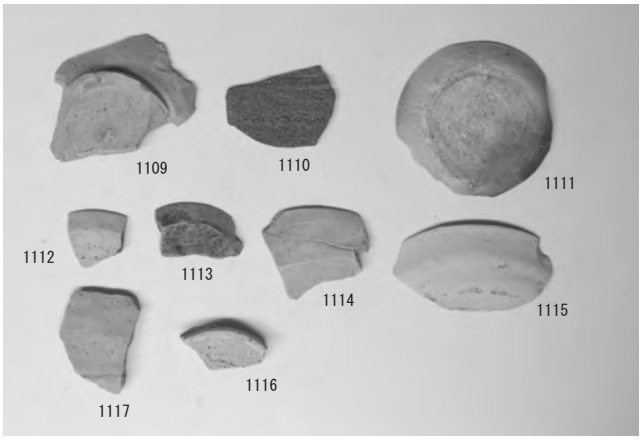

1071
1072
1073
1074
1075
1076
1077
1078
1079
1080
1081

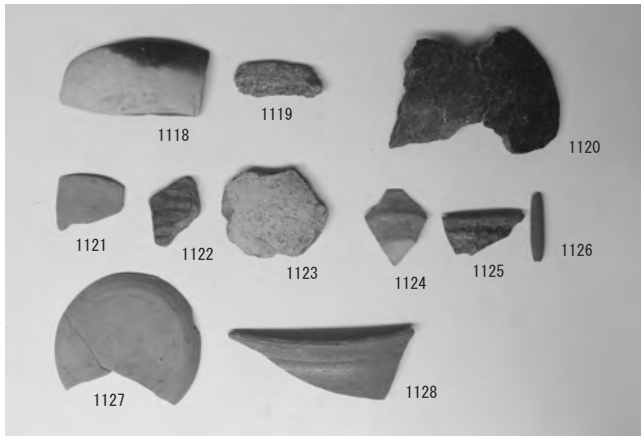
1074

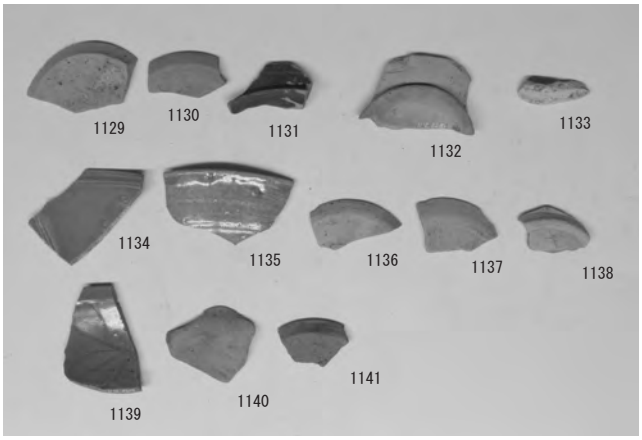

1082
1083
1084
1085
1086
1087
1088
1089
1090
1091
1092


1093
1094
1095
1096
1097
1098
1099
1100

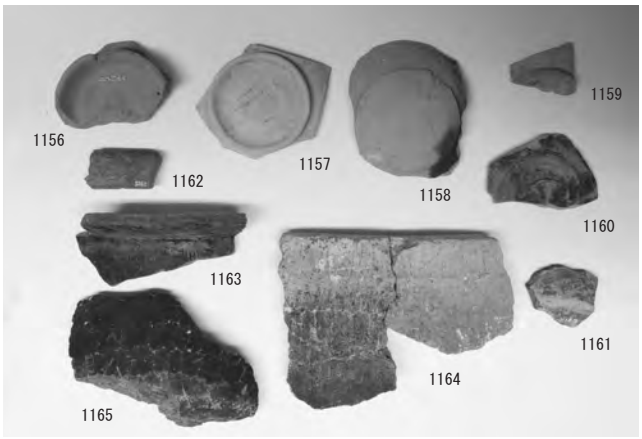

1101
1102
1103
1104
1105
1106
1107


1109
1110
1111
1112
1113
1114
1115
1116
1117

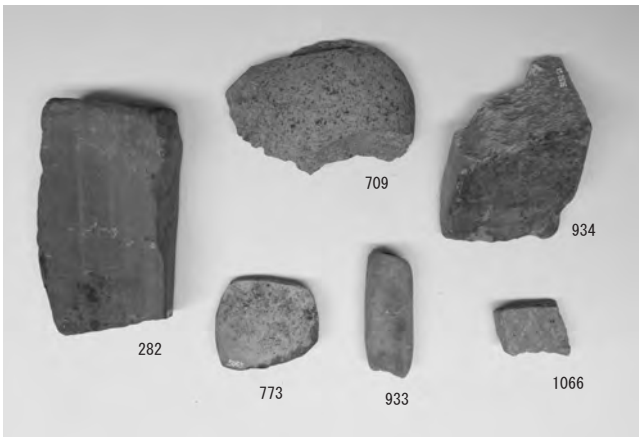

1118
1119
1120
1121
1122
1123
1124
1125
1126
1127
1128


1129
1130
1131
1132
1133
1134
1135
1136
1137
1138
1139
1140
1141

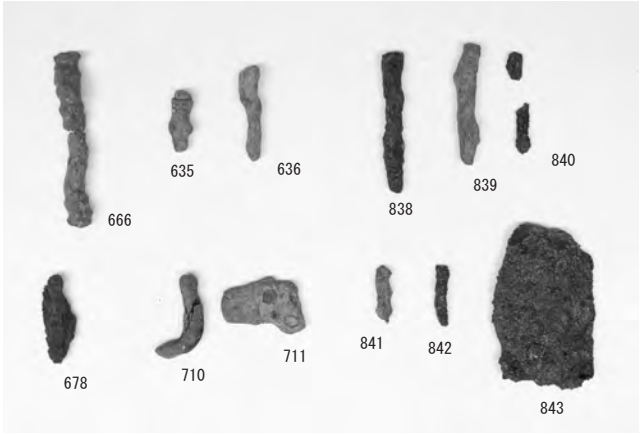
1145
1146
1147
1148
1149
1150
1151
1152
1153
1154
1155

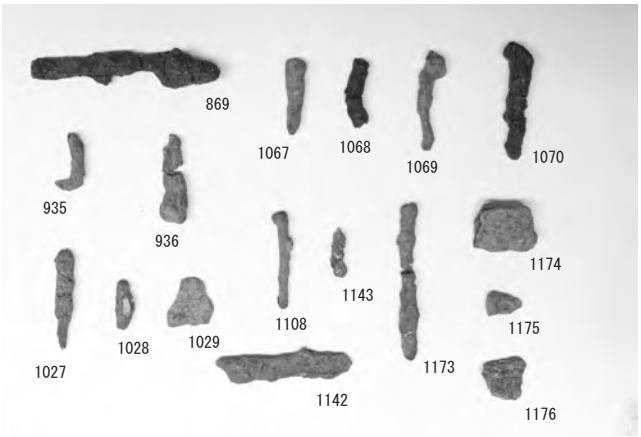

1156
1157
1158
1159
1162
1160
1163
1161
1164
1165

1166
1167
1169
1170
1168
1171
1172


709
934
282
773
933
1066

216
217
218
219
515
329
330
516
517


635
636
838
839
840
666
678
710
711
841
842
843


869
1067
1068
1069
1070
935
936
1174
1143
1108
1175
1027
1028
1029
1173
1142
1176

報告書抄録

ふりがな	入部ＸⅢ　－ひがしいるべいせきだい2じちょうさほうこく(4)－
書　名	入部ＸⅢ
副書名	－東入部遺跡第2次調査報告(4)－
巻　次	
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第1070集
編著者名	池田祐司
編集機関	福岡市教育委員会
発行機関	福岡市教育委員会
発行年月日	2009年3月23日
郵便番号	810-8621
住　所	福岡県福岡市中央区天神１丁目８番１号
電話番号	092-711-4667

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 (世界測地系)	東経	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
ひがしいるべいせき 東入部遺跡 第2次	ふくおかけんふくおかし 福岡県福岡市 さわらくひがしいるべ 早良区東入部地内1409-1他	40132	0048	33° 31′ 18″	130° 19′ 56″	19911001 ～ 19920305	2,242.50	圃場整備

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
東入部遺跡 第2次調査 11地点	集落	縄文	土抗	土器、石器	弥生前期の土抗からは甕がまとまって出土した。古墳時代住居は土器を多く廃棄しているものがある。 中世の遺構は調査区南側で集中して検出した。 縄文時代については次年度以降報告予定である。 道路部分のみ調査が終了し、掘削の浅い田面部分11-3区は上面の調査にとどめ、古墳時代以前の遺構を保存している。
		弥生	竪穴住居　1 土抗　1 甕棺墓等　2	弥生土器、石器	
		古代	竪穴住居　11	土師器、鉄器	
		中世	掘立柱建物　3 井戸　3 土抗　２０ 溝　3	土師器、須恵器、黒色土器・瓦器 国産陶器、中国産陶磁器（陶器・白磁青磁）、高麗青磁・陶器、石製品（石鍋砥石）、鉄製品（釘・刀子）	

福岡市埋蔵文化財調査報告書　第1070集

入　部　XIII

2010年３月23日

発　行　福岡市教育委員会
福岡市中央区天神一丁目8-1

印　刷　大野印刷 株式会社
福岡市博多区榎田2丁目2番65号